

001/003 YIG00127 かまくら
(18) 98/01/04 01:50

【シンポジウム】銅鐸を考える 開始

新年あけましておめでとうございます。(^^)
本日平成10年1月4日より【シンポジウム】銅鐸を考える がスタートいたしました。

これより新しくスタートいたしました【シンポジウム】「銅鐸を考える」で司会を私 かまくら が担当させていただきます。つきましては、大変僭越ながら第一声は私からあげさせていただきます。

2月25日までの期間で銅鐸について存分に議論がつくされるよう、またたくさんの発言を通して新たな認識なども得られるよう、そして居心地のよい環境を提供できるようお手伝いをさせていただきます。

パネリストの皆さま、ご協力の程よろしく願います。

【パネリスト紹介】

どんたく、ラン 2、かおる、六爾、kikkawa 以上5名(敬称略・順不同)

【シンポジウム日程】

1/4～1/25

Aコース：会議室は司会&パネリスト間の議論の「場」のみとなります。

Bコース：一般参加の方からのメールによる発言を司会 かまくら が1/25までプールいたします。ご意見・ご要望なんでも結構ですのでドンドン私宛にメールをお出ください。

その際の確認事項といたしまして

- 1.メールは要約等の処理の上、会議室で公開される可能性がございます
- 2.メールは場合によってはスタッフの方が拝見する可能性もございません

以上2点についてはトラブル防止の必要上しっかりと記憶におとどめ下さい。

1/26以降2/25会議室終了まで

A・Bコースの解消

一般参加開始となります。Bコースでプールさせていただいていた発言はこれ以降 かまくら の方から紹介させていただきます。
一般参加の方は直接会議室に発言可能になります。

2/27会議室閉鎖

さて、これからの2ヵ月弱の日程で、私 かまくら の司会によるシンポジウムの進行となっておりますが、銅鐸というテーマには非常に興味はあっても、なかなかそれが自分なりの解釈・自論にまで結びついておりませんので、暗中模索の頭の中を無理矢理整理して司会に臨んでおります。質問や議事進行などにお気づきのことがありましたら、遠慮なく指摘をお願いいたします。m(__)m

私の【シンポジウム】開始の発言に続きまして、各パネリストの皆さま自己紹介を兼ねての発言をお願いいたします。

かまくら

002/003 RXE12761 六爾
(18) 98/01/04 12:04

よろしくおねがいいたします。

銅鐸シンポジウムの開催おめでとうございます。

このたび、パネラーをつとめさせていただきます、六爾と申します。

ふだんは、本館の「考古学の部屋」に登場しています。

銅鐸という謎にわずか2ヶ月間でどのくらい迫れるかわかりませんが、精一杯がんばりますのでよろしくお願いいたします。

最初に私の得意とする分野の紹介でございますが、銅鐸に関しては私の手元に藤森栄一先生の『銅鐸』があります。この藤森銅鐸論はアマチュア考古学者の到達した最高の境地であると、私は考えています。そして、私のハンドルでもある森本六爾先生は日本における青銅器時代の存在の立証に生涯をかけられました。そういった視点からの発言が

中心となることと思いますのでよろしく願いいたします。

***** 六爾 (RXE12761@niftyserve.or.jp) *****

003/003 BYW00406 かおる 皆さん、よろしくおねがいします。
(18) 98/01/04 14:10

シンポジウム「銅鐸を考える」の開催おめでとうございます。
更に、明けましておめでとうございます。

私は、今回のシンポジウムでパネラーをさせていただきます、かおると申します。
いつもは、本館15番会議室「考古学の部屋」に居候をして、古墳や発掘の話題を中心に楽しませていただいています。

一昨年、島根県に加茂岩倉遺跡から、一挙39個もの銅鐸が出土して、しばらく縄文時代の話が多かった日本中を騒がせました。

それまで、銅鐸について興味なかった方も、連日のマスコミ報道などを通じて銅鐸がどんな形のものかは知られたのではないかと思います。
この、大量の銅鐸の出現は、それまでの銅鐸についての色々な謎を解明したかといえば、さにあらずで、謎の上に謎が上乘せされた感があります。
(どうも、考古学では、新しい発見は新しい謎を生むことが多いようです。)

さて、これまで私は銅鐸には興味をもってはいましたが、古墳時代にはもう既にその姿を見ない銅鐸については、特に勉強したことはありませんでした。
今回パネラーの一人であります **どんたくさん** と直接お会いして銅鐸の話聞く機会もあり、その後シンポに参加させていただくなど銅鐸について少々勉強させて頂きました。

といっても、銅鐸の謎を解明する新説を発見した訳ではありません、むしろ、先学の色々な見解の間をうろろしているのが実情です。

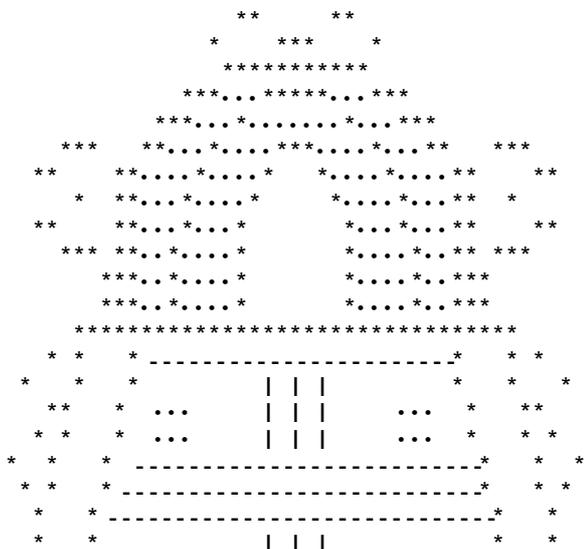
と言う訳で、私としては、今回のシンポジウムの前半では、今の考古学では銅鐸について、こんな風に考えているようだという話を中心に紹介して、皆さんが銅鐸について考える際の参考資料をお届けしたいと思います。

では、最初のご挨拶がわりに、製作に時間はかかるが中身の無い、「近畿式銅鐸」風のイラストをお届けします。

なお、銅鐸の各部位の名称などは、どんたくさんからナイスな図をいただいておりますので、また別に紹介します。

「みかか」と「かきん」の無駄と怒らないで下さいね。

それでは、司会のかまくらさん、パネラーの皆さん、シンポジウム参加の皆さん、2ヶ月間よろしく願いいたします。



006/014 YIG00127 かまくら RE:【シンポジウム】銅鐸を考える 補足
(18) 98/01/04 21:05 001へのコメント

【シンポジウム】銅鐸を考える 開始にあたっての補足です。

テーマである銅鐸とはいったいなんなのか？
パネリストの方々の議論のなかでその輪郭は徐々につかめてゆくかと思いま
すが、ここでは議論に入る以前の段階で一般にいわゆる「銅鐸とはどうい
うものなのか」について簡単に説明させてさせていただきます。

どう たく【銅鐸】

弥生時代の青銅器の一。釣鐘を扁平にした形で、上方に半円形の鈕(ヲウ)がある。
本来内部に舌をつるし、ゆり動かして音を出したものだ。次第に大形化し、装飾が多
くなり、鳴りものの機能を失う。高さ二センチメートル前後から一三センチメートル以上のも
のまであり、装飾には原始絵画のあるものがある。西日本で製作され、祭器
として用いた。 - 出典：「広辞苑 第四版」より -

大変簡単な文章ですが、銅鐸にあまりなじみのない方が最初に入る入り口とし
ての基本として載せました。ここからドンドン議論が展開されていられるよう
うまく司会進行に努力させていただきます。

なお1/4～1/25までは司会者とパネリストのみの議論の場となりますのでご理解
下さい。

その間、一般者の質問ご意見等の発言は司会者の私宛に送信して下さい。この
発言は1/26以降議論の場が一般開放された時に司会者の方から紹介させていた
だきます。(ハンドル名はしっかりと表記して下さい)

司会者 / かまくら

007/014 VZD07512 ラン2 よろしくおつき合ください
(18) 98/01/04 23:38

みなさま 明けましておめでとうございます m(_ _)m
そして 【シンポジウム】銅鐸を考える の開催ばんざーい!

新年早々、遅刻して申しわけありません(^.^;
本館15番会議室「考古学の部屋」に出入りさせていただいている
ラン2と申します。

ラン2は大の考古学ファンです(*^^*)
「広く浅く好奇心のみ」と、ふだん家族に馬鹿にされていますが、
今回は一歩踏み込んでみたいと思っています(^.^) キッパリ
そしてみなさまとともに楽しく有意義な時を共有したいと思います。

ではでは司会のかまくらさん よろしくお願いま～す (^o^)/

ラン2 (VZD07512@niftyserve.or.jp)

008/014 BYW00406 かおる 銅鐸の部位の紹介と簡単な解説
(18) 98/01/05 10:04 003へのコメント

みなさん、こんばんは。

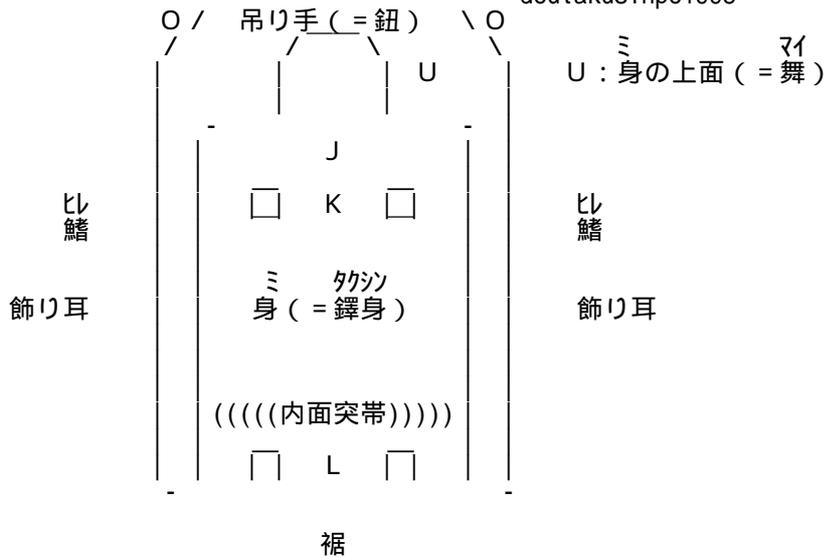
銅鐸の色々な部位については名前が付けられています。
今後のシンポの議論を理解するときの参考にもなると思いますので、どんたくさんの
力作をお借りして簡単に説明したいと思います。

((どんたくさんの力作))

飾り耳

〇〇

〇 / \ ヲ



以下は私の迷解説ですので、間違っていたらパネラーの皆さんご指摘願います。
また、説明不足の点もありましたら補足をお願いします。

これは、いわゆる近畿式銅鐸と言われるものをベースにして書かれています。
(でよかったですね、どんたくさん)

- 銅鐸は吊り手 (= 鈕) と身 (= 鐸身) からできています。
この吊り手の変化を型式分類して製作年代順に編年されたのが、「銅鐸の神様」佐原眞氏です。
銅鐸の編年については、他のパネラーの方から紹介があるかもしれませんが、今回は省略です。
- 鐸身のKとLそしてJは一般に型持ちと呼ばれています孔です。
銅鐸を鑄造するときには、この図を逆さまに倒立させた形にして鑄込むのですが、銅鐸鑄造時には、鑄型の外型と中型の隙間(1~数mm)を一定に保つために、一種のスペーサー(型持)を入れることとなります。
J, K, Lは、この型持を入れた場所に出来た孔と考えられているのです。
通常、Jは2個。Kは鐸身の裏表あわせて合計4個。Lも合計4個できることとなります。

ところで、Lは孔ではなく、実際は切り込みになっています。
ところが、どんたくさんによりますと、兵庫県西宮市の辰馬考古資料館(民間の資料館でもっとも銅鐸を所蔵・研究を行っているところでしょう)所蔵の銅鐸のなかに出土地不明、扁平鈕2式、六区袈裟禪文銅鐸が鑄放し状態のものがあるそうで、これではLは切り込みではなく、四角い穴になっているそうです。

つまり、銅鐸を鑄込んで、出来たてホヤホヤのときは、Lは四角い孔だけれど、その後の仕上げの段階で、裾の部分进行削り揃える結果、完成品では、Lが凹形になる。

のではないかと考えられるということです。

出土した銅鐸が全てそのような仕方で作られているのかどうかは分かりませんが、鑄込む時に、裾部分全体が外に出ているより、湯口(溶けた青銅を流し込む口)だけが外部と繋がっている方が湯の温度管理にも良かったのかも知れないなあ、と思いつつ、でも、削り揃えるのなら、型持ちのところまでも削ったら良いのではなんてことも思ってしまいました。
削るのは最小限だといわれたら、ウーンなるほどとなるかもしれませんが。

- Jの孔は舌(ぜつ: 銅鐸を鳴らすために鐸身の中に吊るされる棒のこ)をぶら下げるための紐を結ぶ穴としても利用されたと考えられています。
この穴の数が最古段階の菱環鈕式銅鐸では1つ、外縁付鈕式銅鐸の式からは2つになるそうです。
型式分類にも穴の数が活用されているのには驚きました。

なお、J、K、Lの穴の存在理由については、他の理由を考えられている方もおられますが、その説については今回は省略です。

4 飾り耳は全ての銅鐸にある訳ではありません、古い型式の銅鐸にはなく、中段階の扁平鈕式銅鐸から付くようです。

でも、中段階でも付いてないものもあり、この違いの理由は他のパネラーの方にお聞きしたいところです。

また、吊り手につく耳飾りは、二つの渦巻きが合わさったような形ですので「二頭渦紋飾り耳」と呼ばれていますが、どうやら、銅鐸でも新しい突線鈕式銅鐸のうち、主に近畿地方で発見される「近畿式」銅鐸にのみ付けられているようで、同じ突線鈕式銅鐸でも、三河や遠州を中心に発見されるいわゆる「三遠式」銅鐸には見られないようです。（ここは、博物館で突線式の銅鐸を見学して近畿式と三遠式を区別するときのポイントの一つでしょうか）

5 ((((((内面突帯))))))は鐸身の内側の裾に帯状に付けられている出っ張りで、出土した古い形の銅鐸の内面突帯はたいてい擦り減っています。

その理由は、銅鐸の内側にぶら下げた舌がこの内面突帯にぶつかって音を出すときに擦り減ったのだと考えられています。

このことから、内面突帯は、元来そのために作られたものであって、したがって銅鐸は初めは音を鳴らす物であったと考えられているのです。

これが、新しい型式の銅鐸では内面突帯が狭く低くなる傾向があり、徳島県阿南市出土の畑田銅鐸（突線鈕2式）では内面突帯がはじめから作られていません。

突線鈕式銅鐸を作る頃には、音を鳴らさなくなっていたのでしょうか。

6 鱗も全ての銅鐸に付くのではなく、最古段階の菱環鈕式には付ません、と言い切つてよいのでしょうか？。

他のパネラーの方いかがですか。

以上、とりあえずの解説でした。

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

009/014 YIG00127 かまくら
(18) 98/01/05 21:28

議題 1「銅鐸はどこから来たのか」
コメント数：2

それでは、早速最初の議題にうつらせていただきます。
各パネリストの皆さま、よろしくお願いいたします。

「銅鐸はどこから来たのか？」

銅鐸の起源・原型についてそれぞれのお考えをご発言願います。
いつごろ・どこから・どうやって銅鐸が倭国にもたらされたのか、もちろん倭国独自のものであるという観点からのご意見もありましたら、その根拠も添えてご発言下さい。

司会者 / かまくら

010/014 KFA03002 kikkawa RE:議題 1「銅鐸はどこから来たのか」
(18) 98/01/06 01:59 009へのコメント

銅鐸の起源・原型についてそれぞれのお考えをご発言願います。いつごろ・どこから・どうやって銅鐸が倭国にもたらされたのか、もちろん倭国独自のものであるとこにちは、かまくらさん、司会者ご苦労様です。

先ず、銅鐸の起源を考える上で、次の情報に基づきました。

1)日本列島では、銅鐸に先行して、別の材質で類似したものが作られたとは知られていません。

2)日本列島では、青銅器や鉄器は、縄文時代晩期にほぼ同時に出現しています。

3)歴博[春成秀爾・佐原真](1985)『銅鐸の美 図録』によると、中国河南省下王崗の仰韶文化(約6000年前)の土鈴が、世界最古の鈴製品としています。

4)上記の本によると、青銅文化が東方に伝搬して、中国山東省陶寺の龍山文化(約3900年前)の銅鈴が登場しています。

これらから判断すると、銅鐸は日本に起源があるのではなく、外来のもので、起源の候補として中国が有力と言えるのでしょうか。

次に、伝搬経路としては、漢人が朝鮮半島に拡がっていき、漢文化を伝えたものと考えますが、約2400～2500年前に朝鮮半島に小銅鐸が現れたとしており、それが日本列島にも伝わったのでしょね。

なお、中国での本来の使い方と同様の「聞く銅鐸」である小銅鐸は、日本列島では九州から関東と広範囲に分布していますが、巨大で装飾が著しく原型からのデフォルメの著しい、近畿や東海地方に集中する「見る銅鐸」については、海外に同様の例を聞かないことから、こちらについては日本列島独自の発案との見方が妥当ではないかと思われま。

日本列島に銅鐸が登場した時期についてですが、後に詳しく述べるつもり馬淵久夫教授などによる鉛同位体比の研究によると、佐原編年でI～II-1式とされる銅鐸は、朝鮮半島の鉛に対応するのに対して、II-2式以降の銅鐸は、前漢～後漢初めの漢式鏡の鉛に対応し、後漢中期以降の漢式鏡に相当するデータは知られていません。

このデータから見ると、漢文化が直接日本列島に伝わらない以前から銅鐸が使用されていたと考えられ、楽浪郡が設置された元封3(108 B.C)年よりも前に登場していた公算が大きいと思われま。

一方、銅鐸と弥生土器の流水紋の類似性に注目して、時代を推定しようとする見方があります。古い例では、滋賀県新庄銅鐸(II-1式)があり、奈良県唐古遺跡・第II様式の弥生土器(1995年当時の暦年換算で前2～1世紀、現在の編年観ではもっと遡る?)の文様に似るとしていま。

これらの研究結果は大凡調和的に見え、少なくとも前2世紀に遡る可能性が大きいと思われま。

皆さんの見解は、如何でしょうか？

013/014 QWD02544 どんたく 銅鐸の「鐸」とは何か?(どんたく)
(18) 98/01/06 23:22 009へのコメント コメント数:1

みなさん、こんにちは。 どんたく です。

「銅鐸はどこからきたのか」と問われれば、「朝鮮式小銅鐸が祖形であろう」というのが一般的な答えなのではないでしょうか。

かまくらさんからの設問に対しては、すでに kikkawa さんからのご回答があり、また恐らく他のパネリストの方々からも、詳しいお話があるうかと思いまるので、私は、もう少し別の角度から書かせて戴きたいと思いま。

え～っと、『「銅鐸」の「鐸」とは何か?』ということについてです。

1. 常識論

銅鐸は、青銅製のベルで、英語で言えば、BRONZE BELL です。でも、英語の BELL には、鐘も、鈴も、鐸も、全部含まれるようです。一方、漢字で書いた場合には、次のように意味が分かれま。

鐘：つりがね。お寺の鐘は、突いて鳴らす。
火の見櫓の半鐘は、叩いて鳴らす。

鈴：りん。小型のベルの中に舌(ゼツ)があり、これがあたって音がする。
風鈴なんてのもある。

鐸：おおすず。[説文に、「大鈴也」とある。]
振って鳴らす大きなすず。
舌(ゼツ)が木製のものが木鐸(ボクタク)、金製のものが金鐸。
昔、政令を発する時、文事には木鐸、武事には金鐸を用いた。
「新聞は、社会の木鐸」なんて言い方もありますよ。
一方、舌の材料に関係なく、次のような言い方もしま。
風鈴の大きいのが風鐸；鉄製のものが鉄鐸；銅製のものが銅鐸。

2. 古代中国では

鐘とか鐸と言いますと、何となく吊り耳のあるものを思い浮かべてしまいまりますが、中国では、どうもそうではなかつたようです。(*1)

鐘：中国では、約2700年前、柄についた環で吊り下げた有柄・無舌の叩き鳴らすカネを「鐘」と呼んでいた。
しかし、後には、「鐘」は有鈕・無舌のカネをさすようになった。

鐸：中国では、有柄・有舌の振り鳴らすカネをさした。
ただし、有鈕・有舌の大型のカネをさす場合もあつた。

鈴：中国では、有鈕・有舌のカネを普通には「鈴」と呼んだ。
この他、内部に石や金属の小塊を封じ込めて、振り鳴らすスズも、「鈴」であらわした。

3. 古代日本では
ところでこの「鐸」という字は、古い時代の日本では、ヌテ（又はヌリテ）あるいはサナギ（サナキ）などと呼ばれていたようです。
ただし、どうやらこれは銅鐸をさすのではなく、いずれも鉄鐸を指して使われた言葉のようです。

古事記：顯宗天皇の条：(*2)
鐸（ヌリテ、ヌテ）、奴弓（ヌテ）。
政事要略に、「鐸、倭訓塗手」とある。
新撰字鏡には、[金+民]にヌリテの訓がある。

日本書紀：顯宗天皇元年2月の条：(*3)
鐸（ヌリテ、ヌテ）、奴底（ヌテ）。

日本書紀：垂仁天皇15年8月の条：(*3)
鐸石別命（ヌテイシワケノミコト）。
姓氏録には、大鐸石和居命。

大治本華嚴經：(*4)
鉄鐸。[上 須受、下 奴弓]とある。

鐸比古鐸比売神社：（ヌデヒコヌデヒメジンジャ）(*5)
大阪府柏原市大泉4-6に現存する式内小社。

古語拾遺：天石窟の条：(*4)
鉄鐸[古語、佐那伎]（サナキ）。

延喜式：卷二：神祇二：四時祭下：鎮魂祭の項：(*6)
……。鈴廿口。佐奈伎廿口。……。宇氣槽一隻。……。
（この「佐奈伎」について、九条家本には「如戈之物也」との注がある。）

長野県・諏訪神社：(*7)(*8)
「さなぎの鈴」と呼ばれる神宝の鉄鐸がある。
他のいくつかの神社にも同様な鉄鐸がある。(*9)

この鉄鐸が銅鐸につながるか、と言いますと、どうも直接的にはつながりそうにないように思えます。

【主な参考資料】

- (*1) 佐原真：歴史発掘(8)「祭りのカネ銅鐸」1996.7. 講談社 p.136
- (*2) 日本古典文学大系：「古事記 祝詞」岩波書店 p.329,331
- (*3) 日本古典文学大系：「日本書紀 上」岩波書店 p.266
- (*4) 西宮一民校注：「古語拾遺」岩波文庫 黄 35-1 p.19,74
- (*5) 「大阪府神社名鑑」昭和46.1. 大阪府神道青年会 p.417
- (*6) 国史大系：「延喜式 前篇」吉川弘文館 p.42
- (*7) 原田淑人「考古茶話(四) サナギ(鐸・鐵鐸)というもの」
昭和35年。聖心女子大学論叢8
- (*8) 藤森栄一「銅鐸」(昭和39.8.初版) 学生社 p.115,184
- (*9) 田中巽「銅鐸関係資料集成」1986.3. 東海大学出版会 p.959

QWD02544 どんたく

014/014 QWD02544 どんたく 鐸舞(どんたく)
(18) 98/01/06 23:29 013へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたく です。

三国志・卷三十・魏書・東夷・韓の条というのがあります。
いわゆる魏志倭人伝が書かれている、すぐ前の条です。

ここに、次のような文章があります。(*1)

常以五月下種訖、祭鬼神、羣聚歌舞、飲酒晝夜無休。
ページ(8)

其舞、數十人俱起相隨、踏地低昂、手足相應、節奏有似鐸舞。

【訳文】(*2)

毎年五月には種を播きおわり、鬼神を祭る。人々は群がり聚まって歌舞し飲食する。〔それは〕昼夜を通じて休まず行なわれ、その舞は、数十人が一緒に立ち上がって調子をおわせ、地を踏むのに、足を低くまたは高く挙げ、手と足とは同じような調子で動き、そのリズムは中国の鐸舞に似たところがある。

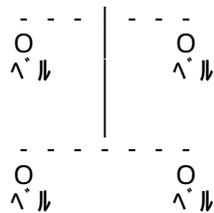
この「鐸舞」というものがどのようなものか、三国志には絵がありませんから分かりません。

しかし、『ひょっとすると、「鐸舞」とはこのようなものではなかろうか?』と思わせるような絵が、中国の広西省にあります。(*3)

ただし、これは単に「どんたく がそう思った」というだけのことであって、一般的に認められているものではないことを、お断りしておきます。(^^)

広西省の西漢時代の墓から、銅のベルがいくつか出土しています。このベルの頭には、羊の角状をした1対の鈕がついています。

同じ広西省にある、ある岩の崖からは、このベルを描いたと思われる絵も発見されています。この絵では、下図のように、「土」という字の形に組み合わせた棒?の先に、合計4個のベルがぶら下げられています。



そして、2人の人間が並んでいる真ん中に、この「土」がおかれています。

この2人の人間は、頭に何かをつけ、股を広げてバンザイをしたような格好をしており、何か踊っているような雰囲気です。

この「土」の高さは、人間の胴体よりも少し短い寸法です。

日本の銅鐸の絵のなかに、イトマキ状のものを持って人が踊っている?ものがありますが、あのイトマキ?と寸法的には似ている感じです。

でも、この広西省のベルの形は、日本の銅鐸とは大分違います。特に鈕の形が全く違ってきます。

従って、仮にこの広西省の鐸舞?を三国志の「鐸舞」に結び付けることが可能であったとしても、このベルを日本の銅鐸と結び付けて考えるのは、やはり無理があるように思えます。

(*1)三国志 三 中華書局 p.852

(*2)井上秀雄他訳注「東アジア民族史 1 正史東夷伝」東洋文庫 264 平凡社 p.206

(*3)広西壮族自治区文化庁文物処・広西壮族自治区博物館編：「広西左岸岩画」 1988.12. 文物出版社

QWD02544 どんたく

015/016 QWD02544 どんたく ベルの起源(どんたく)

(18) 98/01/07 21:37 013へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたく です。

「銅鐸はどこからきたのか?」という設問に対して、さらに溯って、「そもそも、ベルというものは、どうして生まれたのか?」ということを考えてみたいと思います。

実は、既にそういうことを考えた人がおりますので、その人の説を紹介します。

その人は、米国の Nathaniel Spear, Jr. (1896年ビッパ^ビ-^グ生まれ) と言い、米国ベル協会 (American Bell Association) の会長を勤め、長年にわたって古今東西のベルを収集して "A TREASURY OF ARCHAEOLOGICAL BELLS" という本を著わしています。

この本の中には、世界各国の考古学的なベルの写真と解説が収録されており、その中には、日本の銅鐸も含まれています。

この本の冒頭に、次のような一文が載せられています。

「最初にベルというものが生まれたのは、いつ頃か？」という質問を、しばしば受けることがある。
このような質問に対して、筆者は敢えて次のように答えたい。

『稲妻の閃光がひらめき、激しい雷鳴が天空に響きわたったとき、古代の人々は、心底恐れおののいたことであろう。そうして、この激しい音と火とによって表わされた雷というものに、圧倒的されるような「巨大な力」の存在を感じとったことであろう。

まさしくその瞬間、古代人は、自分自身も大きな音を発することによって、この「巨大な力」に立ち向かおうとし、手近にあった棒を握りしめて石を叩き続けたのではなからうか。このようにして、最初のベルというものが誕生したと考えられるのである。』

すなわち、ベルというものの誕生を、雷と結び付けて考えておられます。

【参考資料】

Nathaniel Spear, Jr.: "A TREASURY OF ARCHAEOLOGICAL BELLS"
Hastings House Publishers Inc., New York ISBN:0-8038-7182-1

QWD02544 どんたく

016/016 BYW00406 かおる RE:議題 1「銅鐸はどこから来たのか」
(18) 98/01/07 23:06 009へのコメント

議題 1

>> 「銅鐸はどこから来たのか？」
>> 銅鐸の起源・原型についてそれぞれのお考えをご発言願います。
>> いつごろ・どこから・どうやって銅鐸が倭国にもたらされたのか、もちろん
>> 倭国独自のものであるという観点からのご意見もありましたら、その根拠も
>> 添えてご発言下さい。
いきなり、難しい質問なので、悩んでおりました。

まず、銅鐸の原形ですが、形からは朝鮮の銅鐸はその第一候補でしょうね。
佐原氏の「歴史発掘 8 祭りのカネ銅鐸」(講談社刊)で、紀元前三世紀頃に韓国で作られたと思われる鈴について「小さく(4~16センチメートル)、吊り手の断面は銀杏型で、身に紋様を飾らず、身の中央と両側に型持ちの孔をあけるなどの違いがあるとはいえ、よく似ています。韓国合松里(しょうごうり)の銅鐸は、内面突帯をそなえている点まで、日本の銅鐸と共通しています。」と解説しています。

一見した形は銅鐸です。
この朝鮮式銅鐸はシャーマンが身に付けていたと考えられています(「歴史発掘 6 弥生の世界(酒井龍一)講談社刊」の199ページに韓国国立全州博物館で想定復元したシャーマンの写真があります。かなりおかしいです。)

ただ、上記の解説にもあるよあに、吊り手の断面が銀杏型で、身に紋様を飾っていません。

日本の最古段階の銅鐸とされる菱環鈕式銅鐸の吊り手は菱形で、身には横帯文が施されています。

また、大きさも20センチを超えるようになっていきます。
弥生人は、この韓国式銅鐸から菱環鈕式銅鐸へいきなり飛躍したのでしょうか。途中にまだ見つからない途中経過の銅鐸があったのかもしれないね。

いまのところ、韓国式銅鐸と日本の銅鐸は点線で繋がっています。

次にいつごろ伝わったのかですが、kikkawaさんが#10で紹介されているように、日本の銅鐸の製作年代は佐原氏が流水文銅鐸と、弥生土器の流水文との関連から流水文銅鐸は弥生 期に作られたものと考えられています。

このため、最古段階の菱環鈕式銅鐸はその前段階の弥生 期の末には作られていたのではないかと考えられています。

私はこれが定説かと思っていたのですが、そうではないと考えられ方もおられるようです。

例えば寺沢氏は「考古学その見方と解釈 上 弥生時代の青銅器とそのマツリ」（森浩一編：筑摩書房）で主な青銅器鑄型の出土時期から考えて、弥生中期中頃には国産の青銅器が作られ始めており、銅鐸も京都府鶏冠井（菱環鈕式の鑄型）の鑄型が中期中頃か、遡っても前半頃とされています。

また、流水文土器の年代については、現奈良県田原本町教育委員会の藤田三郎氏が「三世紀の九州と近畿 銅鐸鑄造年代とその祭祀（橿原考古学研究所附属博物館編：河出書房新社）で土器の流水文や絵画と銅鐸の流水文や絵画を比較考証したあと、「佐原先生が最も根拠しておられた横形流水文については、第二様式の土器に限定できないというのが結論であります。時期的には第四様式まで横形流水文が残ると考えられますので、どうもその時間幅でとらえる必要があるだろうと思います。」とされています。

（もっとも、佐原氏は三期以降に横形流水文の土器が残ったとしても、圧倒的に数がないので、基本的には横形流水文は二期の紋様だと考えられているようです。）

と、まあ、他にもあるとは思いますが、銅鐸の製作年代については色々な見解があるようです。

えっ、私ですか。

今のところは、佐原氏の説に説得されていますが、寺沢氏の説も気になっています。

最後に、どうやってですが、困りましたね。

大分県宇佐市の弥生時代終末期の住居跡から潰された朝鮮式銅鐸が出土しているそうですので、朝鮮半島に近い九州北部に渡来人が持ち込んだか、倭人が向こうに渡って手に入れたのかもしれませんが。

それが弥生 期ごろだったら佐原氏の年代観に近くなるし、弥生 期以降だと、寺沢氏の年代観が有利になるのでしょうか。

でも、いつ渡って来たのかは、今のところ考古学的にはなにも分からない状態です。

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

017/021 YIG00127 かまくら
(18) 98/01/08 20:39

【重要】機種依存文字について
コメント数：1

【シンポジウム】銅鐸を考える に参加及びROMの皆さま、連絡事項が発生いたしましたので、以下ご確認下さい。

MACユーザーの方から機種依存文字のご指摘がございました。
ギリシア文字での1 2 3・・・は機種依存のため、本来の文字がでないそうです。
今後ご注意お願いいたします。

それでは機種依存の為読めなかったMACユーザーの方へ

発言8では

>> この穴の数が最古段階の菱環鈕式銅鐸では1つ、外縁付鈕式銅鐸の 式からは2つ
>>になるそうです。

2です

発言16では

>> 次にいつごろ伝わったのかですが、kikkawaさんが#10で紹介されているように、
>>日本の銅鐸の製作年代は佐原氏が流水文銅鐸と、弥生土器の流水文との関連から流水文
>>銅鐸は弥生 期に作られたものと考えられています。

2です

doutakusinp01998

>> このため、最古段階の菱環鈕式銅鐸はその前段階の弥生 期の末には作られていたの
>>ではないかと考えられています。 1 です

以上のこと、皆さま頭のどこかにおとどめくださって、これからの議論を
大いに盛り上げてまいりましょう。＼(๑~)／

司会者 / かまくら

018/021 YIG00127 かまくら
(18) 98/01/08 20:56

銅鐸の見える博物館集成
コメント数：1

【シンポジウム】銅鐸を考える が始まり、議題1についてもパネリストの
皆さまよりご意見いただいておりますが、ここで討論形式とはちょっと離れ
まして、しかし今後銅鐸を考えるうえで非常に為になる企画をご提案いたし
ます。(これは、パネリストかおるさんの案です。＼(^.^)／)

タイトルは「銅鐸の見える博物館集成」!!

- 1、主な銅鐸の紹介
- 2、何処の博物館へ行けばこんな銅鐸が見れる あそこではこんな銅鐸
が叩ける といった情報交換
- 3、これは司会者からの付け足してことでちょっと欲張りまして、
こんなミュージアム・グッズがある又は関連書籍、関連ホーム
ページのアドレス紹介、講演会・講座の情報の提供等

以上のような内容で、気軽に情報交換できるツリーとしたいと考えておりま
す。「これはっ!」という情報をお持ちの方は是非ご紹介下さい。

尚、【シンポジウム】銅鐸を考える は1/25までは司会とパネリストのみの
発言になっております。1/26より一般参加開始となり会議室終了の2/25まで、
皆さまからの発言・情報提供でより一層盛り上がっていく予定でございます。
1/25までは司会者までメールをいただけましたら、その情報は一時的にプール
いたしまして、一般参加開始となりましたら司会の方から紹介させていただきます
ます。

その際の確認事項といたしまして

- 1.メールは要約等の処理の上、会議室で公開される可能性がご
ざいます
 - 2.メールは場合によってはスタッフの方が拝見する可能性もご
ざいます
- 以上2点についてはトラブル防止の必要上しっかりと記憶に
おとどめ下さい。

それでは、楽しく為になる情報をお待ちしております。(^ ^)

司会者 / かまくら

019/021 BYW00406 かおる RE:【重要】機種依存文字について
(18) 98/01/08 21:46 017へのコメント

かまくらさん、こんばんは。

機種依存文字と知らずにギリシヤ文字を使っていました。
読めなかった皆さん失礼しました。

今後注意いたします。

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

020/021 BYW00406 かおる 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
(18) 98/01/08 22:55 018へのコメント

ページ(12)

皆さんこんばんは。
言いたしっべの私から、まずは「銅鐸の見える博物館」を紹介します。

【奈良県立橿原考古学研究所附属博物館】

昨年10月にリニューアルオープンした考古学専門の博物館です。
ここには、奈良県内で出土した旧石器時代から室町時代までの遺物が所狭しと展示されています。

勿論、奈良県内出土の銅鐸もレプリカも含めて展示されています。

例えば、土の鋳型で鋳造されたと考えられている兄弟銅鐸の

石上銅鐸二号 突線鈕1式 二区流水文 高57センチ

この銅鐸の吊り手の第二紋様帯に戈を持つ二人の人物が描かれています。

(兄弟は、伝奈良県出土銅鐸 突線鈕1式 二区流水文 高60.2センチですが、この銅鐸の裾には、鹿六頭とサギ(のような鳥)一羽が書き加えられています。)

他に、桜井市大福小学校の校庭から出土した

大福銅鐸 突線鈕1式 袈裟襷紋 高45センチ

この銅鐸は、畿内第五様式期後半頃に築造されたとされる方形周溝墓の周溝の土中から発見されて注目を集めました。

また、鐸身に赤色顔料の付着があり、何に使用されたのか興味を持たれます。

次に、銅鐸鋳造に関連して、唐古・鍵遺跡から出土した、銅鐸の石製鋳型や土製鋳型の外型、送風管・フイゴ羽口などが展示されています。
(確か、どんたくさんは、この土製鋳型を泉森館長の好意で実測させてもらったのではなかったかな。)

他にも銅鐸を木に吊るして鳴らし、この前で皆が祈っているジオラマが展示されています。

このほか、藤ノ木古墳出土の太刀や金銅製履・金銅製冠などの復元品も展示されていますので、考古学ファンでなくても、楽しめる博物館です。
ぜひ、ご覧ください。

【場所】 奈良県橿原市畝傍街50-2

【電話】 0744-24-1185

【交通機関】 近鉄橿原線畝傍御陵前下車徒歩5分
又は近鉄南大阪線橿原神宮前下車徒歩15分

【開館時間】 9時～17時

【休館日】 月曜日、祝日

【入館料】 大人=400円、高校・大学生=300円、小・中学生=200円

なお、展示室以外のミュージアムショップ及び資料室はフリーゾーンです。
(奈良県の発掘資料はここへくれば見ることができますので、活用して下さい。)

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

021/021 RXE12761 六爾 六爾の銅鐸研究史
(18) 98/01/09 00:09

あけましておめでとうございます。

銅鐸シンポがはじまって以来早くも5日目突入いたしました。
私は、ちょっとパソコンの調子が悪かったので、発言はお休み状態でしたが、そろそろ黙っているわけにも行かず、困っています。

とりあえずは、金曜日に関東で一番銅鐸がある場所である、東博へいってこようと思います。それからの発言になるかと思えます。ちっとも、インスピレーションが沸かないのです。佐原真、春成秀爾という二人の名コンビが銅鐸研究をリードしているのですが、その議論は高度であり、素人の介入する余地は全くないのが現状なのです。そこで、六爾流銅鐸研究物語をはじめてみましょう。

はじめは哲学者の提唱から

1920年(大正10)哲学者であり、優れた歴史研究家でもあった和辻哲郎先生は銅鐸銅剣文化圏論を発表されました。この文化圏論は現在の青銅器文化圏理論の基礎となるもので、教科書などにも必ずあるあの分布図はこれが発祥となっているのです。

マッチが火をつけて消えてしまった銅鐸研究

1927年(昭和2)梅原末治(マッチことうめはらすえじ)先生が『銅鐸の研究』を出すとき、その議論が止まってしまいました。これは、あまりの見事な研究の成果であったがために、ほかの研究者が遠慮してしまったのです。

マッチへのライターへの反撃

そこへ反撃ののろしを挙げたのが小林行雄先生です。椿井大塚山古墳の一件以来、すっかり信頼関係が崩れてしまった、マッチ梅原とライター小林のコンビはついに学説上でも大きく対立するようになります。森本六爾先生の考えを発展し銅鐸の原料は船載銅利器のいつ武士であるという説を発表したのです。

ライターでガスバーナーに火をつける

そして、1960年(昭和35)その小林先生に懇憑され、全く実物を検討せずに写真だけで書いた論文が佐原真先生の『世界考古学大系』の中の論文だったのです。この中で佐原先生は画期的といわれた銅鐸をつり下げる紐(ちゅう)による分類を発表されたのです。

ガスバーナーから2口コンロへ

その分類を1970年(昭和45)佐原先生の学問友達でもあり、梅原末治先生の最後の弟子である田中琢先生が「キクタク」と「ミルタク」に分類されたのです。ここにいたって、分裂していたマッチとライターは融合して強力な2口ガスコンロを形成するに至ったわけです。

持ち運び可能なカセットコンロ

マッチとライターの融合によって強力な2口コンロになった銅鐸研究は一般の大衆にはちょっとやそつでは手の届かないところになってしまいました。それを誰でもどこにでも持っていけるように親しみやすくされたのがカセットコンロ藤森栄一先生です。1964年(昭和39)に発表された『銅鐸』は毎日出版文化賞を受賞し、一般大衆でも銅鐸研究に参加出来るということを知らしたのです。

レンジでチンする銅鐸研究

考古学はインスタントではいかん、と終生いつづけたマッチ先生のしかめ面が目に見えるようですが、以後の銅鐸研究は百花繚乱となります。また、銅鐸の出土も相次ぎ、荒神谷、加茂岩倉と大量の銅鐸がわれわれのまえに姿を現したのです。これで、現在までの銅鐸の出土総数は460数個を数えるようになったのです。

***** 六爾 (RXE12761@niftyserve.or.jp) *****

こちらの発言は「考古学の部屋」「銅鐸シンポ」の両方にアップしております。

022/023 YIG00127 かまくら
(18) 98/01/09 21:34

議題 2 「銅鐸の役割」

パネリストの皆さま、議題1の「銅鐸はどこから来たのか」に引き続きまして、1と平行しつつも次ぎの議題に入りたいと思います。

議題2では銅鐸の役割(その変遷も含む)について、パネリストの皆さまに、ご意見をお伺いいたします。

そもそも銅鐸とは一体、何に使われたのか、また地域によってその役割に違いはあるのか、銅鐸が使われた時代(例えば弥生時代前・中・後期でわけた場合)において役割の変化はあったのか等についてご発言下さい。

尚繰り返しになりますがシンポジウムの進行は下記の通りですので、一般の方も司会の私宛に積極的に、ご意見等のメールをお願いいたします。

1/4~1/25

Aコース: 会議室は司会&パネリスト間の議論の「場」のみとなります。

ページ(14)

doutakusinp01998

Bコース：一般参加の方からのメールによる発言を司会 かまくら が1/25
までプールいたします。ご意見・ご要望なんでも結構ですので
ドンドン私宛にメールをお出しく下さい。

その際の確認事項といたしまして

- 1.メールは要約等の処理の上、会議室で公開される可能性がご
ざいます
 - 2.メールは場合によってはスタッフの方が拝見する可能性もご
ざいます
- 以上2点についてはトラブル防止の必要上しっかりと記憶に
おとどめ下さい。

1/26以降2/25会議室終了まで

A・Bコースの解消

一般参加開始となります。Bコースでプールさせていただいていた発言は
これ以降 かまくら の方から紹介させていただきます。

一般参加の方は直接会議室に発言可能になります。

司会者 / かまくら

023/023 YIG00127 かまくら RE:【重要】機種依存文字について 訂正
(18) 98/01/09 21:47 017へのコメント

パネリスト及びROM参加の皆さま、こんにちは。(^ ^)

>ギリシア文字での1 2 3・・・は機種依存のため、本来の文字がでないそうです。

ギリシア文字ではなく、ローマ数字の間違いでした。
ここに訂正させていただきます。大変失礼いたしました。m(____)m

司会者 / かまくら

024/025 VZD07512 ラン2 RE:鐸舞YAHHO
(18) 98/01/10 01:48 014へのコメント

どんたくさん みなさん こんにちは。ラン2です。

鐸舞について、たいへん興味深く拝見しました。
ラン2はこの鐸舞なるものについて、また銅鐸の原型って何なんだろうと
考えてみました。

どんたくさんが#13で

>>「銅鐸はどこからきたのか」と問われれば、
>>「朝鮮式小銅鐸が祖形であろう」というのが一般的な答えなのではないでしょうか。
と、おっしゃているとおりだと思いますが、これについては、別に発言したく思
いますので、今日は、鐸舞について、少しコメントさせていただきます。

中国において、「鐸」がどういうものであったかについてですが、
どんたくさん#14で常識論で定義されていることそのまま中国でもあてはまると思
います。

林已奈夫編『漢代の文物』（朋友書店 1996年再版）を見ると、長柄のついている
物（福引きで当たった時に鳴らす鈴にそっくり）と、鈕がついている物（韓国式小
銅鐸に感じがちょっとだけ似てる）の2種類の図が示されています。
『説文』で「鐸大鈴也」とあるように、鈴の大きい物と考えた方がいいように思
うのですが、どうでしょう。

鐸舞がどういったものかについてなんですが、孫机著『漢代物質文化資料図説』
（中国・文物出版社 1991年）に、興味深い図が鐸舞として紹介されています。
馬王堆1号墓の黒地彩絵漆棺に描かれているまさしく両手に鐸を持って踊ってい
る(?)仙人が妖怪の図です。
へえ~と思ったのは、両手を上に向けて振り鳴らしているんです。

手元にある中国の青銅器関係の本に出てくる鐸にはみな柄がついているんですが、
鈕の物は少ないってことなんですかね。

また『漢代の文物』で『周礼』には軍隊の教練に鐸を使って合図することが記さ
ページ(15)

doutakusinpo1998

れているとあり、また漢代にも進退の合図など軍用の用途をもっていたと思われる
るとありますが、この軍用楽器として使われたのは、柄のあるタイプでしょうか。
紐のタイプなのででしょうか気になります。

では また

ラン 2

025/025 VZD07512 ラン 2 東大総合博物館のホームページ
(18) 98/01/10 02:40 018へのコメント

SUBJ: 銅鐸の音を聞こう！
こんにちは。ラン 2 です (^o^)/
「銅鐸の音の聞ける博物館」をご紹介します。
東京大学総合博物館のホームページのデジタルミュージアムです。
インターネットにアクセスできる方は、ぜひいらっやいませ。

<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/>

今も、銅鐸の音を聞きながらこれを書いています (^_^)

026/028 VZD07512 ラン 2 用語解説、菱環紐(^ ^)
(18) 98/01/11 20:09 コメント数：1

みなさん こんにちは。ラン 2 です (^o^)/

ラン 2 は白状しますと、銅鐸はにわか勉強です(^^;;
でもって、いろんな本を読んで、1 番にすごいと思ったのは、やはり佐原真の業績、
菱環紐に気がつかれたということですね。
この菱環紐って、どういう意味なのか基礎知識としてまとめておきますね。

#21で、六爾さんが簡潔、明瞭な研究史をアップしてくださいました。
すごくおもしろくて、思わずのけぞってしまいましたよ (^o^)

その中で、
>> そして、1960年(昭和35)その小林先生に懇憑され、全く実物を検討せずに写
>>真だけで書いた論文が佐原真先生の『世界考古学大系』の中の論文だったのです。この
>>中で佐原先生は画期的といわれた銅鐸をつり下げる紐(ちゅう)による分類を発表され
>>たのです。

この平凡社『世界考古学大系』というのは全16巻で、とても定評のある全集です。
その第2巻(日本II弥生時代)の中の「銅鐸の鑄造」がそうです。
現在の佐原真を築いたといっても、いいすぎではないと思います。

それまで梅原末治の『銅鐸の研究』で資料集成されて以来、三木文雄らによって
主として文様による型式分類が試みられてきました。
佐原真は、『世界考古学大系2』「銅鐸の鑄造」において、吊り手(紐)の変化
によって、4類9種に分けられました。現在ではこの型式分類がひろく使われて
います。
吊り手(紐)の変化ですが、ちょうど縦に切って(ホントに切っちゃだめよ)断面
を観察すると、吊り手の部分は の形、菱形に見えます。この菱形の環による
紐ということです。

分類 紐の断面

最古段階の菱環紐式

古段階の外縁付紐式 | 鱗からつながる外縁

中段階の扁平紐式 | 扁平な外縁
| 扁平な内縁

新段階の突線紐式 =|= 扁平な外周および文様帯に突線がつく
|

さて、この分類に対する製作年代、時期区分についてはどなたかお願いします。

ラン 2 が思うに、文様ばかりに着眼していたものを、銅鐸の本来カネとしての機能
に着目し、カネとして使うならば、吊り手こそ重要な型式分類の鍵となることに気
ページ(16)

ずかれたインスピレーションって、やっぱりすごいわ。

では また (^.^)/ ~~~

ラン 2

027/028 QWD02544 どんたく 銅鐸の分類と製作年代
(18) 98/01/11 20:59 026へのコメント コメント数：1

ラン 2 さん、みなさん、こんにちは。 どんたく です。

ラン 2 さん、実にうまく吊り手の断面図を描かれましたね。
それから、六爾さんに対するコメント、私も全く同感です。

》さてこの分類に対する製作年代、時期区分についてはどんたくさんお願いします。

はい、かしこまりました。といっても、本の受け売りをするだけですが。(^^)

ラン 2 さんが書いておられるように、銅鐸の分類方法については、先学によって色々な説が唱えられたようですが、現在では佐原真氏の提唱による、吊り手の形の変遷をもとにした分類方法が、最も説得力のあるものとして受け入れられているようです。

佐原真氏の著書から、銅鐸の分類と、これに対応した製作年代と弥生時代の時期区分を引用してみます。

	[銅鐸の分類]	[製作年代]	[時期区分]
最古段階	I -1式 (菱環鈕 1 式)	前 3 ~ 前 2 世紀	弥生 I 期
	I -2式 (菱環鈕 2 式)		I 期
古 段 階	II -1式 (外縁付き鈕 1 式)	前 2 ~ 前 1 世紀	II 期
	II -2式 (外縁付き鈕 2 式)		III ~ III 期
中 段 階	III -1式 (偏平鈕 1 式)	前 1 ~ 後 1 世紀	III ~ IV 期
	III -2式 (偏平鈕 2 式)		IV 期
新 段 階	IV -1式 (突線鈕 1 式)	1 ~ 2 世紀	IV ~ V 期
	IV -2式 (突線鈕 2 式)		IV ~ V 期
	IV -3式 (突線鈕 3 式)	2 世紀	V 期
	IV -4式 (突線鈕 4 式)		V 期
	IV -5式 (突線鈕 5 式)		V 期

ただし、

- (1) この年代観については、研究者によって有る程度の差がある。
- (2) 佐原氏自体の年代観にも、± 1 世紀程度の誤差の可能性はありうる。としています。

【参考資料】

佐原真：歴史発掘(8)「祭りのカネ銅鐸」1996.7. 講談社 p.87

QWD02544 どんたく

028/028 QWD02544 どんたく 銅鐸の使用年代
(18) 98/01/11 21:56 027へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたく です。

#27では銅鐸の製作年代について述べましたが、それでは使用年代の方はどうなのでしょう？

銅鐸の製造がやまってから、程なく使用もされなくなったのでしょうか？
それとも、その後も（場所によっては）永らく使用されたのでしょうか？
このことを考える上で、以下 3 つの例をあげておきます。

1. 神庭荒神谷遺跡

松江市の島根県埋蔵文化財調査センターの展示室にあった説明パネルには、
『出雲・神庭荒神谷遺跡（銅剣358本、銅鐸6個、銅矛16本が出土）で
火を焚いた跡があり、熱残留磁気法で測定した結果、5世紀頃（？）
という結果が出た。』

とあったように思います。

ただし、この件はウロ覚えで不確かです。（*1）
どなたか、助けてくださ～い。

2. 加茂岩倉遺跡

出雲の加茂岩倉遺跡(1996.10.銅鐸39個が出土)の、銅鐸の埋納坑近くの土中と、これから北西約3メートル離れた土坑の中から、木炭の粉末が見つかっています。

これら2個所の木炭片について、米国の分析機関で炭素同位体による年代測定を行なった結果、

埋納坑近くの木炭の年代は、B.C. 40±50年、
土坑の中の木炭の年代は、B.C. 190±50年、
という結果が得られたことが新聞に報道されています。

同じ新聞には、『加茂岩倉銅鐸の製作年代は紀元前2世紀ごろから紀元後1, 2世紀と考えられており、木炭の年代もこれに合致する。』とも書かれています。(*2)

3. 八王子遺跡

1997年3月13日に、愛知県一宮市八王子の弥生遺跡の環濠の内側の場所から、外縁付き鈕1式の流水文銅鐸が、縦に逆さまに埋まった形で見つかりました。方形周溝墓の下から見つかったそうです。(*3)

その後の新聞報道によりますと、

『銅鐸は高さ21.6cmと小型であることや、表面の模様から弥生中期前葉(紀元前2世紀ごろ)に近畿地方南部の技術者が作ったと推定された。』
『同時に出土した土器の特徴から、紀元前1世紀ごろ地中に埋めて処分されたことも判明。』
というように書かれています。(*4)

この銅鐸の吊り手には、こすられて擦り減ったとみられる光沢部分があり、これは、紐か布かで吊るしたためたためだろうと推定されています。(朝鮮の銅鐸は別として、日本の銅鐸でこのような「吊っていた証拠」が見つかったのは、初めてのことでしょう。) また内面突帯が著しく摩耗していることから、相当長期間にわたって音を鳴らして、使われたものと考えられます。

銅鐸とは違いますが、「三種の神器」の場合には、作られてから後ずいぶん長い年月にわたって伝わり、祀られてきてますよね。(現存の「三種の神器」がいつ作られたものなのかは知りませんが。)

それに較べれば、恐らく銅鐸の使用年月は、もっと短かったのでしょうか。

【参考】

(*1) 神庭荒神谷遺跡の熱残留磁気調査については、
時枝克安・伊藤清明：「荒神谷遺跡の焼土の年代と性格」
「荒神谷遺跡発掘調査概報(3)」昭和62年、松江 所収
に、AD590±30、AD950±100、AD1250±80、AD250±80 などという
数字があるらしいが、これを直接読んでいないので、内容は分からない。
どなたかご存知の方がおられたら、ご教示をお願いしたい。

(*2) 山陰中央新報 1997.11.20. (24面)

(*3) 1997.9.7.滋賀県野洲町・銅鐸博物館における、
愛知県埋蔵文化財センター：樋上昇氏の講演による。

(*4) 日本経済新聞 1997.11.8. 及び 朝日新聞 1997.11.8.

QWD02544 どんたく

029/029 VZD07512 ラン2 用語解説、弥生の時期区分(^ ^)
(18) 98/01/11 22:33 027へのコメント

どんたくさん みなさん こんにちは。ラン2です(^o^)/
さっそくのフォローありがとうございます m(_ _)m

ラン2は、弥生時代はあまり興味がありませんでした。
ページ(18)

doutakusinpo1998

今回勉強させてもらって、ラン2自身が新たに知識として得たことなども、みなさんと共有したいと思っています (^o^)

まずどんたくさんがまとめてくださった、銅鐸の分類と製作年代の図式の中で、弥生の時期区分ということですが、考古学が好き！という方ならわかると思いますが、この弥生I期から弥生V期って、何による区分だと思

います？
実は土器に基づく時期区分なんです。つまり土器の編年です。
考古学者は土器を古い順に並べる（編年）ことによって時期を分けてきました。

弥生時代前期 = 弥生I期

弥生時代中期 = 弥生II ~ IV期

弥生時代後期 = 弥生V期

庄内式土器の時期

（ただし庄内式土器の時期は、弥生VI期と言う人もいるし、古墳時代初頭と言う人もいます）

とされています。では また・・・ 考古学基礎講座でした。 ラン2

030/031 YIG00127 かまくら 【お知らせ】これからの予定
(18) 98/01/12 21:48

【シンポジウム】銅鐸を考える に参加の皆さま、こんにちは。(^ ^)

議題に対する討論と「銅鐸の見える博物館集成」「六爾の銅鐸研究史」の企画でシンポジウムをすすめてまいりましたが、今後のより活発な発言をお待ちするために、これからの予定をお知らせいたします。
ROMはもとより一般参加をされる方のご参考になれば幸いです。

1/14 議題 3 「銅鐸を持っていた人々とは」

1/15 ラン2さん企画 「銅鐸こぼれ話」

1/18 議題 4 「なぜ銅鐸は使用されなくなったのか」

1/22 議題 5 「出雲と銅鐸の関係」

1/26からの一般参加開始より、議題1～5までについて質問・意見交換をする一方で新たな議題での討論を考えております。何か議題についてのご提案等ございましたら、司会者までメールにて連絡お願いいたします。

「銅鐸の見える博物館集成」「六爾の銅鐸研究史」「銅鐸こぼれ話」などの企画はシンポジウム終了まで続けてまいりまして、こちらの方でも話の花を咲かせてゆきたいと思っております。

追記：ローマ数字の件

一部のMACユーザーより、ローマ数字は文字化けしてしまうので、代替文字を使用して欲しいというご要望が入っております。再度確認よろしくお願ひいたします。

司会者 / かまくら

031/031 KFA03002 kikkawa RE:銅鐸の使用年代
(18) 98/01/12 22:34 028へのコメント

火を焚いた跡があり、熱残留磁気法で測定した結果、5世紀頃(?)という結果が出た。』とあったように思います。ただし、この件はウロ覚えで不確かです。(*1)
こんにちはどんたくさん、これに関しては、以下の本が参考になると思います。
中島正志・夏原信義『考古学ライブラリー 9 考古地磁気年代測定法』(ニューサイエンス社)

どこかに置きっぱなしなのか、本棚に見つかりませんでしたので、データを当てる事が出来ませんので、定性的な話で失礼します。見つかりましたら、補足します。

doutakusinp01998

磁性鉱物は、その組成によって決まった温度以上になると磁力を失い、再びその温度以下になると、その場所での磁力線の向きと磁場強度に従い、磁力を獲得します。この温度をキュリー温度と言います、この温度は鉱物の融点よりは遥かに低く、粘性により向きが変化することは、殆ど無いと考えられます。

地球磁場は、年代により刻々と向きや強度が変化するもので、世界地図にも磁極は年代入りで表記されていますね。磁極は、蛇行しながら自転軸の周りを動いていき、各地における磁力線の方向も刻々と変わりますので、熱残留磁気の向きから、窺が最後に使われた年代を推定しようとする方法です。

実際には、色々問題点有りますので、それを列挙します。

1. 遺跡が現在までに、地震や豪雨などによる地滑りなどで動いていないこと。
2. その後に二次的に磁場を受けますが、その成分をきちんと消磁できること。
3. 磁極は、ぐるぐると地軸の周りを回るので、予め年代幅が絞れないと、複数の解が生じることに成ります。
4. 年代が既知の試料を用いて、予め年代による偏角・俯角の変動が知られていなければ成りません。地球磁場が、双極子で高い近似が出来るなら、世界のどこかで変動曲線が求められていれば、計算で世界中の変動曲線が得られますが、実際に世界中で磁場を測定したデータを球関数展開すると、2次の項だけではとても満足には近似できず、高次の項がかなり残るので、そうも行きません。そこで、限られた地域で変動曲線を作る必要があります。
5. これらの条件を満たしたとしても、測定年代が研究目的に必要なだけの誤差に抑えられるか。

このような問題点が、クリアされているのでしょうか？

032/036 QWD02544 どんたく RE^2:銅鐸の使用年代
(18) 98/01/13 20:16 031へのコメント

きっかわさん、こんにちは。 どんたくです。

早速にお教え戴いて、有り難うございました。

>> どこかに置きっぱなしなのか、本棚に見つかりませんでしたので、データを当てる
>>ことが出来ませんので、定性的な話で失礼します。

イヤー。本を見ずに、記憶だけでこんなにキッチリと書かれるなんて、スゴイ！

>> 3. 磁極は、ぐるぐると地軸の周りを回るので、予め年代幅が絞れないと、複数の解
>>が生じることに成ります。

そういえば、島根県埋蔵文化財調査センターで見た展示パネルでは、地球の磁極の位置の軌跡が、まるで酔っ払いがグルグル・フラフラと歩き回ったかのような形で描かれておりました。

QWD02544 どんたく

033/036 QWD02544 どんたく 銅鐸はマツリの祭器？
(18) 98/01/13 20:23 022へのコメント コメント数：3

みなさん、こんにちは。 どんたく です。

>> 議題 2では銅鐸の役割（その変遷も含む）について、パネリストの皆さま
>>に、ご意見をお伺いいたします。

「銅鐸はマツリの祭器であろう」というように言われていますが、それではどのようなマツリであったか、ということになると、まだどうもはっきりしていません。

銅鐸の役割を探る主な鍵として、次のようなものが考えられます。

- (1) 銅鐸に描かれた絵画から、その秘密を探る。
- (2) 「なぜ銅鐸が埋められたか」という面から、アプローチする。

この二つのテーマについて、私なりに概観してみることに致します。

QWD02544 どんたく

034/036 QWD02544 どんたく 銅鐸絵画の意味づけ
ページ(20)

(18) 98/01/13 20:29 033へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたく です。

銅鐸の謎を解く一つの鍵として、銅鐸の絵と文様が注目されています。

ところで、銅鐸の絵が何を意味しているかということになると、次のように、色々な解釈があるようです。(*1)

風物詩派 : 銅鐸の絵を、単に弥生時代の日常生活・環境を風物詩的に表現したものとする。(梅原1927)

水田風物詩派 : サギ・コイ・フナ・カエル・スッポン・イモリ・カエル・ヘビ・カニ・トンボ・アメンボ など、絵に表われる生物を、田植えのころの「水田」との関わりで捉える。(根木1991、根木ほか1991)

季節派 : 季節感を織り込んだ絵とみる。(直良1933、藤森1933、三木1963、江上1966)

画題位置重視派 : 絵を描いた場所を問題とする。(藤森1964)

農作祈願派 : トンボ・カマキリ・カエル・イモリ : 害虫を捕獲する。
スッポン・魚 : 水の豊かさを示す。
鹿・イノシシ : 田を荒らす害獣。
というように考えて、豊作を祈願するものとみる。(鳥越1970)

農耕賛歌派 : 「弱肉強食の世界にあって、獣を狩りして生きてきた。しかし、今、稲作を知って、倉には米が満ちている。いざ、神を称えようではないか。」
という内容の、農耕賛歌とみる。(小林1959、小林1967、佐原1983)

ただし、次の文章にみるように、最近になって佐原氏は「農耕賛歌派」から転向されたようです。(*2)

春成 : 佐原さんも、1995年の『銅鐸の美』展の解説やカタログまでは小林さんの「農耕賛歌」説を支えてきていたし、本書に収録したフォーラム(1996.10.21.開催)でもそうでしたが、やっと小林説では駄目だと宣言しましたね。
佐原 : かつては、師の影を踏もうとして踏めず、今では、踏みつけた足を向ける先に迷っている。

要するに、銅鐸の絵のもつ意味について、現段階では専門家でも意見がまちまちで、よく分かっていない、ということなのでしょう。

【参考資料】

(*1) 国立歴史民俗博物館編の図録：「銅鐸の美」1995.10.毎日新聞社 p.48

(*2) 国立歴史民俗博物館編：「銅鐸の絵を読み解く」1997.3.小学館 p.158

QWD02544 どんたく

035/036 QWD02544 どんたく 銅鐸はなぜ埋められたか？
(18) 98/01/13 20:29 033へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたく です。

銅鐸の謎を解くもう一つの鍵は、「銅鐸はなぜ埋められたか」という問題です。

銅鐸は、たいていの場合、1個か2個程度出土するというのが普通のパターンだったのですが、出雲の神庭荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡で思わぬ大量の青銅器が見つかって、皆がビックリ仰天。あらためて「何故埋められたか」ということが問題になりました。

ページ(21)

1997.11.18.～12.21.に大阪市立美術館で「古代出雲文化展」が開催されましたが、ここの壁に次のような文章が掲げられておりました。
(この文章は、この文化展の図録には載っていない。)

「なぜ埋められたのか？」

発掘された青銅器は我々にさまざまな疑問を投げかけている。
なぜこれだけ大量の青銅器が埋められたのか、まだ定説はない。

A．隠匿説

敵の侵攻から出雲の宝器である青銅器を護るために隠した。

B．奉納説

強い武力を願い、自分達の祖先の霊に対して大規模な奉納を行った。

C．地中保管説

青銅器は通常地中に保管され、祭りの時だけ掘り起こされて使用された。
ところが祭りのやり方が変わり、青銅器は地中に忘れられた。

D．祭祀転換説

青銅器の祭りに変わる新たな祭りを行なうため、各地に祀る予定であったものを一括して埋めた。

国立歴史民俗博物館の佐原真館長と春成秀爾氏は、銅鐸のオーソリティですが、両氏の間でも意見の相違があるようです。

佐原氏は「地中保管説」をとっておられます。
そして、古い銅鐸も新しい銅鐸も、銅鐸の祭りが終わりを告げたときに土中に残されたというように、考えておられるようです。(*1)(*2)

一方、春成氏はその説には批判的で、基本的に古い銅鐸は古い時代に、新しい銅鐸は新しい時代に埋めた、と考えておられるようです。(*2)

【参考資料】

(*1)佐原真：歴史発掘(8)「祭りのカネ銅鐸」1996.7. 講談社 p140～143

(*2)佐原真・春成秀爾：「出雲の銅鐸 - 発見から解説へ - 」NHKブックス p.141

さて、皆さん方は、どのようにお考えでしょうか？

QWD02544 どんたく

036/036 QWD02544 どんたく 銅矛の埋め方

(18) 98/01/13 20:30 033へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたく です。

銅鐸ではありませんが、銅矛の埋め方について、注目すべき展示がありましたのでご紹介したいと思います。

1997年11月、神戸市立博物館に、「'97考古速報展」を見に行きました。そこには、次のような説明がされている展示がありました。

「祭りの後、住居の穴に納められた銅矛」

福岡県北九州市重留(シゲトメ)遺跡出土

弥生時代後期(約1,800年前)

(財)北九州市教育文化事業団

弥生時代後期の竪穴住居に、祭器(銅矛)を埋納するための穴を設け、埋めては掘り出すという行為を繰り返した跡が見つかった。
同じ銅矛が祭りに使われ、同じ場所に埋め戻され、保管されたのであろう。
最終段階の埋納坑の中に、鋒(キツサ)を東に向け、刃を斜め45度に傾けた状態で埋納され、埋めたあとには灰白色の粘土がかぶせられていた。

銅矛は、長さ約80cmの広形銅矛でありました。

銅鐸では、まだこのようにはっきりした例を、私は聞いたことがありません。しかし、銅鐸についても、これと同じように、埋めたり、掘り出したり、を繰り返した可能性は十分にありうるのではなからうか、そんな思いを抱きながら、この銅矛埋蔵地点の展示写真に見入ってしまったのであります。

QWD02544 どんたく

037/039 VZD07512 ラン 2 RE:銅鐸の使用年代
(18) 98/01/14 01:14 028へのコメント

どんたくさん みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

銅鐸の使用年代に関して、3つ事例をあげていただきましたが、正直なところ現段階で、有効な資料となるには不足しているような気がします・・

ところで徳島市国府町矢野遺跡の出土銅鐸の事例などは、使用年代を考える上で希有な資料ではないでしょうか。

銅鐸の埋納地は、人里離れた山の中や、丘陵の斜面などの見晴らしの良い所などからの発見が80%近くをしめているそうでそうが、最近では平野部や、集落の中からの発見の事例もふえつつあります。

さて矢野遺跡の銅鐸は、弥生時代の集落の中から、しかも埋納状態がはっきりとわかる貴重な事例だと思います。つまり銅鐸が使用された年代の範囲が、その集落の存続した期間に納まるということになりますよね。

矢野遺跡は徳島県の弥生遺跡を代表する集落遺跡です。その推定範囲は南北約2 km、東西1 kmにおよぶ、弥生時代中期から後・終末期の集落です。さらに詳しくしぼると、出土調査区の遺構には、2小期（後期中葉と後期後葉）の時期差があるそうです。銅鐸の分類は突線鈕5式6区袈裟襷紋銅鐸（どんたくさんの#27によるとV期、つまり弥生時代後期）です。

矢野遺跡の銅鐸は使用年代を考えるヒントだけではなく、埋納状態がはっきりしていることから、次のような事実も判明しており、埋納法・祭祀を考える上でも重要な鍵を握っているのではないのでしょうか。

木製容器に土とともに埋められた
埋納坑に埋められた
埋納坑上に施設があった
その施設は取り壊されている

【参考文献】

徳島県文化財センター：「矢野遺跡」1993.6
菅原康夫：「銅鐸にこめられた弥生人の思想」アサヒグラフ別冊『銅鐸の谷』
1997.11

038/039 VZD07512 ラン 2 RE^3:銅鐸の使用年代
(18) 98/01/14 01:15 032へのコメント

みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

たしかに熱残留磁気の測定値が±100年なんて数字は、せっかく分析されたものだけど、(??)というような気もしますよね。でも共伴土器が無い場合の多い銅鐸出土の現状では、埋納地のそばの焚火の跡で測定される熱残留磁気のデータも、集積することによって、有効になっていくのではないかと思ったりもします。

では また (^.^)/ ~~~ ラン 2

039/039 VZD07512 ラン 2 RE:銅鐸はなぜ埋められたか？
(18) 98/01/14 02:37 035へのコメント

どんたくさん みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

銅鐸はなぜ埋められたか？
銅鐸といえば、その文様・形など今までどちらかといえばモノが中心の研究がされてきたように思われます。

なぜなら銅鐸出土がたいてい何かの工事などで、偶然に出土するパターンが多かったからです。埋納状態がわからないまま取り上げられてしまうということです。
しかし近年では、埋納状態がわかる事例が、少しずつふえていっています。

寺沢薫は埋納状態がわかる事例を集め、銅鐸埋納論を展開されています。それによると「平時は集落(地上)で管理・保管され、有事に際して浸しく邪気、悪霊に対抗するためにその進入路たる境界各所に埋納する呪器」とされています。
境界埋納説については、春成秀爾をはじめ有力な説として浮上していますが、すべての銅鐸の埋納意味を解き明かすことができるか、また境界という観念がどういうものであったかなども、今後の課題になるのではないのでしょうか。

【参考文献】

寺沢薫：「銅鐸埋納論 上・下」『古代文化』第44巻5・6号 1992

040/040 YIG00127 かまくら 議題 3「銅鐸を持っていた人々」
(18) 98/01/14 20:05

【シンポジウム】銅鐸を考える の議題1・2と並行いたしました、【お知らせ】での予定通り次の質問をさせていただきます。

議題3としては、「銅鐸を持っていた人々」についてご意見をお伺いしたいと思います。銅鐸を持って(所持し、それを使って)いた人々とはどんな集団だったのか? 集団という言葉だけに限定せず、一族又は部族国家等発言の趣旨に沿った言葉をお使い下さい。

各パネリストの皆さんのお考えをおきかせください。

司会者 / かまくら

041/045 QWD02544 どんたく RE^2:銅鐸の使用年代
(18) 98/01/14 23:02 037へのコメント

ラン2さん、こんにちは。 どんたくです。

フォロー戴いて、有り難うございます。m(_ _)m

矢野遺跡のことを知りたくて、インターネットのURL：
<http://www.tokushima.shikoku.mbc.ntt.co.jp/jyomon/iseki.html>
というのを覗いて見たのですが、矢野銅鐸のことは出ていなくて・・・。

ラン2さんが【参考文献】としてあげられた、アサヒグラフ[別冊]「銅鐸の谷」は、先日買うことは買ったのですが、まだ読んでおりませんでした。
ラン2さんの #37 を読んで、慌ててページをめくってみました。

これ、いろいろなことが書いてあって面白そうですね。
この雑誌の p.94 に、森浩一：「銅鐸と水神」というのが載ってました。
これ、「どんたく説」につながるのです。 \^o^ / ハンザイ

これについては、いずれまた別の機会に触れたいと思っております。

QWD02544 どんたく

042/045 RXE12761 六爾 六爾の銅鐸研究史(2)文献一覧
(18) 98/01/14 23:02 021へのコメント

銅鐸関係の文献の一覧です。
少し見づらいかもかもしれませんが、報告書などを含んでいます。
もっと詳しく知りたい方は<http://webcat.nacsis.ac.jp/webcat.html>でキーワードを銅鐸といれて見てください。

「銅鐸」の授業：小学6年・社会科 / 有田和正著 [ビデオ(カセット)] . -
- 明治図書出版, 19 --. -- (有田式指導案と授業のネタ / 有田和正著 ; 5)

愛知の銅鐸：特別展 / 愛知県清洲貝殻山貝塚資料館編. -- 愛知県清洲貝殻山貝塚資料館, 1991

跡部遺跡発掘調査報告書：大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸 / 八尾市文化財調査研究会編。 -- [八尾市文化財調査研究会], 1991. -- (八尾市文化財調査研究会報告 / 八尾市文化財調査研究会編 ; 31)

引佐郡細江町中川地区銅鐸分布調査報告：田方郡修善寺町入谷平遺跡緊急調査概報 / 静岡県教育委員会編。 -- 静岡県教育委員会, 1968. -- (静岡県文化財調査報告書 ; 第8集)

鋳物の文化史：銅鐸から自動車エンジンまで / 石野享文 ; 稲川弘明図・絵。 -- 小峰書店, 1986. -- (図説日本の文化をさぐる ; 6)

埋もれた銅鐸 / 森秀人著。 -- 紀伊国屋書店, 1970. -- (紀伊國屋新書 ; B-38)

埋もれた銅鐸 / 森秀人著。 -- 新装版。 -- 紀伊国屋書店, 1982

近江の銅鐸と銅鏡。 -- 滋賀県立近江風土記の丘資料館, 1981

近江の銅鐸物語 / 寺井秀七郎著。 -- 近代文藝社, 1995

大国主命と銅鐸 / 渡部義任著。 -- 有峰書店新社, 1995. -- (神代史発掘 / 渡部義任著 ; 2)

加茂岩倉遺跡：古代からのメッセージ 大量銅鐸。 -- 山陰中央新報社, 1997

鬼虎川の銅鐸鋳型。 -- 東大阪市遺跡保護調査会, 1981. -- (第7次発掘調査報告 ; 1)

[京都]高山寺 鳥獣人物戯画 ; [兵庫]神戸市立博物館 銅鐸 ; [香川]善通寺 金銅錫杖 ; [奈良・京都・東京]地獄・餓鬼・病草紙 / NHK取材班著。 -- 日本放送出版協会, 1987. -- (NHK国宝への旅 / NHK取材班著 ; 第9巻)

巨石文化と太陽暦の謎：エジプト・マヤ・インカ・インダス・銅鐸 古代農民と海人の道 / 藤芳義男著。 -- 新国民社, 1981

神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書 / 桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査委員会編 ; 本編。 -- 2版。 -- 兵庫県教育委員会, 1972. -- (兵庫県文化財調査報告 / 兵庫県教育委員会編 ; 第1冊)

神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書 / 桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査委員会編 ; 図版篇。 -- 兵庫県社会文化協会, 1966. -- (兵庫県文化財調査報告 / 兵庫県教育委員会編 ; 第1冊)

古事記は銅鐸を記録している / 吉田舜著。 -- 葦書房, 1991

コト・フエ・ツゾミ・銅鐸：日本楽器の源流と日本的改造：第12回歴博フォーラム。 -- 国立歴史民俗博物館, 1992

桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書 / 桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査委員会編 ; 本編。 -- 第2版。 -- 真陽社, 1972. -- (兵庫県文化財調査報告 / 兵庫県教育委員会編 ; 第1冊)

志谷奥遺跡：銅鐸・銅剣出土地 / 島根県鹿島町教育委員会[編]。 -- 鹿島町教育委員会, 1976

重要文化財西浦銅鐸 / 羽曳野市教育委員会編。 -- 羽曳野市教育委員会, 1991. -- (羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 / 羽曳野市教育委員会[編] ; 24)

殉職の巫女王 / 原田大六著。 -- 六興出版, 1980. -- (ロッコウブックス ; . 銅鐸への挑戦 / 原田大六著)

太陽が台風か / 原田大六著。 -- 六興出版, 1980. -- (ロッコウブックス ; . 銅鐸への挑戦 / 原田大六著)

大陸の風とともに：銅鐸交響曲 / 広島市歴史科学教育事業団編。 -- 広島市歴史科学教育事業団, 1993

対論銅鐸 / 森浩一, 石野博信著。 -- 学生社, 1994

- 天理ギャラリー図録集 ; 1 - 6. -- 東京天理教館, 1965
- 銅剣・銅鐸・銅矛と出雲王国の時代 / 松本清張編. -- 日本放送出版協会, 1986
- 銅鐸 : 跡部遺跡 : 八尾市春日町出土. -- 八尾市教育委員会, 1989
- 銅鐸 : 昭和60年度秋季展. -- 辰馬考古資料館, 1985. -- (展観の朶 ; 13)
- 銅鐸 : 青銅器をめぐるまつり : 特別展 / 浜松市博物館編. -- 浜松市博物館, 1989
- 銅鐸 : 徹底討論. -- 羽曳野市, 1991. -- (はびきの歴史シンポジウム ; 第6回)
- 銅鐸 : 平成4年度特別展 / 赤穂市立歴史博物館編. -- 赤穂市立歴史博物館, 1992. -- (赤穂市立歴史博物館特別展図録 ; no.7)
- 銅鐸 : 埋納と終焉を考える / 銅鐸博物館(野洲町立歴史民俗資料館). -- 銅鐸博物館, 1996
- 銅鐸 / 佐原真著. -- 講談社, 1979. -- (日本の原始美術 ; 7)
- 銅鐸 / 三木文雄著. -- 柏書房, 1983
- 銅鐸 / 辰馬考古資料館編. -- 3版. -- 辰馬考古資料館, 1987
- 銅鐸 / 藤森栄一著. -- 学生社, 1964
- 銅鐸 / 辰馬考古資料館編. -- 辰馬考古資料館, 1978
- 銅鐸 / 三木文雄編. -- 至文堂, 1973. -- (日本の美術 ; 88)
- 銅鐸・弥生の時代 / 藤森栄一著. -- 学生社, 1983. -- (藤森栄一全集 ; 第10巻)
- 銅鐸から銅鏡へ : 卑弥呼の鏡を探る / 野洲町立歴史民俗資料館編. -- 野洲町立歴史民俗資料館, 1991
- 銅鐸関係資料集成 / 田中巽著. -- 東海大学出版会, 1986
- 銅鐸講演会記録集 : 最近の発掘例を中心に銅鐸にせまる / 八尾市文化財調査研究会編. -- 八尾市文化財調査研究会, 1990. -- (八尾市文化財調査研究会報告 / 八尾市文化財調査研究会編 ; 27)
- 銅鐸と古代のまつり : 特別展 / 八尾市立歴史民俗資料館編. -- 八尾市立歴史民俗資料館, 1990
- 銅鐸とコンピュータ : 古事記が予言する未来技術 / 山田久延彦著. -- 徳間書店, 1981
- 銅鐸と女王国の時代 / 松本清張編. -- 日本放送出版協会, 1983
- 銅鐸・銅矛出土地. -- 鳥根県教育委員会, 1986. -- (荒神谷遺跡発掘調査概報 / 鳥根県教育委員会編 ; 2)
- 銅鐸の絵と子どもの絵 : 第20回歴博フォーラム / 国立歴史民俗博物館編. -- 国立歴史民俗博物館, 1995
- 銅鐸の系譜 / 竹内尚武著. -- 大林印刷有限会社, 1993
- 銅鐸の研究 / 梅原末治著 ; 資料篇. -- 木耳社, 1985
- 銅鐸の研究 / 梅原末治著 ; 資料篇. -- 大岡山書店, 1927
- 銅鐸の世界展 : 地の神への「いのり」 : 特別展 / 神戸市立博物館編. -- 神戸市スポーツ教育公社, 1993

- 銅鐸の谷 : ある銅鐸ファンのひとりごと / 大野勝美著. -- 大野勝美, 1994
- 銅鐸の謎 : この絵は何を物語るか / 大羽弘道著. -- 光文社, 1974. -- (カップ・ブックス)
- 銅鐸の謎 / 阪上秀太郎著. -- 近代文芸社, 1995
- 銅鐸ノ謎ヲ解ク : 野洲町町制30周年記念野洲の歴史を考えるシンポジウム / 野洲町教育委員会編. -- 野洲町教育委員会, 1985
- 銅鐸の美 / 国立歴史民俗博物館編. -- 毎日新聞社, 1995
- 銅鐸のまち“野洲” : 観光ガイドブック / 野洲町観光協会[編] ; 第5回改定版. -- 野洲町観光協会, 1986
- 銅鐸は生きている / 徳力彦之助著. -- 白川書院, 1972
- 銅鐸は第5世代のコンピュータ / 山田久延彦著. -- 徳間書店, 1981. -- (真説古事記 ; 3)
- 西浦銅鐸 / 羽曳野市教育委員会編. -- 羽曳野市教育委員会, 1980. -- (羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 / 羽曳野市教育委員会[編] ; 1)
- 日本楽器の源流 : コト・フエ・ツツミ・銅鐸 : 歴博フォーラム / 国立歴史民俗博物館編. -- 第一書房, 1995
- 日本楽器の源流 : コト・フエ・ツツミ・銅鐸 / 国立歴史民俗博物館編. -- 国立歴史民俗博物館, 1995. -- (歴博フォーラム / 国立歴史民俗博物館)
- 日本考古学の概観 / 末永雅雄著. -- 雄山閣, 1990. -- (末永雅雄著作集 / 末永雅雄著 ; 第1巻)
- 日本古代史の謎 : ゼミナール / 古田武彦[ほか]著 ; [正]. -- 朝日新聞社, 1975
- 日本出土青銅器の研究 : 剣・戈・矛・鏡・銅鐸 / 三木文雄著 ; set - 図録編. -- 第一書房, 1995
- 野々間遺跡 : 兵庫県氷上郡上春日町野上野所在銅鐸出土地 / 兵庫県氷上郡春日町編. -- 兵庫県氷上郡春日町, 1990
- 破壊された銅鐸 / 原田大六著. -- 六興出版, 1980. -- (ロッコウブックス ; . 銅鐸への挑戦 / 原田大六著)
- 発見神王朝 : 銅鐸と女王の謎解き / 島田豊作著. -- コウテン史学会サービスルーム, 1978
- 発見! 滝峯才四郎谷銅鐸. -- 細江町教育委員会, 1991
- 兵庫の銅鐸 / 兵庫県立歴史博物館編. -- 兵庫県立歴史博物館, 1987. -- (博物館普及資料 ; 第7集)
- 誇り高き銅鐸 / 原田大六著. -- 六興出版, 1980. -- (ロッコウブックス ; . 銅鐸への挑戦 / 原田大六著)
- 祭りのカネ銅鐸 / 佐原真著. -- 講談社, 1996. -- (歴史発掘 ; 8)
- 向笠出土の新銅鐸について : 福井県三方郡三方町 / 広嶋一良著. -- 広嶋一良, 1969
- 野洲町立歴史民俗資料館(銅鐸博物館)研究紀要 / 野洲町立歴史民俗資料館(銅鐸博物館)編. -- 1号 (1989.3) -
- 安永田遺跡 : 佐賀県鳥栖市に所在する安永田遺跡銅鐸鋳型出土地の調査 ; [本文]. -- 鳥栖市教育委員会, 1985. -- (鳥栖市文化財調査報告書 / 鳥栖市教育委員会編 ; 第25集)
- 矢野銅鐸 / 徳島県埋蔵文化財センター編. -- 徳島県埋蔵文化財センター, 1993

伊予 1 讃岐19

紀伊41

伊豆 2

筑前 1 土佐11 阿波42

<合計 500個> (他に不明:70個)

第1図 旧国別の銅鐸出土個数(ほぼ地形に沿った形で並べたつもり)

大雑把にいうと、近畿地方を中心に、東は天竜川付近、西は広島から四国のほぼ東半分といった地域から、銅鐸は出土しています。旧国別に見ると、出雲が銅鐸個数NO.1になりました。

一方、銅鐸の鋳型が出土した地点については、少し古い資料で申し訳ありませんが、次のとおりです。(*2)

越前 1

		山城 1
	播磨 3	河内 1
	攝津 2	大和 1
筑前 1		
肥前 1		

<合計 11地点>

第2図 旧国別の銅鐸鋳型出土地点数

銅鐸そのものについては、今までに九州から出土していないようですが、鋳型については、九州からも出土しているというのは、興味深いことです。この九州の石製鋳型破片は、特殊な文様をもっています。このような特殊な文様をもつ、九州産と考えられる銅鐸が、島根、広島、岡山、鳥取の各県から出土しています>(*3,*4)

なお、摂津・東奈良遺跡(大阪府茨木市)からは、いくつかの石製鋳型(完全な形の鋳型及び破片となった鋳型)が出土しています。これらの鋳型から作られたとされている銅鐸は、次のとおりです>(*2)

- a. 摂津・原田神社鐸、讃岐・我拝師山鐸。
- b. 但馬・氣比(死)1号鐸~3号鐸。

【参考資料】

第1図関係:

- (*1)アサヒグラフ[別冊]「銅鐸の谷」1997.11.朝日新聞社 p.74
島根県古代文化センター提供のデータ。
「伝 出土」と伝えられているものも、含まれている。

第2図関係:

- (*2)田中巽「銅鐸関係資料集成」1986.3.東海大学出版会
- (*3)国立歴史民俗博物館編の図録:「銅鐸の美」1995.10.毎日新聞社 p.202
- (*4)三木文雄:「銅鐸」1983.6.柏書房 p.101

QWD02544 どんたく

044/045 QWD02544 どんたく 銅鐸の安置法(どんたく)

(18) 98/01/14 23:24 033へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

前にも申しましたように、銅鐸は偶然の機会に見つかったものが多いために、詳しい埋納状況がわかっているものは、比較的少ないというのが実状です。

それでも最近では、ある程度銅鐸がどんな埋められ方(=安置の方法)をしていたか、わかる例が増えてきたようです。

「銅鐸を横に臥せ、鐸を上下垂直方向になるようにして埋める。」
これが一つの典型的な埋め方として、注目されています。

中には、このような形にうまく埋められるようにするため、

- a. 銅鐸の下部側面に小石を据えて、埋める。
- b. 埋納坑下半分は、銅鐸に密着するように、ぎりぎりに掘削して、埋める。
- c. 木枠などを使って、埋める。

というようなことをした例も、いろいろあるようです。

では、このような埋められ方をしているものが、どれだけあるのか。

これについては、#39 にラン 2 さんが紹介された寺澤薫氏が、過去のデータを丹念に調べ、銅鐸の埋納状況を整理された労作があります。（*1）

寺澤氏のデータから、銅鐸の埋められ方別に個数を拾い出してみると、次のようになります。

1 個所 当たり 出土個数	横臥 (鑿の方向)				正立	倒立	データ 無し	合計
	垂直	水平	斜位	不詳				
1	26	22	7	4	2		5	66
2	5	16	4	2	7		6	40
3	4	2				3		9
4	8						4	12
6	6							6
9	9							9
14	12	2					14	28
合計	70	42	11	6	9	3	29	170 個

この表を見ると、

1 個所当たりの銅鐸出土個数が 3 個以下の場合については、
鑿が垂直のものと水平のものは、ほぼ同数。

1 個所当たりの銅鐸出土個数が 4 個以上の場合については、
鑿が垂直となっているものが圧倒的に多い。

全体的に見ると、鑿が垂直となっているものが多い。

ということが言えそうです。

これを寺澤氏がどのように解釈しておられるかは、#39 にラン 2 さんが紹介しておられる通りです。

【参考資料】

(*1) 寺澤薫 「銅鐸埋納論 (上)」 古代文化 Vol.44. 5
" 「銅鐸埋納論 (下)」 " " 6

1989年までに出土した銅鐸のうち、埋納状況の分かる170個の銅鐸
について整理したものを。

QWD02544 どんたく

045/045 VZD07512 ラン 2
(18) 98/01/15 00:21

用語解説、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」

みなさん こんにちは。ラン 2 です (^o^)/

シンポジウム開催からはや10日が過ぎました。

ROMで参加してくださっているみなさんも、銅鐸に興味をもってくださったことだと思えます(^_^)

今日は一緒に「聞く銅鐸」と「見る銅鐸」のおさらいをしておきましょう。

#21の六爾さんの銅鐸研究史の中のこの部分がそうですね。

>>ガスバーナーから2口コンロへ

>> その分類を1970年(昭和45)佐原先生の学問友達でもあり、梅原末治先生の最

>>後の弟子である田中琢先生が「キクタク」と「ミルタク」に分類されたのです。ここに

>>いたって、分裂していたマッチとライターは融合して強力な2口ガスコンロを形成する

>>に至ったわけです。

朝鮮式小銅鐸を祖形としながらも、異質なものとして出発し、小型から大型へ、吊り下げて鳴らす銅鐸から宝器として安置する銅鐸への変遷を、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」へという言葉で表されています。

突線鈕2式では、鈕が縦に長くなり、銅鐸全体の高さがぐっと大きくなります。

この用語は田中琢が『古代の日本5近畿』の中の「『まつり』から『まつりごと』へ」(1970)で表されました。

突線鈕1式までを「聞く銅鐸」、突線鈕2式以降を「見る銅鐸」と命名し、畿内では「聞く銅鐸」が大多数を占め、その東西では「見る銅鐸」が大多数を占める事実を、銅鐸祭祀普及の時期差としてとらえ、その変質を推定しています。

本館15番考古学の部屋でおなじみラン2のお茶の間劇場！です。

ラン2 「なんで聞く銅鐸から見る銅鐸になったん？」
 だんな 「日本人らしいところやん」
 ラン2 「へえ？どこが？」
 だんな 「銅剣もそうやん。最初は人を切る道具やったのに、だんだん大きくなっ
 て、実用品やのうて、おまつりの道具になるやろ。銅矛も、銅戈も、鏡
 だってそうや。みんな大きくして祭器に変身させた。」
 ラン2 「そうかあ～。で、それはなんでやのん？」
 だんな 「・・・・・・・・」

では また (^.^)/ ~~~

ラン2

046/046 KFA03002 kikkawa RE:議題 2 「銅鐸の役割」
 (18) 98/01/15 00:58 022へのコメント

黒塚古墳に関する怒濤の報道に気を取られているうちに、遅くなってしまいました。
 既に、議題 3が出されていますね。(^^;

そもそも銅鐸とは一体、何に使われたのか、また地域によってその役割に違いはあるのか、銅鐸が使われた時代（例えば弥生時代前・中・後期でわけた場合）において役割の変化はあったのか等についてご発言下さい。
 私は、銅鐸に関して大変詳しいどんたくさんがされているような、綿密な話は無理なので、基本的な話に留まっていますが、ご了承下さい。
 銅鐸の中で、粗形とされる中国の銅鈴と、サイズや形態に著しい違いがない小銅鐸については、中国での使い方をご存じな方にお任せすることにして除外しまして、比較的大きな銅鐸に限定することにします。

小銅鐸を除外すると、その分布は東海～中国・四国にほぼ限定されます。
 銅鐸の用途を理解する面で重要なのは、言うまでもなく、墓や住居から見つからず、人里離れたような場所で見つかるのが多いことですね。
 この事から、銅鐸が個人的な所有物とする見方は強く否定されると考えられます。
 また、日本列島では、青銅と鉄は縄文時代晩期にほぼ同時に伝わったと見られ、西アジアなどに比べて、青銅は当初から軍事面で重要性が小さかったことが想像され、荒神谷遺跡の膨大な数の銅剣は、象徴的に思えます。
 となると、利用目的は祭祀と考える一般的な見方が妥当だと思います。祭祀の詳細については、知識不足の私には荷が重く、お手上げです。m()m

同じ時代における地域による役割の違いの有無ですが、遠く離れた地域で同型の銅鐸が幾つも発見されており、銅鐸の互換性が高いようですから、余り違いはないように思います。

次に、時代による役割の違いですが、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」と言われるように、佐原真・歴博館長の型式編年では、巨大にかつデフォルメ化が進んで行くとされ、この編年は妥当と考えられていますね。これは、明らかに役割が次第に変化したことを示すものと思います。
 最後のタイプとされる、近畿式・三遠式と言われるものは、その中でも極端ですが、この時期になると、先行して吉備や出雲では銅鐸文化と手を切っているのは、興味深いですね。

勉強不足で、私はこの程度しか述べる事が出来ませんでした。識者の方々の更なる発言を期待します。

047/049 QWD02544 どんたく RE:用語解説、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」
 (18) 98/01/15 16:20 045へのコメント

ラン2さん、みなさん、こんにちは。 どんたくです。

>>ラン2 「なんで聞く銅鐸から見る銅鐸になったん？」
 >>だんな 「日本人らしいところやん」
 >>ラン2 「へえ？どこが？」
 >>だんな 「銅剣もそうやん。最初は人を切る道具やったのに、だんだん大きくなっ
 >> て、実用品やのうて、おまつりの道具になるやろ。銅矛も、銅戈も、鏡
 >> だってそうや。みんな大きくして祭器に変身させた。」
 >>ラン2 「そうかあ～。で、それはなんでやのん？」
 >>だんな 「・・・・・・・・」

「だんな」に代わってお答えいたします。(^^)

年末恒例のNHKテレビ「紅白歌合戦」がその好例です。

小林幸子を見てください。

毎年、着こしらえが派手になって、大型化していききましたよね。
「聞く歌手」から「見る歌手」へと・・・。

あれ（銅鐸）もオマツリ、これ（紅白）もオマツリ。

お粗末でした。m(_ _)m

QWD02544 どんたく

048/049 QWD02544 どんたく 埋納坑の炭粉末（どんたく）
(18) 98/01/15 16:39 033へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

#28 に述べましたように、出雲の加茂岩倉遺跡の土の中からは、木炭の粉末が見つかっています。

この他の銅鐸出土地点でも、このような炭の粉や、火を燃やしたと思われる痕跡が残っている所が、いくつかあるようです。（*1）

島根・神庭カバ	荒神谷	炭粒
島根・上府カコ		焼土
広島・福田		木炭
徳島・名東		灰
奈良・大福		炭粒

この他にも、大阪府八尾市跡部でも、埋納坑の土の中に炭が混じっていたそうです。（*2）

また、兵庫県西宮市の辰馬考古資料館は、播磨・関賀銅鐸を所蔵しています。辰馬悦蔵氏がこの銅鐸を入手された後、辰馬悦蔵商店の人が、銅鐸発見者に会って、聴取したときのメモが、辰馬考古資料館に残されています。

その一部をご紹介します。（*3）

「昭和六年一月廿五日 鷓野傳四郎ヨリ銅鐸ニ関シ聴キ取りタル要点」

問 明治四十一年四月三十日ニ発掘セシトノ事八新曆カ旧曆カ

答 新曆ナリ

問 銅鐸発掘ノ際ニ銅鐸ノ上ニ黒イ有機土ガアッタと言フガ其質ト厚サハ如何

答 銅鐸ノ上ニハ粘土ハナカッタガ黒イ土ガ三寸位アリマシタ
ソノ質ハ確實ナルコトハ不明ナルモ多分木ノ葉ガ腐ッタ土ダト思ッタ

問 ソノ傍ラニ炭焼釜ノ跡ガアリ ソコカラ炭ガ流レテ居タノデハナカッタカ
木炭末ガ混ジテ居タトノ事ナルガ如何

答 炭焼釜ノ跡ハ発掘ケ所ノ直グ傍ニアッタガ 炭ガ流レテ居タノデハナク
大体ニ於テ木ノ葉ガ腐ッタ土デアル
然シ炭ヲ釜ノ所デ篩ッタモノダカラ穴ノ中ニ少々ノ木炭末ガ混ジテ居タ
コトハ事実デアル

少し曖昧さが残る文章ですが、ひょっとすると、この木炭末も炭焼釜から流れたものではなく、銅鐸埋納坑の中に、前からあったものなのかも知れません。

このように、銅鐸埋納坑の土の中から、炭の粉末が出てくるところを見ると、銅鐸埋納の場所で、火を焚く儀式が行なわれたのではないかと、思うられます。

【参考資料】

- (*1) 寺沢薫「銅鐸埋納論(上)」古代文化 VOL.44 NO.5 1992.5.
- (*2) 神戸市立博物館編集:「銅鐸の世界-地の神への祈り-展」図録 1993.1. 神戸市スポーツ教育公社発行 p.136
- (*3) 1997年11月に辰馬考古資料館を見学した際、特別展示されていた資料より抜粋。

QWD02544 どんたく

049/049 QWD02544 どんたく 地鎮祭(どんたく)
(18) 98/01/15 16:39 033へのコメント

みんな、こんにちは。 どんたくです。

今まで古代の銅鐸の埋納について書いてきましたが、そんな昔の話ではなく、現代でも「ものを埋める」ということは、行なわれています。

皆さんも地鎮祭というものに列席された経験をお持ちではないでしょうか？

このトコシズメのマツリでは、今はほんの真似事のような形になってしまっておりますが、「ものを埋める」という儀式が行なわれます。

また、これは以前テレビで見ただけなのですが、日本古来の相撲でも、「ものを埋める」儀式が行なわれます。

現在の相撲は、地方場所を含めて年六場所制ですが、この場所に備えて、相撲協会は土俵を築き上げます。
この土俵が出来上がったときに、土俵の上に祭壇をしつらえ、行司さんが神主さんになって神事がとり行なわれます。
(行司が行事をやるんです。)
この神事では、土俵の真ん中に小さな穴を掘って、色々なものを埋めます。何と何を埋めるのかは忘れてしまいましたが、何か一定のキマリがあったように記憶しています。
(勿論、銅鐸を埋めるわけではありませんけどネ。)
ちなみに、日本の相撲の開祖と言われる野見宿禰は、出雲の土師部の祖とされています。

いずれにしても、「ものを埋める」という神事は、現代でも行なわれているわけです。

それから、記・紀だったか、風土記だったかに、カメを土中に埋めるということが書いてあったように思うのですが、それがどこに書いてあったか、今思い出せません。

もっとも、このような神事が銅鐸の時代まで溯れるものかどうかは、なんとも言えない、と言えばそれまでですが・・・。

QWD02544 どんたく

050/054 YIG00127 かまくら 銅鐸こぼれ話
(18) 98/01/15 20:12

【シンポジウム】銅鐸を考える に参加の皆さま、こんにちは。(^ ^)

議題での討論も盛り上がってまいりましたが、ここで議題への発言に加えまして、新たな企画を提案させていただきます。

タイトルは「銅鐸こぼれ話」!!(ラン2さんからのご提案です、(^.^)ノ)
銅鐸の発掘秘話や学会の裏話などを話題にコーヒープレイク

ここで肩の力をちょっとぬいて一息入れてみてはいかがでしょう?
そしてリフレッシュ後はまたまた議論の花をパーっと咲かせてまいりましょう。(^ ^)ノ

*この企画は会議室終了まで続ける予定です。一般参加開始後のより一層の賑わいを期待いたします。(^ ^)

司会者ノかまくら

051/054 QWD02544 どんたく RE:地鎮祭(どんたく)
(18) 98/01/15 20:21 049へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

#49 「地鎮祭」について、早速 大三元さんからメールを頂戴しました。

》>>それから、記・紀だったか、風土記だったかに、カメを土中に埋める
》>>ということが書いてあったように思うのですが、それがどこに書いて
》>>あったか、今思い出せません。
》
》播磨風土記託賀郡法太里(養坂・花波山)・・・
》丹波と播磨の国境として大甕をここに掘り埋めた、それで養坂と言う。
》
》のことでしょうか。。

そうです、そうです。 これです。 早速「播磨風土記」を見てみました。

岩波・日本古典文学大系「風土記」 p.337 に書いてありました。

大三元さん、どうも有り難うございました。m(_ _)m

QWD02544 どんたく

052/054 YIG00127 かまくら RE:【お知らせ】これからの予定 付け足し
(18) 98/01/15 20:36 030へのコメント

皆さま、こんにちは。(^ ^)

【シンポジウム】銅鐸を考える における今後の予定で付け足しをさせて
いただきます。

パネリスト・どんたくさんからの企画

「どんたく説」シリーズ化!!、(^.^)ノ

議題での討論とは別ツリーで、どんたくさんが銅鐸に対する御自身の
説をシリーズで発言されます。どんたくさんが主張されるお考えに皆
さまのご意見や感想などお出し下さい。
それによって議題とは違う視点での銅鐸へのアプローチと考察の深まり
が可能となることでしょうか。(^^)

* どんたくさんの準備が整い次第この企画はスタートいたします。
しばらくお待ち下さい。

司会者 / かまくら

053/054 QWD02544 どんたく 銅鐸埋納の儀式(どんたく)
(18) 98/01/15 21:52 033へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

以上、何回かに分けて、銅鐸の埋納について述べてきましたが、
これらのことを通して、私は「銅鐸の役割」について、次のように考えて
います。

- (1) 銅鐸はマツリの祭器であった。
- (2) 銅鐸の埋め方(安置法)には、ある種の「作法」があったように
感じられる。
「作法」があるということは、銅鐸の埋納が、その銅鐸の一生のうちに
たった1回だけ行なわれたのではなく、例えば毎年1回というように、
定期的に銅鐸埋納の儀式が行なわれたであろうことを示唆している
のではなからうか?
- (3) 銅矛の場合には、何回も埋めたり、取り出したりを繰り返した跡が発見
されているが、銅鐸の場合にも同様なことが行なわれた可能性があるの
ページ(34)

ではなかろうか。

- (4) 出雲の加茂岩倉遺跡では、銅鐸が埋納されていた埋納坑のすぐそばに、もう一つ銅鐸が埋納されていない土坑が発見されている。これは、もしかすると、伊勢神宮の遷宮のように、定期的に2つの土坑を交代で銅鐸の埋納坑として使ったのかもしれない。
- (5) 銅鐸の埋納場所では、火を焚く行事が行なわれたような痕跡が残されている場合がある。これも、銅鐸にかかわるマツリの一環ではなかったろうか。
- (6) 現代でも、地鎮祭や、相撲の土俵完成時の神事では、「ものを埋める」という儀式が行なわれる。
- (7) これらのことから見て、銅鐸の埋納は、単に隠匿とか、保管とかということではなく、「銅鐸を埋める」ということ自体が、一つの儀式だったのではなかろうか？
- (8) では、この銅鐸埋納の儀式というのは、何のために行なわれたか？私一人で勝手に唱えている「どんたく説」では、これはカミナリの神様を祀るための神事であり、カミナリの神様の怒りを鎮め、雨を降らせて貰って五穀豊穡を祈るための儀式であった、というように考える。

最後の(8)の項目では、突然「カミナリ」さまが飛び出してきて、皆さん「エエッ??」と思われたことでしょう。

この「どんたく説」については、書き出すと非常に長くなってしまいます。そこで、#52に司会者のかまくらさんからお知らせ戴いたように、これについては、司会者・パネリスト間の課題提示・回答というシンポジウムの形から離れて、別途「どんたく説」シリーズとしてアップさせて戴こうかと思えます。

QWD02544 どんたく

054/054 BYW00406 かおる RE:議題 2「銅鐸の役割」
(18) 98/01/15 22:00 022へのコメント

みなさん、こんばんは。

ちょっと、難しい議題の上、昨年の発掘開始より注目していました黒塚古墳から、とんでもないものが出土したので、そちらに手を出してしまい、発言が遅くなりました。

まず、銅鐸の編年ですが、基本的には佐原氏の編年案で良いのではないかと思います。そして、菱環鈕式から扁平鈕式あるいは突線鈕1式くらいまでは鳴らす物として利用され、突線鈕2式(近畿式や三遠式)以降はそ、その大きさや、鈕の形、内面突帯の退化などから、鳴らさずに見せる銅鐸に変化してきたと思います。

この銅鐸は、どんたくさんの説明にあるように、埋められた形で発見されています。それも、一定の様式で埋めているようです。さらに、場所も住居跡や墓からではなく、集落から少し離れた斜面に埋められていることが多いようです。

また、寺澤氏は銅鐸の複数埋納の状況を整理されていますが、これを見ますと、菱環鈕式銅鐸は外縁付鈕式銅鐸と共伴しており、外縁付鈕式銅鐸は扁平鈕式銅鐸と共伴しています。しかしながら、突線鈕式銅鐸は他の型式の銅鐸とは共伴していません(ただ、突線鈕1式と扁平鈕2式が共伴している例が2例あるようです)注1。

突線鈕2式以降の銅鐸の分布は主に近畿と東海地方そして高知県辺りにかたより、山陰や瀬戸内からは出土しなくなっています。

それから、なぜか近畿でも奈良からは突線鈕2式以降の銅鐸の出土がありません。

これらの、事実をもとに想像しますと、銅鐸は個人ではなく共同体が保有し、当初は鳴らすことで、突線鈕2式以降は見せることで何等かの効果を得られるように考えて利用したと思われます。この儀式には埋めるという行為も入っていたのではないのでしょうか。

ただ、具体的にどういうマツリなのかは、よく分かりません。どんたくさんが紹介された説のどれかかもしれませんし、もっと違うものかもしれません。

次に銅鐸の利用の仕方の変化の理由ですが、これは、鳴らしていた頃の弥生社会と見せることに主眼を置くようになった弥生社会では、社会の有り様が変わってきたことを示しているのではないかと思います。

具体的な考古学的根拠は出せませんが、ある程度平等な共同体から、首長と呼べそうな階級が出現し、共に奉るのではなく、銅鐸と共に立つ首長に頭を下げさせたのかもしれません。

そして、吉備や出雲では、そういう社会の変化の中で、鳴らす銅鐸の段階から見る銅鐸の段階へ移行せず、四隅突出墓や墳丘墓でマツリを行うことに代えていったのではないのでしょうか。

また、大和では、近畿の中でも早く、銅鐸を捨て、新しく古墳というものを吉備や出雲の影響を受けながら（あるいは取り込みながら）創り出していったのではないのでしょうか。

（今回、発掘された黒塚古墳の竪穴式石室の側壁は下部40センチほどに河原石を垂直に積み上げ、この上に板石を持ち送るようにして造られており、この河原石を垂直に積み重ねる技法が2世紀後半から3世紀前半にかけての吉備地方で作られた石室の技法と同じだということで、大和と吉備との強い結び付きを窺わせます。）

奈良県桜井市大福遺跡から出土した突線鈕1式銅鐸が、山の斜面ではなく、弥生後期の方形周溝墓の溝の中から出土したのは、何か大きな意味があるように思います。

と、根拠薄弱な想像を並べてしまいました。質問タイムが恐いなあ。

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

055/055 BYW00406 かおる RE:議題 2 「銅鐸の役割」訂正レス
(18) 98/01/15 22:54 054へのコメント

訂正レスです。

>>また、寺澤氏は銅鐸の複数埋納の状況を整理されていますが、これを見ますと、菱環鈕式

>>銅鐸は外縁付鈕式銅鐸と共伴しており、外縁付鈕式銅鐸は扁平鈕式銅鐸と共伴していません

>>しかしながら、突線鈕式銅鐸は他の型式の銅鐸とは共伴していません（ただ、突線鈕1式

>>と扁平鈕2式が共伴している例が2例あるようです）注1。

注1を書くのを忘れており失礼しました。

参考にしたのは、「考古学その見方と解釈 上（森浩一編）」の中の「弥生時代の青銅器とそのマツリ」（寺澤薫著）でした。

佐原氏とは違う見方ですが、参考になります。

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

056/057 KFA03002 kikkawa 鉛同位体比と佐原編年
(18) 98/01/16 02:20

以前、簡単に触れました東文研の馬淵久夫部長(現・作陽短大教授)のグループによる、鉛同位体比による銅鐸の研究について述べます。

鉛の安定同位体の質量数としては、204,206,207,208の4つがあり、204は地球が生成されて以来のままですが、206はウラン238系列、207はウラン235系列、208はトリウム232系列の、それぞれ最終形成物として、付加されてきたものです。

但し、鉛鉱床が形成された後は、ウランやトリウムに対して鉛の含有量が圧倒的に卓越するので、殆ど不変になります。そのことから、鉛鉱床が形成される以前のウラン・トリウム・鉛含有量や、鉛鉱床の形成年代によって、これらの同位体比は大きな違いを示します。

山崎一雄・名大教授の先駆的な研究を、質量ともに推進した馬淵教授の仕事により、弥生時代から奈良時代までの青銅製品の鉛は、(1)朝鮮半島の製品、(2)華北系の前漢鏡(後漢の初めを含む)、(3)華中・華南系の後漢中期以降の漢式鏡、(4)日本産の鉛を使用した皇朝十二銭などが、ほぼ区別できることが明らかになってきました。

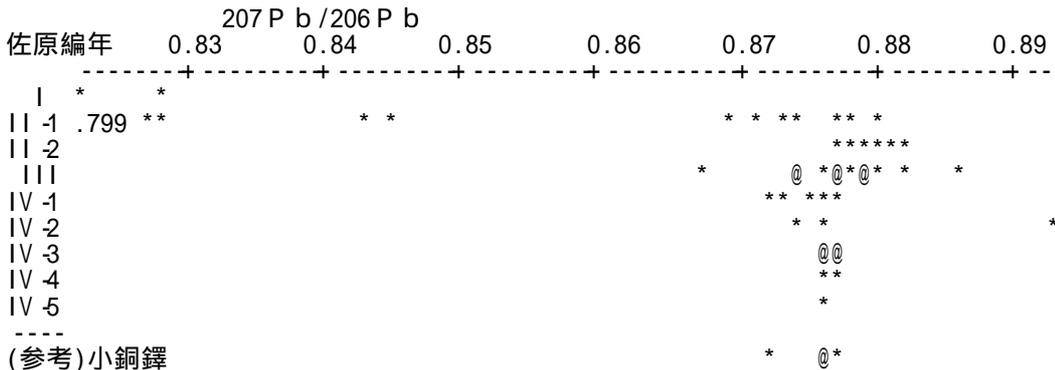
代表的な、馬淵久夫・平尾良光(1982)『考古学雑誌』68,1 を初めとして、『季刊邪馬台国』60号と62号に採録された、最近までの諸論文からコンパイルして、作図したものです。

なお、鉛同位体比のデータは、208/206と207/206を両軸に取ったグラフに表示するのが一般的ですが、銅鐸については、後漢中期以降の漢式鏡や、日本産の鉛に相当する鉛同位体比を示すデータは知られていないので、207/206のみでも紛らわしくないので、簡略した図としました。(作図の面倒さも理由の一つ(^;))

それらを佐原真・歴博館長の型式編年と比較したものが、以下の図です。

なお、I:菱環紐、II:外縁付紐、III:扁平紐、IV:突線紐 に相当します。

*はその範囲にデータが1-2個、@は3個以上見られることを示します。(この範囲に入らないデータ1つは数字で表示)



このデータを見ると、明瞭な傾向があることに気付くと思います。

上記の馬淵・平尾(1982)論文の、「佐原真分類」の項に以下の記述があります。

“紐に着目した佐原分類では、最古段階と古段階に“朝鮮系遺物タイプ”に属するものがあり、新段階になって規格品の“前漢鏡タイプ”になる点で、首尾一貫して単純に解釈できるという特徴がある。”

荒神谷遺跡など、その後のデータを加えても傾向は同じで、自然科学的研究によっても、佐原編年が蓋然性が高いものと見られるように成ったわけですね。

上の図を見ると、I式およびII-1式の一部に朝鮮半島タイプ(左側)のデータが見え、II-2以降は全て前漢鏡タイプ(右側)であること、更に後期の型式はデータが揃っていることが判ります。

近畿式・三遠式の巨大な銅鐸の鉛同位体比が、統計的に見て同一と考えられるほど揃っていることについて、“すべて一つの鉱山に由来するとしてよいであろう。”と解釈されています。

なお、小銅鐸についても、栃木・神奈川・静岡・福岡出土のデータも参考に示しましたが、大部分が近畿式・三遠式と同じ値を示します。

「銅鐸生成の年代」の項には、以下の記述があります。

“銅鐸が作られ始めた年代に関しては、大別して弥生時代中期後半以降とする説(鎌木、杉原、三木)と、前期後半にさかのぼるとする説(佐原)とに分かれるように思われる。鉛同位体比に、この問題を考える手がかりはないだろうか。”

筆者らの定義による類の銅鐸が、中国系の原料が日本に入っていない時期、もしくは入っていても量が少ない時期とすれば、B.C.108年前漢の武帝による楽浪郡など四郡設置の前後ということになる。これは、中国の歴史年代を基準にしている点では従来の推論と同じであるが、土器・武具形祭器との比較とか使用尺度からの年代推定

とは全く違う指標に基づいている。

製作年代の下限についても同様な議論が可能ではなく、弥生時代末期から古墳時代前期にかけての青銅遺物の測定が不十分なので、まだ多くを語れない。ただ判っきりしていることは、現在までの測定例では前期古墳出土の倣製鏡に“前漢鏡タイプ”の鉛はなく、銅鐸との間に一線を画している。”

その当時は、小林行雄・京大教授による銅鏡の伝世論の影響が大きかったので混乱していましたが、近年では疑問視され、卑弥呼時代は既に古墳時代とする見解が拡がりつつありますね。

銅鐸と、古墳時代に作られた銅鏡の鉛同位体比が、全くオーバーラップしないことは、銅鐸の製造年代の下限を考える上で、大きな制約条件と成ります。

それにしても、佐原館長による銅鐸の型式編年は、層位学的な考察が殆ど利用できない状況で行い、これほど上手く行くとは、その洞察力に驚かされます！

057/057 VZD07512 ラン2 ダンプカーで運ばれた銅鐸の巻(^ ^)
(18) 98/01/16 02:28 050へのコメント

みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

なかなか議題に沿うコメントをアップできないラン2ですが、やし馬根性だけは人一倍です。

ラン2が見たり聞いたり読んだりして心に残っていることなどを、銅鐸こぼれ話としてアップしていきたいと思っています。

今日はその1話目です(^_^)

【ダンプカーで運ばれた銅鐸の巻】

* * 清水井銅鐸。新段階（突線鈕3式）・近畿II式。* *

昭和30年代後半、京都府綴喜郡八幡町（現八幡市）清水井で、山を切り開いて宅地造成が行われていた。その土取り場で、バケツのようなモノが土といっしょにダンプカーに積み込まれた。

ダンプの運転手は所定の場所に土を捨てにいったのだが、そのバケツのようなモノを拾い上げた。

彼はてっきりこの変わったモノを赤カネだと思い、国道沿いのクズ鉄屋に、売りに行った。

ダンプの運転手は、目方2貫600匁（約9.8キログラム）、金600円で売れ、昼食代ができた。

ある金融業者が帰宅途中、クズ鉄屋のクズ鉄の横にころがっている釣鐘が目についた。彼はその釣鐘を2000円足らずの金で買い求めた。

この金融業者が、京都の病院に院長で、考古学研究者であるU氏のもとへ、「変わったおもしろい釣鐘を手に入れたから見て欲しい」と訪ねてきた。

その釣鐘を見てびっくり！

なんとそれは高さ66センチメートル、無傷の立派な銅鐸でした。

U氏は、金融業者にそれが銅鐸であり、貴重な学術資料であることを説明した。保護法に基づいて発見届けを出すことを進める一方、大学や博物館に引きとってもらおうよう説得した。しかし、大学や博物館と相談したが予算の関係で折り合いがつかず、交渉は成立しなかった。

U氏は、骨董屋に売買され海外に流失してしまうのを恐れたが、結局どうすることもできず、金融業者の手からも離れ行方不明となってしまった。

（以上 山田良三『考古の旅5 近畿北部篇』1975年 明文社・より要約、この全集は全10巻で刊行予定でしたが、上記の1巻しかでませんでした・・・）

さて長い間行方不明となっていたこの銅鐸は、その後ひょっこりと出てきて現在は大阪の正木美術館に所蔵されています(^_^)

では また (^.^)/ ~~~

ラン2

058/060 QWD02544 どんたく
(18) 98/01/16 21:38

「どんたく説」プロローグ
コメント数：2

みなさん、こんにちは。どんたくです。

今までは、シンポジウムの議題に沿って、銅鐸について一般的に言われているページ(38)

ことを主体にして書いて参りました。

ところが、#53 までやって参りまして、従来一般的に言われてきていることの紹介だけでは、私としては、済まなくなりました。

そこで、私自身が勝手に独自に考えたこと、従って一般的には認めて貰えていない「どんたく説」というものをこの機会に紹介させて戴くことにして、今後はこの「どんたく説」をベースにしながら、私なりに銅鐸の謎に迫ってみたいと思います。

#52 で司会者の かまくらさん から予告して戴いたとおり、議題の討論とは別ツリーで、「どんたく説」を一つのシリーズとして書かせて戴きたいと思えます。

この「どんたく説」というのは、「銅鐸は雷神信仰の祭器である」という仮説で、その骨子は次の通りです。

- (1) 近畿地方において、銅鐸の出土分布と雷の発生分布との間には、ある程度の相関関係が見られる場合がある。
- (2) 古来、雷は、世界各地で「神様」と考えられてきた。
- (3) いわゆるテンソン族が近畿地方に入ってくる前から、そこには先住系の人達が住んでいた。
- (4) いわゆるテンソン族が太陽信仰を持っていたのに対し、先住系の人達は別の宗教を持っていた。それは、雷神信仰であった。
- (5) 「銅鐸は、カモ・ミワ族と関係する土地から相当数出ている。」という大場磐雄先生の説がある。カモ・ミワ族は先住系。大場説は、「どんたく説」にとって有り難い味方。
- (6) 銅鐸は、雷神信仰をもった先住系の人達の、マツリの祭器であった。

というのが、その概要です。

なにしろ、この「どんたく説」、今まで誰にも相手にされなかったシロモノですので、そのつもりで、よ～く肩に唾をつけてお読みください。(^^)

QWD02544 どんたく

059/060 QWD02544 どんたく 雷の発生頻度分布
(18) 98/01/16 21:50 058へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたく です。

今から20年余り前になりましたか。
私は銅鐸などの出土分布をあらわした地図を見ておりました。
いわゆる「銅剣銅矛文化圏／銅鐸文化圏」の地図です。

これを見ていて、アレッと思いました。

「この銅鐸の出土分布は、雷の発生分布に似ている！」

私は関西に住み、そして電気屋という職業柄、特に近畿地方については、どの地域が雷が多く、どの地域が少ないか、大体頭に入っております。

雷というのは、どこの土地でも一様に起こるのではなくて、場所によって多い地域、少ない地域があります。

雷の発生は、勿論気象条件の影響をモロに受けますが、この気象条件というのは、その地域・地域の地形に左右されるところが大きいのです。

近畿地方での夏の雷雲の動きの統計をとってみますと、大体において、西の方から東の方へと移動して行っています。

そして、一つの典型的な雷の通り道として、山崎断層ルートがあります。

第1図 六甲山麓の銅鐸出土分布
(括弧内の数字は銅鐸出土個数)

この地域の配電線への落雷事故統計をとって見ますと、第1図に示したように、東半分が雷が多い地帯です。そうして、銅鐸の出土は、この地帯以東に集中しています。雷が少ない西半分の地帯からは、今まで1個も銅鐸が発見されていません。

以上、雷と銅鐸の分布との間に相関性がありそうな所を列挙してみました。

勿論私は「雷の多い所には必ず銅鐸も多い。」等と言うつもりはありません。例えば全国的に見ると、群馬県は最も雷の多い地方ですが、ここからは銅鐸は全く出土していません。

いうまでもなく、
(1) 銅鐸を祀る人達がいた地域から銅鐸は出土する。
これが基本的な条件です。

その前提に立った上で、
(2) 雷の多い所から銅鐸が出土する傾向が見られる所がある。
とりたいのです。

QWD02544 どんたく

061/061 VZD07512 ラン2 描かれた銅鐸(^ ^)
(18) 98/01/17 00:31 034へのコメント

どんたくさん みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

銅鐸の絵と文様にはいろいろな解釈があるのですねえ。
ラン2もいろんな解釈についての本を読みましたが、そういわれればそういう気にもなるし、う~ん、その根拠って何なの?と聞けば、明確な答えなんてないんでしょうね。

ところで、弥生時代の土器や、鐸形土製品の中に、銅鐸らしきものが描かれているというのをご紹介したいと思います。

まず佐賀県川寄吉原遺跡から出土した鐸形土製品で、1人の人物が描かれ、右手に戈、左手に盾を持ち、腰には刀剣を帯びています。頭に羽の飾りをつけていることから祭人らしいと推定されています。この人物の向かって右脇下に、半杏仁形のモノが銅鐸でないかといわれています。舌のようなものも見えます。

島根県西伯郡淀江町角田遺跡では大形の壺の表面をぐるっと1周して線刻画が描かれています。頭に羽の飾りをつけた人物(祭人)が舟を漕ぎ、梯子のある大形の建物(楼観)や高床倉庫へ向かっている様子です。高床倉庫の横には大木がありそこに杏仁形のモノが2つ吊り下げられています。それが銅鐸といわれているのですが、たしかに舌のようなモノもついています。

みなさんは どうご覧になりますか?

【参考文献】
『弥生文化の研究 8』雄山閣 1987 p23~24
寺澤薫「弥生時代の青銅器とそのマツリ」『考古学その見方と解釈 上』
所収 筑摩書房 1991

062/062 QWD02544 どんたく 雷は神様
(18) 98/01/17 21:47 058へのコメント

みなさん、こんにちは。どんたくです。

「雷鳴」と「電光」という言葉があります。
英語で言えば、THUNDER と LIGHTNING。
前者がゴロゴロと鳴る音、後者がピカピカと光る光を表わします。

「雷」という漢字は、一種の象形文字であり、田の上に雨、そういう時にゴロゴロと雷が鳴るわけです。
(象形文字の元の形では、「田」を三つ重ねて、その上に「雨」を書く。)

この「雷」という字は、訓では、カミナリとかイカツチと読みます。「イカツチ」が元来何を意味しているかと言いますと、一説によれば、

イカ = イカメシイのイカ。
ツ = 助詞の「ノ」に相当。
チ = オロチ (= 大蛇) のチと同じく、勢威を表わす一種の尊称。

ということで、厳めしい、つまり厳かで恐ろしいもの、といった意味であるとされているようです。

つまり、昔の人は、雷は一種の神様であるとして「イカツチ」と言い、またゴロゴロ鳴る音が神の怒りの声であるとして、「神鳴り」とか「鳴る神」とかよんだものと思われます。

一方、「電」という漢字は、雨の下にイナヅマが走る形を表わした象形文字です。

また、「神」という漢字を偏(礻)と旁(礻)に分解してみますと、
「示」：神霊の降下してくる祭壇を描いた象形文字。
「申」：「電」の下の部分と同様、イナヅマが走る形を表わした象形文字です。

このように中国では古くから「イナヅマは神様」という考えがあったのでしょ。

この「電」という字は、訓では、イナヅマとかイナビカリと読みます。また、イナツルビという言い方もあるようです。雷神が雨を降らせて農作物が育つ。とりわけ農作物の中でも最も尊重されたのが稲でありましたから、この稲と雷とが結びついて、「イナヅマ」とか「イナビカリ」とかいう言葉ができたのではないかと思います。

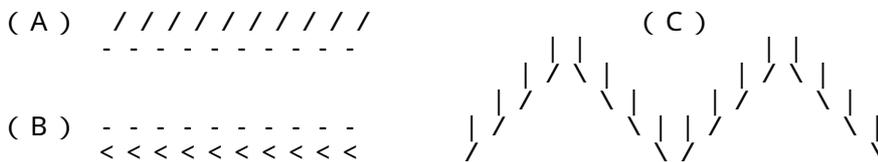
雷を神様であると考えたのは中国や日本だけではありません。

北欧神話には、THOR という名前の雷の神様がいます。これが英語の THUNDER という言葉の語源だそうです。

余談ですが、英語の THURSDAY (木曜日) は、THOR'S DAY からきているそうで、いわば「雷神の日」ということだそうです。でも、北欧の某大学で雷のことを研究している電気工学の教授に確認した所では、木曜日に雷が多いということは、ないそうです。(^^)

アメリカのナバホ・インディアンは SANDPAINTINGS という、一種の厄除けの絵を描きます。(*1)
これは、板の上に彩色された砂を使って絵を描き、糊で固めたものです。この絵には、稲妻と蛇が重要なモチーフとして描かれています。

また、下図のような、銅鐸の綾杉文にちょっと似たような文様も描かれることがあるようです。



これらの文様は、イナヅマを象っているように感じられます。

古代には世界のあちこちで、雷は神様として畏敬されてきたようです。

【参考資料】
(*1) Gladys A. Reichard "NAVAJO MEDICINE MAN SANDPAINTINGS"
DOVER PUBLICATIONS, INC., NEW YORK ISBN:0-486-23329-4

063/064 VZD07512 ラン 2
(18) 98/01/17 23:05

日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)

【日本最古の銅鐸鑄型の巻】

* * 鶏冠井遺跡出土銅鐸鑄型。古段階（菱環鈕式）* *

銅鐸の生産地・年代を決定するものとして鑄型の発見はたいへん重要な鍵となります。まだ事例は少ないですが、ぼちぼちと発見されつつあります。また従来銅鐸の分布圏外とされてきた九州でも見つかって（銅鐸そのものはまだみつかっていませんが）、銅鐸の起源をめぐる九州説と近畿説が対立しています。

さて本題に入ります(^_^)

現在、日本最古の銅鐸鑄型は、京都府向日市鶏冠井（かいで）遺跡出土の鑄型片だそうです。

向日市埋蔵文化財調査センター長・山中章さんのもとに、鶏冠井遺跡の調査をやっていた調査員が、変な石が出たので見に来てほしいと言ってかけ込んできました。飛んでいくところには、表面が真っ黒に焦げた、しかし、袈裟禪文の格子がくっきりわかる石があったのです。

山中さんは、その石がどんな形式の銅鐸か、復原に熱中しました。結果、佐原真の分類する菱環鈕式という最古銅鐸にしかならない確信を得、後に論文にされました。この鑄型は向日市文化資料館にあり、山中さんの復原図による模型もあります。またこの銅鐸の側面には、刃物を砥いた跡が明瞭に残っています。弥生人は、銅鐸鑄型が破損してもなお、これを砥石として使用したのです。

しかし、現在某大学にいらっしやる先生が現地説明会の時、山中さんたちが、まだ層位の検討など十分にできていないので慎重にその鑄型が畿内第2様式から第4様式のどこかに属する可能性もあると申し上げたことをとらえて、その後、報告書でこれを否定したにもかかわらずいまだに「あれは新しい」とおっしゃっているそうです。

以上山中さんより直接教えていただいたことです。
このシンポジウムに参加されているみなさんに、山中さんより伝言です。

>> 「絶対に鶏冠井銅鐸鑄型は菱環鈕式で、日本最古の銅鐸で、且つ、畿内第2様式の時期に製作されたものである！」と、お伝え下さい。

【参考文献】

山中章「鶏冠井遺跡銅鐸鑄型の復原」『京都府埋蔵文化財情報18』1985年

では また (^_^)/ ~~~

ラン 2

064/064 QWD02544 どんたく RE:議題 3「銅鐸を持っていた人々」
(18) 98/01/17 23:07 040へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

>> 議題3としては、「銅鐸を持っていた人々」についてご意見をお伺いした
>>いと思います。

#30 に司会のかまくらさんが示された予定表では、

>> 1/14 議題 3 「銅鐸を持っていた人々とは」

>>

>> 1/18 議題 4 「なぜ銅鐸は使用されなくなったのか」

となっていましたよね。

もう「議題 4」に入らなければならない所までできているのに、
まだ「議題 3」に対する回答をしていませんでしたので、
何とか駆け込みで、書き込みしてみることに致します。

doutakusinpo1998

この議題に関しては、全く私の「独断と偏見」による回答ということになりますので、その旨ご承知おきください。(^^)

取りあえずここでは、話しを簡単にするために、銅鐸出土分布の中心ともいべき、近畿地方に限定して考えてみることにいたします。

私は、銅鐸を持っていた人々は、先住系の人たちだろうと思っています。

先住系というのは、いわゆるテンソン族の人たちが近畿地方に入ってくる前から、そこに住んでいた人たちのことです。

記・紀に出てくる「神武東征」説話については、「あんなもの嘘っぱちだあ」と思っておられる方も多いことかと思えます。

でも私は、これは全くのデタラメではなく、このような伝承があるということは、やはり何かそれなりの背景があったのではなからうか、というように考えたいのです。

普通誰でも人間は、
「オレはこの土地に、古くから、先祖代々住んできたのだ。」
と言って威張りたいものではないでしょうか？

「我々一族は、昔からここに住んでいたのだ。」と威張りたいたしたら、天孫降臨の舞台を、遠い九州の高千穂峯などではなく、大和・紀伊が接する辺りの山奥、例えば大台ヶ原辺りを選ぶことにしてもよさそうな気がします。

奈良盆地に立って、南の方を眺めると、遙か彼方に山々が霞んで見え、神々しいような感じさえします。
天孫降臨の場所に選んでもピッタシといった感じです。(^^)

ところがそうではなく、神武天皇は、はるばる九州の方から大和にやってきた、ということになっています。
これは、やはり大和朝廷の祖先が西の方からやってきて、大和に入ったという歴史的事実があったことの反映なのではなからうか、そして、一般住民もそのことを知っていたのではなからうか、というように感じます。

このように考えてくると、大和朝廷の祖先である、いわゆるテンソン族が大和に入ってくる前から、近畿地方には先住者が住んでおり、この人たちが「銅鐸を持っていた人々」であったとするのが、一番分かりがよいように、私は思います。

このことについては、さらに「どんたく説」シリーズの中でも、考察したいと思っておりますので、そちらの方も読んで下さいネ。m(_ _)m

QWD02544 どんたく

065/065 YIG00127 かまくら 議題 4 なぜ銅鐸は使用されなくなったのか
(18) 98/01/18 06:50

皆さま、こんにちは。(^^)

#30の【お知らせ】での予定通り議題4に入りたいと思います。
「なぜ銅鐸は使用されなくなったのか」について皆さまのお考えをおきかせ下さい。銅鐸による祭祀から別な祭祀へ変わったから、又は銅鐸をシンボルとしてまとまっていた人々が他の集団(これは海を渡ってきた人々としても今の日本国内の他地域で勢力を張っていた人々としても、もちろんそれ以外にもOK!!)に征服されたから等、いろいろな見方があるかと思いますが、皆さまそれぞれがお持ちになっているご意見の発表をお待ちいたします。

* 新しい議題にはいりましても、全ての議題は会議室終了まで続きますので引き続き皆さまのご意見・お考えをお寄せ下さい。一般参加開始後の盛況を固く信じております。(^^)ノ

司会者 / かまくら

067/070 BYW00406 かおる RE: 議題 3 「銅鐸を持っていた人々」
(18) 98/01/18 23:34 040へのコメント

ページ(44)

みなさん、こんばんは。
課題3もかなり難しいです。

>> 議題3としては、「銅鐸を持っていた人々」についてご意見をお伺いした
>>いと思います。銅鐸を持って(所持し、それを使って)いた人々とはどんな
>>集団だったのか? 集団という言葉だけに限定せず、一族又は部族国家等発言
>>の趣旨に沿った言葉をお使い下さい。
正直なところ、どういふ集団が銅鐸を作り、これを活用していたのか分かりません。
ただ、銅鐸の分布域や鑄型の出土地域から考えると、近畿を中心とした地域の集団がその
周
辺地域とマツリを共有していたのではないかと考えます。
その人達が弥生後期末頃に西方の集団に征服されたかどうかはなんとも言えません。
分からないという理由は、九州北部の青銅器祭器である広形銅矛が近畿地方に広まらず
、
銅鐸から古墳にマツリの道具立てが変わったことにあります。
また、後に纏向遺跡から出土する土器の割合が、九州系がほとんどなく、東海や吉備、
山
陰系の土器が多いことから、九州より銅鐸のマツリを共有した吉備や東海との繋がりが古
墳
時代も強かったように思えることも理由の一つです。
吉備を中心とした瀬戸内辺りの勢力が大和に進出した、あるいは強く影響を与えたと思
え
るほうが古墳の成立の説明はしやすいかもしれません(根拠は薄いですが)。

黒塚古墳の見学のため長時間雨の中で待ちながら、そんなことを考えておりました。

P.S

しかし、鏡はともかく、もう少し、じっくりと石室の構造を観察したかったなあ。
それから、築造年代を中山大塚より新しく、下池山より古くした理由も聞きたかったで
す
ね。(今日の状況では無い物ねだりかもしませんが。)

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

068/070 VZD07512 ラン2 RE^2:鐸舞(^ ^)
(18) 98/01/19 00:06 024へのコメント

みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/
自己レスで~す。
(ちょっと訂正を加え、2度目のアップです。二重になった方ごめんなさい。)
うちにある銅鐸関係の本を、ラン2の部屋に大集合させています。
主要な本をひととおり読み終え、やっと議題1に追いつけそうです。
えっ? もう議題4ですって? すみません(^_^;

>>手元にある中国の青銅器関係の本に出てくる鐸にはみな柄がついているんですが、
>>鈕の物は少ないってことなんでしょうかね。

と書きましたが、国立歴史民俗博物館編図録『銅鐸の美』を見ると、中国・朝鮮
の有鈕有舌の鈴の実測図がいくつか載っていました。朝鮮式銅鈴(朝鮮式小銅鐸)
の例も豊富に載っているので、参考になるかと思います。

#16でかおるさんも紹介していらっしゃいますが、図録の解説によれば、韓国で
は朝鮮式銅鈴は、祈祷師・呪術師の道具のひとつとされ、韓国全州博物館の「銅
鐸を吊り上げた呪術師」という復原展示の写真をみると、腰に小さな朝鮮式銅鈴
をいくつも吊り下げています。
音を発するカネとしての役割に徹していたということだそうです。ふ~ん。

追伸

都合により、ここ2日間お休みさせていただきます m(_ _)m

では また (^.^)/ ~~~ ラン2

069/070 KFA03002 kikkawa RE:議題4なぜ銅鐸は使用されなくなった
(18) 98/01/19 01:05 065へのコメント

議題3は、今の所イメージが余りありませんので、皆さんの見解を読ませていた
だいたいと思います。

で、先に議題 4 に行くことにします。

このテーマを考える上では、銅鐸製作時とその後で、遺跡・遺物の特徴にどのような違いがあるかを見るのが、基本でしょうね。

まず、年代的な情報として、#56で紹介した鉛同位体比に基づく青銅原料の違いから、銅鐸を作った時代は、古墳時代とはオーバーラップしないとするのは、蓋然性が高いと考えられます。

まず、近畿や東海よりも早く銅鐸文化から離脱したと見られる、吉備や出雲については、都出比呂志・阪大教授『古代国家の胎動』の、第3回「倭国の乱」(来年1月20日放送予定)に、以下のような記述があります。

“ところが、瀬戸内北岸の吉備と出雲ではこの時期になると青銅祭器は顕著ではありません。この知己では、この時期、青銅祭器の祭りに代わって大きな墳丘墓築造が盛んになります。墓のことは次回に詳しく述べますが、吉備と出雲では青銅祭器を使って集団の結束や先祖を顕彰する呪術が廃れ、墓を大規模に築造して、そこに葬った先祖祭祀を中心に結束する新しい宗教が登場していたと解釈してはどうでしょうか。”

また、小林三郎・明治大教授(1997)「霞ヶ浦沿岸の古墳とその文化」(霞ヶ浦町郷土資料館(1997)『霞ヶ浦の首長』に所収)に、日本全般の話として以下のような記述があります。

“古墳出現までは、方形周溝墓であったり土[土広]墓と呼ばれる遺骸の土中直葬であったりして、それらが群集して墓域を形成するのが、ごく一般的な墓制の姿である。ところが、古墳は、一人のために壮大な墳丘を盛り上げて造り、遺骸に添えて種々の副葬品が納められるのが通有である。それまでの群集として墓域を形成する墓制が排除されてしまった。

古墳の出現という墓制上の一大変革を、社会的機構の大変化として捕らえ、弥生社会から古墳社会への推移と考えている。”

銅鐸は、個人のものとは考えられず、集団の祭祀目的と考えるのが一般的ですね。

次第に、極く少数の有力者が、絶大な権威・権力を握って他を圧倒して、それと集団としての銅鐸の祭祀は並び立つものでは無くなったことでしょう。

吉備の特殊器台から埴輪へと移行したと考えられることも含めて、畿内への影響が窺えますね。

特に、古墳時代前期には、畿内を中心として、漢式鏡に比べ巨大な倭国製を含めて銅鏡の副葬数が非常に多く、青銅製品として銅鐸から銅鏡にとって代わられたようにも思われます。

岡村秀典・京大助教授(1995)「楽浪出土鏡の諸問題」(『考古学ジャーナル』392号、に所収)に、地域的な動態をみるために楽浪、韓、九州、九州以東に分けて、漢鏡の時期別出土頻度を示した図とその説明が載っています。

“韓地域では、漢鏡3期後半(注:前1c.中頃)に大きなヤマがあるが、それ以後の出土はごくわずかである。この地域では前1世紀の1時期を除いて、鏡に対する関心がうすかったとめてよいだろう。

それに対して漢鏡に異常な興味をもったのが日本列島の倭人である。九州とそれ以東とを問わず、非常に多くの漢鏡が出土している。なかでも九州における漢鏡3期後半の鏡と九州以東における漢鏡7期(注:2c.後半~3c.前半)とは異常なほどの出土量である。”とされています。

朝鮮半島南部での銅鏡の副葬は、百濟・武寧王陵の4枚が多い程度で、銅鏡には群馬県古墳に同型鏡が存在し、木棺が日本特産のコウヤマキで、王冠には日本特産のヒスイ製勾玉で飾られ、文献でも『日本書紀』には九州の島で生まれたと記すなど、倭国との繋がりが大きく、倭国からの影響と見なすべきでしょうね。

倭人は、韓人に比べて、著しく銅鏡に執心したようで、古墳時代には集中して分布する地が、九州から畿内へと移っています。『三国志』に、卑弥呼の使者への下貢品として、多数の鏡が記されているのと、符合しますね。

このような変化を、権力を持っていた部族の交代と見るか、他の地域からの風習の伝搬と見るかの、いずれでしょうか？

それは別として、強大な権力の誕生により、集団の祭祀から個人崇拜へと祭祀が変わったことが、要因と見ることは当たっているように思います。

070/070 KFA03002 kikkawa RE:日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)
(18) 98/01/19 01:05 063へのコメント

しかし、現在某大学にいらっしやる先生が現地説明会の時、山中さんたちが、まだ層位の検討など十分にできていないので慎重にその鑄型が畿内第2様式から第4様式のどこかに属する可能性もあると申し上げたことをとらえて、その後、報告書でこれを否定したにもかかわらずいまだに「あれは新しい」とおっしゃっている

こんにちはラン2さん。銅鐸の鑄型を巡る論争と言えば、佐原真・春成秀爾(1997)『出雲の銅鐸 発見から解読へ』(NHKブックス)での、森浩一・同志社大教授に対する批判は痛烈ですね。

“森浩一さんは、考古学研究者であり、またその発言は大きな影響力をもっています。実際の石型とそれによる製品とをくらべて観察するとか、兄弟銅鐸五つを比較して、傷がどのように進み、それを修復しているか、観察してほしい。物も見ないで、銅鐸の石製鑄型とよばれているものは本当に鑄型かどうかはわからない、などという重大な発言をしないでほしい、ということです。実際の考古資料から離れてしまっただけは考古学もおしまいです。”(p.98)

この問題については、技術史プロの富田徹男・東洋大教授が、本館(FREKI)15番の#3540「RE:銅鐸の鑄型」で、“同じ実験が文化財関係者と工学部関係者で行われ、文化財関係者は必ず失敗するのですが、工学部では成功するのです。”の書き出しで、鑄型の予備加熱による脱水、銅の度重なる融解による脱ガスは、金属屋によって当然とされています。

弥生時代における銅鐸製造は、専門家によるものでしょうから、20世紀の金属加工の素人が、約2000年前のプロの技術力を軽視しては理解を誤るといって、警鐘のように思えました。

071/071 QWD02544 どんたく RE:日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)
(18) 98/01/19 23:58 070へのコメント

kikkawaさん、こんにちは。 どんたくです。

佐原真・春成秀爾両先生のお話しは別として、kikkawaさんが書かれたことについて、ちょっとコメントさせていただきますね。

>> この問題については、技術史プロの富田徹男・東洋大教授が、本館(FREKI)15番の
>>#3540「RE:銅鐸の鑄型」で、“同じ実験が文化財関係者と工学部関係者で行われ、文
>>化財関係者は必ず失敗するのですが、工学部では成功するのです。”の書き出しで、
>>鑄型の予備加熱による脱水、銅の度重なる融解による脱ガスは、金属屋によって当然
>>とされています。

これは、久野雄一郎氏が「石製の鑄型では、銅鐸の鑄造は不可能」としておられる問題について、FREKI MES 15 で、かおるさんと私の間でやりとりをしていた時、私が書いた#3539(97/05/31)「銅鐸の鑄型」に関して、早速富田徹男さんから#3540(97/06/01)でレスを頂戴したものの一部ですね。

その後、#3548 で、どんたく から富田さん宛てに、参考文献を教えて戴きたい旨お願いした所、#3554(97/06/02)で富田さんから次のようなご返事を頂戴しました。

>> 始め抜き刷りを探したのですが、見つかりませんでした。ただ学生に配布した
>>たもの(一部切り取っている)が残っており、出典とうろ覚えの実験が説明で
>>きます。
>>
>>Namio HAGA, Yuichiro KUNO, Toshihide UCHIDA
>>
>>"STUDIES ON NON-FERROUS METALS IN ANCIENT JAPAN"
>>
>>.....

これに対して、#3567(97/06/03)で どんたく から富田さんにお礼を申し上げるとともに、
『富田さんにお示しいただいた論文の著者の一人である Yuichiro KUNO さんこそ、「石型では銅鐸の鑄造は困難」と主張しておられる張本人の久野雄一郎氏です。』という趣旨のことを申し上げました。
これを富田さんが読んで下さったかどうかは、わかりません。

以上のような経緯があったことを、念のため書かせていただきます。

結局、石型で銅鐸鑄造に成功した例は、少なくとも今までにはないようです。
(将来誰かが成功するかも?)

なお、森浩一先生、久野雄一郎氏のお二人とも、檀原考古学研究所の指導研究員(?)の肩書きを持っておられたように思います。

072/072 KFA03002 kikkawa RE:日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)
 (18) 98/01/20 07:48 071へのコメント

『富田さんにお示しいただいた論文の著者の一人である Yuichiro KUNO さんこそ、「石型では銅鐸の鑄造は困難」と主張しておられる張本人の久野雄一郎氏です。』
 どんたくさん、指摘を有り難うございます。上記のログの周辺を見直したら、本館15番の#3554に、富田教授が書かれていますね。その部分は失念しており、錯誤を生じ失礼しました。m(____)m

結局、石型で銅鐸鑄造に成功した例は、少なくとも今までにはないようです。
 佐原真・春成秀爾(1997)『出雲の銅鐸 発見から解読へ』(NHKブックス) の、p. 88~93の「実験考古学」の項には、以下のような記述があります。
 “佐原 戸津さんは、石野鑄型を組み合わせて、どのような固定していたか、まわりを包んでいたか。鑄型の石をあらかじめ、どのような方法で、どのくらいの時間熱した状態で、どのようなルツボで、どのようにして青銅を注いだか。それに兄弟の銅鐸を作るときに、戸津さんたちの実験では、ひき続いて次々と作るんだ。けれども、弥生時代にはそうでなかった。というのは、兄弟銅鐸で成分が違って重さも違うものがある。材料が違うのだから、一回の工程でない可能性もある。・・・
 しかし、戸津さんたちの石の鑄型の実験は貴重ですね。一つの鑄型を四回使って兄弟の四銅鐸を作っている。
 春成 石の鑄型の実験としては初めてだから貴重ですね。そして結論もひかえ目で、森浩一さんと久野雄一郎さんが、記者発表のときに配った文書(六五 - 六六頁参照)に引用してある表現から受ける印象とは違いますね。”

この文面を見ると、弥生時代の製法とは異なる手順で、石製鑄型で繰り返し銅鐸を作ったという事を述べているようです。

参考文献によると、戸津圭之介・長谷川克義(1996)「石製鑄型による銅鐸の鑄造実験」(平尾良光編『古代東アジアの青銅器鑄造に関する基礎的研究』平成五~七年度科研費成果報告書 に所収) の事ですが、これに当たれないので、実際の所は確認できません。

青銅器の鉛同位体比に関する、久野さんの主張は、『季刊 邪馬台国』62号のp. 259~265に分かり易く指摘されているように、的外れと言えるもので、銅鐸の鑄型の件でも、常識的な線で考えると、同様に久野さんの主張が怪しげに見えるのですが、確証が無いので当面はペンディングと変更させて下さい。

073/076 QWD02544 どんたく 黄泉国の雷
 (18) 98/01/20 21:02 058へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたく です。

段々と考古学からは離れて、記・紀神話の世界へと入って行ってしまいますが、お許しください。

イザナキノミコトは、妻のイザナミノミコトが亡くなると、これを悼み悲しんで、黄泉国(ヨミ)まで追いかけて行きます。

ここでイザナキが見たものは、ウジがたかって変わり果てた妻イザナミの姿でありました。
 そして、このイザナミには、8種類の雷がたかっておりました。

古事記では「八雷神」、日本書紀では「八色雷公」などと書かれていますが、その内訳は、

古事記では、大雷・火雷・黒雷・拆雷・若雷・土雷・鳴雷・伏雷。(*1)

日本書紀の第九の一書では、大雷・火雷・土雷・稚雷・黒雷・山雷・野雷・裂雷。(*2)

というようになっています。

そうしてこの雷たちは、非常に汚らわしいものとして描かれています。

何故「神様」であるべきカミナリが、ウジムシ同様の汚らわしい存在として扱われているのでしょうか？

【参考資料】

- (*1)日本古典文学大系：「古事記 祝詞」 岩波書店 p.65
- (*2)日本古典文学大系：「日本書紀 上」 岩波書店 p.98

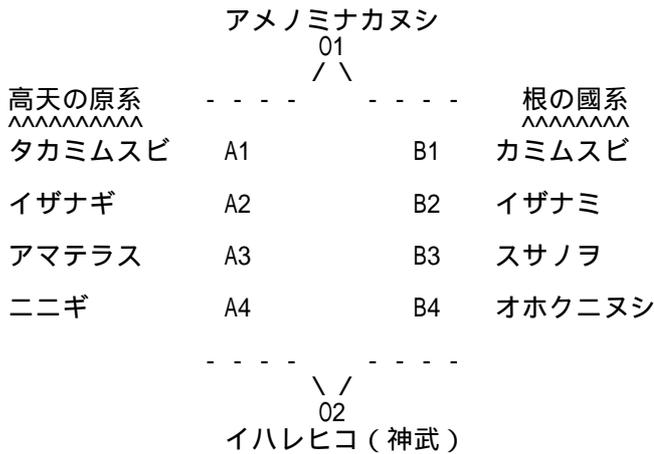
QWD02544 どんたく

074/076 QWD02544 どんたく 神々の体系
(18) 98/01/20 21:02 058へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

京都大学教授だった上山春平先生の「神々の体系」という本があります。

この本では、古事記の神統譜を検討して、次のような形に纏めあげています。



そうしてこの神々の体系について、次のような説明があります。 (*1) (*2)

『私の見るところでは、
 記紀の神代の巻は大きく二つの部分に分けることができ、
 イザナギとイザナミの二神による広義の国生みの物語が前半の部分をなし、
 アマテラスとスサノヲを中心とする高天の原系と根の國系の葛藤と和解の
 物語が後半の部分をなしている、と言えるように思う。
 (中略)
 前半は自然形成のロジック、後半は社会(国家)形成のロジックによって
 構成されている、ということが出来るかもしれない。

ややくわしく言いかえれば、前半の部分が、陰陽未分の混沌から出発し、
 陰陽の分離をへて、陰陽の和合を媒介とする万物の形成に至る、という
 形をとるのにたいして、
 後半の部分は、支配の系譜としてのタカマノハラ系と、被支配の系譜
 としてのネノクニ系の分裂から出発し、ネノクニ系が自らの育成した
 社会をタカマノハラ系の統治にゆだねるという仕方で、二つの系譜を
 統合する秩序が形成され、その統合の中心として天皇が出現する、
 という形になっている。』

これを私なりに簡単化して言い換えると、次のようになります。

 *
 * 高天の原系(天孫系 = 支配者) : イザナギ・アマテラス・ニニギ *
 * 根の國系 (先住系 = 被支配者) : イザナミ・スサノヲ・オホクニヌシ *
 *
 * という二つの系列の対立があり、 *
 * やがてこれが高天の原系(天孫系)によって統合される。 *
 *

そうしてこれは、単なるオハナシとして作りあげただけのものではなく、
何らかの意味で歴史的事実を反映したものである、と私は考えるわけです。
ページ(49)

【参考資料】

(*1) 上山春平「神々の体系」 中公新書 291 p.41

(*2) 上山春平「続・神々の体系」中公新書 394 p.134

QWD02544 どんたく

075/076 QWD02544 どんたく 天つ神と国つ神

(18) 98/01/20 21:02 058へのコメント

D07天つ神と国つ神

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

「神々の体系」に関連して、「天つ神・国つ神」について、説明させて下さい。これについては、「神話伝説辞典」に、次のように記載されています。

「あまつかみ・くにつかみ 天津神・国津神」

わが国にシナ風の天神・地祇の思想が本来からあったかどうかは問題であるが、「天つ神諸の命以ちて」とか、「僕は国つ神大山津見神の子」とかというような記事が、記紀にしばしば見られ、

高天原に坐す神およびそこから天孫に従って天降ったと伝える神を天つ神とし、それに対し、天孫降臨以前から国土に土着したと伝える神を国つ神としていることが判る。

祝詞や姓氏録に見える天つ神・国つ神の別も、記紀の伝承をもととしている。高御産巢日、天忍日、饒速日などを祖とする氏族は、天神系であるとされ、大国主、綿津見神などを祖とする氏族は地祇系とされる。

そうした区別の原因については、種々の論がある。その関係を、先住民族对新渡来民族というような民族関係で説明する説や、大和朝廷を中心とする中央貴族と地方土着の被征服民族との勢力関係で説明する説、あるいは、原始社会に見られる双分組織で説明する説などが、代表的なものである。

民族の相違で説明するのは適当ではない。

地祇令の天神地祇の義解に、出雲国造の奉ずる神（熊野大神）を天神としていると同時に、その国造の祀る大汝（材材好）を地祇としているのを見ても、

また同系統の雷神を祀ると考えられる葛木と山城の鴨の神を、それぞれ後者を天神、前者を地祇としているのを見ても、察せられよう。

要は、大和朝廷に帰属ないし協力の時期の先後などの、政治的關係に負う所が多いと思われる。

[参考] 津田左右吉「日本古典の研究」。
肥後和男「日本神話の研究」。

【参考資料】

朝倉治彦・井之口章次・岡野弘比古・松前健 共編「神話伝説辞典」
東京堂出版 p.37

QWD02544 どんたく

076/076 QWD02544 どんたく RE:日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)

(18) 98/01/20 22:05 072へのコメント

kikkawaさん、こんにちは。 どんたくです。

》 結局、石型で銅鐸鑄造に成功した例は、少なくとも今までにはないようです。
》 佐原真・春成秀爾(1997)『出雲の銅鐸 発見から解読へ』(NHKブックス) の、p.
》 88～93の「実験考古学」の項には、以下のような記述があります。

アアッ！ ありました。ありました。
一遍読んでいたのに、「記憶にございません」でした。(^^;)

doutakusinp01998

「東京芸大で石型による銅鐸鑄造実験をやったが、結局うまく成功しなかった。」
という話はきいたことがあるのですが、この戸津さんの鑄造実験というのは、
これとは別のものなのかどうか？

いずれにしても、ご教示有り難うございました。m(__)m

QWD02544 どんたく

077/078 KFA03002 kikkawa RE:日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)
(18) 98/01/20 23:54 072へのコメント

参考文献によると、戸津圭之介・長谷川克義(1996)「石製鑄型による銅鐸の鑄造実
補足です。goo検索(<http://www.goo.ne.jp>)で戸津圭之介さんをサーチしたところ、
東京芸大美術学部の鑄金・第二研究室の教授で、カリキュラムは以下のように記され
ていました(<http://www.geidai.ac.jp/fa/index.html>)。

“鑄金制作の基本的知識と技術を習得し、併せて鑄金の特質である計画性及び造形
力を養うことを目標としています。

主な授業内容としては、原形制作、鑄型制作、合金の溶解、仕上加工、表面処理、
着色等一貫した鑄金の工程を修得します。鑄金造形の様々な技法と素材を通して、逐
次高度な知識と技術を修得し幅広い創作力の向上を図るようにカリキュラムが編成さ
れています。”

とすることで、鑄造に関する専門家の方ですね。

戸津教授の個人WWWページは無いようで、残念でした。

078/078 KFA03002 kikkawa RE:日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)
(18) 98/01/21 07:49 076へのコメント

「東京芸大で石型による銅鐸鑄造実験をやったが、結局うまく成功しなかった。」
という話はきいたことがあるのですが、この戸津さんの鑄造実験というのは、
どんたくさん、#72に述べましたが、戸津さんは東京芸大教授ですから、どうやら
その実験の事のように、前にも引用した以下の文章に見えるように、

“春成 石の鑄型の実験としては初めてだから貴重ですね。そして結論もひかえ目
で、森浩一さんと久野雄一郎さんが、記者発表のときに配った文書(六五 - 六六頁参
照)に引用してある表現から受ける印象とは違いますね。”

と、両者の受け取り方が大きく異なることにより、齟齬を来しているようです。

元データの記述を知らないまま、両者の見解を読んでも判然としないので、どなたか、戸津圭之介・長谷川克義(1996)「石製鑄型による銅鐸の鑄造実験」(平尾良光
編『古代東アジアの青銅器鑄造に関する基礎的研究』平成五～七年度科研費成果報告
書 に所収) にアクセスできる方は、内容を紹介していただけませんか？

079/082 VZD07512 ラン2 【お地蔵様になった銅鐸鑄型の巻】
(18) 98/01/21 20:47

【お地蔵様になった銅鐸鑄型の巻】

* * 兵庫県赤穂市上高野出土銅鐸鑄型。中段階(扁平鈕式) * *

ラン2 家のお茶の間劇場(^ ^)

黒塚古墳のある奈良県天理市柳本駅に向かう電車の中・・・

ラン2 「ねえ、お地蔵さまになった銅鐸鑄型の話って前してくれたよねえ」

だんな 「赤穂のやつか？」

ラン2 「そうそう。アップすんねん。もう1回ゆうて」

だんな 「しゃあないなあ。

赤穂に有年(うね)考古館っていうのがあるねんけど、それを作っ
たのは、松岡秀夫先生っていうねん。本業はお医者さんなんやけど、
赤穂の考古学研究の中心人物やった人や。

松岡先生が、ある日道を歩いていて、道端のお地蔵さんの祠をのぞ
いて、びっくり。そこに祭られていたのはお地蔵さんではなく、な
んと銅鐸の鑄型やったんや。

調べてみると、近所の方が、近くの川で拾ったもので、漬物石とし
て使ってたんやけど、ようよう見ると、仏様の光背みたいなもんが
見える。それであわててお地蔵さんやと思って、祠を建てて祭ら
はったそうや。」

ラン2 「ふ～ん。光背に見えたってことは、鈕の部分とかやったんかなあ」

だんな 「たしかにその鑄型の写真を見ると、見ようによってはほんま、お地
蔵さんに見えるんやね」

ラン2「あたしらも、祠があったらのぞかなあかんねえ。もちろん、拝んでからね」
だんな「この話を知ってから僕は、何か祠があると必ずのぞくことにしてるんや」
柳本駅に着き、電車を降りる。駅前に小さな祠を見つける。
ラン2、祠をのぞき込む。
ラン2「ほえ。ちょっとこれ普通の地藏さんちゃうで。」
だんな「げげっ!!!」
ラン2「え～、何、何??? 鑄型かあ??? そんな、あほな・・・」
だんな「これ、石棺使っているやん。ああ、そやそや。『古代学研究』の古い号に、石棺を使った卒塔婆が柳本にある、っていう資料紹介があったのを思い出したわ。これがそうなんやろな。ここには前も来たことあったけど、その時はぜんぜん気がつかんかったわ。」

これは先週ホントにあった会話です・・・

家の帰ってから、神戸市立博物館『銅鐸の世界展』の図録を見たら、ホントに鈕の部分で、お地藏さまの光背にそっくりでした(^_^)

石棺卒塔婆については『古代学研究』1号 1946年に紹介されています。

ラン2とだんなさんは関西人なので、こてこての関西弁ですみません。銅鐸こぼれ話は、これ以後、題名を【何々の巻】としますね (^o^)/

080/082 QWD02544 どんたく RE:議題 4 なぜ銅鐸は使用されなくなったの (18) 98/01/21 22:09 065へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

>> #30の【お知らせ】での予定通り議題 4 に入りたいと思います。
>> 「なぜ銅鐸は使用されなくなったのか」について皆さまのお考えをおきかせ
>> 下さい。

今回も、議題 3 に対する私の回答 (#64) の場合と同様、「独断と偏見」の産物(?) の「どんたく説」に基づいて、回答させて戴きます。

#64 『RE:議題3「銅鐸を持っていた人々」』では、

>> 私は、銅鐸を持っていた人々は、先住系の人たちだろうと思っています。
>> 先住系というのは、いわゆるテンソン族の人たちが近畿地方に入ってくる
>> 前から、そこに住んでいた人たちのことです。

と申し上げました。

その後、「どんたく説」シリーズの中の #74「神々の体系」で、上山春平先生の所論を紹介して、

>> 高天の原系（天孫系 = 支配者）：イザナギ・アマテラス・ニニギ
>> 根の国系（先住系 = 被支配者）：イザナミ・スサノヲ・オホクニヌシ
>>

>> という二つの系列の対立があり、
>> やがてこれが高天の原系（天孫系）によって統合される。

と書きました。

従って、「なぜ銅鐸は使用されなくなったのか」という議題に対する答えは、次のようになります。

- (1) 銅鐸は、先住系の人たちによって、祭器として用いられていた。
- (2) 天孫系の勢力が増し、これによって統合されるようになって、被支配者の立場となった先住系の人たちは、銅鐸を用いた祭祀を続けることができなくなった。

さらに想像を逞しくしますと、次のようなことになります。(^^)

#53 でもちょっとふれましたが、先住系の人たちが勢力を持っていた時代には、
ページ(52)

恐らく毎年定例的に神様に祈りを捧げるマツリが行なわれ、その中で「銅鐸を埋める」ということも、儀式として行なわれていたのではないかと、私には想像しています。

その後、天孫系の勢力が増してきた後、次のようなことが起きたのではなかろうかと想像します。

- (A) 銅鐸を用いたマツリを、おおびらに行なうことはできなくなっただろう。
- (B) しかしその後も（銅鐸埋納という、大掛かりな儀式は又キにしたとしても）何等かの形で、ひっそりとマツリが続けられたところもあるかもしれない。
- (C) 宝器（祭器）である銅鐸を、支配者側に供出せざるを得なくなった場合もあるかもしれない。
- (D) 支配者の目を逃れるため、銅鐸を別の場所に移し替えた場合もあるかもしれない。
- (E) 結局時代の変遷とともに、銅鐸にまつわる祭祀は姿を消していっただろう。
- (F) 銅鐸祭祀の消滅は、或る日突然、日本全国一斉におきたのではなく、天孫系の勢力伸張／先住系の勢力衰退に関連して、地域によって年代的な差があるだろう。

どうも、「だろう」「かもしれない」ばかりが続いて申し訳ありませんが、何しろ謎だらけの銅鐸のことです。

今後さらにこの謎の解明を進めるに当たっては、いろいろな可能性のあることを念頭においておく必要もあるだろうと思って、敢えて書かせていただきました。

QWD02544 どんたく

081/082 QWD02544 どんたく 上賀茂神社・下鴨神社
(18) 98/01/21 22:09 058へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

前に #73「黄泉国の雷」に、イザナミノミコトにたかっていた八雷神のことを書きました。
このイザナミノミコトは、前述の #74「神々の体系」によれば、先住系の神様です。

これ以外にも雷にまつわる伝承を探り、これが先住系とどのようなつながりをもつかを探ってみたいと思います。

雷に縁の深い神様としては、京都に通称、上賀茂神社・下鴨神社と呼ばれる式内社があります。

正式には、
上賀茂神社は、賀茂別雷^{カキガチ}神社で、ご祭神は別雷^{カキガチ}神。
下鴨神社は、賀茂御祖^{ミヤ}神社で、ご祭神は、建角身命^{タケツノミコト}とその娘の玉依姫命。

建角身命は、神武天皇東征の折り、道案内役をつとめた八咫鳥^{ヤチトリ}のことでされています。

山城国風土記逸文にこの賀茂社のことが記されています。（*1）
その概要は、次の通りです。

賀茂建角身命は、神武天皇の道案内の後、葛城山に行き、さらに山城国の岡田の賀茂を経て、賀茂川を遡り、久我の国の北の山基にすまった。

賀茂建角身命の娘の玉依比賣が石川の瀬見の小川で川遊びをしていたとき、丹塗矢が川上から流れてきた。

この丹塗矢を取って床の辺に置いていたところ、孕んで男子を生んだ。
これを可茂別雷命^{カキガチミコト}と名づけた。

丹塗矢は、乙訓郡の社にいます火雷神^{ヒノカミ}である。

ここに出てくる火雷神は、黄泉国の八雷神の中の一神です。

また、葛城山は大阪府と奈良県の境にあり、その東麓はカモ氏族の一中心地です。そして、この「葛城のカモ」は、出雲系ともつながっており、「国つ神」系すなわち先住系の一族と考えられています。

一方、賀茂建角身命(=ヤタガラス)は、同じカモ族とは言っても、「天つ神」とされ、天孫系に属していることになっています。

しかし、道案内をするためには、前からその土地に住んでいて土地カンがなければ、できない筈です。

前回 #75「天つ神・国つ神」のところで引用した文章にもありましたように、『天つ神・国つ神の別は、大和朝廷に帰属ないし協力の時期の先後などの、政治的関係に負う所が多い。』ということをお察ししますと、この賀茂建角身命(=ヤタガラス)も、元々は先住系であったものと見られます。

従って、上賀茂神社・下鴨神社を奉祭する「山城のカモ」も、元をただせば、先住系だと考えられ、そうしてこの氏族が現在に至るまで雷の神様を祀ってきたというように言えると思います。

【参考資料】

(*1) 岩波・日本古典文学大系「風土記」p.414

QWD02544 どんたく

082/082 QWD02544 どんたく 神代よりさき
(18) 98/01/21 22:09 058へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

前回、上賀茂神社・下鴨神社を奉祭する「山城のカモ」は、元々は先住系だったのではなからうか、ということを書きましたが、このことを裏書きするような資料が一つあります。

「賀茂注進雑記」という文書があります。これは、江戸時代に作られた比較的新しい資料なのですが、そこには賀茂の神社の由来のようなことから、年中行事としてどのようなことが行なわれるか、といったことが書かれています。

この文書の初めの方に、次のような個所があります。

或神書に云天地未分まるかれたる中に大もとの御神まします
清るは天となり濁れるはくだりて地と成しより
陰陽の両神わかれましたして陽徳の御神は天の事をつかさどり
陰徳の御神は國土をしるしめすといへり

又云当社の託し給へる神詠に

ちはやぶる わけつち山に 宮居して 天くだること 神代よりさき
と託し給つるとみえたり

同私記に賀茂御神は陰徳にして男神 伊勢は陽徳にして女神に坐す

この御神詠に「神代よりさき」とあるのは、「我々カモ族は、天孫族よりも古くから、住んでいたのだぞ」という意味がこめられているように思われるのです。

この歌がいつ頃から伝えられているものなのかは分かりませんが、このような歌を読むと、ますます私の想像力のボルテージは上がってくるのです。

【参考資料】

「賀茂注進雑記」続々群書類従 第一 神祇部

QWD02544 どんたく
ページ(54)

083/083 QWD02544 どんたく RE:【お地蔵様になった銅鐸鑄型の巻】
(18) 98/01/21 23:13 079へのコメント

ラン2さん、こんにちは。 どんたくです。

>>柳本駅に着き、電車を降りる。駅前に小さな祠を見つける。
>>ラン2、祠をのぞき込む。
>>ラン2「ほえ。ちょっとこれ普通の地蔵さんちゃうで。」
>>だんな「げげっ!!!」
>>ラン2「え～、何、何???鑄型かあ???そんな、あほな・・・」
>>だんな「これ、石棺使っているやん。ああ、そやそや。『古代学研究』の古
>>い号に、石棺を使った卒塔婆が柳本にある、っていう資料紹介があ
>>ったのを思い出したわ。これがそうなんやろな。ここには前も来た
>>ことあったけど、その時はぜんぜん気がつかんかったわ。」

ほんとに「げげっ!!!」ですね! 笑っちゃいました。
1月18日に柳本駅に行ったときには、そのような祠があるなんて、全然思いも
しませんでした。
これからは、祠を見つけたら、お参りすることにします。

お地蔵さんになっていた銅鐸鑄型、5年前に神戸市立博物館の「銅鐸の世界展」
で拝んだことを思い出します。

あの「銅鐸の世界展」は感激でした。3回くらい見に行ったかな?
あちこちの銅鐸や鑄型が一堂に会し、まるで八百万や稲の神々が集まっている
ような思いがしました。

QWD02544 どんたく

084/088 QWD02544 どんたく 雷丘
(18) 98/01/22 20:47 058へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

奈良県の飛鳥に雷丘(イカツチノオカ)という、ごく小さな小山があります。
甘樫丘(アマカシノオカ:148m)の北方、約400mくらいのところです。

日本書紀雄略7年7月の条に、少子部連スガルが、天皇に命じられて
三諸岳の神を捕らえる話があります。(*1)

この山の神は大物主神とも菟田の墨坂の神とも言われ、大蛇の形をした雷神
です。
またこの三諸岳は、奈良県桜井市の三輪山とも、飛鳥の雷岳とも言われて
います。(*1)

この話の異伝が「日本霊異記」にあります。(*2)

空に雷鳴がしたので、天皇はこの鳴る神を捕らえてくるようにスガルに
命じます。

スガルは「天皇のお召しだ」と、雷神に向かって呼びわります。
豊浦寺と飯岡との間に鳴雷(ナルイカツチ)が落ちているのを見て、
これを箆に入れて大宮に運び、天皇に奉ります。

ところが、雷は光明を放ったので天皇はこれを見て恐れ、幣帛を進めて
落ちたところに雷を戻します。

そしてこの場所を、今に雷岡(イカツチノオカ)と呼ぶ、としています。

このように、飛鳥の雷丘は、ごくちっぽけな小山ではありますが、
雷さまのいる聖地とされていたように感じられます。

【参考資料】

(*1) 岩波・日本古典文学大系「日本書紀 上」p.473
(*2) 「神話伝説辞典」東京堂出版 p.301 「ちいさこべのすがる」の項。

085/088 QWD02544 どんたく 柿本人麿呂
(18) 98/01/22 20:47 058へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

前回述べた雷丘に関して、万葉集の中に、次の歌があります。

卷三 #235

天皇、雷岳に御遊しし時、柿本朝臣人麿呂の作れる歌一首

大君は 神にしませば 天雲の ^{イガサ}雷の上に いほらせるかも

非常に雄大な感じがする歌です。
人によっては、「今の飛鳥の雷丘では、余りにも小さすぎる。
万葉集にいう雷丘は、今の甘樫丘のことかもしれない。」
などと考えるむきもあるようです。

しかし、私は、やはり今の雷丘でよいのではないか、と思います。

というのは、この雷丘は、雷の神様を信奉していた先住系の人たちにとりて、一つの聖地だったのではないか。

天皇といえども、この先住系の聖地に足を踏み入れることは、一般住民感情として、なかなか許されないものがあつた。

それが、やっと政治社会情勢の変化によって、天皇が雷丘に上ることができるようになり、これを柿本朝臣人麿呂が、声高らかに謳い上げたのだ、と。

ヒョットすると、この雷丘に、先住系の人たちが祀っていた銅鐸がまだ埋まっているかもしれない、などと、想像を逞しくしています。(^^)

QWD02544 どんたく

086/088 QWD02544 どんたく 綱敷天満神社
(18) 98/01/22 20:47 058へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

今回の話題は、私が銅鐸に関して唱えていることの中でも、一番皆さんから相手にされない種類の話ですので、そのつもりでお読み下さい。(^^)

神戸市東灘区御影町石屋字八色岡 ヤグサカ というところに、綱敷天満神社という神社があります。
(日本書紀にいう、「八色雷公」と同じ、ヤグサという地名に注意！)

菅原道真公が大宰府に向かわれる途中で、綱を敷いて休まれたという、言い伝えのある神社です。
(同様の言い伝えが残っている神社は他にもいくつかありますが・・・)

菅原道真公は、土師部の系譜で、その祖先は出雲の野見宿禰です。
すなわち、天孫系・先住系の別でいうならば、先住系の系譜の人です。

そうして、菅原道真公は、学問の神様であると同時に、雷の神様でもあります。
恐らくこの土地には、ずっと以前から、先住系の人たちが住んでいて、太宰府へ向かう途中の道真公が立ち寄られたのではないか、と思われれます。

この神社に参拝すると、参拝する方向は、真北より少し西寄りの方角に向かつて拜むこととなりますが、神殿の遥か向こうには、六甲山系の山が見えます。

そして、そこには、有名な桜ヶ丘銅鐸の出土地点があるのです。
すなわち、この神社に参拝すると、丁度桜ヶ丘銅鐸出土地点を遥拝するような形となります。

さらにこの神社の南方、海岸に近いところに、この神社のお旅所があります。

doutakusinp01998

そして、桜ヶ丘銅鐸出土地点 - 網敷天満神社 - お旅所 が、
丁度一直線に並んでいるのです。

これを、単なる偶然と笑いとばすか、それとも、何かを感じ取るかは、
皆さんにお任せいたします。

ちなみに、この神社は3年前の阪神大震災で全壊しましたが、最近鉄筋
コンクリート造で再建されました。
神殿の向きは、以前と全く同じ方角を保っています。

QWD02544 どんたく

087/088 YIG00127 かまくら 議題 5 出雲と銅鐸の関係
(18) 98/01/22 20:54

皆さま、こんにちは。(^ ^)
議題 5 に入らせていただきます。
今回は「出雲と銅鐸の関係」というテーマで、皆さまのお考えをおききしたい
と思います。96年10月の島根県加茂町岩倉での衝撃的な銅鐸発見以来(神
庭荒神谷の銅鐸も忘れてはいけませんね(^ ^) 古代出雲文化展などで何か
と話題を提供している 出雲 という地域に限定して銅鐸をご考察下さい。

* 1/25までは司会とパネリストのみの発言で議論をすすめてまいります
が、1/26の一般参加開始よりそれは解除になります。お手元の資料のご用
意は大丈夫ですか? ぶるって皆さまご参加下さい。 \ (^ ^) /

司会者 / かまくら

088/088 VZD07512 ラン2 RE^2: 日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)
(18) 98/01/23 01:34 078へのコメント

kikkawaさん どんたくさん みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

>>たか、戸津圭之介・長谷川克義(1996)「石製鑄型による銅鐸の鑄造実験」(平尾良光
>>編『古代東アジアの青銅器鑄造に関する基礎的研究』平成五～七年度科研費成果報告
>>書 に所収) にアクセスできる方は、内容を紹介していただけませんか?

この論文、ラン2も読んでみたいです。
奈良国立文化財研究所なら所蔵されているにちがいないと、知人をお願いしたとこ
ろ残念ながら所蔵されていませんでした。

>>考古学関係の流通本は、ほぼ100%そろえているはずですが、
>>題から見て、おそらく非売品なのでしょう。

というお返事もいただきました。

ということは、残るは国立国会図書館だけです!
「科研費成果報告書」ということは、100%国立国会図書館に所蔵されているこ
とは確実です。
うちのだんなさんの話によると国立国会図書館には、科研費成果報告類のファイル
を集めたコーナーがあるそうです。
東京在住のみなさま、時間がありませんでしたら、見てきてくださいませ m(_ _)m
ラン2は京都在住なので、こういう時とてももどかしく思うことがあります。

ラン2の一口メモ(^ ^)
科研費とは、文部省科学研究費補助金のことで、文部省が研究者に対し、その研究
に補助金を支給するというものです。
科研費をもらったら、どういう研究をしたかという内容を、文部省に提出しなけれ
ばなりません。論文の小冊子、報告書、単行本など、その体裁は問われません。
文部省に提出されたものは、すべて国立国会図書館へいきます。

では また(^ ^) / ~~~ ラン2

089/092 QWD02544 どんたく 大場磐雄説(その1)
(18) 98/01/23 20:08 058へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

今まで、銅鐸・雷・雷神信仰・先住系という関係について、私一人で勝手にいきましている「どんたく説」を述べてまいりました。

恐らく皆さん、眉が唾でベトベトになってしまわれたことでしょう。(^^)

ここで、この「どんたく説」にとって援軍になるような、諸先生の説を紹介させて戴きます。
もっとも、この先生方は、『「どんたく説」を援ける気なんて毛頭ないよ。』と言われるかもしれませんが……。

まず最初に、國学院大学におられた大場磐雄先生が、昭和24年に発表された説の概要を紹介させて戴きます。

[立論の根拠]

- (イ) 銅鐸は当時貴重な器具であって、これを入手または製作し得たものは、相当優勢の一団と推定されること。
- (ロ) その発見地が近畿を中心として一定の地域に限定されているから、古代においてその範囲内に分布発展した集団であったこと。
- (ハ) 後世の古典 - - 記紀や風土記等 - - にはこれに関する記事を欠き、また遺品をも存在しないことは、これを所持した集団が被征服者のことき特別な立場に置かれたと考えられること。
- (ニ) 型式編年上から古型式のものが山陰・山陽に発見されるので、まずその地方に栄えた集団が早く大陸との交通を行ない金属文化を受容したと推定されること。

[立証の方法]

銅鐸発見地の個々を再検討して、その付近に居住した古民族の有無を調べた結果、全体を通じて何等かの共通した事実が示されたならば、即ち銅鐸使用氏族の推定が可能であろうとした。

しからばその最古の氏族は何によって推定するか。
その一は古社であり、その二は古地名である。
前者は延喜式所載を主とし、後者は和名抄を主として、検討した。

[検討結果]

畿内・東海・北陸・山陰・山陽・南海の各地にわたり、三十六個所の銅鐸出土地を列挙して、そこに居住した古代氏族の状態を記述した。
銅鐸発見地の確実なるものは百数十個所を算するから、以上はその二割五分にしか相当しない。

しかし私の調査結果は、他の地方においても同一の結果を得るものが頗る多い。

これによればそのほとんど全部が加茂または美和と関係深い神社・地名を有し、かって二氏が移住したまたは勢力を占めていた事実を物語っている。

翻って再び分布図を案ずるに、加茂・美和二氏の分布と銅鐸発見地との間に相当の食い違いがあり、また当然発見を予想せらるる地方にまだこれを見ない個所が存在する。

一例を挙げるならば、近畿地方においては山城国に同族の分布顕著なるものを見るに拘わらず、一口の発見なく、(*2)

また近江国野洲郡には鐸の濃密な分布を示しておりながら、氏族の痕跡の希薄なこと、またこれと同様な事例が紀伊国にも認められる点、

更に山陰にあっては丹後・但馬両国内にも鐸の発見は数例見ながら、同氏族の分布を見ないし、

また出雲国のごとく同族の同族の分布頗る多い地方でありながら、鐸の発見殆どない地方をも見るのである。(*3)

銅鐸使用氏族の全部を上掲の二氏と限定するのはいささか無謀であろうが、

その一部が二氏と離れることの出来ない関係を有することは、何人も疑いを容れる余地を見ないであろうと思う。

(続く)

【参考資料】

- (*1) 大場磐雄「銅鐸私考」神道史学 1.1 昭和24年
(大場磐雄「考古学上から見た古氏族の研究」1975.9. 永井出版企画に再録)
- (*2) 現在は、山城国からも銅鐸は発見されている。
森浩一「銅鐸と水神」アサヒグラフ [別冊]
「銅鐸の谷 加茂岩倉遺跡と出雲」1997.11. p.94 参照。
- (*3) 現在は、出雲の神庭荒神谷遺跡から6個、加茂岩倉遺跡から39個の銅鐸が出土している。

QWD02544 どんたく

090/092 QWD02544 どんたく 大場磐雄説 (その 2)

(18) 98/01/23 20:08 058へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

前回到引き続いて、大場磐雄説の紹介を続けます。

[カモ・ミワ 二氏族の地位]

カモ・ミワ 二氏族の有する性質は、

- (1) 先史時代以降我が国土に居を占めた豪族で、後には大国主神を中心とするいわゆる出雲神族とせられた。
- (2) 分布は、近畿・中国を中心とし、東は函嶺以西、西は瀬戸内海付近を主とする。
- (3) 神話によればこの一団は早く大陸方面と交通があったらしく推察される。

とすることができよう。

そしてこの性質は銅鐸の示す性質とも一致し、私がここに述べた立論の根拠とほぼ合致を見る。

[銅鐸の末路]

当時我が国に存在した銅鐸の数は相当の多きに上ったと推察されるが、我が古典には殆どこれに関する記事を見ない。

文献のみでなく実例に徴しても、古墳時代以降の遺品中に銅鐸の末裔と推定される遺品は全く存在しない。

以上のべた通り銅鐸の使用は我が上古時代のある時期に栄えたが、古墳時代に入っては殆ど跡を絶つという変則的な現象を示しており、従ってこの使用者に何等かの変動が与えられた結果と解せざるを得ないのである。

あたかもよしこの事実はカモ・ミワ氏族 - - 即ち出雲神族 - - が、大和朝廷の設立に際し、旧来の国土を奉獻した国譲り神話を裏書していると言うべきではあるまいか。

銅鐸が前記二氏の使用品で、一種の宝器 (宗教的な) であったとすれば、一族の権威の象徴たる理由から、征服者側からは没収または奪取したであろうし、所有者側からは隠蔽した場合はあったと推察される。

以上で大場磐雄説の紹介を終わります。

【参考資料】

- (*1) 大場磐雄「銅鐸私考」神道史学 1.1 昭和24年
(大場磐雄「考古学上から見た古氏族の研究」1975.9. 永井出版企画に再録)

QWD02544 どんたく

091/092 QWD02544 どんたく
(18) 98/01/23 20:08 058へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

前回は大場磐雄説を2回にわたって紹介させて戴きました。

今回は、銅鐸と古代氏族との関係を取り上げた、その他の説について、簡単に纏めて紹介させて戴きたいと思います。

1. 田中巽説(*1)
銅鐸は、尾張連と関係が深いところから多数出土しているとする。
尾張連は記・紀には断片的にしか出てこない。

新撰姓氏録には火明命を祖神とする尾張氏五、六氏があげられているが、尾張氏の性質は明らかでない。

先代旧事本紀「天孫本紀」に尾張氏系譜があるが、これをどこまで信用できるかが、また問題である。

結局田中巽氏は、尾張氏の一派である伊和部(後に石作部と呼ぶ)のように、出雲系の神を奉祭したものがあることなどから、尾張氏は出雲系に繋がった氏族であると見ている。

2. 谷川健一説(*2)
谷川氏は、伊福部と関係のある場所から、銅鐸が出土していることに注目している。
また伊福部は、銅を吹く、即ち銅の鑄造に携わったものとみている。

伊福部は大己貴命(オホミノミコト)を始祖としている、出雲系の氏族である。

また、常陸国風土記逸文に、伊福部神が雷神として出てくることに注目している。

3. 平田篤胤説(*4)
江戸時代の学者である平田篤胤は、「弘仁歴運記考」という本の中で、銅鐸について、いくつかの絵も混えながら、記述している。

その中から、一部を抜粋してみよう。

『然れど此ノ銅器のみに非ず、諸国の古家また丘などの崩れて、和ならず漢ならず、天竺ならぬ鏡鈴をはじめ、古器古物の出たる例、数ふるに違あらず。
其の品々を蓄ふる人多かれど、彼ノ銅器を始め、然る物どもの中に、大国主ノ神の物なるが、彼ノ国避の後は世に廢れて、遂に土中に埋まり、或は彼ノ大神の御代なりし人の家に収めたる物などの、現はるべき運ありて、時に出るなり。』

これを読むと、平田篤胤も、銅鐸は出雲の大国主神のものというように考えていたようである。

このように、銅鐸を古代氏族と結び付けて考えている方々の説を見ると、いずれもその古代氏族は出雲系、即ち先住系というように見ておられます。

逆に、天孫系の古代氏族と銅鐸とを結び付けている説は、今まで私は見たことがありません。

- 【参考資料】
(*1) 田中巽「銅鐸関係資料集成」1986.3. 東海大学出版会 p.977
(*2) 谷川健一「青銅の神の足跡」1979.6. 第1刷 集英社
(*3) 平田篤胤「弘仁歴運記考」下之巻

QWD02544 どんたく

092/092 QWD02544 どんたく RE: 議題 5 出雲と銅鐸の関係(どんたく)
(18) 98/01/23 20:45 087へのコメント

かまくらさん、みなさん、こんにちは。 どんたくです。

#87:

>>議題 5に入らせていただきます。

>>今回は「出雲と銅鐸の関係」というテーマで、皆さまのお考えをおききした
>>いいと思います。

1995年の夏、私は出雲の神庭荒神谷遺跡を訪れ、さらに足を伸ばして加茂町の加茂神社や神原神社に参拝しました。

そのとき、加茂町を通りながら、「この辺りから銅鐸が1, 2個でも出てきたら面白いのになあ。」と思っておりました。

そうしたら、その翌年の秋、なんと本当に加茂町の加茂岩倉地点から銅鐸が出てきたではありませんか。

それも私の予想? に反して、39個もザックザックと! ギャギャギャツ

なぜ私が加茂町から銅鐸が出ると予想したか?

それは、大場磐雄先生が昭和24年に書かれた「銅鐸私考」という論文が頭にあったからです。(*1)

大場説については「どんたく説」シリーズ(#89,#90)の方に詳述しますが、「銅鐸はカモ・ミワ族と縁の深い土地から沢山出ている。」というのがその主旨で、「銅鐸私考」には、いずれは出雲からも銅鐸が出土することを期待しているような書き方がされています。

もし大場先生が生きておられたら、さぞかし大喜びされたことでしょう。

ただ、この加茂町という町名の由来は、弥生時代まで遡ることは無理なようです。

出雲国風土記に、意宇 杵 郡：賀茂の神戸というのが見えますが、これは和名抄の能義 丹 郡の賀茂・神戸であるとされ、現在の安来市に当たることとなりますから、現在の加茂町とは全く違う場所です。(*2)

それはともかくとして、出雲は先住系の一大中心地であったことは確かです。

私は、「銅鐸は先住系の祭器である。」というように考えておりますから、出雲から銅鐸が沢山出てきたことは、「我が意を得たり」という感じです。(特に、島根県出身である私としては、\^o^/ ハンザイ)

さらに欲を言えば、「将来出雲から銅鐸の鋳型が出てきたらいいのになあ。」と思っております。アマリヨカ!

【参考資料】

(*1) 大場磐雄「銅鐸私考」神道史学 1.1 昭和24年
(大場磐雄「考古学上から見た古氏族の研究」1975.9. 永井出版企画に再録)

(*2) 加藤義成「修訂 出雲国風土記参究」平成4年12月 改訂4版
松江 今井書店 p.122

QWD02544 どんたく

093/093 VZD07512 ラン 2
(18) 98/01/24 01:09

【唐古・鍵の楼閣は丸瓦葺? の巻】

【唐古・鍵の楼閣は丸瓦葺? の巻】

* * 奈良県田原本町唐古・鍵遺跡出土銅鐸鋳型。中段階(扁平鈕式) * *

唐古・鍵遺跡では1977年の調査で銅鐸鋳型の外枠が出土しています。これが出土したときの話です。

この鋳型を見つけたのは、当時某大学2回生のOさんです。Oさんは、とても優秀な学生で、直感的に銅鐸鋳型か? と思い、調査員に知らせて大騒ぎ!!

doutakusinpo1998

これをそばで見ている1回生のIさんは、「なんで弥生時代の遺跡から丸瓦がでるんやろ？」と不思議に思っていたそうです。図録などの写真で見ると、ラン2も迷わず丸瓦ですか？と聞くと思う。

このとき、ふたりの先輩のKさんは「ありがたや節」の替え歌「あつ、いがたや！節」をつくって歌ったそうです。

のちに唐古から楼閣の描かれた絵画土器が出ました。この楼閣の屋根は、一見瓦葺きのような感じに見えます。某大学では、「あの銅鐸鑄型は実は鑄型ではなく、楼閣に書いてあった丸瓦だったのだ！」というジョークがはやったそうです。

Oさん、Iさん、Kさん。
現在はみなさん各地で考古学研究者として活躍されています(^_^)

唐古の鑄型の話題は、最近、日本史館・【古代】古代の謎を解くの# 641からツリーがあましたね。# 650ではどんたくさんによる銅鐸鑄型の外枠について
のわかりやすい説明もありますので、ご参考までに・・・

次回のこぼれ話も、鑄型編を予定しています (^o^)

094/095 QWD02544 どんたく 「雷鳴」型と「電光」型
(18) 98/01/24 14:14 058へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

さて、今まで日本神話にまつわるお話を書いて参りましたが、ここで少し方向転換をしたいと思います。

この「どんたく説」シリーズの最初の方の、#62「雷は神様」の中で、『雷には「雷鳴」と「電光」の両方がある。』ということを申し上げました。

これを日本語と英語とについて表にしてみますと、次のようになります。

	雷鳴	電光	普通、雷を表現する時に使う言葉
日本語	カミナリ	イナヅマ	カミナリ (= 雷鳴)
英語	THUNDER	LIGHTNING	LIGHTNING (= 電光)

日本語の場合には、イナヅマという言葉もありますが、普通は「雷」というものを表現する時には、カミナリというように、「雷鳴」主体で表現しますよね。

一方、英語の場合には、THUNDER という言葉もありますが、普通は「雷」というものを表現する時には、LIGHTNING というように、「電光」主体で表現するように思います。

このように、同じ「雷」というものに対しても、日本人と英米人とは、呼び方・感じ方が違うようです。

そこで、

日本人は、「雷鳴」型。
英米人は、「電光」型。

というように分けて考えてみたいと思います。

もっとも、江戸時代には雷電為衛門という大層強い相撲取りがいたそうです。この人などは、「雷鳴」と「電光」の両方を重視していますので、これは「雷電」型と呼ぶことにしましょう。

一体、何故こんなことを言い出したか、それについては、次回の発言をお読み下さい。

QWD02544 どんたく

095/095 QWD02544 どんたく 銅鐸と銅利器
(18) 98/01/24 14:14 058へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

タイトルに書いた「銅利器」とは、銅剣・銅矛・銅戈などの武器型祭器を、ここでは指すもののご理解ください。

以前は、近畿方面を中心とした「銅鐸文化圏」と、それより西の九州方面を中心とした「銅剣・銅矛文化圏」があるという、和辻哲郎博士の説が盛んに言われていたようです。

その後、九州から銅鐸の鋳型が発見されたりして、この文化圏論も下火になった感がありました。

しかし、やはり近畿方面に銅鐸が多く、それより西の方面に銅剣・銅矛が多く出土しているというのは、厳然たる事実でありました。

ところが、10年余り前に、出雲の神庭荒神谷遺跡から大量の銅剣が出土し、さらにその翌年には、すぐ傍から銅鐸と銅矛が出土して大騒ぎとなりました。

また一昨年には、神庭荒神谷遺跡からさほど離れていない加茂岩倉遺跡から、大量の銅鐸が出土しました。しかもこの銅鐸には、神庭荒神谷の銅剣と同じようなX印がついたものが幾つかあり、両遺跡の間には何らかの関係がありそうな感じです。

「銅剣と銅鐸が同じ出雲から大量に出てきたのは、どういうわけか？」と皆が首をひねることになったわけです。

しかし、「どんたく説」を唱えている私としましては、神庭荒神谷以降、一人密かにナルホド・ナルホドと、ほくそえんでおりました。(^^)

といいますのは、「どんたく説」では「銅鐸は雷神信仰の祭器である。」と唱えておりますが、さらに言えば、次のようなことを考えております。

雷神信仰には、「雷鳴」型と「電光」型の二通りがある。
近畿方面：「雷鳴」型 ゴロゴロなるカミナリを模した銅鐸を祀る (*1)
九州方面：「電光」型 ピカピカ光るイナヅマを模した銅利器を祀る (*2)

さらに、この二つの型の複合型として、
神戸の桜ヶ丘では、銅鐸と銅戈が一緒に出土。
長野県の小野神社では、1本の矛に数個の鉄鐸をつけている。
などの例があることからして、
「雷電」型 ゴロゴロ・ピカピカの両方を祀る
というものもある。

それですから、神庭荒神谷・加茂岩倉での発見を見て、
『ナルホド。「雷電」型にも、ずいぶん強力なものが、あったのだなあ。』
というのが、私の感想でありました。

【参考】

(*1) 銅鐸と雷の関係については、#15「ベルの起源」で述べた、
「ベルというものの誕生を、雷と結び付けて考える。」
という、Nathaniel Spear Jr. 氏の説も、考慮に入れている。

(*2) 神庭荒神谷出土の銅矛に見られる「研ぎ分け」は、銅鐸の綾杉文や、
ナバホ・インディアンの SANDPAINTINGS に見られる文様
(#62「雷は神様」参照)にも似ている。
これは、イナヅマを表現しているのかも知れない。

QWD02544 どんたく

096/096 QWD02544 どんたく 金ピカの銅鐸
(18) 98/01/24 21:24 058へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

さて、今まで、銅鐸 - 雷 - 雷神信仰 - 先住民系 といったことについて、述べて参りました。

最後に、銅鐸の埋納について、触れてみたいと思います。

#53「銅鐸埋納の儀式」に、私は次のようなことを書きました。

銅鐸の埋め方には、一種の「作法」があったように感じられる。

銅鐸の埋納は、単に隠匿とか、保管とかということではなく、「銅鐸を埋める」ということ自体が、恐らく毎年定例的に行なわれる、一つの儀式だったのではなからうか？

この儀式は、カミナリの神様を祀るための神事であり、カミナリの神様の怒りを鎮め、雨を降らせて貰って農作物の豊穡を祈るためのものであった、と考える。

これに関連して一つ気になることがあります。

佐原氏と春成氏の、加茂岩倉銅鐸に関する次のような対話があります。（*1）

春成
よその遺跡から出土したIII-2 式の銅鐸も同様だから、この形式の銅鐸は作ったあと、ほんの少し鳴らしたか、鳴らさないかのうちに地中に埋めてしまったのではないですかね。
.

佐原 いや、待った。そんなことは簡単に言えへん。III-2 式は鶴の一声でちょっと鳴らしただけかもしれない。しかし、そのまま二世紀、三世紀まで埋めたり出したりしながら使いつづけたかもしれない。銅鐸地中保管説の私だったらそう解釈する。

春成 だけど、大阪の跡部銅鐸はどう考えます？
あれはIII-1 式で1989年に発掘したときは、まだ金ピカだった。作ってすぐ埋めたから現在まで金色のままだったんでしょう。埋めたり出したりだったら光沢を失って錆びているはずですよ。

佐原 痛いところを突いてくる。

もし春成氏のいわれる通り、「作ってすぐ埋めたから現在まで金色のままだった。」ということであれば、前述の銅鐸埋納に関する「どんたく説」は成り立たない場合が出てくることになります。

しかし私は、銅鐸が金ピカで出土したのは、「作ってすぐ埋めたから」ということではなく、次のような状況があった可能性があるのではないかと考えます。

銅鐸が土中で一種の電池作用を受けていた。
（イオン化傾向の異なる二つの物質があれば、電池作用は、多かれ少なかれ、発生する。）

そのために、銅鐸の表面が活性化された状態になり、銅鐸の地がむき出しになった状況となっていた。

そのために、銅鐸表面が金ピカになった。

銅鐸を土中から取り出して空気中にさらすと、銅鐸表面は活性化しているため、急速に酸化が進行して、光沢を失うだろう。
（跡部で本当にこういうことがあったかどうか、私は知りませんが・・・）

銅鐸が非常に乾燥した砂の中にある場合には、このような現象は起こりにくいでしょうが、銅鐸が粘土質の土に包まれ、水気が多い状態のときには、このようなことが起きる可能性がありうると思われれます。

実際の銅鐸の埋納状況がどのようなものであったかも全く知らずに、このようなことを言うのは、甚だ不遜ではありますが、もし私の想像が当たっているならば、色褪せた銅鐸をもう一度土の中に戻してやって、前と同じ状況に置き、1年後に再度掘り出してみると、またもや金ピカの銅鐸が出土することになります。（^_^）

doutakusinpo1998

このような可能性の有無等についても科学的に十分調査・検討した上で、「作ってすぐ埋めたから、現在まで金色のままだった。」というのであれば、この春成氏の発言は非常に重みをもったものとなりましょう。

逆に、もしそうでないとしたら、この発言は、色褪せたものになってしまうのではないのでしょうか？

【参考資料】

(*1) 佐原真・春成秀爾「出雲の銅鐸」1997.10. NHK Books [802] p.184

QWD02544 どんたく

097/097 YIG00127 かまくら 一般参加後の予定
(18) 98/01/24 23:13

皆さま、こんにちは。(^ ^)

いよいよ【シンポジウム】銅鐸を考える も1/26より一般参加開始となります。ヽ(^。^)/
1/25まではこれまで通りA・Bコースにわかれてシンポジウムをすすめてまいります。Bコースでは(司会者宛にメールで質問を出していただき、それを司会者がプールし、一般参加開始後ご紹介させていただく形をとっております)既にいくつか質問をいただいております、1/26のうちにはご紹介して、会議室終了の2/25まで皆さまと考えていきたいと思えます。

もう少しお待ちくださいませ。m(__)m

司会者 / かまくら

098/099 QWD02544 どんたく 天地和合
(18) 98/01/25 10:55 058へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

今までの話の展開の中で、

天神系 = 天つ神系 = 天孫系 (= 支配者)
地祇系 = 国つ神系 = 先住系 (= 被支配者)

の対立と、統合といった問題に触れてきました。

しかし、記・紀などを読む限り、この統合は比較的穏やかに、無駄な摩擦は避ける形で、行なわれたように感じられます。

記・紀神話において、イザナキとイザナミが夫婦とされ、アマテラスとスサノヲが姉弟とされています。
また、支配者側が被支配者側の女を娶るなど、いろいろな面において、「天地和合」を基本原理とする配慮が感じられるのです。

この点が、アメリカ大陸における白人と原住民との間の関係とは、大いに違っているように思われます。

まことに蛇足ながら、いらざる誤解が生じるのを避けるために、敢えて一言このことを付け加えさせて戴きます。

QWD02544 どんたく

099/099 QWD02544 どんたく 「どんたく説」エピローグ
(18) 98/01/25 10:55 058へのコメント

D20 「どんたく説」エピローグ

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

これもちまして、「どんたく説」シリーズは一応幕を閉じることと
ページ(65)

いたします。

「どんたく説」は、考古学上の遺物である銅鐸を神話と結びつけるという、いわば「邪道」の説であります。

このことが、今まで誰にも相手にして貰えなかった一番大きな理由でありましょう。

しかし、「雷の分布と銅鐸の分布の相関」という点に着目してスタートした私としましては、自然の成り行きとしてこの「邪道」に足を踏み入れて行ったのであります。

このような「珍説」を読まされることは、皆様にとって、大変迷惑至極だったかもしれませんが、私にとりましては、このような発表の機会を与えられたことを大変感謝しております。

以上、ながながと書いてまいりましたが、「どんたく説」を要約すると次のようなことになりましょう。

- (1) 銅鐸の出土分布と雷の発生分布との間には、ある程度の相関関係が見られる場合がある。
- (2) 古代氏族は、天孫系と先住系の二つに分けられる。
- (3) 銅鐸と古代氏族とが関係があるという諸説を見ると、その古代氏族は何れも先住系である。
- (4) 古来、先住系の場合には、雷神を祀る習俗があったものと見られる。
- (5) 銅鐸の埋め方には、一種の「作法」があったように感じられる。これからみて、銅鐸を埋めること自体が、一種の儀式としてあったように思われる。

以上のようなことから、私は、「銅鐸は、先住系の人たちによる、雷神信仰の祭器であった。」というように考えるわけです。

ゴロゴロと鳴り響く雷(=神鳴り)を、神の怒りの声として恐れ、この神の怒りをなだめ鎮めるために、銅鐸を土中に埋める儀式を行なった。そうして、雷神から雨の恵みを受けて、農作物の豊穰を祈った。

こんな風に考えるわけです。

まあ、この「どんたく説」は単なる一つの仮説にしか過ぎません。皆さんも読んでいて「おかしいなあ」と首をかしげることも多々あったことかと思えます。

しかし、この仮説をもとにして、以上述べてきたような色々な事柄を一応は説明できるように思えます。

これとは全く違う、誰もが納得できるような仮説をたて、それに基づいて色々な事柄をもっとうまく説明できる方法があるのか、ないのか。

もしそういうものがあるならば、是非とも教えて戴きたいと思っています。

他のパネリストの方々とのバランスもわきまえず、勝手に書き連ねたこと、お許し下さい。

手前勝手な「どんたく説」シリーズをご愛読戴き、まことに有り難うございました。m(_ _)m

QWD02544 どんたく

100/106 KFA03002 kikkawa RE^3: 日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)
(18) 98/01/25 23:42 088へのコメント

奈良国立文化財研究所なら所蔵されているにちがいないと、知人をお願いしたところ残念ながら所蔵されていませんでした。ラン2さん、調べていただいて有り難うございます。奈文研にも無いようだと、極めてサーキュレーションが悪い資料と言えそうですね。

文部省に提出されたものは、すべて国立国会図書館へいきます。
それはちょっと大変。(^^; 戸津教授自身が、他の本に概要を書いていたりしない
ですかねえ？

101/106 VZD07512 ラン 2 RE:描かれた銅鐸(^ ^)
(18) 98/01/26 00:00 061へのコメント

みなさん こんにちは。ラン 2 です (^o^)/
すみません。訂正です。

>>島根県西伯郡淀江町角田遺跡では大形の壺の表面をぐるっと1周して線刻
>>画が描かれています。

島根県ではなくて、鳥取県でした(^;;

耳順爺さんよりご指摘いただきました。
ありがとうございます m(_ _)m ラン 2

102/106 YIG00127 かまくら 一般参加開始、(^.^)ノ
(18) 98/01/26 06:46

皆さま、こんにちは。(^ ^)

1 / 2 6 より A・B コースでのシンポジウム進行は解除になり、一般参加
が開始になりました。今までROMされていた方、大変お待たせいたしました
た。これからは思いっきり議論に参加なされて下さい。 \ (^o^)/

B コースで司会者宛に届いた質問メールは後程UPいたしますので、これ
までの議題 1 ~ 5、企画と同様お話が盛り上がっていくよう、皆さまのご協
力をお願いいたします。m(_ _)m

* 尚、質問の内容が、これまでの発言と重複する個所があるので、質問自
体を誰宛とはせず、もう一度確認しつつ広く皆さまのお考えをおききたい
と思います。

司会者 / かまくら

103/106 YIG00127 かまくら 質問 1 銅鐸王国について
(18) 98/01/26 07:10 コメント数：1

皆さま、こんにちは。(^ ^)

B コースで司会者宛に届き、プールさせていただいた質問をご紹介させて
いただきます。パネリスト&一般参加の皆さまそれぞれのご意見をおきかせ
下さい。質問者は弥生さんです。以下の文章が御質問の内容になります。

> 疑問点...邪馬台国の所在地を巡って様々な仮説がありますが、有力候補
> 地の九州説と近畿説のどちらにしても、お互いに「ではその時代にもう一
> 方の候補地はどうだったのか」ということを深く追及した形跡が、あまり
> ないのは何故でしょう。(「邪馬台国東遷説」と云う苦し紛れの仮説にし
> ても同じことです。)
> 不満点...つまり、上の疑問を解消するに足る仮説がないこと、そして、
> 奈良県で遺跡が発掘されると、「スワ邪馬台国」と勇み立つ説はあっても、
> 銅鐸国に結び付ける仮説が出て来ないことです。既に「青銅器文化圏」が、
> ほぼ東西に別れて二種類あると発表され定説となってから随分時間が経っ
> ているように思いますのに、この二つの文化圏について、その中心王朝、
> または取巻く国々の説明が曖昧にされている様に思われます。
> (但し、この二大文化圏説も最近疑問視されているとかですが...。)
> 「邪馬台国と銅鐸との関係は見られない」これも定説だと思いますが、
> それならば、邪馬台国の比定地以外に銅鐸の国があったと理解して良いよう
> に思われます。また、古事記・日本書紀などは銅鐸を知らない(或いは故
> 意に無視する姿勢)らしいので、銅鐸は「普通に云う大和王朝」とも無関
> 係だと考えても良いかと思われます。考古学の専門家は、銅鐸が弥生文化
> 時代のものと断言なさいました。銅鐸は今も厳然と存在し、しかも日本製
> と考えられながら、邪馬台国にも「ヤマト王権」にも結び付けられずに、
> 歴史上無視されているかのようです。銅鐸が、邪馬台国にもヤマト王権に
ページ(67)

doutakusinpo1998

> もその他にも、神話にすら記録が無いのなら、それ以外の「何か」と関係
> があったと考えるしかない様に思います。弥生時代といわれる約 5～600年
> 間に、日本の国土の中にその「何か」があった筈ではないでしょうか。
> 銅鐸と云う物体に迫る時には、是非「銅鐸国＝銅鐸文化圏内の盟主国」
> についての、説得力を伴った新たな仮説の発表をして戴きたいと思ってい
> ます。私の考えではそのことに触れずに終わる筈は無いと思うのですが...。
> 銅鐸の謎に迫る時、この物体の背景にあったかも知れない、海外先進国に
> 目を向けると同時に、当時の日本列島内の国家の在り方...支配者、政治・
> 経済の実態、民衆の日常生活等々について、先入観を取払って見つめ考え
> 直す努力（文献の読み直しと、基本的な考え方）をしないと、何時まで待
> っても新しい展開はないのではないかと心配になるのです。敢えて云うな
> ら、歴代の天皇の存在にも、もっと懐疑のまなざしを向ける必要があると
> 思っています。 <弥生>

皆さまの積極的なご意見お待ちしております。(^.^)

司会者 / かまくら

104/106 YIG00127 かまくら 質問 2 カモ・ミワの地名と銅鐸の関係
(18) 98/01/26 07:25

皆さま、こんにちは。(^^)
司会者がプールのしております御質問のご紹介をさせていただきます。
質問者は勘太郎さんです。地名から銅鐸をいま一度検討しなおしてみたいと思
います。以下が勘太郎さんからの御質問の内容です。

> 出土地名：カモやミワに関係のある所から銅鐸が出ている例が沢山ある、と
> のことでしたがこれら地名についての考察があればお聞かせ願えないでしょうか

皆さまは、どうお考えでしょうか？ ご意見お待ちしております。

司会者 / かまくら

105/106 YIG00127 かまくら 質問 3 出雲に集まる神様と銅鐸祭祀
(18) 98/01/26 07:36

皆さま、こんにちは。(^^)
Bコースで司会者宛に届いておりましたご質問を紹介させていただきます。
質問者は質問 2 に続きまして 勘太郎 さんです。

> 加茂岩倉遺跡で大量の銅鐸が出土した、ということは出雲が銅鐸祭祀の一大メ
> ッカであったことを示唆していると思います。これは出雲に集まる神様達の会議
> 場を彷彿とさせます。西日本一円から首長達がはるばる銅鐸を担いで集まったと
> いう連想を持たせます。銅鐸はその表面の絵画から農耕民の祭りに使用された
> と思われる。いっぽう、大阪の天神祭りなど船渡御祭祀は海洋民に関係が深そう
> です。神武東征神話が海洋民が農耕民を征服したことを象徴しているとするなら
> ば、船渡御神と出雲集合神は重複しないと思うのですが、どなたか調べられてい
> るのでしょうか？

皆さまはどのようにお考えですか？ ご意見等ドシドシお寄せ下さい。

司会者 / かまくら

107/107 CXN00172 大三元 Re:質問 1 銅鐸王国について
(18) 98/01/26 21:25 103へのコメント

銅鐸に関しては殆ど調べた事がないので今回のシンポジウムはとても参考にな
りました。拝読しながら、特に、どんたくさんの#027で、ヒトツものを覚えた
気がしました。と申しますのは、要するに前3世紀から後3世紀まで、という
時代感です。(1000年位の差異は有り得るそうですが、)

前3世紀と言うと、雑駁に言って弥生時代の始まり、後3世紀と言うと卑弥呼が
死にイヨ(トヨ?)に引き継いで、邪馬台国のその後が見えなくなる頃ですね。

doutakusinpo1998

単純に考えると、邪馬台国 = 弥生 = 銅鐸、なら前3世紀に始まり後3世紀に終わるって事に大きな矛盾が無いのかな、なんて思っていますが、そうすると、弥生文化と古墳文化（天皇家の歴史？）は連続するものではなくって、勢力の交替が示唆されるのでしょうか。と言うわけで、

弥生さんの提示されたこの(#103)疑問、設問に共感を覚えております。

邪馬台国が見えなくなる頃に銅鐸もなくなるんなら、一旦、両者をつなげて考えてみねばならないんじゃないのか。

そうじゃないんなら、縄文でも弥生でもない第3の文化、銅鐸文化、とその持ち主の存在が仮定されねばならないんでしょうねえ。

***Homepage: <http://www.alpha-net.or.jp/users/gens/>

108/112 YIG00127 かまくら 質問4 何故聞くから見る銅鐸になったのか
(18) 98/01/26 21:38

皆さま、こんにちは。(^ ^)
質問の4をご紹介します。質問者は勘太郎さんです。

- > 何故聞く銅鐸から見る銅鐸に変わったか？
- > 野洲町立銅鐸博物館には銅鐸のレプリカがあり中に舌をぶら下げて音を聞かせ
- > てくれました。正直言ってあまり綺麗な音色ではありません。大銅鐸化は同時に音
- > 色の悪化を伴い鳴らさなくなったのでは？

音色の悪化と銅鐸が聞くから見るに変わったことの関係について、皆さまのお考えをおきかせください。また、それに関わるご意見などもお寄せ下さい。

司会者 / かまくら

109/112 YIG00127 かまくら 質問5 鳴神 = 銅鐸？雷？
(18) 98/01/26 21:39

皆さま、こんにちは。(^ ^)
質問5のご紹介に入らせていただきます。質問者は勘太郎さんです。

- > 和歌山市に鳴滝(なるたき)、鳴神(なるかみ)という地名があります。もし
- > かしたら鳴神は銅鐸のことではないでしょうか？

鳴神という地名と銅鐸について、皆さまはどうお考えになられるのでしょうか？
つながりがあるような気にさせる地名ですね。ご意見・ご情報 お待ちいたします。

司会者 / かまくら

110/112 KFA03002 kikkawa RE:質問1 銅鐸王国について
(18) 98/01/26 22:14 103へのコメント

司会のかまくらさんが紹介されたメールについてコメントします。
「邪馬台国と銅鐸との関係は見られない」これも定説だと思いますが、それならば、邪馬台国の比定地以外に銅鐸の国があったと理解して良いように思われます。
この意味が良く判らないのですが、「銅鐸」と「邪馬台国」の両者に、時代的なずれがあれば問題ないのでは？

#56で紹介したように、鉛同位体比のデータから、“銅鐸と、古墳時代に作られた銅鏡の鉛同位体比が、全くオーバーラップしないことは、銅鐸の製造年代の下限を考える上で、大きな制約条件と成ります。”と述べました。
また、纏向石塚古墳の年輪年代や土器型式とか、魏呉の記年鏡は古墳時代の遺跡のみからしか出土しないなど、旧来の鏡の伝世論を疑問視し、卑弥呼の時代は古墳時代とする見解が有力に成りつつあります。

利用されなくなっていたので、記録に残っていないのではと考えます。では、そのような例として、ヒスイ文化を挙げます。

寺村光晴(1995)『日本の翡翠』(吉川弘文館)によると、宝石品質のヒスイとしては、東アジアにおいては日本の特産で、糸魚川付近で工房遺跡が幾つも発見され、縄文時代前期からヒスイ大珠として用いられています。縄文時代晩期になると、加工が
ページ(69)

進んだヒスイ勾玉が登場します。

古墳時代に入ってもせつせつと作られ続けます。『三国志』で、台与からの貢献品の中の「青大句珠」は、ヒスイ勾玉を指すと考える説も有ります。倭国の勢力が及んだ朝鮮半島南部の、新羅・百濟・任那の旧領でも、ヒスイ勾玉が大量に出土します。

ところが、次第にヒスイの利用は減っている、天平20(748)年頃に作られた東大寺三月堂の不空羼索観音立像が、確認されている最後の使用例です。

では、日本でのヒスイを指していると思われる文献と言えば、『釈日本紀』引用の、“越後国風土記曰、八坂丹玉名、謂玉色青、故云青八坂丹玉也。”位のもので、その後完全に忘れ去られ、昭和16(1941)年に東北大の河野義礼さんが再発見するまで、ヒスイが産出していたことは忘れ去られています。

現にこのような例がありますから、「銅鐸」と「邪馬台国」には時代的なギャップがあり、銅鐸は邪馬台国の場所の制約条件には成らないと考えます。

銅鐸と云う物体に迫る時には、是非「銅鐸国 = 銅鐸文化圏内の盟主国」についての、説得力を伴った新たな仮説の発表をして戴きたいと思っています。

についてですが、#46で、“銅鐸の用途を理解する面で重要なのは、言うまでもなく、墓や住居から見つからず、人里離れたような場所で見つかるのが多いことですね。この事から、銅鐸が個人的な所有物とする見方は強く否定されると考えられます。”と述べたように、個人の権威・権力の象徴ではなく、集団の祭祀的な帰属意識を示す程度のもものでは？と想像しています。

小林三郎教授の“古墳出現までは、方形周溝墓であったり土[土広]墓と呼ばれる遺骸の土中直葬であったりして、それらが群集して墓域を形成するのが、ごく一般的な墓制の姿である。ところが、古墳は、一人のために壮大な墳丘を盛り上げて造り、遺骸に添えて種々の副葬品が納められるのが通有である。それまでの群集として墓域を形成する墓制が排除されてしまった。”との記述のように、巨大古墳の時代とは権力構造が著しく異なり、弥生時代の銅鐸文化圏に盟主国というものが存在したのか、いささか疑問に思っています。

あいにく、弥生さんの考えとは異なってしまいましたが、私の見解は以上です。

111/112 KFA03002 kikkawa 銅鐸文化から巨大墳墓への体制の移行
(18) 98/01/26 22:14 105へのコメント

本当はこの記事への直接のコメントではなく、同じ勘太郎さんの日本史館2番#825の“特にKikkawaさんの(多分)銅鐸から前方後円墳への(断絶のない)祭祀の移行説には仰天させられました。”に対するものですが、関連もあるのでぶら下げました。

勘太郎さんが仰られたものとは、少しニュアンスは違うのですが、祭祀体制の変化が即支配・被支配関係を示すものではないと見るのはその通りです。

#69に、近畿や東海よりも早く銅鐸文化から離脱したと見られる、吉備や出雲について、都出比呂志教授の記述として、“ところが、瀬戸内北岸の吉備と出雲ではこの時期になると青銅祭器は顕著ではありません。この地域では、この時期、青銅祭器の祭りに代わって大きな墳丘墓築造が盛んになります。”と紹介しました。

出雲を中心に北陸にも分布する四隅突出型墳丘墓は、島根県教育委員会編(1997)『古代出雲文化展 図録』によると、最古期(1A期)には中国山間部に築造され、広島県三次市の宗祐池西1号墳が代表例としており、編年表によると、その後山陰(1B期)に更には北陸(2期)に広がったとしています。

一方、吉備の榑突遺跡と言う弥生時代最大の墳墓の形態や、特殊器台は他の地域に先行するものは見られず、独自と考えられています。

他の地域からの支配であれば、権威・権力を示す祭祀は、先行する地域があつて良さそうに思います。ですので、権力の移動があつたとしても精々はコップの中の争いで、他の地域からの支配とは考えがたいように思います。

祭祀が大きく変わった時期と言えば、6世紀末~7世紀初めに掛けて、倭国の領域で揃って前方後円墳と埴輪という従来の体制が終了します。一斉であることから、全域を把握する権力者による命令であると想像されます。この現象は『日本書紀』や『隋書』などに見られるような、仏教への体制の移行によると考えられ、征服・被征服とは考えられていませんね。

このような例がありますので、新たな強大な権力を伴う祭祀が、別の地域に発するものでなければ、支配・被支配とは言い難いように思います。

さて、勘太郎さんが言われる前方後円墳体制ですが、前方後円墳については纏向石塚古墳が最古級と考えられています。一方、吉備の特殊器台の受け継いで埴輪へと繋
ページ(70)

doutakusinp01998

がっており、吉備の影響も相当大きいのではないかと思います。

銅鐸の鉛同位体比に、後漢中期以降の漢式鏡に相当する組成は見られず、畿内における銅鐸と前方後円墳の時代については、ある程度の時間のギャップがあると想像しています。

112/112 RXE12761 六爾 RE:質問3 出雲に集まる神様と銅鐸祭祀
(18) 98/01/26 23:55 105へのコメント

nifty:FREKIMT/MES/18/105 へのコメントです。
かまくら さん 勘太郎さん、こんにちは。

>
>> 加茂岩倉遺跡で大量の銅鐸が出土した、ということは出雲が銅鐸祭祀の一大メ
>> ッカであったことを示唆していると思います。これは出雲に集まる神様達の会議
>> 場を彷彿とさせます。西日本一円から首長達がはるばる銅鐸を担いで集まったと
>> という連想を持たせます。銅鐸はその表面の絵画から農耕民の祭りに使用されたと
>> 思われます。

この辺については、多くの考古学者の意見が一致しています。ただ、四区・六
区の袈裟懸禪紋の銅鐸について水田区画としての連想からの確な銅鐸絵画の解
釈を試みておられるのは、わが藤森栄一先生以外にはおられません。

いっぽう、大阪の天神祭りなど船渡御祭祀は海洋民に関係が深そう
>> です。神武東征神話が海洋民が農耕民を征服したことを象徴しているとするなら
>> ば、船渡御神と出雲集命神は重複しないと思うのですが、どなたか調べられてい
>> るでしょうか？

加茂岩倉の大量出土というのはいわゆる、銅鐸の最終的な姿であるわけで、最
終にたどり着くまでには原型があると思います。
銅鐸の原型が朝鮮式小銅鐸にある、という仮説が成り立つのであれば、私が研
究している諏訪大社の鉄鐸（さなぎ）も銅鐸ファミリーの一員でしょう。
考古学では実証性を重んじるあまりに、考古学者としてこの辺の事情について
突っ込んだ意見の交換はあまりなされていなかったと思います。
しかし、私のアップした研究史でも触れていますが、現在の銅鐸研究の主役は
われわれ一般大衆であると考えれば、当フォーラムの意義も大いに認めら
れるのです。

> 皆さまはどのようにお考えですか？ ご意見等ドシドシお寄せ下さい。

>
>
>

司会者 / かまくら

六爾 EmNifty 2.03

113/114 RXE12761 六爾 RE:質問1 銅鐸王国について
(18) 98/01/26 23:55 103へのコメント

nifty:FREKIMT/MES/18/103 へのコメントです。
かまくら さん、弥生さんこんにちは。(^^)
いちおう、パネラーの端くれの六爾です。m(_ _)m

>
>> 疑問点... 邪馬台国の所在地を巡って様々な仮説がありますが、有力候補
>> 地の九州説と近畿説のどちらにしても、お互いに「ではその時代にもう一
>> 方の候補地はどうだったのか」ということを深く追及した形跡が、あまり
>> ないのは何故でしょう。（「邪馬台国東遷説」と云う苦し紛れの仮説にし
>> ても同じことです。）

これは、同感です。(^^)

>> 不満点... つまり、上の疑問を解消するに足る仮説がないこと、そして、
>> 奈良県で遺跡が発掘されると、「スウ邪馬台国」と勇み立つ説はあっても、
>> 銅鐸国に結び付ける仮説が出て来ないことです。既に「青銅器文化圏」が、
>> ほぼ東西に別れて二種類あると発表され定説となってから随分時間が経っ
>> ているように思いますのに、この二つの文化圏について、その中心王朝、
ページ(71)

>> または取巻く国々の説明が曖昧にされている様に思われます。
>> (但し、この二大文化圏説も最近疑問視されているとかですが...)

そうですね。二大文化圏説はもともと古代史および哲学者の方から出されているので、抽象的な概念もありますが、仮説としては多くの人々の賛成を取り付けたのです。しかし、従来は銅鐸文化圏ではないといわれた九州などでも発見が相次ぎ、この仮説は全く崩壊していると考えた方が妥当と思われます。

>> 「邪馬台国と銅鐸との関係は見られない」これも定説だと思いますが、
>> それならば、邪馬台国の比定地以外に銅鐸の国があったと理解して良いよう
>> に思われます。また、古事記・日本書紀などは銅鐸を知らない(或いは故
>> 意に無視する姿勢)らしいので、銅鐸は「普通に云う大和王朝」とも無関
>> 係だと考えても良いかと思われます。考古学の専門家は、銅鐸が弥生文化
>> 時代のものと断言なさいました。

これが、定説となったのは戦後のことです。戦前は梅原マツチ先生の古墳時代にまで続いたとする説の方が有力であった。しかし、小林ライター先生によって粉碎されたのです。ただ、杉原荘介先生のように弥生の後半とする説もありました。小林先生の弥生の開始と同時にあった。とする説が現在も続いているのです。

>> 銅鐸は今も厳然と存在し、しかも日本製
>> と考えられながら、邪馬台国にも「ヤマト王権」にも結び付けられずに、
>> 歴史上無視されているかのようです。銅鐸が、邪馬台国にもヤマト王権に
>> もその他にも、神話にすら記録が無いのなら、それ以外の「何か」と関係
>> があったと考えるしかない様に思います。弥生時代といわれる約 5~600年
>> 間に、日本の国土の中にその「何か」があった筈ではないでしょうか。
>> 銅鐸と云う物体に迫る時には、是非「銅鐸国 = 銅鐸文化圏内の盟主国」
>> についての、説得力を伴った新たな仮説の発表をして戴きたいと思ってい
>> ます。

これについては、現在百花繚乱ともいえるべき説がでています。ただ、どの説もあまり受け入れられていないのが現状です。そうした中で、藤森先生の『銅鐸』は今に至るまでにもっとも読まれた本ではないでしょうか。私が、今回このシンポジウムに参加したのも、この藤森銅鐸説をもう一度検討してみたかったからなのです。藤森先生は魅力的な銅鐸の解釈をこの本の中で述べられました。一部の好意的な学者をのぞいては、その学説は学界から黙殺されました。(- ;)
しかし、諏訪地方という地域をモデルとして銅鐸およびその亜流である鉄鐸を考えることは、ある意味では銅鐸の性格を考えることになると思えます。
!(^^)!

>> 私の考えではそのことに触れずに終わる筈は無いと思うのですが...
>> 銅鐸の謎に迫る時、この物体の背景にあったかも知れない、海外先進国に
>> 目を向けると同時に、当時の日本列島内の国家の在り方...支配者、政治・
>> 経済の実態、民衆の日常生活等々について、先入観を取払って見つめ考え
>> 直す努力(文献の読み直しと、基本的な考え方)をしないと、何時まで待
>> っても新しい展開はないのではないかと心配になるのです。敢えて云うな
>> ら、歴代の天皇の存在にも、もっと懐疑のまなざしを向ける必要があると
>> 思っています。 < 弥生 >

もちろん、その通りです。かつて、
「日本には天皇がいっぱいいた、大和の天皇も諏訪の大祝天皇も同格だった、ただ力の強かった大和の天皇が勝ただけだ。」という言葉のをこした伊藤富雄先生(古代史研究家、藤森栄一先生の先生)の言葉をもう一度かみしめてみる必要があるのです。したがって、天皇陵の発掘こそ、必要なのではないのでしょうか。(森先生ガンバって(^^)/~) 箸墓古墳などにはたぶん多数の鏡が副葬されていることでしょう。基本的にはこのように一番核となる重要な部分が菊のカーテンに閉ざされているようでは、考古学的方法を用いた邪馬台国論争も価値が下がってしまうのです。

以上、とりとめもありませんが、レスさせていただきました。弥生さんいかがでしょうか。(o-o)

それでは、六爾でした。(^^)/~~~

doutakusinpo1998

114/114 RXE12761 六爾 RE:議題 銅鐸は鉄鐸になって今もあります。
(18) 98/01/26 23:56 065へのコメント

nifty:FREKIMT/MES/18/65 へのコメントです。
かまくら さん、こんにちは。

銅鐸、の元祖が朝鮮式小銅鐸であるならばという仮説に基づけば、今でも銅鐸は生きています。

今年は、長野県の諏訪大社の御柱の年です。
この、御柱をはじめとして独特の文化圏を形成していた信濃地方においては、「さなぎの鈴」とよばれる高さ10センチほどの鉄の鐸を6本づつ木に結びつけ、神様を地上にお迎えする儀式に使っていました。これが、銅鐸の亜流である鉄鐸です。

戦国時代にも武田氏と諏訪氏が争ったときに、最後に鉄鐸を鳴らして誓いとしたことが文献にもでてくるのです。

したがって、私は銅鐸は使われなくなったのではなく、一部鉄鐸になって生き残った地域もあったとする説を提唱いたします。

パネラー/六爾
この説は藤森栄一先生の説です。

115/116 VZD07512 ラン2 青銅器文化圏について 1
(18) 98/01/27 01:52 103へのコメント コメント数:1

みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/
弥生さんの疑問への答えとはなりません、ちょっと問題を整理するために、青銅器文化圏についてコメントさせていただきます。

>>銅鐸国に結び付ける仮説が出て来ないことです。既に「青銅器文化圏」が、>>ほぼ東西に別れて二種類あると発表され定説となってから随分時間が経っているように思いますのに、この二つの文化圏について、その中心王朝、>>または取巻く国々の説明が曖昧にされている様に思われます。
>>(但し、この二大文化圏説も最近疑問視されているとかですが...。)

この青銅器文化圏についてですが、たしかに哲学者・和辻哲郎による銅矛・銅剣文化圏と、銅鐸文化圏の二つの対峙する祭祀・勢力圏を想定した分布図というものが長く教科書にも使われていましたね。
ラン2もそう習いました(^_^;;

しかしその後、和辻の説は、原田大六により再編成されました。
何がどう違うのかというと、和辻の考えによる銅矛・銅剣文化圏には、まつりの道具としての銅矛・銅剣と、人殺しの道具(日常品)としての銅矛・銅剣とが、一緒にされていました。
原田は人殺しの道具(日常品)としての銅矛・銅剣を除き、純粹にまつりの道具としての銅矛・銅剣を取り出した上で、3つの分布圏に分けたのです。
西が広形銅矛・広形銅戈、東が銅鐸、その2つが交錯する間に平形銅剣がそうです。

現在では原田の方法論が発展した形で、佐原真、近藤喬一らによって論じられています。それによると、もっと細かく、そして時代ごとの変化に重点が置かれているように思います。

【参考文献】
寺澤薫「弥生時代の青銅器とそのマツリ」『考古学その見方と解釈 上』
所収 筑摩書房 1991
*この『考古学その見方と解釈』という本は、時代を追った小テーマで分かれており、最新の研究成果を取り入れていて、とてもよくまとまっています。
大学のテキストとしても使われており、考古学を勉強するにはおすすです。

116/116 VZD07512 ラン2 RE:青銅器文化圏について 2
(18) 98/01/27 02:02 115へのコメント

みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/
補足です。

『古代出雲文化展』の図録を持ってらっしゃる方は、P59を開いてみてください。

ちょうど青銅器分布図が3つの時代に分けられて載っています。
弥生I・II期では、2つの円がきれいに交わって、東が銅鐸、西が銅矛・銅剣・銅戈です。
弥生III・IV期では、中国、四国で数種類の青銅器が使用されています。
弥生V期では、日本海沿岸地域、瀬戸内海沿岸地域では青銅器がぼっかりと空白になってしまいます。

問題はそのぼっかり空いたところはどうなったのかです。
P70を開いてください。

山陰では四隅突出墓が現れその墓上で祭祀を行い、吉備では特殊器台・特殊壺と呼ばれるものが現れそれで墳墓祭祀を行うという青銅器祭祀に変わる新しい祭祀が始まるのです。

『古代出雲文化展』の図録を持っておられない方、ごめんなさい m(_ _)m

最近の歴史関係の図録は、展示品の写真と簡単な紹介だけではなく、けっこう読ませるモノが増えてきているように感じます。
この『古代出雲文化展』の図録も、読むだけでも楽しいものに仕上がってるように思います(^_^)

この図録をなぜか3冊も持っている ラン2でした(^; ;

117/117 RXE12761 六爾 RE:質問4 何故聞くから見る銅鐸になったの
(18) 98/01/27 09:18 108へのコメント

nifty:FREKIMT/MES/18/108 へのコメントです。
かまくら さん、こんにちは。

> 皆さま、こんにちは。(^ ^)
>質問の4をご紹介します。質問者は勘太郎さんです。
>
>> 何故聞く銅鐸から見る銅鐸に変わったか？
>> 野洲町立銅鐸博物館には銅鐸のレプリカがあり中に舌をぶら下げて音を聞かせ
>> てくれました。正直言ってあまり綺麗な音色ではありません。大銅鐸化は同時に音
>> 色の悪化を伴い鳴らさなくなったのでは？
>
> 音色の悪化と銅鐸が聞くから見るに変わったことの関係について、皆さまの
>お考えをおきかせください。また、それに関わるご意見などもお寄せ下さい。
>
>
> 司会者 / かまくら
銅鐸の音についてですが、銅鐸博物館の銅鐸は復元されたものですが、復元当
時はもっときれいな音を出していたらしいのです。どうも、経年変化が激しい
ようです。これも、理由かもしれません。
ただ、私はキクタクはサナギになったと考えています。諏訪大社のサナギの鈴
の音は全くの金属同士のこすれあったような音なのですが、それでも立派に祭
器として活躍したのですから、音の質はあまり考える必要はないと思われま
すがいかがでしょうか。

六爾

118/119 VZD07512 ラン2 RE:質問4 何故聞くから見る銅鐸になったの
(18) 98/01/27 21:10 108へのコメント

みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

>>何故聞く銅鐸から見る銅鐸に変わったか？
>>野洲町立銅鐸博物館には銅鐸のレプリカがあり中に舌をぶら下げて音を聞かせ
>>てくれました。正直言ってあまり綺麗な音色ではありません。大銅鐸化は同時に音
>>色の悪化を伴い鳴らさなくなったのでは？

ラン2が思うのに、青銅器が祭祀に用いられたということで、大型になったのは、
銅鐸だけではなく、銅矛・銅剣・銅戈すべて大きくなってるのです。

doutakusinpo1998

このことから単に音色の問題だけでないということは、明かですよ。

それと鳴らしたか、鳴らさなかったかについては、佐原真と三木文雄が論争しています。(銅鐸の型式編年も含めてですが・・・)
銅鐸の内面下辺の突帯に舌が当たって磨滅した跡があるかないかなんですが、そんなんほんまにわかるんかなあ・・・
佐原はこの突帯は舌が当たって鳴るためのものとし、三木は銅鐸を強固にするためのものとしています。

ところでみなさん 銅鐸の音色を聞いてみてくださいましたか? #25を見てね。
たしかに勘太郎さんのおっしゃるようによい音とはいえませんが、
でも弥生人にとっては画期的な音だったんじゃないかしら? ラン2

119/119 VZD07512 ラン2 RE:質問5 鳴神=銅鐸?雷?
(18) 98/01/27 21:10 109へのコメント

みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

>> 和歌山市に鳴滝(なるたき)、鳴神(なるかみ)という地名があります。もし
>>かしたら鳴神は銅鐸のことではないでしょうか?

歴史を考える上で、地名というのはとても大切だと思っています。
たとえば考古学の発掘調査などでも、報告書には正確に小字名まで記載することが常道です。

ラン2、和歌山市とはあまり縁がありませんが、和歌山市の鳴神といえば、
鳴神社があるところですね。
『平安時代史事典』によれば、鳴神社の祭神についてはいろんな説があります。
ただ、大和国添上郡および宮中主水司には鳴雷神という神がまつられており、
和歌山の鳴神も、この鳴雷神の略称である可能性があるそうです。
そうだとすると、和歌山の鳴神社も水神をまつたものと考えられるのではない
でしょうか。

鳴神=銅鐸については、それを実証するのが、とてもたいへんでしょうね。
考古学の限界かしら・・・ ラン2

120/125 RXE12761 六爾 RE:質問4 何故聞くから見る銅鐸になったの
(18) 98/01/27 21:51 118へのコメント

nifty:FREKIMT/MES/18/118 へのコメントです。
ラン2さん、こんにちは。また、コメント再開おめでとうございます。

>
>ラン2が思うのに、青銅器が祭祀に用いられたということで、大型になったのは、
>銅鐸だけではありません。銅矛・銅剣・銅戈すべて大きくなってるのです。
>このことから単に音色の問題だけでないということは、明かですよ。
>
>それと鳴らしたか、鳴らさなかったかについては、佐原真と三木文雄が論争して
>います。(銅鐸の型式編年も含めてですが・・・)
>銅鐸の内面下辺の突帯に舌が当たって磨滅した跡があるかないかなんですが、そ
>んなんほんまにわかるんかなあ・・・
>佐原はこの突帯は舌が当たって鳴るためのものとし、三木は銅鐸を強固にするた
>めのものとしています。

私も、読んだことがあります。
>ところでみなさん 銅鐸の音色を聞いてみてくださいましたか? #25を見てね。
>たしかに勘太郎さんのおっしゃるようによい音とはいえませんが、
>でも弥生人にとっては画期的な音だったんじゃないかしら? ラン2

>
>そうかもしれませぬ。ただし、銅鐸の音色については経年変化があるらしい
>のです。神戸にも復元銅鐸があり、木製の舌がついているのですが、20年近
>く鳴らし続けられた結果、銅鐸が磨滅しているというのです。これは、舌は木
>製でも、金属製でもがまわらないということではないのでしょうか。
>あと、銅鐸の音色ですが、舌を用いて鈴のように鳴らしていた銅鐸と、消防署
>の半鐘のように叩いて鳴らしたものもあったようですね。
>私の聴いてきた鉄鐸の音について諏訪の神長官守矢資料館では金属の珍らしか
>ったあの時代にはこの音でも十分に神の声に聞こえたのでは、というお話をな
>さっておられましたが。(館長さんの諏訪弁のお話をそのまま再現できないの
>>> ページ(75)

が残念ですが) (^_^;)

それでは、また六爾でした。(^^)/ ~~~

121/125 QWD02544 どんたく RE:質問1 銅鐸王国について
(18) 98/01/27 21:52 103へのコメント

弥生さん、お久しぶりです。 どんたくです。

質問1について：

以前、弥生さんは、「銅鐸国クエスト」という長編をアップしておられましたよね。

私は、あの長編は、ホンのちょっとかじっただけで、弥生さんのおっしゃる「銅鐸国」というものが、どういうものなのか、結局わからずじまいでした。(^^)

今回は丁度よい機会かとも思いますので、お差し支えなければ、弥生さんの考えておられる「銅鐸王国」のエッセンスについて、分かりやすく、ご披露いただけないものでしょうか？

弥生さんの質問状を読んでも、もう一つ意味が掴めないところもありますので・・・。

よろしく願い申し上げます。

QWD02544 どんたく

122/125 QWD02544 どんたく RE:質問2 カモ・ミワの地名と銅鐸の関係
(18) 98/01/27 21:52 104へのコメント

勘太郎さん、こんにちは。 どんたくです。

質問2：

> 出土地名：カモやミワに関係のある所から銅鐸が出ている例が沢山ある、と
> のことでしたがこれら地名についての考察があればお聞かせ願えないでしょうか

大場磐雄「銅鐸私考」の中には、カモやミワに関係のあるところとして、三十数例の銅鐸出土地点があげられています。

しかし、これらの地点には、必ずしもカモとかミワとかという地名がついているわけではありません。

一例をあげますと、

『大和国南葛城郡吐田郷村長柄から銅鐸が出土している。
この辺り一帯には、
鴨都波八重事代主命神社、葛木坐一言主命神社、多太神社、長柄神社、
鴨山口神社、大穴持神社、大倉比売神社、高鴨阿治須岐詫彦根命神社、
など、カモ氏一族に縁の深い、多くの式内社がある。』

というような趣旨のことが書かれています。

三十数例の一つ一つについて、こういうことを、この場を書くことは難しいので、その点をご勘弁ください。m(_ _)m

それとも私は、何か質問の意味を取り違えているのかな？

QWD02544 どんたく

123/125 QWD02544 どんたく RE:質問3 出雲に集まる神様と銅鐸祭祀
(18) 98/01/27 21:52 105へのコメント

勘太郎さん、こんにちは。 どんたくです。

質問3：

> いう連想を持たせませす。銅鐸はその表面の絵画から農耕民の祭りに使用されたと
> 思われます。いっぽう、大阪の天神祭りなど船渡御祭祀は海洋民に関係が深そう
> です。神武東征神話が海洋民が農耕民を征服したことを象徴しているとするなら
> ば、船渡御神と出雲集合神は重複しないと思うのですが、どなたか調べられてい
> るのでしょうか？

doutakusinpo1998

船渡御のマツリに着目されるというのは、面白い発想ですね。

でも、日本は海に囲まれた国ですので、全国津々浦々に色々な神様があり、船を使ったマツリを、ある特定氏族にだけ限定して考えるのは、無理なような気がします。

銅鐸にも、古墳にも、船の絵が描かれたものがあるようです。

また、大阪の天神祭りのご祭神は、菅原道真公で、出雲系です。

QWD02544 どんたく

124/125 QWD02544 どんたく RE:質問4 何故聞くから見る銅鐸になったの
(18) 98/01/27 21:52 108へのコメント

勘太郎さん、こんにちは。 どんたくです。

質問4 :

> 何故聞く銅鐸から見る銅鐸に変わったか？

#45 『用語解説、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」』（ラン2さん）

#47 『RE:用語解説、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」』（どんたく）

はご覧になって戴いたことかと思えます。

#47 が、私の回答？です。(^^)

京都の泉屋博古館（せうゐはくこく）に、住友家による中国の青銅器のコレクションがあります。

これを見ると、その重厚さに圧倒されて、思わず溜め息が出てしまいます。

ものすごく分厚く、大きい青銅器！

「よくまあこれだけの銅を惜しげもなく使ったものだ。」

「よくまあ、全くスを作らずに、これだけ大きなものが鑄造できたものだ。」
というように感じます。

これと比べると、我が国の銅鐸は、まことにチャチなものに見えてしまいます。

紅白歌合戦の小林幸子ではありませんが、恐らくマツリの道具としての銅鐸は、「オレはこんなに立派なものを持ってろ」と見せびらかしたい心理が働いて、段段に大きなものへとエスカレートしていったのではないのでしょうか？

銅の材料は貴重品だったでしょうから、できるだけ少ない銅量で、できるだけ大きくみせかけようとして、極端に薄い鑄物を作り上げた。

このように薄手の鑄造品を作るのは、現代でもなかなか真似ができない、高度な技術が必要だったとは思いますが。

でも、大きくて薄い鑄造品を叩くと、まるでバケツを叩くようなもので、勘太郎さんがおっしゃるように、いい音はできませんよね。

QWD02544 どんたく

125/125 QWD02544 どんたく RE:質問5 鳴神 = 銅鐸？雷？
(18) 98/01/27 21:52 109へのコメント

勘太郎さん、こんにちは。 どんたくです。

質問5 :

> 和歌山市に鳴滝(なるたき)、鳴神(なるかみ)という地名があります。もし

> かしたら鳴神は銅鐸のことではないのでしょうか？

広辞林に、「なるかみ」は次のように書かれています。

(1) かみなり。

(2) 歌舞伎十八番の一つ。能の「一角仙人」をもとにしたもので、鳴神上人が
修法によって雨を封じたのを、朝命を受けた雲絶対間姫（クモタマヒメ）が

ページ(77)

doutakusinpo1998

色じかけで上人をたぶらかし、これを破るという筋。

「神鳴り」は、雷（カミナリ）で、「鳴る神」は、カミナリの神様、ということではないでしょうか？

「どんたく説」では、このカミナリが、銅鐸 雨乞いにつながる、ということになってます。(^^)

余談ですが、和歌山県では雨乞山というところからも、銅鐸が出土しています。

QWD02544 どんたく

126/127 CXN00172 大三元 Re:RE:質問5 鳴神 = 銅鐸？雷？
(18) 98/01/27 23:57 125へのコメント

どんたくさん、ご苦労さまです、ご活躍ですね、(^^)。

>> 「どんたく説」では、このカミナリが、銅鐸 雨乞いにつながる、
>> ということになってます。(^^)
>> 余談ですが、和歌山県では雨乞山というところからも、銅鐸が出土しています。

既にご存知でしょうが神功紀（前紀、仲哀9年2月25日）に迹驚岡の大磐を「剣と鏡」を捧げて天神地祇に祈祷せしめると、「雷電」がとどろき落ちて磐を壊し水を通すことが出来た、って記事がありますね。

「剣と鏡」のセットが、別の時代か、別の種族か、別の地域か、別の文化では、「銅鐸」だったんかも、ってことですね。。

***Homepage: <http://www.alpha-net.or.jp/users/gens/>

127/127 CXN00172 大三元 Re:RE:質問2 カモ・ミワの地名と銅鐸の関
(18) 98/01/27 23:57 122へのコメント

どんたくさん、今晚は。

>> 鴨都波八重事代主命神社、葛木坐一言主命神社、多太神社、長柄神社、
>> 鴨山口神社、大穴持神社、大倉比売神社、高鴨阿治須岐詫彦根命神社、
>> など、カモ氏一族に縁の深い、多くの式内社がある。』

この内、多太神社（衝鉾とをよるひこ？）と大倉比賣神社（菟夫羅媛@仲哀8年紀？）がカモに関わる理由をご存知でしたら教えて下さい。

***Homepage: <http://www.alpha-net.or.jp/users/gens/>

128/128 KFA03002 kikkawa RE:銅鐸文化から巨大墳墓への体制の移行
(18) 98/01/28 08:31 111へのコメント

追加コメントです。銅鐸の後の時代の話ですが、前回紹介したNHK人間大学『古代国家の胎動』テキストの次の記述、
都出比呂志教授の記述として、“ところが、瀬戸内北岸の吉備と出雲ではこの時期になると青銅祭器は顕著ではありません。この地域では、この時期、青銅祭器の祭りに代わって大きな墳丘墓築造が盛んになります。”と紹介しました。
に続いて、“墓のことは次回に詳しく述べます”とありますが、昨夜の「前方後円墳の源流」の回の放送で、四隅突出型墳丘墓・楯築遺跡や前方後円墳・前方後方墳の祖形についての話があり、ご覧になった方々も多いと思います。
見逃された方は、教育テレビで今日の15:00～15:30に再放送されますので、留守録などで対応が可能です...この発言は昨夜中にアップするつもりが、Niftyが定期メンテナンスで止まっていて出来ず、手遅れかも知れないのが残念です。

都出教授は、様々な形態の墳丘墓について、円墳に突起が出来たものを、1突起円丘墓（前方後円墳の祖形）・2突起円丘墓（楯築遺跡）、方墳に突起が出来たものを、1突起円丘墓（前方後方墳の祖形）・2突起円丘墓・4突起墳丘墓（四隅突出型墳丘墓）に分類して、統一的に説明されようとしているのが、印象的でした。

前方後円墳については纏向石塚古墳が最古級と考えられています。
に、については以下のような記述があります。
“これらの墳丘の突起には長い型式と短い型式とがありま。寺沢薫氏は短い型式は、奈良県纏向遺跡の墳丘墓の影響が各地に及んだものと考え、「纏向型前方後円墳」と呼んでいます。この墳形の墓が西日本から東日本まで広く分布することを重視すれば、
ページ(78)

doutakusinpo1998

大和がその震源地であった可能性は高いでしょう。同時に、京都府黒田墓のように突起の長い型式があることは長い型式のものが震源地ですでに成立していたと考えていいと思います。”

なお、都出教授は、纏向石塚古墳(墳丘長93m、土器型式は庄内1)の時代は、弥生時代終末期とし、巨大な箸墓古墳(276m、布留0)から古墳時代とする定義をされており、私は纏向石塚古墳は古墳時代とする定義を支持している違いがあります。

テキストの次回分を読むと、「新しい宗教による対立の融合」の項に、“二世紀末、北部九州では銅矛形祭器、畿内では銅鐸祭祀がまだ存続しており、”と、されています。

#56で紹介したように、銅鐸の鉛同位体比は、後漢中期以降の漢式鏡と同様の値を示すものは知られていません。弥生時代の平原遺跡では、倣製鏡とされる日本最大径の内行花文鏡などは、IV期の銅鐸の鉛原料とほぼ同じ値で、漢式鏡も全て前漢鏡(後漢初期を含む)の値を示し、一方で古墳時代の漢式鏡も倣製鏡と見なされているものも、全て後漢中期以降の漢式鏡の値を示します。漢式鏡と鉛原料が共通と仮定すると、銅鐸は後漢中期には既に作られなかったと見なされます。

と言うわけで、その時期には既に銅鐸の製作・使用を止めていたと、私は考えていますが、編年に必要な土器などと共伴しないことには、決め手がありませんが...

NHK教育『古代日本の胎動』の放送時間(火曜22:45~23:15)は、NHK総合『堂々日本史』が終わる時間(昨夜は時間がずれましたが)に始まるので覚えやすいです。未だの方も是非ご覧を。

129/129 YRS02673 高木義隆 RE:質問4 何故聞くから見る銅鐸になったの
(18) 98/01/28 10:17 124へのコメント

>京都の泉屋博物館(せんおくわかん)に、住友家による中国の青銅器のコレクション
>があります。
>これを見ると、その重厚さに圧倒されて、思わず溜め息が出てしまいます。
>ものすごく分厚く、大きい青銅器!
>「よくまあこれだけの銅を惜しげもなく使ったものだ。」

ここの、ロビーで、所蔵の鐘を実際に叩いてみた音を聴くことができます。カンカンという感じであまり感動しませんでした。銅の劣化という問題があるでしょう。

一方、1992年春に東京国立博物館本館1F奥の部屋で、湖北省のスタッフによって、古代楽器のセットの演奏がありました。これは同館の東洋館B1Fで行われていた、曹公乙墓特別展の共催です。かなり頻繁に演奏されたのでスタッフは大変だったでしょうが、聴いた人は多いと思います。楽器は曹公乙墓(BC433年)から出土した楽器のかなり忠実なコピーを使っていました。コピーでいくらそれほど慎重に扱わなくてもいいとはいえ全部で5トンもある多数の鐘さらにそれを掛ける巨大な枠、をよく武漢からもってきたものです。

大きな鐘の音は重厚でなかなかよかった。

申包胥が秦の宮殿で聴いたのもこんな感じだったのでしょうか

日本人にとっては、異和感のあるCDですが、中国唱片CCD-8703 できくことはできます。

>「よくまあ、全くスを作らずに、これだけ大きなものが鑄造できたものだ。」
>というように感じます。

ううん、フリーアでのガンマ線撮影などみると、スはあるようです。

>これと比べると、我が国の銅鐸は、まことにチャチなものに見えてしまいます。

そうでもないですよ。

130/132 QWD02544 どんたく RE^2:質問5 鳴神=銅鐸?雷?
(18) 98/01/28 21:42 126へのコメント

大三元さん、こんにちは。 どんたくです。

>>既にご存知でしょうが神功紀(前紀、仲哀9年2月25日)に迹驚岡の大磐を
ページ(79)

doutakusinpo1998

>>「剣と鏡」を捧げて天神地祇に祈祷せしめると、「雷電」がとどろき落ちて
>>磐を壊し水を通すことが出来た、って記事がありますね。

「既にご存知」ではございませんでした。(^^)

神功皇后 摂政前紀(仲哀天皇9年4月)のところにありますね。

ご教示どうも有り難うございました。m(_ _)m

QWD02544 どんたく

131/132 QWD02544 どんたく RE^2:質問 2 カモ・ミワの地名と銅鐸の関
(18) 98/01/28 21:42 127へのコメント

大三元さん、こんにちは。 どんたくです。

>>この内、多太神社(衝鋒とをよるひこ?)と大倉比賣神社(菟夫羅媛@仲哀8年紀?)
>>がカモに関わる理由をご存知でしたら教えて下さい。

大場磐雄「銅鐸私考」の中に、大和国南葛城郡吐田郷村長柄から出土した銅鐸に
関連して、次のように式内社がリストアップされています。

鴨都波八重事代主命神社二座<並名神大月次相嘗新嘗>
(御所村大字御所鎮座。下鴨神社と称する)

葛木坐一言主命神社<名神大月次相嘗新嘗>
(吐田郷村森脇鎮座。祭神一言主神は大穴持尊の子味耜高彥根尊)

多太神社<鍬鞆>(吐田郷村多田鎮座。祭神太田田根子古命)

長柄神社<鍬鞆>(吐田郷村長柄鎮座。祭神天乃八重事代主命)

鴨山口神社<大月次新嘗>(櫛羅村櫛羅鎮座)
大穴持神社(葛村朝町鎮座。祭神大己貴尊)

大倉比売神社(葛村古瀬鎮座。祭神大倉比売は下照姫の別名。大己貴尊の子)

高鴨阿治須岐詫彦根命神社四座<並名神大月次相嘗新嘗>
(葛城村神通寺鎮座。祭神は大己貴尊の子)

以上です。

下照姫は、大三元さんの「かやなるみ考」にも出てきましたね。
いろんな名前を持っていたのかなあ。

QWD02544 どんたく

132/132 QWD02544 どんたく RE:質問 4 何故聞くから見る銅鐸になったの
(18) 98/01/28 21:42 129へのコメント

高木義隆さん、レス有り難うございました。 どんたくです。

》>「よくまあ、全くスを作らずに、これだけ大きなものが鑄造できたものだ。」
》>というように感じます。

》
》ううん、フーリアでのガンマ線撮影などみていると、スはあるようです。

ああ、やっぱり中の方にはスはあるのですか?
ちょっと見には見えませんでしたけど。

ところで、「フーリアでのガンマ線撮影」って、何のことですか?
お教え戴ければありがたいです。

》>これと比べると、我が国の銅鐸は、まことにチャチなものに見えてしまいます。
》
》そうでもないですよ。

銅鐸大好き人間の、どんたく といたしましては、
まことに頼もしいご発言です。m(_ _)m

(私の言ってること、矛盾してる?)

133/136 VZC02152 勘太郎
(18) 98/01/29 09:24

銅鐸に関する質問(続)

勘太郎の初歩的な質問に対して沢山のご丁寧なレスありがとうございます。大分方向修正できました。まとめてのお礼で失礼します。
調子に乗ってもう少し質問させていただきます。よろしくお願い申し上げます。5項目ありますがどれかひとつだけでも結構です。

1. 銅鐸九州出土の可能性

どんたくさんが #043 銅鐸の出土分布 で九州では銅鐸が 筑前1 銅鐸の鋳型が 筑前1 肥前1 出土しているとアップされていますが、これは九州も銅鐸文化圏と解釈しても良いのでしょうか？
それに関連して、今後九州で銅鐸が発見される可能性はいかがでしょうか。福岡市早良区に賀茂、福岡県朝倉郡に三輪町、宮崎県延岡市に上・中・下三輪、大分県日田市と豊後高田市に美和、という銅鐸に係りのありそうな地名があります。最近の命名がもしや、とと思っています。

2. 銅鐸人は文字を使っていたか？

銅鏡には文字の刻まれているものが多いですが、銅鐸には文字は刻まれていないのでしょうか？あるいは銅鐸が出土した遺跡で文字の書かれた遺物は見つかっていないのでしょうか？
紀元57年に漢倭那国王が金印を貰っていますが倭那国王が金印の文字を文字として認識していたかどうか？ このとき西日本は銅鐸祭祀時代だったようですが、銅鐸を祭った人達は文字を知っていたのかどうか？ 気になるところです。

3. 大己貴(銅鐸人) - 饒速日 - 神武

銅鐸と大和朝廷の関係についてはこのシンポジウムが始まる前にkikkawaさんに「銅鐸祭祀から巨大墳墓祭祀への移行」という素晴らしい発想を教えてくださいましたが、《文芸春秋編『古代日本史最前線』p132~149 「大和朝廷生誕のなぞを解く」/1993》の中で武光誠という方が唐古・鍵遺跡の銅鐸鋳型、纏向遺跡と吉備および物部氏との関係、を述べておられました。ここからは勘太郎の勝手な推測ですが、武光誠さんは"大己貴(銅鐸人) - 饒速日 - 神武"というストーリーを組み立てておられるのでは、と思いました。

4. この質問は どんたくさんへ

不明瞭な質問で申しわけありませんでした。
加茂 = カモはカミの転。あるいはカハ(川)モ(面) 《市町村名語源辞典(東京堂出版)P.77》
三輪 = 三輪山麓はヤマモトともいい、初瀬川の曲流する「磯城」の水垣(みわノ『日本書紀』崇神記の宮名)の地域である《日本地名ルーツ辞典(創拓社)P.521》
とあります。加茂、三輪の名と銅鐸との関係について何か示唆があれば(例えば神聖地とか)お願いします。ツツメリヨウデシ ルキョ(.)\ (^ (^);

5. 加茂岩倉遺跡の銅鐸祭祀の時期？

銅鐸祭祀は吉備、出雲から衰退しはじめた、とのことですが荒神谷や加茂岩倉遺跡も同様に早期に祭祀を止めたと考えていいのでしょうか。

98.01.29 勘太郎

134/136 SGL02501 弥生
(18) 98/01/29 12:25 114へのコメント

RE: 議題 銅鐸は鉄鐸になって今もあります。

六爾様 RESを有り難うございました。
諏訪の鉄鐸のことですが、あれはやっぱり、「銅鐸が一部鉄鐸になって生き残った」のですか？、それが逆とか、鉄鐸・銅鐸が同時期にあった、とかはあり得ませんか？。諏訪は鉄の国で、洩れ矢神とタケミナカタが夫々、鉄輪と藤枝を持って戦った話がありますよね、今も現存する「鉄鐸」が「誓約の鐸」と伝わっていることに、とても注目しています。私の仮説では、「銅鐸」にも「誓約」の意味が込められていたこと、になるものですから。それから、鈴が幾つか付いたものを手に持って舞うのは、今も「三番叟」などに生きていますが、鈴舞・鐸舞・小銅鐸、アメノウズメが矛に着けて鳴らした鐸、みんな、根は一つなのだろうな - ?、などと考えています。
今年4月の、上社「山出し祭り」は絶対に行くつもりであります。<弥生>

135/136 SGL02501 弥生 RE:質問1 銅鐸王国について
 (18) 98/01/29 12:29 121へのコメント コメント数:1

どんたく様
 出ました!「どんたく説」。いつかは投稿を断られましたけど(オボエテルワヨ)。
 質問もありますが、後にします。
 #103へのRES有り難うございました。他の方からも戴いていますが、どんたくさんの
 リクエストによる『「銅鐸王国」のエッセンス』は、あんまり気が進まないのですが
 同時に他の方にもお答え出来るかな?、と思い直してノソノソと執筆中(おかげさ)
 です。エッセンスと言っても、銅鐸国の所在や、銅鐸王の名前、を書くだけでは、
 「なんじゃ、それは」になるだけですから、違う書き方にしようと思います。
 それは『質問1~4』まで、特に4の「何故聞くから見る銅鐸に...」を、バッチリと、
 クリヤ-できるつもりですから、しばし、お時間をお与え下さいまし。
 ところで、#124ですが、私も中国商時代の青銅器を見て、びっくりしたことがあり
 ました。やっぱり内心で、銅鐸と比べてしまいました。銅鐸を「チャチ」と言えなく
 もないですが、私は「感性の違い」をシミジミ感じました。かくも違うものか!と。
 「物資が豊富なんだ!」とも思いましたが、銅鐸の下手な絵は、銅鏡とも全然違いま
 すが、多くの日本人は銅鐸の絵が好きなのではないかと思っています。 <弥生>

136/136 SGL02501 弥生 RE:質問1 銅鐸王国について
 (18) 98/01/29 17:16 135へのコメント

#135の訂正
 大訂正をしなくっちゃ。#135の文中で『質問1~4』は『議題1~4』の
 大間違いです。しかし、続く文中の「4」とは『質問4』のことです。
 従って『議題4』に関しては、どちらでも良いのですが、触れないことにします。
 謹んでお詫びして、訂正を致します。(分かりにくいでしょうか?) <弥生>

137/138 QW02544 どんたく 銅鐸の曲線美(どんたく)
 (18) 98/01/29 21:47 コメント数:1

みなさん、こんにちは。 どんたく です。

銅鐸の鐸身は、非常に優美な曲面をもっています。

現在実験考古学的に復元銅鐸を作ろうとする人は、現存するどれかの
 銅鐸の曲面をコピーして鋳型を作り、鋳込んでいます。

しかし、最初に銅鐸を作った人は、どうやってこのような美しい曲面を
 生み出したのか?
 これが私の考えたことであります。

数本の鉛筆を束ねて持って下さい。
 これを両手で持って、束を捻じるようにしてみます。
 そうすると、束の真ん中はすばまったままで、両端が広がった形のものが
 出来るでしょう。

神戸の港にあるポート・タワーという塔は、このような形をしています。
 先年の大地震でもビクともしなかった、構造的に丈夫な塔です。

この曲面は、数学的には「一葉回転双曲面」と呼ばれます。
 「銅鐸鐸身の曲面は、このポート・タワーの曲面の一部分を切り取って
 作ったような形をしている。」
 というのが、私の仮説です。

この仮説をもとにして、パソコン・プログラムを作り、いくつかの銅鐸に
 ついて、銅鐸実測図とパソコンで描かせた図とを重ねあわせてみたところ、
 ピッタリと合いました。

パソコンを使わなくても、もう一つ別な方法でも、銅鐸鐸身の曲面が
 「一葉回転双曲面」であるかどうかを、大雑把ながら、チェックできる
 方法があります。

銅鐸の鐸身に直線定規をあててみるのです。
 直線定規を縦方向に銅鐸に当てると、銅鐸の表面はカーブしてますから、
 当然のことながら、定規の真ん中辺りに隙間ができます。

ところが、この直線定規を少し斜めにして銅鐸に当てると、アアラ不思議!
 ページ(82)

doutakusinpo1998

ある斜めの角度のところで、直線定規がピッタリと曲面にくっつきます。
銅鐸の曲面が「一葉回転双曲面」でなければ、このようにピッタリと
くっつくことにはなりません。（*1）

この方法で、東奈良遺跡出土の完形の鑄型に直線定規をあてがってみた
ところ、実にピッタリと定規が鑄型の曲面にくっつきました！

私のこの仮説はほぼ間違いないものと思っておりますが、今後さらに
実測例を増やしていきたいな、と思っております。
（実は、加茂岩倉銅鐸を狙っている・・・。）

このパソコン・プログラムについては、
FREKI/LIB/06/28 「銅鐸鑄身作図BASICプログラム」
に登録されています。

ただし、これをダウンロードして解凍した後、プログラムとして
使うには、PC-9800 シリーズの BASIC (MS-DOS版) が必要です。

【注】(*1)
数学的に言うと、「一葉回転双曲面」は、直線で構成された「線織面」
となっているため、このように、
「ある斜めの角度のところで、直線定規がピッタリと曲面にくっつく」
ということになるのです。

【参考文献】
野田昌夫：「銅鐸の曲線美はどのようにして作り出されたか」
古代学評論 第4号（古代を考える会20周年記念号）
1995.9.23.発行 p103~118

「古代学評論」の取扱い店：
〒530 大阪市北区芝田 1-6-2（阪急古書のまち）
藤沢書店 電話：06-373-0779
¥3,700（郵送料は別）
（ただし、まだ残部が残っているかどうかはわかりません。）

QWDO2544 どんたく

138/138 QWDO2544 どんたく 箆袋で銅鐸独楽を作る(どんたく)
(18) 98/01/29 21:51 137へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたく です。

前回の「銅鐸の曲線美」に関連して、以前に FREKI/MES-1 【文明の十字路】
にアップしたものを再録させてください。
（ルール違反ですけど、お許しください。m(_ _)m）

140/141 QWDO2544 どんたく 箆袋で作る銅鐸独楽(どんたく)
(18) 98/01/30 01:20 137へのコメント

みなさん、こんにちは。 どんたく です。

前回の「銅鐸の曲線美」に関連して、以前に FREKI/MES-1 【文明の十字路】
にアップしたものを再録させてください。
（ルール違反ですけど、お許しください。m(_ _)m）

》 10565/10565 QWDO2544 どんたく 箆袋で銅鐸独楽(ドウタクマ)を作る
》 (1) 95/11/10 23:07

》 みなさん今日は。 銅鐸好きの どんたく です。

》 #10522 (95/11/01)「銅鐸曲線美の謎を解く」で、銅鐸鑄身作図BASICプログラム
》 のことを書き込みました。
》 おかげさまで何人かの方々が、データライブラリからこの作図プログラムをダウ
》 ンロードして下さったようです。

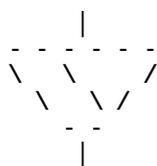
》 前の書き込みはやや難解だったかも知れませんが、今日はもっとやさしい方法
》 をご紹介させていただきたいと思っております。

ページ(83)

》 箸袋1つ、ツマヨウジ1本、針1本 をご用意下さい。
 》 それからセロテープがあれば、さらに好都合です。
 》 これを使って小生考案・命名の「銅鐸独楽」(ドウタクゴマ)を作ります。

- 》 (1) 箸袋の幅が仮に 3 cm あるものとします。
 》 この箸袋を、 3 cm ごとに折り目をつけて、折り込んで行きます。
 》 (2) 折り込んでいった箸袋をいったん伸ばします。
 》 (3) 今つけた折り目を利用しながら、箸袋が三角形の環になるように、トグロ状に巻いていきます。
 》 (4) 箸袋の巻終わりのところを、セロテープで止めると、環がほどけないで、しっかりします。
 》 (5) 巻終わりの面(3 cm 角の正方形)の真ん中に針で孔をあけます。
 》 (6) 針をさらに差し込んで、対向した折り目の真ん中まで突き通します。
 》 (7) 今あけた針の孔に、ツマヨウジを差し込みます。
 》 これがゴマの心棒になります。

》 これで、下図のような「銅鐸独楽」の出来上りです。
 》 (私の下手な説明で分からないようでしたら、ご遠慮なくご質問下さい)



[注] この図では、正三角形になっていませんが、上の説明通りに作れば、1辺 3 cm の正三角形の環になる筈です。

》 さあ、ツマヨウジを軸にして、箸袋のゴマを回して見て下さい。
 》 三角形のゴマが、曲面を描いて回るのが見えませんか？
 》 これが銅鐸鐸身の曲線美の原理であるというのが私の主張です。

》 ン？ バランスがとれなくてゴマがうまく回らない？
 》 それなら仕方ありません。ツマヨウジの両端を両手で支えながら指先でツマヨウジをクルクル回して見て下さい。
 》 ゴマが回るにつれて、銅鐸によく似た曲面が見えてくる筈です。

》 ” 銅鐸を 独り楽しむ 夜長かな ” 鈍鐸(どんたく)

----- QWD02544 どんたく

141/141 QWD02544 どんたく RE:質問1 銅鐸王国について
 (18) 98/01/30 01:40 135へのコメント

弥生さん、こんにちは。 どんたくです。

>>いつかは投稿を断られましたけど(オボエテルワヨ)。

ああ、そんなこともありましたっけねえ。すっかり忘れてました。(^^ゞホリホリ

>>・・・と思い直してノソノソと執筆中(おおげさ)です。

期待してお待ち申し上げております。m(____)m
 鈍な私の頭が混乱しなくてすむように、できるだけ分かりやすく書いて下さいね。

ところで一つお願いがあります。
 弥生さんは、大体いつも1行40字一杯に書かれるようですが、これでは読みにくい上に、弥生さんの文章を引用するときに困るのです。

ご面倒でしょうが、1行37文字以内くらいに区切って書いて戴くと助かります。

言いにくいことを書いてしまって、ごめんなさい。
 よろしく願います。

QWD02544 どんたく

142/142 YIG00127 かまくら RE: K A N A K さんからのご意見紹介
 (18) 98/01/30 17:09 099へのコメント

皆さん、こんにちは。(^^)

KANAKさんよりメールで以下のような どんたくさんの大作「どんたく説」へのご質問&ご意見をいただきましたので、ご紹介させていただきます。

> 1. 雷神の性格

- > (荒) 祟り神・・・雷鳴・雷光・落雷――>火災・殺傷
- > (和) 豊饒神・・・降雨――>水耕――>成長・豊作

- >>>とりわけ農作物の中でも最も尊重されたのが稲でありましたから、この稲と
- >>>雷とが結びついて、「イナヅマ」とか「イナヒカリ」とかいう言葉ができた
- >>>のではないかと思います。・・・
- >>>ゴロゴロと鳴り響く雷(=神鳴り)を、神の怒りの声として恐れ、
- >>>この神の怒りをなり鎮めるために、銅鐸を土中に埋める儀式を行なった。
- >>>そうして、雷神から雨の恵みを受けて、農作物の豊穰を祈った

> の前提にたつて、初期における豊饒神の側面をより重視されては？と思いました。

> 2. 雷神祭祀

- > 上記の意味で、銅鐸=雷神祭祀は降雨(雨乞いよりも広い意味で)儀式の側面を、
- > より重視されては？と思いました。
- > 銅鐸分布と雷線(?)の相関関係は、降雨儀式と雷雨発生の確率から、雷神聖地
- > と言う認識があったと理解出来ないでしょうか？

- >・・・ところで、この程度の金属板埋設で落雷確率に影響が生じますか？
- > (集落避雷の効果があるかどうか？)
- > 或いは木にぶら下げれば、落雷を誘発する可能性は有りますか？
- > (一種の神依としての効果があるか？)
- > この相関関係は三遠地方でも成立するのでしょうか？

> 3. 銅鐸期の農(水)耕

- > 銅鐸期の水耕は灌漑技術の未発達から、平地よりも山麓傾斜地が中心であり、
- > 古墳期に灌漑技術の発達に伴い、平地に移行し、規模も拡大したのでは無いか？
- > と思います。初期銅鐸発見地の地形とは関係ないでしょうか？
- > (大和盆地の丘陵地帯=谷間扇状地に小規模水田がよく見られます。一般的には
- > 平地を開拓しつつして谷間にまで拡張したと、思われますが、発想を変えれば
- > 谷間の扇状地の方が原始型だったかも知れません。・・・簡単なダムを造り、
- > 段々畑的に水を落としていく・・・ヨクワカリマセンガ！)
- > 仮に傾斜地水耕であれば、夏季降雨の必要性は平地よりも、更に重要だったのでは？
- > とも思います。

> 4. 雷神の性格変化

- > 降雨神としての「雷神」は、平地水耕の発達とともに「蛇(->龍)神」に其の地位
- > を譲り、祟り神としての性格が強調されたのでは無いか？
- > それと共に「銅鐸=雷神祭祀」の集団農耕祭祀の意味が失われたのでは無いか？
- > とも思います。
- > 神話の一部には「雷神=蛇(->龍)神」の痕跡が有るように思いますが・・・。
- > (ただし、明確に「龍神」と意識されるのは、更に後世のことです)

> 5. 変化の要因

- > これらの変化の要因を、単なる伝播的技術(思想)変化と見るか、或いは権力の介入
- > による社会的技術(思想)変化と見るか？(・・・征服等を含む？)
- > が問題だと思いますが、総合的に判断して(便利な言葉ですが、要するに私の検証不
- > 足による山勘です)後者の可能性も十分有りうと思います。

> 6. その他雑感

- > A. 初期古墳の代表的存在である「箸墓」の水濠には、巻向川の灌漑との関係が
- > 指摘されています。古墳造営(技術)と平地水耕灌漑技術の関係を示す？
- > B. 銅鐸氏族？カモ・ミワは何れも「水鳥・水輪」と水に縁がある(半分ジョーク)？
- > C. 銅鐸文様には「流水」と共に「降雨」が窺える(ヨナカシ)？
- > D. 近世の民俗的雨乞い儀式でも、鐘・銅鐸等「金属音」と「火煙」が重視される？
- > E. 巨大化傾向は、「見る」よりも「天(雷神)に見せる」意味が生じた？
- > F. 落雷と豊作を結びつける民間伝承がある(ミタ)？
- > G. 山城の銅鐸集積地は上賀茂神社禁足地にあり(ナ-テ)？

- > 7. 以上の諸点から、銅利器=雷光は一寸肩が凝る(ヨナカシ)ので、
- > 銅鐸=雷神祭祀=降雨儀式=初期水耕豊饒儀式 の線で良いような気がしました。

以上がKANAKさんからのご意見です。皆さまはどのように「どんたく説」をお考えになりましたでしょうか？

司会者 / かまくら

143/143 VZD07512 ラン2
(18) 98/01/30 23:51

【親子二代の銅鐸と鋳型の巻】

みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/
一般参加が始まって、盛り上がってきましたね。
残りの約1カ月、おおいに楽しみましょう！
さて、今日のこぼれ話は、親子二代にわたる因縁話です。

* * 豊中市桜塚・原田神社銅鐸。古段階（外縁付鈕1式）* *
* * 茨木市東奈良遺跡出土銅鐸鋳型2号。古段階（外縁付鈕1式）* *

昭和23年、古瓦研究で知られる考古学者藤沢一夫氏が、東大阪市の古道具屋で、
天明元年（1781）原田神社境内出土の箱書を持つ銅鐸を見つけた。
すぐに原田神社と掛け合い25000円（当時）で購入させた。

時は流れて、昭和48年、大阪府茨木市の弥生集落・東奈良遺跡での発掘調査で、
黒く焼けた石片が出土した。
流水紋や鋸歯紋を刻んでいることから、調査員の藤沢真依氏は当時例の少ない銅鐸
鋳型だと判断。
すぐに佐原真氏によって、豊中市桜塚の原田神社境内出土銅鐸と、香川県善通寺市
我拝師山出土銅鐸を鋳造した鋳型と確認された。

実は、藤沢真依氏は、東奈良遺跡調査委員会の理事として指導にあたった藤沢一夫
氏の息子で、真依氏は父がかつて見つけた銅鐸を鋳造した鋳型を発見したわけです。

製作地と配付地が明らかになったというだけでも珍しいのに、親子二代の手により
再会できたなんてホントびっくりですよ(^_^)

では また (^.^)/ ~~~

ラン2

144/147 QWD02544 どんたく RE:銅鐸九州出土の可能性
(18) 98/01/31 20:23 133へのコメント

勘太郎さん、こんにちは。 どんたくです。

いくつかの質問を頂戴しましたので、一つずつ別個にレスさせていただきます。
（お答えにはなっていないかもしれませんが、悪しからず）

>> 1. 銅鐸九州出土の可能性
>> どんたくさんが #043 銅鐸の出土分布 で九州では
>> 銅鐸が 筑前 1
>> 銅鐸の鋳型が 筑前 1 肥前 1
>> 出土しているとアップされていますが、これは九州も銅鐸文化圏と解釈し
>> ても良いのでしょうか？
>> それに関連して、今後九州で銅鐸が発見される可能性はいかがでしょうか。

#043「銅鐸の出土分布」は、【参考資料】にあげましたように、

>> アサヒグラフ [別冊] 「銅鐸の谷」1997.11.朝日新聞社 p.74
>> 鳥根県古代文化センター提供のデータ。

に基づくものです。

97.10.1.開催の「文化財講演会とよなか'97」で鳥根県古代文化センター長の
宍道正年氏の講演がありました。
その際に、鳥根県古代文化センター提供の銅鐸出土分布表が配布されましたが、
その時のデータでは、九州からは銅鐸の出土はない、ということになっており
ました。

それが、上記アサヒグラフでは、「肥前から銅鐸1」というように変わって
ページ(86)

おります。
これが肥前の何処で、何時発見されたものか、については、私は存じません。

銅鐸鑄型の出土地・発見年は、次の通りです。

肥前・鳥栖市柚比町安永田遺跡 1980,1981

筑前・福岡市博多区席田遺跡群赤穂ノ浦遺跡 1982

>>これは九州も銅鐸文化圏と解釈しても良いのでしょうか？

これについては、#115/116「青銅器文化圏1/2」を書かれたラン2さんにお答えをお願いしたいです。>ラン2さん、よろしく。m(_ _)m

>> それに関連して、今後九州で銅鐸が発見される可能性はいかがでしょうか。

そりゃ、「可能性」はあるんでしょうね。でも、どこから出るかは????

それが分かるようなら、勘太郎さんと どんたく とで、金属探知器をワリカンで買って、九州まで担いで行きたいです。(^^)

QWD02544 どんたく

145/147 QWD02544 どんたく RE:加茂、三輪の名と銅鐸
(18) 98/01/31 20:23 133へのコメント

勘太郎さん、こんにちは。 どんたくです。

>>4. この質問は どんたくさんへ

>> 不明瞭な質問で申しわけありませんでした。

>> 加茂 = カモはカミの転。あるいはカ八(川)モ(面) 《市町村名語源辞典
(東京堂出版)P.77》

>> 三輪 = 三輪山麓はヤマモトともいい、初瀬川の曲流する「磯城」の水垣
(みわノ『日本書紀』崇神記の宮名)の地域である《日本地名ルー
ツ辞典(創拓社)P.521》

>> とあります。加茂、三輪の名と銅鐸との関係について何か示唆があれば

>>(例えば神聖地とか)お願いします。ツヅクメリヨクデ シタ ル キッ(.)\(^^\);

これについては、お答えできるだけの知識がありません。
直接的に「カモ、ミワという名前が、銅鐸に結びつくか？」などということは、
考えてみたこともなかったものですから。

QWD02544 どんたく

146/147 QWD02544 どんたく RE:銅鐸人は文字を使っていたか？
(18) 98/01/31 20:23 133へのコメント

勘太郎さん、こんにちは。 どんたくです。

>>2. 銅鐸人は文字を使っていたか？

>> 銅鏡には文字の刻まれているものが多いですが、銅鐸には文字は刻まれて
>>いないのでしょうか？あるいは銅鐸が出土した遺跡で文字の書かれた遺物は
>>見つかっていないのでしょうか？

銅鐸に文字が刻まれていた、という話は、今までに聞いたことがありません。
X印がついたものはありましたけど・・・。

以前、「銅鐸に描かれた絵は、絵文字である」という説を書いた本を見かけた
ことはありますが、買いませんでした。(^^)

また、銅鐸はおろか、弥生時代の遺跡から文字が見つかったという話も、
存じません。

>> 紀元57年に漢倭那国王が金印を貰っていますが倭那国王が金印の文字を
>>文字として認識していたかどうか？ このとき西日本は銅鐸祭祀時代だった
>>ようですが、銅鐸を祭った人達は文字を知っていたのかどうか？ 気になる
>>ところです。

ウーム、おっしゃる通り、これはなんともいえませんねえ。

QWD02544 どんたく
ページ(87)

147/147 QWD02544 どんたく RE:加茂岩倉遺跡の銅鐸祭祀の時期？
(18) 98/01/31 20:23 133へのコメント

勘太郎さん、こんにちは。 どんたくです。

>> 5 . 加茂岩倉遺跡の銅鐸祭祀の時期？

>> 銅鐸祭祀は吉備、出雲から衰退しはじめた、とのことですが荒神谷や加茂
>>岩倉遺跡も同様に早期に祭祀を止めたと考えていいのでしょうか。

(1) 神庭荒神谷

神庭荒神谷の青銅祭器の年代について、春成秀爾氏は、
「埋納時期は、銅鐸 + 銅矛が中広形 b 式銅矛の年代によって後 1 世紀前半
ないしそれ以降、銅剣も後 1 世紀前半ないしそれ以降ということになる。」
としておられます。(*1)

また、
「1 世紀後半以降は、出雲も吉備も、近畿や北九州の青銅器を使う祭りから離脱
していったことは確かである。」
とも書いておられます。(*2)

(2) 加茂岩倉遺跡

加茂岩倉遺跡については、新聞報道によれば、
埋納坑近くの木炭の年代は、B.C. 40 ± 50 年、
土坑の中の木炭の年代は、 B.C. 190 ± 50 年、
という結果が得られ、

『加茂岩倉銅鐸の製作年代は紀元前 2 世紀ごろから紀元後 1 , 2 世紀と
考えられており、木炭の年代もこれに合致する。』
と書かれています。(*3)

これらの年代については、他にも色々な考えがあるかも知れません。

ここから先は私の勝手な憶測ですが、銅鐸の最終的な埋納と同時に祭祀も
やまってしまったのかどうか？

ヒョットすると、「隠れキリシタン」のように、一部の人たちによって、
その後も密やかにマツリが続けられていたかも・・・。

【参考資料】

(*1) 春成秀爾「神庭（荒神谷）青銅器と出雲勢力」p.204
島根県古代文化センター編「荒神谷遺跡と青銅器」1995.11.同朋社出版

(*2) 春成秀爾「神庭（荒神谷）青銅器と出雲勢力」p.217
島根県古代文化センター編「荒神谷遺跡と青銅器」1995.11.同朋社出版

(*3) 98/01/11: #28 「銅鐸の使用年代」参照

QWD02544 どんたく

148/148 YRS02673 高木義隆 RE:質問 4 何故聞くから見る銅鐸になったの
(18) 98/01/31 21:29 132へのコメント

>>> 「よくまあ、全くスを作らずに、これだけ大きなものが鑄造できたものだ。」

>>> > というように感じます。

>>>

>>> ううん、フーリアでのガンマ線撮影などみると、スはあるようです。

> ああ、やっぱり中の方にはスはあるのですか？

> ちょっと見には見えませんでしたけど。

> ところで、「フーリアでのガンマ線撮影」って、何のことですか？

> お教え戴ければありがたいです。

フーリア美術館で青銅器を硬 X 線(ガンマ線はまちがいでした。) で撮影した研究が昔おこなわれてまして、

Gettens, Freer Chinese Bronze Vol II に載っています。みるとばらつきはありますが、かなりの数の微小なスがあるようです。

>>>これと比べると、我が国の銅鐸は、まことにチャチなものに見えてしまいます。
>>>
>>> そうでもないですよ。

>銅鐸大好き人間の、どんたく といたしましては、
>まことに頼もしいご発言です。m(_ _)m

台北故宮博物院で中国美術にどっぷりつかった直後では、東京国立博物館の展示もなにかすすけたもののようにしか見えませんでした。

しかし、表慶館の縄文弥生埴輪などの展示はインパクトがあって救われたような気分になったことがあります。

高木 義隆takaki@cac.co.jp

玲児のテイスト3 <http://www.recruit.co.jp/stpage/channel.cgi?301>

玲児のテイスト2 <http://www.recruit.co.jp/stpage/channel.cgi?269>

玲児の古美術 <http://www.recruit.co.jp/stpage/channel.cgi?10>

玲児のテイスト <http://www.recruit.co.jp/stpage/channel.cgi?140>

玲児の中国書道珍品集 <http://www.recruit.co.jp/stpage/channel.cgi?234>

などもよろしく。

149/151 VZD07512 ラン2 銅鐸博物館
(18) 98/01/31 22:17 018へのコメント コメント数:1

みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/
今日は、滋賀県野洲町にある銅鐸博物館へ行ってきましたので、レポートします。

【銅鐸博物館（野洲町立歴史民俗資料館）】

【場所】 滋賀県野洲郡野洲町大字辻町57-1

【電話】 077-587-4410

【交通機関】 JR琵琶湖線「野洲駅」下車、野洲駅正面口から近江バス
「村田製作所」「希望ヶ丘西ゲート」行で、「銅鐸博物館前」または
「辻町」下車、徒歩3分
名神高速道路「竜王インターチェンジ」「栗東インターチェンジ」から
国道8号線経由約15分

【開館時間】 9時～17時

【休館日】 月曜日、祝日

【入館料】 大人=200円、高校・大学生=150円、小・中学生=100円

銅鐸博物館では、シンプルでビジュアルに銅鐸を紹介するコーナーと、大岩山銅鐸のコーナー（ただしほとんど複製です）、野洲町民俗と歴史を紹介するコーナーに分かれています。

隣接して弥生の森歴史公園があり、弥生時代の竪穴式住居・高床倉庫を復元されています。古代米「赤米」の栽培や、野焼きによる土器作りなどの古代生活体験教室もあるので、子供連れで楽しめるのではないのでしょうか。

ラン2の一口メモ(^ ^)

大岩山銅鐸についてちょっと書いておきますね。

滋賀県野洲町大岩山から明治14年に14点、昭和37年に10点の銅鐸が出土しています。

加茂岩倉遺跡で大量の銅鐸が発見されるまで、1ヶ所の出土数としては最高でした。

すべてが新段階の銅鐸で、近畿式銅鐸と三遠式銅鐸が同じ場所に埋納されていたという興味深い点が注目されています。

現在、東京国立博物館蔵となっている1-1号鐸は、総高134.7cmという最大の銅鐸

です。

昭和に出土した銅鐸は、発見者・土地所有者の協力により滋賀県の所蔵となりました

が、明治に出土した銅鐸は、散逸して地元には残っていません。

大岩山は丘陵地でしたが、国道・新幹線など度重なる造成用土砂採掘によって、

大部分は失われています。

博物館の裏手、丘陵の東側に当たるところには、出土を記念した石碑が建てられています。

150/151 VZD07512 ラン2 ラン2、銅鐸を手にするの巻
(18) 98/01/31 23:06 149へのコメント

銅鐸博物館レポートのつづきで～す (^o^)/

銅鐸博物館のロビーには、鳴らしてみるコーナーがありました (^o^)
もちろんやじ馬根性のラン2はガンガン鳴らして、パチパチ記念撮影をして
いると、博物館の方が、こちらはいかがですか？と、大岩山銅鐸11-4号鐸
の復元銅鐸を出してきてくださり、手袋をはめて実際持たせていただきました。

ラン2「う～ん。重い！これは吊り下げられへんわ～。見る銅鐸やねえ」
だんなさんが下に置いて表面を、こんこん叩きはじめる。
だんな「置いたら叩いてもあかなあ」
館の方「材料はほぼ同じなんですけど、実物はもっと薄いんですよ。古代人の
技術に追いつけてませんね。これ一つ作るのに、車1代分の費用が
かかっているんですがねえ。現在、1番大きな銅鐸も復元製作中な
んですよ」
ラン2「へ～っ。貴重な体験をさせていただきました。銅鐸を手持てたな
んて感動です。ありがとうございました」

博物館の受付には欲しいモノがいっぱい・・
まず買ったのが、キャラクター商品「どうたくん」のTシャツ1050円。
滋賀県草津市志那から出土した日本最小の銅鐸をモデルとしたほぼ実物大の
復元銅鐸 3000円。成分比を考慮して作られているので、古代の音色を堪能
できます(?)
『大岩山出土銅鐸図録』1500円。
去年の特別展覧会の図録『「銅鐸」-埋納と終焉を考える』も欲しかったの
ですが、残念ながら売り切れ(;_;)でも博物館の方が、これで良かったら
と、論考部分のコピーをくださいました (^o^)/

とてもとても親切な博物館であることを強調しておきます(^_^)

151/151 QWD02544 どんたく RE: K A N A Kさんからのご意見紹介
(18) 98/01/31 23:32 142へのコメント

K A N A Kさん、こんにちは。 どんたくです。

大変貴重なご意見、有り難うございます。m(_ _)m
今後の参考にさせて頂きたいと思います。

> . . .ところで、この程度の金属板埋設で落雷確率に影響が生じますか？
> (集落避雷の効果があるかどうか？)

この程度のことで落雷確率に顕著な影響が現われるとは言えないと思います。

カミナリサマというのは、相当気まぐれなところがありまして、
山で草刈りをしていた人の金歯に落雷してみたり、
何でもない平地で草野球をやっていたピッチャーに落雷してみたり、
中には、一旦家の窓から入ってきて、部屋の中を一巡りしてから、
またポイと外へ出て行ってしまふ、といった雷まであるようです。

ですから、銅鐸を地中に埋めたからどうこうということは出来ないと思います。

> 或いは木にぶら下げれば、落雷を誘発する可能性は有りますか？
> (一種の神依としての効果があるか？)

前述の「地中に埋めた」という場合よりは、多少落雷確率が上がる方向に
なると思いますが、銅鐸を枝にぶら下げることによるよりも、むしろ
その木の高さが高いことの方が、落雷確率をあげる意味では効果がある
と思います。

> この相関関係は三遠地方でも成立するのでしょうか？

三河・遠江は、全国大でみて、特に落雷頻度の高い地方とはいえません。

残念ながらこの地方については私は土地カンがなく、雷の落雷頻度に関する
細かいローカルなデータを持っておりません。

従って、三遠地方については、何とも言えません。

doutakusinpo1998

>注目しています。私の仮説では、「銅鐸」にも「誓約」の意味が込められていたこと、>になるものですから。それから、鈴が幾つか付いたものを手に持って舞うのは、今も>「三番叟」などに生きていますが、鈴舞・鐸舞・小銅鐸、アメノウズメが矛に着けて>鳴らした鐸、みんな、根は一つなのだろうな - ?、などと考えています。
諏訪が、鉄の国であったというのは伝説上のことで、実際に考古学的には実証されていないのではないのでしょうか。この点については藤森先生もたいへん苦しまれたといわれています。諏訪が鉄の国であるという考古学実証が出来れば鉄鐸銅鐸後胤説はもっと多くの支持を得ることが出来るのです。!(^^)!
>今年4月の、上社「山出し祭り」は絶対に行くつもりであります。
いいですね。御柱を含めて今年は祭礼が目白押しですね。わたしは、またちょっと相沢忠洋記念館の方が忙しくなってきたので、いけそうにありませんが。

六爾・・・・・・・・(^^)/~

六爾 EmNifty 2.03

154/155 RXE12761 六爾 RE:【親子二代の銅鐸と鑄型の巻】
(18) 98/02/01 00:04 143へのコメント

nifty:FREKIMT/MES/18/143 へのコメントです。
ラン2 さん、こんにちは。

このお話は、初めて聞きました。大変いいお話ですね。一般的に有名な考古学者のご子息の方はあとを継がない、という例が多いなかですばらしいお話だと思います。もっとも、偉大な考古学者ほど生前は認められることが少なかったもので、父親の姿をみて自分はそのようになりたくない、ということからあとを継ぐ人が少ないのではないのでしょうか。森本六爾・藤森栄一・相沢忠洋の各先生方は皆そうでしたが。(_ ;)

六爾・・・・・・・・それでは(^^)/~

155/155 VZD07512 ラン2 RE^2:銅鐸九州出土の可能性
(18) 98/02/01 01:39 144へのコメント

勘太郎さん どんたくさん こんにちは。ラン2です (^^)/

>>その際に、鳥根県古代文化センター提供の銅鐸出土分布表が配布されましたが、>>その時のデータでは、九州からは銅鐸の出土はない、ということになっており>>ました。

九州でも銅鐸は出ているようです。
明治26年頃、福岡市東区馬出・九州大学病院建設中出土と伝えられているものがあります。『考古学ジャーナル』NO.210の銅鐸出土地名表には「伝筑前」となっていました。
中山平次郎「九州における銅鐸」(『史淵』1号 昭和4年)に紹介されているようですが、まだ見ていません。

それと九州からは朝鮮小銅鐸と、その鑄型、銅鐸土製品も少なからず出土しています。
九州・安永田遺跡などにおける銅鐸の鑄型発見によって、九州でも銅鐸が鑄造されていたことが明らかになりました。
ということは、鑄造だけでなく、銅鐸のまつりが九州でも存在していた可能性がじゅうぶんあるってことですよね。
たしかに従来の「銅鐸分布圏」と「銅矛・銅剣分布圏」の対立論に一石を投じる資料だと思います。

>>これは九州も銅鐸文化圏と解釈しても良いのでしょうか？

寺澤薫さんなんかは、「弥生時代の青銅器とそのマツリ」『考古学その見方と解釈 上』の中で、北九州も銅鐸分布の範囲にいれておられます。

ただし前に述べたように『古代出雲文化展』図録の分布図では、北九州は銅鐸分布圏からはずされています。これはおそらく鑄型と朝鮮小銅鐸は範疇に入っていないのだと思います。

つまり研究者によっても、北九州を銅鐸分布圏と解釈する人とそうでない人がいるということです。

どちらにしても九州は銅鐸分布圏の中心とは言い難いのは確かです。

九州では、朝鮮小銅鐸の問題もあります。鋳型についての問題もありますので、また改めてコメントさせてください。

このシンポジウムがはじまってすぐに、朝鮮小銅鐸から小銅鐸へというタイトルでアップしようと思っていたのですが、調べれば、調べるほど難しく、まだまとまらないんです(^_^;;

最後に訂正したいのが、#115/116「青銅器文化圏1/2」のタイトルですが、「青銅器文化圏」を「青銅祭器分布圏」としてください。その方がわかりやすいし、話題に即していると思います m(____)m 青銅器分布圏だと、人殺しの道具としての剣や、権力者の権威の象徴としての鏡も含んでしまいますので(^_^;;

156/156 VZC02152 勘太郎 RE:加茂岩倉遺跡の銅鐸祭祀の時期？
(18) 98/02/01 09:19 147へのコメント

どんたくさん 詳細なレスありがとうございます。
どんたく説、興味深く読ませていただきました。確かに雷に続く夕立は農耕の民には渴望される場所ですね。それで私も「銅鐸と雷」について少し考えてみました。でも即席なので以下ぐらいしか思いつきませんでした。ご笑読ください。

1. 銅鐸は呼び水？

銅鐸と雷がどう繋がるのか？ 夕立はまづ雷鳴があり、その後雨が降るといパターンが多いですが、手押しポンプの呼び水の発想で雷鳴を呼ぶのに銅鐸を鳴らしたというのはどうでしょうか？

銅鐸を鳴らす - - 雷が鳴る - - 雨が降る

という雨乞い祭器だった。

では、聞く銅鐸から見る銅鐸に変わったのは何故かって？ うーん...、もう少しかんがえさせて(^_^;;

2. 夜の銅鐸祭り？

加茂岩倉遺跡ではたき火の跡が見つかったとのことですが、銅鐸祭祀は夜行われたのか？

でも雷は夕方多くて夜は少ないのでは？ うーんんん、

そうだっ、きっと農耕シーズンだけレンタルにしている成功すれば秋には利息の米をつけて雨乞い技師の巫女(男?)と一緒に出雲に返済したに違いない 100%バキッ(.) (^_^;;

漫画的発想だから、突っ込まないでね(^_^;;

しかし、39個の銅鐸を一齐に鳴らしたら感動で身震いしただろうな。銅鐸展でやってほしかったナア。

98.02.01 勘太郎

157/157 QWD02544 どんたく 夜の銅鐸祭り？
(18) 98/02/01 15:36 156へのコメント

勘太郎さん、こんにちは。 どんたくです。

>> 加茂岩倉遺跡ではたき火の跡が見つかったとのことですが、銅鐸祭祀は夜>>行われたのか？

もう少し正確にいうと、加茂岩倉遺跡では、埋土の中に木炭粉が混じっているのが見つかった、ということのようです。

確か神庭荒神谷遺跡の方で、火を焚いた跡が見つかったように記憶しています。

それから、火を焚くのは、夜とは限らないと思います。

山伏が雨乞いのためにゴマを焚くとしたら、昼間でも焚くでしょう。

昭和20年代から30年代の初め頃だったと思いますが、一時期中部地方の木曾川筋などで、湯水対策として、人工降雨の実験が盛んに行なわれたことがありました。

doutakusinpo1998

山の上でヨウ化銀を焚いて、上昇気流に乗せて雨雲まで届かせる。
このヨウ化銀の細かい粒子が核となって、雲の中に小さな雨粒ができ、
これがきっかけとなって雨が降り出す。
というやり方で実験を繰り返し、実際に何回か雨が降り出しました。

これ、山伏の雨乞いのゴマ焚きの現代版でした。(^^)

ただこの場合、全くの晴天では効果が期待できないので、雨雲が立ち込めて、
今にも雨が降りそうなときに、ヨウ化銀を焚きました。

それですから、本当にヨウ化銀のせいで雨が降り出したのか、それともそんな
ことをしなくても、雨が降ったのかが、判然としませんでした。

そんなことで、そのうちにこの人工降雨実験も沙汰済みとなってしまいました。

QWD02544 どんたく

158/158 QWD02544 どんたく RE^2:銅鐸九州出土の可能性
(18) 98/02/01 20:53 155へのコメント

ラン2さん、こんにちは。 どんたくです。

>>九州でも銅鐸は出ているようです。
>>明治26年頃、福岡市東区馬出・九州大学病院建設中出土と伝えられているものが
>>あります。『考古学ジャーナル』NO.210の銅鐸出土地名表には「伝筑前」となっ
>>ていました。
>>中山平次郎「九州における銅鐸」（『史淵』1号 昭和4年）に紹介されている
>>ようですが、まだ見ていません。

ご教示有り難うございました。

慌てて、田中巽「銅鐸関係資料集成」東海大学出版会 を見てみましたら、
チャンと出てました。(^^ゞ シッパイ、シッパイ

この本では、2口の銅鐸が出土したとしてあり、
「中山平次郎氏は本鐸2口のうち1口は現在福岡市東区崇福寺に香炉として
伝えられている鐸であろうと云う。」
とあります。

一方、アサヒグラフ別冊「銅鐸の谷」 p.74 の表では、「筑前：（伝）1」
となっています。

『考古学ジャーナル』NO.210の銅鐸出土地名表では、何口となっているで
しょうか？

QWD02544 どんたく

159/159 BYW00406 かおる RE^2:銅鐸九州出土の可能性
(18) 98/02/01 22:45 155へのコメント

皆さん、こんばんは。
ちょっと、仕事が忙しくてレスが付けられませんでした。

>>中山平次郎「九州における銅鐸」（『史淵』1号 昭和4年）に紹介されている
>>ようですが、まだ見ていません。
この銅鐸は、福岡市在住の中山氏は昭和4年に、元骨董商が手に入れた銅鐸の内側に
「子々孫々寶」と陽鑄されたのを発見して発表されたのですが、森本六爾氏がこの陽鑄が
後
世の偽作であることを見抜いたという、いわくつきの「有銘銅鐸」ではないかと思えます
。
藤森先生の「銅鐸」にもこの話は紹介されています。

今、この立派な流水文銅鐸は昭和60年に重要文化財の指定を受け、辰馬考古資料館が
所
蔵しているということです。

参考
「墓盗人と贖物づくり 日本考古学外史」玉利勲著（平凡社選書142）

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)
ページ(94)

160/162 VEQ00553 竜野 天馬
(18) 98/02/02 21:15

「銅鐸 = 湯沸器説」

会議室の皆さん、こんばんは。かまくらさん、どうもです。約束通りやってまいりました。(^^)

パネリストの皆さんのハイレベルな議論には、ただただ舌を巻くばかりではありませんが、こちらでちと銅鐸にまつわる面白いお話でも聞いて、コーヒープレイクとしゃれてみてはいかがでしょう？ F S F 3で昨年11月頃話題になった、銅鐸をめぐるあるトンデモ学説があるのですが、さいわい向こうで要約転載、引用の了承を得られましたので、ちくちくご紹介させていただきます。
まじめな話をしているときになんだ、と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、こういうトンデモ説、実は意外に、きちんと論理だったツッコミをいれられるかどうかでまっとうな学説を理解しているかどうかの試金石になったりしますので、どちら様もよろしくお付き合いくださいませ。

そのトンデモ説とは、発言タイトルにありますところの「銅鐸 = 湯沸器説」。発端は、「文芸春秋」昨年2月号に掲載された、石垣敬義氏(石垣食品社長)の「銅鐸は湯沸器である」という論文です。
さてさて、ここで問題。いかにして銅鐸で湯を沸かすのか？ 銅鐸を逆さにし、鍋がわりに水を張って火にかけるのか。しかしながら、ここに来られている方なら承知千万のことに、銅鐸というのは孔だらけでとても水など溜められるものではありません。ではどうするのかお分かりになりますか？

石垣説によれば、その手順とは以下の通り。

1. まず地面に大きな穴を掘る。
2. その穴に水を溜める。
3. しかる後に真っ赤に銅鐸を焼く。
4. 穴の水に焼けた銅鐸をほうり込む。
5. 湯が沸く！！

こうなるわけです(笑)

石垣氏自身はこれを実験し、見事に湯が沸くことを確かめたといいますが...。そりゃ沸きますよねえ。ただし、銅鐸である必然性がまったくない(笑)。

どこかの郷土料理で、まさにこういう方法で湯を沸かしている料理があります。たらいに張った水に焼け石をほうり込んで、瞬時に湯を沸かすという。しかし、何が悲しゅうてわざわざ精巧に加工した銅鐸をそんなことに使わなければならないのか...。

石垣氏は、「銅鐸楽器説」を攻撃ターゲットとし、楽器として用いることができないう銅鐸が多数発見されていることから、この説は誤りであるとしてそれを証明するために銅鐸の別の用途を考えたとのことのようです。しかし、この会議室です出に話題になったように「聞く銅鐸から見る銅鐸へ」説として大半の銅鐸が実用的楽器ではなく祭器として作られたものであるという学説が主流であることをご存じなしにこれを唱えているようです。

さらに石垣氏はトンデモの道に走っていきます。「真っ赤に焼けた銅鐸」を証明する、「赤い銅鐸」が発見されていないことについて(氏は「朱を塗った銅鐸」が見つまっていることを赤錆びた銅鐸の見間違いであると主張しているそうですが)、これは、銅鐸が楽器ではないことを知られたくないばかりに、学会と文化庁が「赤い銅鐸」を改竄して通常見られるような銅鐸に作り変えるという「陰謀」を行っているというのです(「正論」97年12月号)。

さあ、どちら様も思う存分笑ってみてください。そして、思いっきりつっこんでみてください。そういうところから、意外と銅鐸に対する理解が深まったりするかもしれませんよ(笑)

最後になりましたが、向こうのフォーラムで快く転載に応じてくださった皆様にこころよりお礼申し上げます。なお、要約による意味の間違い、混乱等が生じた場合はすべて責は竜野天馬にあります。

98/02/02(月) 20:23 竜野 天馬(VEQ00553)

161/162 VZD07512 ラン 2 第29回銅鐸研究会の案内 / 銅鐸博物館
(18) 98/02/02 21:46 018へのコメント

みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

銅鐸博物館（滋賀県野洲町）では、銅鐸研究会が年に何回か、銅鐸についての研究報告会が開かれています。ちょうど次の日曜日がその開催日にあっていますので、ご案内します。以下、案内チラシから引用します。

【日時】2月8日（土）午後2時から4時まで
【会場】銅鐸博物館（野洲町立歴史民俗資料館）研修室
【主催】野洲町教育委員会
【演題】「伊勢遺跡と銅鐸の時代」
【講師】守山町教育委員会 伴野 幸一氏
今回の銅鐸研究会は、滋賀県守山市の伊勢遺跡で調査に携わっている伴野幸一氏に、伊勢遺跡発見の大型掘立柱建物と銅鐸祭祀について詳細な報告をいただきます。特に、銅鐸と同時代の集落の状況と調査課題も合わせて報告していただき、大岩山銅鐸の謎を探るものであります。

*当日受付で定員120名。受講料は無料ですが、入館料が必要。

ラン2は1度も参加したことないけれど、どんたくさんは何度も足を運ばれているのではないのでしょうか？ いかがでした？ >どんたくさん

過去の発表者の一覧を見れば、とても充実した研究会なのではと想像できます。お近くで、時間がある方はどうぞ・・(^_^)

162/162 VZD07512 ラン2 九州出土の銅鐸
(18) 98/02/02 21:46 158へのコメント

どんたくさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

かおるさんのコメントを読んで、『墓盗人と贗物づくり』玉利勲著をあわせて読み返しています。ますますわかんなくなってきました (?_?)

整理するためにまずどんたくさんのご質問に答えます。

>>『考古学ジャーナル』NO.210の銅鐸出土地名表では、何口となっているので>>しょうか？

地名欄に「伝筑前（福岡県）出土、1福岡市東区馬出・九州大学病院」とあり、出土年、型式・文様、高さ、所蔵・保管欄は空白です。つまり何口なのかは書かれていません。文献欄には「中山『史淵』1」備考欄には「病院建設中出土。鈕欠」とあります。

それと出土地不明の中に、型式・文様欄「外2式 4区袈」高さ欄は空白。所蔵・保管欄は「崇福寺」文献欄は「中山『史淵』1」備考欄は「鈕欠」というのがあります。

疑問1、上記の2つは、同じモノなののでしょうか？

さて梅原末治『銅鐸の研究 資料篇（補訂本）』P405を見ますと、筑前・肥前発見の銅鐸・鋳型追加の項に、次のように書かれています。

1 福岡市東区馬出 九州大学医学部附属病院病院建設現場出土 四区袈裟襷紋銅鐸 鈕欠 現高30.7cm 明治26年頃出土 崇福寺蔵品。
中山平次郎「九州における銅鐸」『史淵』第1号 昭和4年 41ページ。
" 「九州の二銅鐸」『三宅博士古希祝賀記念論文集』昭和4年 411ページ。

梅原の本に出てくる4区袈裟襷紋の銅鐸は、『墓盗人と贗物づくり』を読むと、崇福寺に香炉として伝えられている宝鐸であることがわかります。そして『考古学ジャーナル』の出土地不明の分でしょう。

いずれにしろ中山平次郎の論文を読まなければはつきりとは言えません(^_^;; 次の休みに探しに行きます。

それと銅鐸関係の論文を読むとき、九州からは銅鐸の出土はまだないというのをよく見かけます。もちろんこれは、伝筑前を知らないのではなく、伝であることから数にいれておられないのです。

163/165 VZC02152 勘太郎 RE:夜の銅鐸祭り?
(18) 98/02/02 23:04 157へのコメント

ラン2さん、どんたくさん かおるさん、こんにちは、インフルエンザが猛威を振るっています。ご自愛を、濡れマスクが有効という話を聞きました。ご試用を

ラン2さん、かおるさん 九州出土の銅鐸情報、ありがとうございます。これからの発見が期待されますね。

どんたくさん、「雷神祭祀説」に水を差すようなレスをごめんなさい。「ゴマ焚」確かに昼間の行です。たき火のことを打っていて、そのことをチラッと考えたのですがどのぐらい昔に遡れるのか自信がなくてボツにしました。しかし役の行者から考えて相当古いものですね。昨日、近くの「歴史館いずみさの」を見学してきましたが"犬鳴山の修験道"のコーナーがあり雨乞いの護摩を焚いていました。もちろん昼間の行事です。

98.02.02 勘太郎

164/165 VZD07512 ラン2 RE:「銅鐸 = 湯沸器説」
(18) 98/02/02 23:10 160へのコメント

竜野さん いらっしゃい。ラン2です (^o^)/

この話、超歴史の部屋にでてもいいのになぁと、ずっと待ってたんです(^_^)

「銅鐸 = 湯沸器説」が掲載された『文芸春秋』97年2月号と、『正論』97年12月号、しっかりチェックしてますよ。完全無欠のトンデモ説ですね。

ラン2の知人のある考古学の先生は、講演会で1度ならず何度も、この「銅鐸 = 湯沸器説」は本当なのかという質問を受けたと、真剣に怒ってはりました。

なぜ怒っているかという、そういうトンデモ説を説く人に対してはもちろんですが、トンデモ説を信じてしまう一般の聴衆がたくさんいるということについて、今まで考古学者が、いかに考古学をわかりやすくしめしてこなかったかということに対してです。トンデモ説だといって笑い飛ばすだけではなく、考古者がもっときちっと、反論しなければいけないとおっしゃっているのです。

それに影響力の大きい大雑誌がこの説を掲載したのも、はなはだ疑問です。

銅鐸のトンデモ説といえば、昔、カッパブックスの『銅鐸の謎』も大ベストセラーになりましたね(^_^)

トンデモフリークのラン2でした(^_^)

165/165 QWD02544 どんたく RE:第29回銅鐸研究会の案内 / 銅鐸博物館
(18) 98/02/02 23:18 161へのコメント

ラン2さん、こんにちは。 どんたくです。

>>銅鐸博物館（滋賀県野洲町）では、銅鐸研究会が年に何回か、銅鐸について>>の研究報告会が開かれています。

>>.....

>>ラン2は1度も参加したことないけれど、どんたくさんは何度も足を運ばれて>>いるのではないのでしょうか？ いかがでした？ > どんたくさん

>>

>>過去の発表者の一覧を見れば、とても充実した研究会なのではと想像できます。

すべておっしゃる通りです。時々私はこの銅鐸博物館に講演を聞きに行きますが、いつも非常に興味深いお話を聞かせて貰ってます。

講演会場に入る前に住所・名前を書くことになっていますが、そうしておくページ(97)

次回の講演会の予告案内の葉書が自宅に届きます。

講演会のあと、私は大体図々しくあとに残って講師の方に色々質問して教えて貰ったりしています。
場合によっては、その後も手紙のやりとりをさせて貰い、挙げ句のはては銅鐸出土地点の現場まで押しかけて行って見せて戴いたこともあります。(^^)

大阪から滋賀県野洲町まで、マイカーで途中休み休みしながら行きますので、ちょっと時間はかかりますが、いつも「今日はいいい講演を聞かせて貰った」と満足感一杯で帰ってきます。

QWD02544 どんたく

166/169 VEQ00553 竜野 天馬 RE^2:「銅鐸 = 湯沸器説」
(18) 98/02/03 21:22 164へのコメント

ラン 2 さん、こんばんは。

いやぁ、アカデミックな会議室でこのようなバッタモンの話題を振って怒られやしないかと内心びくびくものでしたが(^^;、レスをつけてくださってありがとうございます。

>なぜ怒っているかという、そういうトンデモ説を説く人に対してはもちろんで
>すが、トンデモ説を信じてしまう一般の聴衆がたくさんいるということについて、
>今まで考古学者が、いかに考古学をわかりやすくしめしてこなかったかというこ
>とに対してです。
>トンデモ説だといって笑い飛ばすだけではなく、考古者がもっときちっと、反論
>しなければいけないとおっしゃっているのです。

これですよね。この会議室でこういう話を紹介したことに少しでも学問的意義があるとするは、まさにこういう事だろうと思います。自分は正統派の学問をしているというだけで満足せず、一般の人が明白に誤った道に踏み込もうとしていたら、「それは違うんだよ」ときちんとしてあげることが、その方面について多少なりとも知識を持つものの義務だと思います（私は銅鐸については専門知識はほとんど皆無ですが、どんな分野にも共通していえることですよね）。

「生きて奴隷の民たらんより、死して自由の鬼たらん」
FEB/03 竜野 天馬

167/169 YIG00127 かまくら RE:「銅鐸 = 湯沸器説」
(18) 98/02/03 21:26 160へのコメント

竜野 天馬さん、こんにちは。(^^)

>会議室の皆さん、こんばんは。かまくらさん、どうもです。約束通りやってま
>いりました。(^^)

どうもありがとうございます。
これから会議室終了までの期間 ごゆっくりなされて下さい。

昨年2月の『文芸春秋』の「銅鐸 = 湯沸器説」 このシンポジウムで皆さまどう判断をくだされるか楽しみです。(^^) 『正論』(97年12月)にいたっては、かなりの無理が入っているようですが、その辺りもお聴きしたいですね。
トンデモ説ではありませんが、「えっ！」という衝撃は感じてしまいました。
本屋さんからバック在庫で取り寄せできるようなら、この説を読みたいものです。銅鐸を考える場合の反面教師とするか、トンデモ説と言われるものの中から思わぬインスピレーションを掴むかいろいろありましょけれども、皆さまのご意見をお伺いしたいと思います。
因みに私は銅鐸を焼き、それで湯を沸かすなんて形状的にあまり合理的ではなく、そうゆう使い方はしていなかったと思ってます。確かに表面積は大きく、熱伝導性（この表現が適切か疑問）は有りそうですが、しかし、あれだけ装飾性に富むものを無造作に穴にほうり込むなんて・・・。一連の作業で傷でも付いたら大変じゃないですか。
太占や亀卜のように傷やひびを見て吉凶を占うっていうんなら まだしも納得させられそうにもなるのですが、それさえ充分 怪しげ ですね。(^^)

doutakusinpo1998

> 最後になりましたが、向こうのフォーラムで快く転載に応じてくださった皆様
>にこころよりお礼申し上げます。

司会者からもお礼を申しあげたいと思います。
ますます【シンポジウム】銅鐸を考える が盛り上がるよう努めさせていただきますので、ご期待下さい。

司会者 / かまくら

168/169 QWD02544 どんたく トラの皮のフンドシ
(18) 98/02/03 21:55

みなさん、こんにちは。 どんたくです。

「福は～内。鬼は～外。」
今日は2月4日、節分です。

寅年にちなんで、「トラの皮のフンドシ」について・・・。

もうずいぶん前のことになりますが、あるバーで酔っ払った どんたく氏、
「俺はカミナリサマの研究？をしているんだ」と息巻いておりました。

「じゃ、どうしてカミナリサマは、トラの皮のフンドシをしてるの？」
女の子にそう聞かれて、ギャフンと参ってしまった、どんたく氏でありました。

その後、苦心惨澹、長年にわたって研究？を重ねた結果、どんたく氏の
到達した結論は、以下のようなものでありました。

トラの皮のフンドシをしているのは、「鬼」であって、カミナリサマ
ではない。

風神・雷神というように、カミナリサマは神様であって、鬼ではない。

従って、カミナリサマはトラの皮のフンドシをしていない。

現に、俵屋宗達描くところの風神・雷神図も、
京都三十三間堂の風神・雷神像も、
中国・敦煌・莫高窟の天井に描かれた風神・雷神も、
すべて雷神は、トラの皮のフンドシをしていない。

カミナリサマがトラの皮のフンドシをしているのは、
漫画の世界だけである。

それでは、なぜ鬼はトラの皮のフンドシをしているのか？

鬼は鬼門、即ち丑寅（東北）の方角に住んでいる。
だから鬼は牛のような角を持ち、虎の皮の褌をしているのである。

「銅鐸 = 湯沸器説」に続いて、ちょっと遊んでみました。(^^)

QWD02544 どんたく

169/169 BYW00406 かおる RE:「銅鐸 = 湯沸器説」
(18) 98/02/03 23:21 160へのコメント

竜野 天馬さん、はじめまして。
「銅鐸 = 湯沸器説」の紹介ありがとうございました。

私も、F S F 3のお笑い劇場は好きで巡回しております。
この説の紹介は花山院さんのデビューコメントでしたね。

石垣説については、文藝春秋を買って読みましたが、衝撃の説でした。
あまりの、衝撃に考古学界は開いた口が閉じないのか、反論がありません。
それとも、まともに反論するのがあほらしいのでしょうか。

この銅鐸 = 湯沸器は、倭人の風呂用の湯を沸かすためだそうですが、倭人が弥生時代から
入浴の習慣があったのを、この説で初めて知りました、それも、村の共同湯だったなんて
。

ただ、弥生時代の風呂の痕跡がどこで発掘されたのか記載されていないのが残念です。

それに、弥生時代には米を煮ていなかったという指摘には、動転してしまいました。では、煤のついたりこげた米が残った弥生時代の甕はなんだったのだろうかと悩んでおります。土器を使いご飯を炊く実験のビデオを大阪府立弥生文化博物館で見ましたが、実は土器に見せ掛けた鉄鍋だったのかもしれませんがね。

また、銅鐸が使われなくなったのは、鉄鍋、鉄釜が各戸に普及したためだそうですね。これで、各戸で風呂に入ることができるようになり、村の共同湯はすたれてしまうのですね。

歴史は繰り返すのか、銭湯は内風呂に駆逐されてしまいます。しかし、各戸に鉄鍋や鉄釜が普及するほど弥生後期に製鉄事業が繁栄していたなんて知りませんでした、なんて不勉強だったんでしょうか。鉄鍋はきっと、銅鐸が早く出現しなくなる、吉備や出雲から普及しはじめたのでしょうか。ただ、これも、著者が弥生時代後期に各戸に鉄鍋や鉄釜が普及していたということを証明出来るほどの鍋や釜の出土例を隠しておられるのが非常に残念です。ぜひ、弥生時代の鉄鍋や釜を見てみたいものです。

この衝撃の説を読みながら、風呂好きの私が最も同情したのは、銅鐸の出土していない当時の九州や関東・東北の人達は、十分な湯を沸かせずに思いっきり風呂に入れなかったことです。それとも、銅矛や銅剣や小銅鐸を焼いて湯を沸かしていたのかもしれませんが。それなら、それでよいのですが。

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

170/170 YIG00127 かまくら RE:トラの皮のフンドシ
(18) 98/02/04 07:23 168へのコメント

どんたくさん、こんにちは。(^^)
昨日の節分、私はTVの豆まき報道を見ただけで終わってしまいました。おやつは豆ではなく焼きリンゴでしたが、悪霊邪気を払い福を待ち望む気持ちは一倍ということで、自分を納得させておりました。

> 鬼は鬼門、即ち丑寅(東北)の方角に住んでいる。
> だから鬼は牛のような角を持ち、虎の皮の褌をしているのである。

これは覚えておいて、何かの機会にさりげなく会話のなかに挟み込んでみたいですね。おしゃべりが弾みそうです。(^^)
お借りしちゃっても一向にかまわないでしょうか？

司会者 / かまくら

171/172 SGL02501 弥生 銅鐸国「弥生説」
(18) 98/02/04 15:30 コメント数: 1

どんたく様 「銅鐸独楽」...懐かしいですねえ...
》ご面倒ですが、1行37文字以内くらいに区切って書いて戴くと助かります
分かりました、そうします。「39字で改行」が、機械の言い付けだと思っ
ていて、駄目な場合があるのに気が付かず、ご迷惑をおかけして、済みません
でした。どうして皆さんののは短くて不揃いなのか不思議に思っていました。

皆様こんにちは、#103へのRESその他もありますし、どんたくさん からも
言われましたので「弥生説」の骨子を発表することにします。が、その前に、
そもそも、わたしが「質問1」を司会者さんに提出したのは、「銅鐸とやら
を、辺り一面にまき散らした責任者は誰なのか?、その人物・団体がいたのなら
一体何者なんだ?」と云う設問に答える新仮説...銅鐸の背景に迫りその時代の
イメージが浮かぶ様な...の登場を、ずっと待ち望んでいたからでした。でも
考えてみれば「名前を尋ねる時は、先自分から名乗る」と云う礼儀がありま
した。ですから、中古品ですけど「弥生説」を披露した上で新仮説の発表を
ページ(100)

待つことにします。など、言いながら一言。このシンポジウムが銅鐸と云う物の観察が主眼なら、「弥生説」に期待とかはしないで下さい。これは古事記をテキストに日本書紀や風土記などを参考書にして「銅鐸国」を捜した幻想の世界です。目に見えるものしか信じない向きには、無縁だと思して下さい。では『銅鐸国（仮名）の構想』です、短く箇条書きにしようと努力しましたがやはり説明が必要だと思ったので、結局長くなりました。お許し下さい。

第一部 銅鐸国誕生の背景

導入部として『古代出雲文化展』の図録を、ちょっとお借りします。P.68です。著作権問題が気になりますが、お持ちでない方の為に、少しだけ写します。

{ 特別な人たちの墓。(注・これは小見出しです)
弥生時代に本格的に開始された稲作は、まず耕作地の開墾、...略...灌漑といった多くの人間の共同作業が不可欠となる。...略...水田を維持していくための水利、管理においても多くの人間の労働力の管理や意見の調整が必要となる。...略...生産力が安定してくると人口も増大し、耕地の拡大が始まる。すると...略...他の集団との軋轢...略...集団同士の緊張はリ-ダ-の役割と権威を高めていく。やがてムラとムラを統合したり-ダ-が生まれ、大きな地域的まとまりをもつクニが形成されてきたと考えられる。} - 引用終わり -

『銅鐸国』の発想は、上に引用したようなことと関連しながら始まりました。水田稲作はすでに縄文文化の時代から始まっていると思われるので、ここには『弥生時代に本格的に開始された稲作』と書かれています。引用文からは、「次第に開墾地が広がると、灌漑設備や集団の管理などが必然的に発生し、次第に大きなクニへと発展し、リ-ダ-も小地域のリ-ダ-から、統合地域リ-ダ-、クニのリ-ダ-（国王と言えます）が生まれた。」と読み取れます。

この頁には、「本格的に稲作が開始された弥生時代」の前の時代には、触れていませんが、前段階の「本格的でない稲作」の存在を示唆しています、すでに、縄文土器の稲穂の痕跡が東北地帯でも発見されているのです。人々がホ-ムレス状態から、家族単位、血族集団、村落の発生までは自然現象？としても、その先の大きな地域的まとまりをもつクニには、仲々スナリ行くとは思えません。なぜなら、国が違ふということは、神が違ふことだと思います、古代の人が自分達の神をどれ程恐れ大切にしていたかは遺物を通して察することが出来ると思えます、人間はできても、神の統合など不可能ではありませんか？、初期のクニは宗教国の形態をなし呪術的な司祭王が統率していた、と思われているのではなかったでしょうか。国々を取り纏めて各国の神の上に共通の神を載せる、という形式だけの統合なら出来るでしょうが、それも段階を経ないと無理だと思います。神を敬うのは精神の問題です。振り返り見るなら現在の我々も、土地土地で自分達の神を、祭り親しんでいるではありませんか。

人間の争いの始まりは「食糧の取りっこ」の様です。食糧を自然の産物に頼り常に不安に苛まれ小競り合いを繰り返している、未発達な集団が幾つも存在していた時代に、この食糧問題を「解決する方法」を目の当たりに示すことの出来る勝れて強力なリ-ダ-が現れたとしたらどうでしょうか。「弥生説」は、銅鐸が「食糧問題解決」と密接に結び付いている、とするものです。

93年の『銅鐸国クエスト』から少し引用します。『縄文文化が開化していた、日本列島に、すこしずつ異常があらわれたという。縄文後期頃から徐々に寒冷化が始まったという、そのため食糧が慢性的に欠乏状態になり、それまでの生活が続けられなくなったらしい。荒廃する国土と人心を回復させるべく王達の苦難が続く、縄文水田はそんな頃に始まったのだろうか。だがまだ、水田農耕を選ぶか狩猟・漁撈に生きるかを選択することが出来た...』。『こんな場合は個人・団体を問わず集まってくる、職を求め、暖を求めて、或いは何かに追われてワラワラと...。そして中でも強力だった新移民団のお陰で大騒ぎが起こることになった。何と彼等は、今までにない国家経営を始めようとしたのだ。猛反対があったことも最後まで抵抗した人々があったことも神話にチラチラ伺える。...』。

冒頭の引用文の『灌漑設備や集団の管理』には、指導者がいたのではないのでしょうか、このノウハウを持ち込んだ集団と指導者は、恐らく海外先進国からの、「国家経営」を経験していたグル-ブと関係があるのではないかと思うのです。稲作にも歴史があり、列島に初期水田稲作が始まった時点で、いきなり高度な技術や進んだ優れた農具の存在は疑問ではないかと思いました。ですから個人的・家内工業的・小グル-ブ的な稲作を、大規模水田経営に広げて、恐らくそれまで個々に抱えていた「何時か訪れる飢餓への恐怖」を開放、或いは開放しようとした計画・理想があり、その構想を持ち込んだ団体が、政策実施の為に製造したのが銅鐸かも知れないと思うのです。彼等はすでに銅鐸の祖形を知っており、この大規模な水田経営の普及のために、銅鐸を利用しようと思いついたのかも知れません。

doutakusinpo1998

せん。彼等が善意だけの集団であったなどとは思われません。発想の基にあったものは征服計画だと思えます。時期は縄文晩期に著しく人口が減り、弥生時代の開幕となったその後でしょうか、弥生人が増え人口が増加し始めていた様です。
(続く)

どんたくさん、「弥生説」は、こんな様なことで、始まります。
この後は、2、幻想銅鐸国、3、出雲と銅鐸国 4、銅鐸の正体、と
全部で4つに区切りました、一挙放出しようかと思いましたが、長いし、
「もう止めていい」と言われたら止めようと思って区切りました。
続けて、一つずつUPをして宜しいでしょうか？。

172/172 RXE12761 六爾 RE:銅鐸国「弥生説」
(18) 98/02/04 16:43 171へのコメント

弥生さん、こんばんは。

がんばって弥生説アップしてください。楽しみにしています。

六爾

173/176 YIG00127 かまくら RE:銅鐸国「弥生説」
(18) 98/02/04 20:48 171へのコメント

弥生さん、こんにちは。(^ ^)

>この後は、2、幻想銅鐸国、3、出雲と銅鐸国 4、銅鐸の正体、と
>全部で4つに区切りました、一挙放出しようかと思いましたが、長いし、
>「もう止めていい」と言われたら止めようと思って区切りました。
>続けて、一つずつUPをして宜しいでしょうか？。

是非お続けになってくださいませ。
既に1を読んでしまったので、今更「これで終わり」ってなってしまうたら
欲求不満になってしまいそうです。結論までご面倒でも御説のご紹介よろしく
お願いいたします。m(_)_m

「弥生説」から銅鐸を捉え直してみることで、より多角的に 銅鐸 について
考えることが可能になっていくのではないのでしょうか？

司会者 / かまくら

174/176 QWD02544 どんたく RE:銅鐸国「弥生説」
(18) 98/02/04 21:33 171へのコメント コメント数:1

弥生さん、こんにちは。 どんたくです。

遂に出ました「弥生説」！ 有り難うございます。m(_)_m

>> どんたくさん、「弥生説」は、こんな様なことで、始まります。
>>この後は、2、幻想銅鐸国、3、出雲と銅鐸国 4、銅鐸の正体、と
>>全部で4つに区切りました、一挙放出しようかと思いましたが、長いし、
>>「もう止めていい」と言われたら止めようと思って区切りました。
>>続けて、一つずつUPをして宜しいでしょうか？。

「銅鐸の正体」まであるんですかぁ？

これでいよいよ「銅鐸シンポ」も盛り上がりそう！

是非是非続きをお願いいたします。

・・・こういうこと、一パネリストの私というのが越権行為かな？

司会のかまくらさ～ん。よろしく～。

QWD02544 どんたく

175/176 QWD02544 どんたく RE^2:トラの皮のフンドシ
(18) 98/02/04 21:33 170へのコメント

かまくらさん、こんにちは。 どんたくです。

》> 鬼は鬼門、即ち丑寅（東北）の方角に住んでいる。

ページ(102)

doutakusinpo1998

>> だから鬼は牛のような角を持ち、虎の皮の褌をしているのである。
>> これは覚えておいて、何かの機会にさりげなく会話のなかに挟み込んで
>> みたいですね。おしゃべりが弾みそうです。(^.^)
>> お借りしちゃっても一向にかまわないでしょうか？

どうぞ、どうぞ。お気に召して戴いて大喜びです。
特許料無料で公開いたします。どんどんお使い下さい。(^.^)

P . S .

#168 で、
>>今日は2月4日、節分です。
と書いたのは、「2月3日」の誤りでした。
謹んでお詫びとともに訂正いたします。m(_ _)m

QWD02544 どんたく

176/176 QWD02544 どんたく RE^2:銅鐸国「弥生説」
(18) 98/02/04 21:47 174へのコメント

どんたく よりの訂正です。

#174 をアップしてから見たら、すでに司会のかまくらさんから、
#173がアップされておりました。

しまった。しくじった！

#174 の最後の行、
>>司会のかまくらさ～ん。よろしく～。
は、取り消させて戴きます。

かまくらさん、すみません。m(_ _)m

QWD02544 どんたく

177/177 RXE12761 六爾 RE:藤森栄一「銅鐸」より
(18) 98/02/05 03:32 152へのコメント

nifty:FREKIMT/MES/18/152 へのコメントです。
どんたくさん、こんにちは。

亀レスでごめんなさい。

>一つは、「銅鐸は巨木の下に埋められていたのでは？」という発想。
>もう一つは、「銅鐸の流水文は、雷を表わす」と考えた人があったという話。
>
>六爾さんの領域を侵犯するようで、申し訳ないのですが、私もこの本が大好き
>ですのでお許しください。>六爾さん
いいえ、うれしいです。わたしからも、お願いいたします。

銅鐸と雷の関係、興味深いです。
いっぱいいろいろな説があって大変ですが、楽しく読ませていただいております。

六爾

178/181 VZD07512 ラン2 CD-ROM 蘇る出雲の銅鐸文化
(18) 98/02/05 23:48 018へのコメント

みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

今日は、CD-ROMの紹介です(^_^)

【タイトル】蘇る出雲の銅鐸文化—加茂岩倉遺跡出土銅鐸のすべて
【企画・監修】島根県加茂町 加茂町教育委員会
【問い合わせ先】加茂町教育委員会 TEL 0854-49-8510

内容のメインは、加茂岩倉遺跡出土の銅鐸の、一つ一つの多角度から撮られた
写真です。
ラン2のお気に入り、銅鐸のいろいろな音が聞けることです (^o^)/ カン カン

doutakusinpo1998

展示会のミュージアムショップでいろんなものと一緒に行ったので、価格を覚えてません。御存知の方、フォローしてくださいませ・・(^_^;)

179/181 VZD07512 ラン2 【佐原真『世界考古学大系』執筆秘話の巻】
(18) 98/02/05 23:48 026へのコメント コメント数:1

みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

お待たせしました。ひさびさのこぼれ話です。
#26の用語解説 菱環鈕(^ ^)の続きとして読んでね。

平凡社『世界考古学大系』に佐原真さんが執筆することになったいきさつについて、ご自身が『小林行雄先生追悼録』（京都大学文学部考古学研究室編 天山舎 1994年）に書かれています。

この本によると、最初は小林行雄・佐原真の共同執筆ということだったそうです。

京大のそばの進々堂という喫茶店で、一緒に分類作業に没頭し、菱環鈕等の名称をつけたのも小林先生ということでした。
佐原さんの原稿は、構成から文章表現にいたるまで、全面的かつ徹底的に小林先生の手が入っているそうです。

さて本ができてまずびっくりしたのは佐原さんです。
共同執筆が、単独執筆になっているではありませんか！
それは弟子を思う小林行雄先生の配慮で、3校か4校くらいで、佐原さんには告げず単独執筆にされたようです。
小林先生のところに飛んで行った佐原さんに、小林先生は微笑んでいいました。
「僕の名前があれば、杉原君が手を入れないと思って」

つまり最初から大学院生の名も知れない学生に、単独執筆させさことは、編集の杉原壮介先生が絶対に反対することを見越して、小林先生との共同執筆ということで、進められていたのです。(; ;) イハナヤネ・・ロジヤ
もし共同執筆で出たら、当然小林先生の業績になっていたでしょうね。

ラン2の一口メモ(^ ^)
平凡社『世界考古学大系』は、とても定評のある本であるということ、前にも書きました。図書館などでご覧になる機会も多いと思います。

さてこの『世界考古学大系』日本編の4冊(1959~1961)には、「世界考古学大系日本編補遺」という幻の抜刷りがあります。
実は1985年の刊行を目標に編集されたのですが、いろいろな事情で、ほぼ完成しているにも関わらず、刊行されませんでした。
この編集業務を平凡社より受託した天山舎が、お詫びに抜刷りとして業界関係者に配られたものです。

銅鐸については、佐原真さんが執筆されています。鋳型の発見など新資料の紹介が中心です。

抜刷りといっても、約270ページの大部です。
めったにでないでしょうけれども、古書店探索の折には、頭の隅にでも留めておかれてはいかがでしょうか。

では また (^.^)/ ~~~ ラン2

180/181 VZD07512 ラン2 RE^2:「銅鐸 = 湯沸器説」
(18) 98/02/05 23:49 169へのコメント

かおるさん みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

>> この衝撃の説を読みながら、風呂好きの私が最も同情したのは、銅鐸の出土して
>>いない当時の九州や関東・東北の人達は、十分な湯を沸かせずに思いっきり風呂に
>>入れなかったことです。
(改行位置変更)

この部分、毎日読み返して、うちのだんなさんと笑い転がっています (^o^)
ラン2家に、明るい笑いをありがとうございます m(_ _)m

すみません。ゴミでした(^^;;

181/181 RXE12761 六爾 RE:【佐原真『世界考古学大系』執筆秘話の
(18) 98/02/06 03:02 179へのコメント

nifty:FREKIMT/MES/18/179 へのコメントです。
ラン2さん、こんにちは。

>小林先生のところに飛んで行った佐原さんに、小林先生は微笑んでいました。
>「僕の名前があれば、杉原君が手を入れないと思って」

ある意味では、よき友でもあり、ライバルであったのですね。ただ、この本も含めて杉原先生の編纂された本はすべて、徹底的に杉原先生の手が入るのが常だったようです。『日本農耕文化の形成』などはそのいい例です。

>
>つまり最初から大学院生の名も知れない学生に、単独執筆させさことは、編集
>の杉原荘介先生が絶対に反対することを見越して、小林先生との共同執筆とい
>うことで、進められていたのです。(;-;) イハシ ヲネ・・・ウジウ

しかし、この佐原編年には納得のいかない部分もあられたようです。栄一先生は絶賛していますが、杉原先生はすぐに対抗して『日本青銅器の研究』を著しています。
このように、なにかとライバル意識を小林先生には杉原先生は燃やされていました。これが、大きく弥生時代研究の進歩をもたらしたのではないのでしょうか。

>もし共同執筆で出てたら、当然小林先生の業績になっていたでしょうね。

こちら辺が、梅原マツチ先生との違いでしょうか。(;-)
小林先生は苦勞されておられたので人の心の痛みがわかる人だったのですね。
(/;-)(;-)

六爾

182/183 QWD02544 どんたく アラミタマ・ニギミタマ
(18) 98/02/06 21:45 142へのコメント

KANAKさん、こんにちは。どんたくです。

#142「RE:KANAKさんからのご意見紹介」をもう一度読み返して気がつき
ました。

>1.雷神の性格
>(荒)崇り神・・・雷鳴・雷光・落雷――>火災・殺傷
>(和)豊饒神・・・降雨――>水耕――>成長・豊作

これ、もしかして、アラミタマ・ニギミタマ(=ニキミタマ)ということ
を念頭におかれてのご発言でしょうか？

実は今まで私は、このアラミタマ・ニギミタマという観念が、銅鐸の時代まで
遡って存在したかどうか、わからないと思っておりました。

しかし、上記のKANAKさんのご発言を読み返して、次のようなことを考
えました。

- (1) もし、アラミタマ・ニギミタマという観念が、先住系の人たちに定着した
考えであったなら。
(こうであるかどうかは、これからもっと検討する必要がありますが)
- (2) もし、銅鐸が先住系の人たちが使ったものであったなら。
(これは、すでに「どんたく説」で唱えているところです)

この二つの「もし」を前提とすることが許されるならば、アラミタマ・
ニギミタマという観念が、銅鐸の時代にすでに存在していた可能性が相当に
あるとしてもよいのではないかと。

確かに、カミナリというものは、
荒々しい恐ろしい面

知れませんが、例えば飢饉時の最低食料の支給とか安全保障とか。銅鐸親国は同時に武力集団でもあったらと思うられます。それも、強力な新兵器を携えていた可能性が思われます、それなしではこの計画は不可能であろうと考えられます。

記・紀の中の、国王とその一族が西に東に平定に向かったと言う記述が、銅鐸を携えての稲作普及と、銅鐸親国への服従を迫るものだったのではないかと仮定してみました。当時この農業集団の他に縄文時代からの、港を拠点とする交易集団や、山地に棲み、狩猟・採取の生活集団も存在していたと思われれます。彼等と戦闘状態に陥ったり、婚姻関係を結んだりしたことも有り得ます、これも記・紀の記述からの連想です。海山の幸と交換して蛋白源の補給や、鉱物資源も必要ですし、何よりも燃料がなければ銅鐸製造は出来ません。新しい農業国の運営が、立地条件や気候風土の関係もあって、成功しない場合もあったでしょう、経営が破綻した場合は、隣国と合併させたり親国に吸収するなら、親国に損害はありません。反乱はもちろぬ討伐です。稲作奨励と技術指導と、時には軍隊の出動等を交え、「銅鐸国」は活気に満ちた何年かを過したのでしょうか。

「銅鐸国」を古事記に求めて捜した結果、「銅鐸国王」がいるとすれば、この一族しかいないと思われたのは「崇神一族」で、これには拍子抜けの感じがしました。わたしの記憶では、崇神は「江上・騎馬民族説」では「任那」から出発して北九州を占領し、第一回の日本建国をした。であり「水野・三王朝交替説」では最初の天皇とされた人だったと思います。「なんだ、またこの人か」と思い、「やっぱり崇神には何かがある」と思ったのでした。それから「彼が銅鐸王だとすると、古事記はどう読めばよいのか」と言う路線を進むことになり、その彼を中心に銅鐸国の繁栄と衰退を綴ったのが、「銅鐸国クエスト(92/7～94/5)」でした。そこには「崇神」を銅鐸王と判定した理由・彼の後継者・その後の銅鐸国などをゴチャゴチャと述べたのですが、その当時に、どうしてもはっきりしなかったのが出雲との関係で、その部分は「？」の儘になっていました。

古事記では、崇神以降三代に出雲との関係が見られるので、出雲と銅鐸史との関係が予想はされましたが、古事記から探るのは無理でした。漠然と崇神銅鐸王朝が出雲にも進出したのだろうか、程度に考えていましたが、今回の企画で思い切って、出雲国を初期銅鐸国に当てたらどうなるか、という実験を試みることにしました。(そんな訳で次回は「銅クエ」では扱わなかった、出雲です。)

184/187 BYD06141 中村 勝英 RE:アラミタマ・ニギミタマ
(18) 98/02/07 00:15 182へのコメント

どんたくさん、こんにちは・・・KANAKです。
どんたくさんの長編を拝見しての、思いつくままの感想に真正面から対応頂き、恐れ入ります。

>1. 雷神の性格
> (荒) 崇り神・・・雷鳴・雷光・落雷――>火災・殺傷
> (和) 豊饒神・・・降雨――>水耕――>成長・豊作

>>これ、もしかして、アラミタマ・ニギミタマ(=ニキミタマ)ということをや
>>念頭におかれてのご発言でしょうか？

仰るとおり、荒魂・和魂を念頭においたものです。とても確信を持つには至っておりませんが・・・。

>5. 変化の要因
>これらの変化の要因を、単なる伝播的技術(思想)変化と見るか、或いは権力の介入による社会的技術(思想)変化と見るか？(・・・征服等を含む？)
>が問題だと思いますが、総合的に判断して(便利な言葉ですが、要するに私の検証不足による山勘です)後者の可能性も十分有りうると思います。

で申し上げたとおり、「社会的変化」即ち先住民と移住民の存在を意識しています。そして、その先住民は出雲を本拠地とし、後に移住民により本拠地に逼塞させられた所謂「国神系=出雲族」の可能性も有ると考えております。さらに、大物主伝承に見られるとおり、元来「荒魂・和魂」の観念は「国神系=出雲族」のものであり、移住民？に伝播した可能性もあると思います。

従って、先住民の祭祀が「銅鐸=雷神祭祀」の集団農耕祭祀<であるならば、

>>さらに飛躍して考えるならば、カミナリの神様こそが、アラミタマ・ニギミタマ
>>という観念を生み出す源になった可能性さえありうるかもしれません。(^^)

と言うのは、むしろ論理的帰結といえるのでは無いかとすら思います。

また、>C. 銅鐸文様には「流水」と共に「降雨」が窺える(ヨツカスル)?< について申し上げますと、大型銅鐸に見られる杵組の細かい網目が「降雨」をイメージした? と考えたものです。
杵組み自体も傾斜地の少耕地(段々畑的水田)を思わせませし、「亀」・「水鳥」・「昆虫?」もそれに相応しいかな?・・・と考えたものです。

ハッキリ言って” 思いつきです ” が何かのご参考になれば幸いです。

185/187 QWD02544 どんたく RE:銅鐸国「弥生説」2
(18) 98/02/07 00:33 183へのコメント

弥生さん、こんにちは。 どんたくです。

「弥生説」1では縄文時代から始まりましたね。
銅鐸を論ずるのに縄文時代から説き起こすという気宇壮大な構想は、恐らく世界広しといえども、「弥生説」くらいしかないのではないのでしょうか?

待ち望んでいた「弥生説」2、読んでいて面白い。(^^)
「どんたく説」とは全く違うアプローチですが・・・。

銅鐸を持った人たちが日本に渡来してきたときの状況について、
「アメリカ大陸に白人が渡ってきたときと較べて、どうだったのだろうか?」
と思いながら、読ませて戴きました。

>>今回の企画で思い切って、出雲国を初期銅鐸国に当てたらどうなるか、
>>という実験をしてみることにしました。
>>(そんな訳で次回は「銅クエ」では扱わなかった、出雲です。)

次のアップを楽しみにしています。

QWD02544 どんたく

186/187 RXE12761 六爾 銅鐸起源をめぐる杉原先生と小林先生の闘い
(18) 98/02/07 01:04

こんにちは、ようやく杉原先生の名前がちらほらしてきたようなので、ここで少し解説してみましょう。

らん2さんのご紹介にもありましたが、戦後の学界を代表する弥生時代研究者に明治大学の杉原荘介先生(ここでは杉原旦那と呼ばせていただきます)と、京都大学の小林行雄先生(小林ライター先生です)がいらっしゃいます。

初めての方にはちょっと解説をしておきますと、お二人はともに森本六爾先生の弟子で、六爾先生の死後、「弥生式土器聚成図録」を共同で完成させました。そして、小林ライター先生は唐古遺跡を杉原旦那は登呂遺跡を発掘し弥生時代研究を大きく前進させました。

この二人は非常に仲もよかったのですが、お互いライバル意識を激しく燃やしたことで有名でした。登呂遺跡の発掘報告書が出来たとき、杉原旦那はこれで小林ライターの唐古に勝ったと、いったそうです。

銅鐸に関する、見解も大きく異なり、大ざっぱに説明すると下の図のようになります。当時の学生たちは、この二大巨人の学説の大きな違いに右往左往したそうです。

	杉原旦那説	小林ライター説
.....
年代について	弥生時代後期	弥生時代前期
銅鐸の原料	銅銭	銅剣・銅鉞
埋蔵理由	政治的圧力	祭器として埋納

六爾(RXE12761@niftyserve.or.jp)

187/187 RXE12761 六爾 杉原旦那と佐原真先生
(18) 98/02/07 01:04

らん2さんのお話の付け足しです。

「弥生式土器あるいは銅鐸に関しては、ことごとくと言っていいほど、杉原先生と私とは考え方が違うのです。ずっと年上の方に対して面と向って本当はあんまり違った考えを言えないはずなんだけれども、私は言いたいことは幾らでも言うんです。そうすると先生（杉原旦那）はニコニコ笑って聞いていて、あのべらんめえ調子で「そんなことねえよ」と言われまして……。考え方が違うと一緒に居にくいのが普通だと思うのだけれども、先生は幾ら考え方が違ってもとにかく私を非常にかわいがっていただいて、今考えると本当に懐かしい思い出ばかりです。」大塚初重編『考古学者杉原荘介』より

とても、杉原旦那の人物の大きさがわかりますよね。

六爾(RXE12761@niftyserve.or.jp)

六爾の博物館 (<http://www.machida.xaxon-net.or.jp/~waki/>)

188/189 BYD06141 中村 勝英 RE:アラミタマ・ニギミタマ(追加)
(18) 98/02/07 09:08 184へのコメント

どんたくさん、今日は……。KANAKです。
一寸言い忘れていた事が有りましたので、追記します。

それは”天神さん”信仰です。
ご承知のとおり、全国にはおびただしい”天神神社”がありますね。
私は、かねてより本来は中央貴族の政争に過ぎない”菅原道真”の怨霊が、
何故これほど民衆信仰の対象として拡大したのか？疑問に思っていました。

其処に、どんたくさんの”出雲族=土師氏=菅原道真=雷神信仰”の発想を
拝見して感じたのですが”天神神社”は元来”菅原道真”以前からの民衆
(SF気味に言えば”先住民”)の広範な”雷神信仰”が基礎となっており、
後世において中央貴族の”菅原道真=北野神社”と結びつけられ、再編され
た為にその本来の意味(痕跡)が失われた……。と言う発想は？と思ったのです。

これを検証するためには「天暦元年=947=>1000?」以前に「天神神社」
の淵源が認められれば良いのですが、”アルイハ?”と思わせる古社も有る様です。

「銅鐸=雷神信仰」が民衆の底流に残り「天神さん」に繋がったりしたら面白いの
ですが……。差し当たっては”SF的妄想”に止めて置きます。

189/189 BYW00406 かおる 搬入土器と「神武東征」説話
(18) 98/02/07 10:19 064へのコメント

どんたくさん、こんばんは。
超亀レスで、申し訳ありません。

どこに、このレスを着けようかと迷ったのですが、結局ここにしました。

どんたくさんは、
>>このように考えてくると、大和朝廷の祖先である、いわゆるテンソン族が
>>大和に入ってくる前から、近畿地方には先住者が住んでおり、この人たちが
>>「銅鐸を持っていた人々」であったとするのが、一番分かりがよいように、
>>私は思います。
と考えられています。

実は、私も古事記を最初に読んだ頃は、神武東征説話は過去の記憶の反映かと漠然と
思っていました。
その後、考古学に興味を持ち、奈良の鍵・唐古遺跡や纏向遺跡の調査記録などを読むよ
うになって、少し疑問が出てきました。

それは、#67で触れたように、纏向遺跡から出土する土器の内、大和以外の土器では
東海系が最も多く、次いで吉備・山陰系そして西部瀬戸内系の順となっています。
後には河内や播磨系の土器も多くなるようです。
この搬入土器の出身地はいずれも銅鐸が出土する範囲と重なります。
特に、東海は三遠式銅鐸が多数出土していますね。

この、纏向遺跡が形成される前には、大和盆地には唐古・鍵に弥生人が大きな環濠集落を営んでいました。

ここからは、銅鐸の鋳型の外枠と見られる土型が出土していることから、ここで、銅鐸を作製していたと推定してもよいと思います。

すると、ここは、どんたさんの考えでは先住民の集落となると思います。

この唐古・鍵遺跡から出土した土器で近畿の弥生土器の編年の基礎が作られています。

この、唐古・鍵の集落が次第に衰退したあと（戦闘でいっきに破壊された様子はないようです）、纏向遺跡が出現します。

この、二つの遺跡から出土した土器の研究結果を見ると、どうも、弥生後期から古墳時代前期の大和では九州系の土器が無いように思えるのです（考古学の一寸先は闇だそうですので、今後検出されないとは言えませんが）。

この時期に九州から人が大量にやって来たとすると、もっと九州系の土器が大和盆地の遺跡から出土してもよいのではないのでしょうか。

吉備や山陰における土器の搬入の状況はよく分かりませんが、吉備や北陸・丹後系の土器が出雲の四隅突出墓から出土していても、九州系の土器は出ていませんね。

もしかすると、これらの地域にも九州系の土器は少ないのかもしれない。

「古代出雲文化展」図録のP78から79には近畿地方の土器の動きが記載されていますが、これを見ますと土器は近畿から山陰・瀬戸内・九州・東海・関東と広がっている状況がわかります。

それから、もうひとつ、これは出典を記録していなかったので根拠薄弱ですが、弥生後期の集落付近から出土する石鏃の形式が近畿の形式ばかりで九州系のものが見られないらしいのです。

（これは、戦わずして降伏した、あるいは和解したとも解釈はできますが）

考古学の成果を見ますと、どうも九州の人達が瀬戸内を經由して近畿へやって来たというふうには見えないのです。

このことから、短絡的かもしれませんが、銅鐸から古墳への変化は、その共同体の中での変化ではないかとも思えるのです。

「神武東征」説話と考古学の成果の狭間で考え込んでおります。

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

190/190 KFA03002 kikkawa RE:搬入土器と「神武東征」説話
(18) 98/02/07 18:40 189へのコメント

「神武東征」説話と考古学の成果の狭間で考え込んでおります。

こんにち、かおるさん。私も同様に、近年の考古学によるデータと、神武東征との整合性の悪さに悩んでいる一人です。

色々考えては纏まらないのですが、一つの空想を述べてみます。以下のストーリーは、私のこの時間における底の浅い思いつきに過ぎず、不備や誤りを指摘されると直ぐに変わってしまう程度のもので（^^;であることを予め述べておきます。

『魏略』（『翰苑』引用）によると、倭国の使者が自ら、呉の太伯の後と述べたとしており、中国正史では『梁書』にも引用されています。これは、邪馬台国時代の話であり、既に古墳時代に入っており、纏向がその中心地とする見方で言うと、巨大古墳の王権のルーツを示すもので、それがそのまま天皇家のルーツと成るかも知れません。

『日本書紀』では、神武天皇は筑紫の日向から発したとしており、九州東岸でしょう。華南から出発すればこの地域に到達し、そこを拠点としたことは尤もらしく見えます。

皇祖として天照大神（私は卑弥呼+台与説を支持）を祭る伊勢神宮に関して、神社の様式については、所功（原著1973）『伊勢神宮』（講談社学術文庫）によると、

“木造でも神社建築には、古い様式を今に伝えているものが少なくない。たとえば、出雲大社に代表される“大社造”は、・・・

それに対して、伊勢の神宮をはじめ全国の神明神社にみられる“神明造”は、同じく切妻屋根である。しかし、入口を平側の中央につけた平入型式で、両妻に棟を持ち上げる“棟持柱”が立っている。これは、大社造が大陸系の住居様式を伝えるのに対して、むしろ南方系の高倉型式を留めるものとみられる。”としています。

これらを恣意的に結び付けて、黒潮に乗った人や文化の流通を考えると、北部九州勢力との関連は少なくても良いのではとの憶測をしてみました。（^^;

doutakusinpo1998

191/193 RXE12761 六爾 RE:日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)
(18) 98/02/08 00:51 100へのコメント コメント数:1

nifty:FREKIMT/MES/18/100 へのコメントです。
kikkawa さん、こんにちは。(^^)

亀レスで申し訳ありません。m(____)m
東京芸大の関係の方でしたら、芸大の関係の方でホームページをお持ちの学生さんがいらっしゃるの、概要を伺ってみてはいかがでしょうか。

<http://www.geidai.ac.jp/~yamauchi/science/tani/tani.html>
に、芸大の谷口陽子さんがホームページをもたれていらっしゃいますので、そちらでうかがってみればいいのでは、六爾からの紹介と付け加えておいてくださいかね。(私も聞いてみますが、質問が食い違うといけないので、直接の方が良いと思います。)もしかしたら、戸津教授に直接訊いていただけるかもしれません。(^^)

話は前後いたしますが、佐原教授の森先生への批判はすごいですね。(@_@) もっとも、小林行雄先生への森先生の批判の裏返しだと思うのですが。ものを見なければといいますが、佐原先生の最初の銅鐸著作はものを全くと言っていいほど見ずに、写真だけで書いたのではなかったではないでしょうか。ものものどくだわると、だんだん梅原マツチ先生になりますよねえ。(=_=)らん2さんいかがでしょうか。

森先生ファンの六爾でした。(^^)/ ~~~
六爾の博物館 (<http://www.machida.xaxon-net.or.jp/~waki/>)

>
> 文部省に提出されたものは、すべて国立国会図書館へいきます。
> それはちょっと大変。(^^; 戸津教授自身が、他の本に概要を書いていたりしない
> ですかねえ?
>

六爾 EmNifty 2.03

192/193 VZD07512 ラン2 RE:搬入土器と「神武東征」説話
(18) 98/02/08 01:02 189へのコメント

かおるさん こんにちは。ラン2です (^^)/

>> 考古学の成果を見ますと、どうも九州の人達が瀬戸内を經由して近畿へやって来た
>>というふうには見えないのです。
>> このことから、短絡的かもしれませんが、銅鐸から古墳への変化は、その共同体の
>>中での変化ではないかとも思えるのです。(改行位置変更)

う~ん。
たしかに近畿では九州系の土器の出土は少ないけれど、鏡と武具と装飾具の墓への埋
という墓制の変遷を考えると、ラン2は、初期大和政権に与えてた九州の影響の大き
さを考えざるを得ません。

つまり弥生時代、九州では墓に鏡と武具と装飾具を副葬品としています。弥生時代の
近畿では、何も副葬しないことが多いですよね。
それが前期古墳には、椿井大塚山、黒塚にしても、たくさんの鏡を副葬します。
近畿の弥生の墓制と、近畿の前期古墳につながりはないけど、九州の墓制と、近畿の
前期古墳の間には類似点が多々あります。

近畿の前期古墳に影響を与えたのは、九州だけではありません。
吉備も忘れてはなりません。吉備の特殊器台も重要なポイントですよ。
特殊器台から、前期古墳に見られる円筒埴輪へと変化していくことは、みなが認める
ことです。

搬入土器の問題も、見過ごせませんが、土器というものは日常生活品です。
たとえば極端な言い方ですけど、九州からの王がやってきて上層部だけ入れ替わった
としたら、政治権力は大きく変わるけど、一般の人の生活まで変わるとはいえないの
ではないでしょうか・
ラン2

193/193 VZD07512 ラン2 RE^2:日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)
(18) 98/02/08 02:24 191へのコメント

六爾さん こんにちは。ラン2です(^o^)/

>>話は前後いたしますが、佐原教授の森先生への批判はすごいですね。(@_@)も
>>っとも、小林行雄先生への森先生の批判の裏返しだと思っております。ものを見
>>なければといいますが、佐原先生の最初の銅鐸著作はものを全くと言っていい
>>ほど見ずに、写真だけで書いたのではなかったではないでしょうか。ものもの
>>とこだわると、だんだん梅原マツチ先生になりますよねえ。

#70のkikkawaさんへ、レスするタイミングを失ってて、そのままになってたんですが、再び発言するチャンスがやってきました(^_^)

ラン2が思うに、
>>『出雲の銅鐸 発見から解説へ』(NHKブックス)での、森浩一・同志社大教授に対す
>>る批判は痛烈ですね。

この批判って、『対論 銅鐸』森浩一・石野博信(学生社 1994年)の中で、さりげ
批判されていることへのお返しのような気がしました。

短いので引用しますと、
従来、梅原先生とか三木(文雄)さんとか佐原さんとか、銅鐸を扱った人たちが、
遺跡との関係を遺物そのものほど意識されていないということがあります。
森先生はこの本の中で、銅鐸の出土地、遺跡を考える重要性を語っておられます。
もっとも、佐原さんと仲が悪いのは、今にはじまったことではないですけどね・・・

佐原さんの他者への批判は有名で、昔はとてもシャープで、的を得たものでした。
それが最近では、すっかり泥臭くなってしまって、実に残念です。

それと『出雲の銅鐸 発見から解説へ』(NHKブックス)を読もうと思っていらっしゃる
みなさまへ、ひとことだけ注意したいことがあります。
この本は、実にタイムリーに出版されたとは思いますが、時間を追っての対談モノ
です。そのため最初と最後では、まったく矛盾した内容になっています。
なおかつその時々での放言そのものである印象も受けました。

佐原さんにも、春成さんにも、銅鐸についてはいくつものすぐれた論文、著書があり
ます。入門書としてまずそれらを読んでからでないと、佐原さん、春成さんの研究そ
のものが(?_?)と思われるのではないかと危惧しますが、どうでしょう？

気がついたら、森先生だけに、「先生」をつけてました(^_^; ;
ラン2は森先生のミーハー的ファンですので、お許しください・・・

194/194 VZC02152 勘太郎 加茂岩倉遺跡銅鐸の埋められ方
(18) 98/02/08 10:10

こんにちは パネリストの皆様。またまた些細な疑問です。よろしくお願
い申し上げます。

NHK人間大学「古代国家の胎動」第3回「倭国の乱」36ページで都出
比呂志さんが

「吉備と出雲では青銅祭器を使って集団の結束や先祖を顕彰する呪術が廃
れ、墓を大規模に築造して、そこに葬った先祖祭祀を中心に結束する新しい
宗教が登場していたと解釈してはどうでしょうか」

と述べておられます。まさにkikkawaさん、かおるさんの『青銅器祭祀から墳
墓祭祀移行説』ですね。

それでは加茂岩倉の銅鐸、神庭荒神谷の銅剣、銅矛は何故かくも整然と埋
められていたのか？というのが今日の疑問です。

爆発的に流行した"たまごっち"も今やおもちゃ箱か机の引き出しの隅に
忘れられています。廃止した祭器はスクラップ再利用かゴミ箱行きが普通か
と思います。整然と埋められていたことについては

1. 同一集団内での祭祀の変更というよりは異集団の圧力により埋めざる
を得なかった。

2. 他の勢力より押しつけられていた祭器と訣別するのに摩擦を避けるた
め鄭重に葬った。(これも同一集団内での祭祀の変更の一種ですが)

などとするほうが私にはわかりやすいです。

同一集団内での祭祀の変更(個人への権力の集中)ならば集団祭祀の象徴で
ある銅鐸を個人の墳墓に独占併葬したのでは、と思うのですが....

doutakusinpo1998

kikkawaさんの日頃論証を重ねられてのご発言から『青銅器祭祀から墳墓祭祀移行説』は単なる思いつきではないことは十分理解しているのですが、どうも些細なことでひっかかって^^;

98.02.08 勘太郎

195/200 QWD02544 どんたく 天神信仰
(18) 98/02/08 17:37 188へのコメント

KANAKさん、こんにちは。 どんたくです。

>> 「銅鐸 = 雷神信仰」が民衆の底流に残り「天神さん」に繋がったりしたら面白い
>> のですが・・・差し当たっては”SF的妄想”に止めて置きます。

単なる”SF的妄想”で止めて置くのは勿体無いと思いますヨ。

京都の北野天満宮の中には、今も火雷神の小さな社があります。
実はこれが元々は北野天満宮の本家?のようです。

北野天満宮の創建については、

「北野天満大自在天神宮創建山城国郡上林郷縁起」によれば、
菅原道真公死去後、多治比奇子(ツジヒノアコ)に託宣があった。

「北野寺僧最鎮記文」「天満宮託宣記」によれば、
神良種(ミノヨシタ)の息子の太郎丸に火雷神の託宣があった。

とされ、これに基づいて北野の地に天満宮が作られたということになっているようです。

多治比 = 蝮 = まむし = 蛇 (本居宣長の説)・・・雷神信仰に結びつく
神 = ミワ・・・・・・・・・・・・・・・・先住系

というように、託宣がおりた人たちは何れも先住系につながる人達
だったように思われます。

「大鏡」では、死後の菅原道真は怨霊となり、雷神となって、時平一族を
苦しめます。

このように天神信仰は、普通怨霊思想と結び付けて論じられている場合が
多いように見受けられます。

しかし私は、単に怨霊思想だけではなく、先住系のチャンピオンとして(*1)
立身出世した菅原道真が最後には落剥の身となったことに対する、
一般民衆(先住系)の同情と反発が非常に大きかった、というような事情
もあったのではなからうか、というように密かに考えております。

天神信仰に関しては、非常に多くの論著があり、これの全部に目を通す
ことは到底不可能です。

しかし、この問題を探っていくことによって、さらに古い時代の先住系
のあり方にまで到達できないものかしら、などと考えてはいるのですが、
残念ながら、まだそこまで私は手が回らずにいます。

【参考】

(*1) 菅原道真は、先住系である出雲の土師氏の出身。

【参考資料】

村山修一編「天神信仰」民衆宗教史(4) 雄山閣
眞壁俊信「天神信仰史の研究」続群書類従完成会
坂本太郎「菅原道真」吉川弘文館

QWD02544 どんたく

196/200 QWD02544 どんたく RE:搬入土器と「神武東征」説話
(18) 98/02/08 17:37 189へのコメント コメント数: 1

かおるさん、こんにちは。 どんたくです。

>> 実は、私も古事記を最初に読んだ頃は、神武東征説話は過去の記憶の反映かと
ページ(113)

>>漠然と思っていました。
>> その後、考古学に興味を持ち、奈良の鍵・唐古遺跡や纏向遺跡の調査記録など
>>を読むようになって、少し疑問が出てきました。

かおるさんよくご存知のように、私は考古学には弱いんです。
ラン2さんの #192 にダッコにオンブです。(^^)

>> それは、#67で触れたように、纏向遺跡から出土する土器の内、大和以外の
>>土器では東海系が最も多く、次いで吉備・山陰系そして西部瀬戸内系の順となって
>>います。
>> 後には河内や播磨系の土器も多くなるようです。
>> この搬入土器の出身地はいずれも銅鐸が出土する範囲と重なります。
>> 特に、東海は三遠式銅鐸が多数出土していますね。

これらの土器が日常用品ということであれば、#192 でラン2さんが述べて
おられるとおりであろうかと思えます。

また、纏向の時代には、すでにテンソン系は大和だけでなく、上記の諸地域
も支配下におくような状況になっていたとすれば、これらの諸地域の土器が
纏向にあってもおかしくないように思います。

>> この時期に九州から人が大量にやって来たとなると、もっと九州系の
>>土器が大和盆地の遺跡から出土してもよいのではないのでしょうか。

確かにこのことは一つの「？」ですね。
しかし、大艦隊を組んで一挙に近畿地方に攻め入って制圧したのではなく、
最初はごく少数の人たちがやって来て、それが長年かけて徐々に勢力を
伸ばして行ったとすれば、どうでしょう？

それから、すでにラン2さんがご指摘のように、大和の埴輪の原形は
吉備に見られるようですが、さらに古墳の原形形態についても、
吉備 纏向 大和全体
というような見方ができるのではないのでしょうか？

大和における銅鐸から古墳への移行は、少なくとも吉備など、西の方の
影響を受けているように思われます。

>>このことから、短絡的かもしれませんが、銅鐸から古墳への変化は、
>>その共同体の中での変化ではないかとも思えるのです。

(1) 天つ神・国つ神という考え方が根強くあること。
(2) 銅鐸祭祀と古墳祭祀との間には、大きな断層が感じられること。
(3) 祭祀形態の変更は、宗教の変更を示唆していると思われること。
などから、
銅鐸祭祀から古墳祭祀への変化は、同じ共同体の中で自然に移行した
ものとは、私には考えにくいのです。

QWD02544 どんたく

197/200 QWD02544 どんたく 「神武東征」とメイフラワー号
(18) 98/02/08 17:37 189へのコメント

かおるさん、こんにちは。 どんたくです。

>>「神武東征」説話と考古学の成果の狭間で考え込んでおります。

私は「神武東征」説話を読むときに、アメリカの建国のプロセスを念頭におきながら読んでいます。

1620年11月、101人の乗客を乗せたメイフラワー号はアメリカ東海岸の
コッド岬(マサチューセッツ州)に到着しました。

翌年4月にメイフラワー号が英国に帰港するべく出帆するまでに、約半数
の人が死亡したそうです。

101人の乗客の中には、Miles Standish という名前の軍人がおりました。
この人は、移住者の安全確保・護衛のため、雇われた軍人のリーダーです。

この Miles Standish がアメリカ到着後に最初にやったことは、戦争では
ページ(114)

ありませんでした。
彼は、周辺の原住民であるアメリカン・インディアン達と友好的な関係を結ぶことを一生懸命になってやったのです。

何しろ多勢に無勢、もしもアメリカン・インディアン達に敵意を抱かれたら、移住者達は皆殺しにあうことは必至の状況だったのでしょうか。

白人達が北米大陸で自分達の領域を拡張していったのは、それからずっと後のことのようにです。

200 年余り前にアメリカ合衆国を建国したときには、確かまだ13州しかなかった筈です。

映画の西部劇の舞台となっている「西部」は、テキサス州辺りですが、テキサス州というのは、現在のアメリカ合衆国の真ん中辺りです。西部劇の時代には、まだ白人の勢力範囲はその辺りに留まっており、太平洋岸までは到達していなかったのでしょうか。

確かにアメリカ大陸は非常に広いです。
しかし、白人は非常に高度な武器・技術を持ちながら、北米大陸全体を席捲するのに、非常に長い期間を要しているわけです。

どうも銅鐸の話をするのに、西部劇まで持ち出して、すみません。

ただ、新しい移住者たちが、新しい場所で勢力を確立するまでには、相当な長期間が必要なのではないかと、いうことが言いたかったのです。

いわゆる「神武東征」説話は、私はやはり過去の歴史的事実を何等かの形で反映しているものではないかと思っています。

ただ、これが神武天皇一代の間に一気に大和を手中に収めたとされて、一種の武勇伝として語られていることには疑問をもっています。

恐らくテンソン系の人たちは、西の方から、瀬戸内海沿岸沿いに、相当長い年月をかけて段々と東の方へ移動していったのではないかと。

その間、吉備の辺りにも、相当長期間にわたっていたのではないかと。

近畿地方に辿りついたときにも、最初はごく少数で、大勢の先住者たちに囲まれて、非常に厳しい状況の下にあったのではないかと。

最初は近畿地方のどこかの片隅でヒソソリと暮らし、先住系の人たちの生活文化にも或る程度慣れ親しんでいったかもしれない。
それがやがて相当な年月をかけて、やっと勢力を伸ばすことができるようになっていったのではないかと。

などというように色々妄想を逞しくしています。(^^)

QWD02544 どんたく

198/200 QW101226 もりきん RE:搬入土器と「神武東征」説話
(18) 98/02/08 18:02 189へのコメント

かおる さん、パネリストのみなさん、こんにちは。
ホント、興味深い話のテンコ盛りで毎日楽しみにのぞかせていただいています。

黒塚の行列の中で、「九州の弥生墓から鏡がでるけれど、銅鐸出土地域のそれからは鏡がでていない。鏡を銅鐸の原料にしたのかも」というかおるさんの話、ずっと印象に残ってて、いつか質問しようと思ってました。

え～と、鏡の埋納と銅鐸祭司というのは別に同居しててもおかしくないですよ。片方は死者の弔いに関し、片方はお祭りですから(コツル、ダツイ、サカ・・)生まれたらお宮参り、死んだらお寺、てなものでしょ。それがお互いに入り込んでいかなければ、この両地域の文化が全く異質のもだったということでしょう。今更、私の言うことではないですが。ところが、ラン2さんの言われるように、初期古墳の中に突如、鏡が入る。しかも、古墳自体に吉備や出雲の影響も見られる。土器や石鏃の出土内容に関して、かおるさんの言われるとおりなら、全く奇怪な・・・

これについて、みなさん、どう思われますか。

もりきん(QWI01226)

199/200 BYW00406 かおる RE:搬入土器と「神武東征」説話
(18) 98/02/08 18:28 192へのコメント

kikkawaさん、ラン2さん、つばやきのようなレスに丁寧にレスを頂きありがとうございます。
マルチレスですがお許しください。

kikkawaさんへ

>> 『魏略』(『翰苑』引用)によると、倭国の使者が自ら、呉の太伯の後と述べたとし
>>ており、中国正史では『梁書』にも引用されています。これは、邪馬台国時代の話で
>>あり、既に古墳時代に入っており、纏向がその中心地とする見方で言うと、巨大古墳
>>の王権のルーツを示すもので、それがそのまま天皇家のルーツと成るかも知れませ
うん、実は、巨大古墳を作った者たちが一貫して続いていて現在の天皇家に繋がっ
ているといえるかどうかは、疑問という程ではないにしても、はっきりと議論の前提と
できるほど自信がありません。

ラン2さんへ

>>たしかに近畿では九州系の土器の出土は少ないけれど、鏡と武具と装飾具の墓への埋
>>という墓制の変遷を考えると、ラン2は、初期大和政権に与えてた九州の影響の大き
>>さを考えざるを得ません。

昨日の午後、例によって檀考研附属博物館の資料室で三角縁神獣鏡に関する本を読んで
いて、ふと、前期古墳の副葬品の種類が北部九州の弥生時代の甕棺墓の副葬品と良く似て
いて、北部九州の影響が考えられるという見解をどこかで読んだことを思い出しました。
(帰って探したら「古代日本と古墳文化」(森浩一著:講談社学術文庫)でした。)
ラン2さんのおっしゃるとおりで、単に偶然だと言い切るわけにはいけないでしょう
ね。

確かに、北部九州の墓制の影響はあるのだと思います。

ただ、この影響の仕方をどう理解すべきか、良く分からないのです。
戦争に負けたため進駐軍がやって来て墓制を強制したのか、あっちの墓制がよさそうだ
というので、主体的に取り入れたのかです(近畿勢が連合した各地域の墓制の一部分づつ
を取り込んで、連合の象徴だとばかりに前方後円墳を作ったという理解もできるようにも
思います。)

ほかのパターンもあるかもしれませんが。

>>搬入土器の問題も、見過ごせませんが、土器というものは日常生活品です。
>>たとえば極端な言い方ですけど、九州からの王がやってきて上層部だけ入れ替わった
>>としたら、政治権力は大きく変わるけど、一般の人の生活まで変わるとはいえないの
>>ではないでしょうか・・・

そういうシナリオも考えましたが、上層部だけ入れ代ったので九州系の土器が出ないとい
うのは、具体的にはどう考えればよいのでしょうかね。

例えば、

「何かの理由で近畿勢は手を挙げたので、九州の王とその側近だけが、のこのこと纏向
(これは例です。)にやってきて近畿勢の人達を支配した。
この時には、王の家族も側近達の家族、それに軍隊などは本国に置いて来たので、本国
から土器などを持って来る必要がなく、自分達の日常生活品は現地調達にした。
その後も、近畿からは九州へ人や物は動いたが、九州からは物も人もあまりこなかった
ので、庄内式土器は九州で出土するが、九州系の土器は纏向では出土しない。」

また、

「上層部は少数だったので日常生活の土器はほとんど残っておらず、出土しているのは一
般の人達の使った土器ばかりである。」
というようなシナリオです。

今のところ、北部九州の墓制が近畿へ影響していることは否定しませんが(もちろん吉
備の影響も否定しません)、征服者としてやって来たという解釈には、今一つ腑に落ち
ないものがあります。

P.S(以下私信モードですみません)

ラン2さん、今日、「須恵器生産の研究」が届きました、早速の手配ありがとうございます
ました。

とりあえず、全ページを繰って眺めさせて頂きましたが、なんとか読めそうです(基礎
知識が不足しているので解るとは申しません)。

しかし、第8節装飾付須恵器総覧はすごいです、よくあれだけあつめられたのしたね。
それから、第2章「近畿地方の須恵器生産」はしっかりと拝読させていただきます。
著者さんによるしくお伝えください。

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

200/200 BYW00406 かおる RE:搬入土器と「神武東征」説話
(18) 98/02/08 19:29 196へのコメント

どんたくさん、こんばんは。
銅鐸のシンポでこんな話しもどうかと思ったのですが、日頃疑問に思っていた事なので、この際、皆さんの御意見を聞いて、できればすっきりとしたいと思い、あえて発言しました。

もちろん、どんたくさんに他意はございません。

>>大和における銅鐸から古墳への移行は、少なくとも吉備など、西の方の
>>影響を受けているように思われます。
#199でも、申し上げたとおり、私も北部九州や吉備の影響は否定しません。

ここで、一つ教えて頂きたいのですが。
どんたくさんのテンソン族というのは弥生時代に北部九州で銅矛を祭器としていた弥生人とは違う人達を想定しているのでしょうか。

それから、
>>恐らくテンソン系の人たちは、西の方から、瀬戸内海沿岸沿いに、相当
>>長い年月をかけて段々と東の方へ移動していったのではないかと。

>>その間、吉備の辺りにも、相当長期間にわたっていたのではないかと。
(#197の一部をこちらにコピーしました。)
吉備や出雲では突線鈕式銅鐸の3~5式が出土せず近畿より早く銅鐸祭祀が終了したと思われませんが、これもテンソン族によるものだと考えられておられるように思いますが、それでよろしいのでしょうか。

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

201/201 QWD02544 どんたく RE:搬入土器と「神武東征」説話
(18) 98/02/08 22:25 200へのコメント

かおるさん、こんにちは。 どんたくです。

>> 銅鐸のシンポでこんな話しもどうかと思ったのですが、日頃疑問に思っていた
>>事なので、この際、皆さんの御意見を聞いて、できればすっきりとしたいと思い、
>>あえて発言しました。
>> もちろん、どんたくさんに他意はございません。

このように色々な考え方を出し合ってお互いに議論しあい、考えること
によって、「シンポ」して行くのではないのでしょうか？(^_^)

それでも、スッキリするところまでは、中々いかないかもしれません。
何しろ専門家の人たちにも分かっていない「謎」にとり組んでるのですから。

>> どんたくさんのテンソン族というのは弥生時代に北部九州で銅矛を祭器
>>としていた弥生人とは違う人達を想定しているのでしょうか。

はい。そのように考えないと、今まで言ってきたことと矛盾してしまう
ことになってしまいますね。

また、北部九州から銅鐸の鋳型が出土し、その鋳型と同系統と思われる
銅鐸が中国地方から出ていることからみても、北部九州と中国地方には
同系統の人たちがいて、何等かの交流があったのではないかと考えます。

そしてこれらの人たちは、テンソン系の人たちとは別だと考えます。

では、テンソン族はどこからきたのか？
「高天原から来た。」では答になりませんしねえ。
朝鮮半島の方からでしょうか？
それとも、kikkawaさんが#190に書かれているように、華南からで
しょうか？
そこはよくわかりません。

>> 吉備や出雲では突線鈕式銅鐸の3~5式が出土せず近畿より早く銅鐸祭祀が
ページ(117)

かおる さん、はじめまして、たけ(tk)と申します。

》 この時期に九州から人が大量にやって来たとなると、もっと九州系の土器が
》 大和盆地の遺跡から出土してもよいのではないのでしょうか。

たとえば、元王朝では蒙古高原の産物がたくさん使われていたとか、江戸城
では岡崎の食器を使っていた、とかいう傾向があるのでしょうか？。

- -

》 この、纏向遺跡が形成される前には、大和盆地には唐古・鍵に弥生人が大き
》 な環濠集落を営んでいました。

》 ここからは、銅鐸の鋳型の外枠と見られる土型が出土していることから、こ
》 こで、銅鐸を作製していたと推定してもよいと思います。

》 すると、ここは、どんたさんの考えでは先住民の集落となると思います。

》 この唐古・鍵遺跡から出土した土器で近畿の弥生土器の編年の基礎が作られ
》 ています。この、唐古・鍵の集落が次第に衰退したあと（戦闘でいきなり破
》 壊された様子はないようです）、纏向遺跡が出現します。

この「唐古・鍵の集落が次第に衰退」し始めたところというのは、実年代では
いつ頃になるのでしょうか？。の前2～1世紀は衰退時期ではないですね？。

》 010/190 KFA03002 kikkawa RE:議題 1「銅鐸はどこから来たのか」

》 があります。古い例では、滋賀県新庄銅鐸(II-1式)があり、奈良県唐古遺跡・第II様
》 式の弥生土器(1995年当時の暦年換算で前2～1世紀、現在の編年観ではもっと遡る?)
》 の文様に似るとしています。

たけ(tk) / GGB03124@niftyserve.or.jp

206/212 RXE12761 六爾 RE:搬入土器と「神武東征」説話
(18) 98/02/09 00:13 190へのコメント

nifty:FREKIMT/MES/18/190 へのコメントです。
kikkawa さん、こんにちは。

> 「神武東征」説話と考古学の成果の狭間で考え込んでおります。
> こんにちは、かおるさん。私も同様に、近年の考古学によるデータと、神武東征と
> の整合性の悪さに悩んでいる一人です。

> そういえば、森先生は邪馬台国九州説の立場から、邪馬台国東遷説をとらえて
いらっしゃいましたね。

> これらを恣意的に結び付けて、黒潮に乗った人や文化の流通を考えると、北部九州
> 勢力との関連は少なくないのではとの憶測をしてみました。(^^;

> 銅鐸が航海用具だったという説もありましたよね。そんな風にも考えられます
でしょうか。

六爾(RXE12761@niftyserve.or.jp)

相沢忠洋記念館 (<http://www.machida.xaxon-net.or.jp/~waki/aizawa/>)
六爾の博物館 (<http://www.machida.xaxon-net.or.jp/~waki/>)

203/212 SGL02501 弥生 RE:銅鐸国「弥生説」2
(18) 98/02/08 23:24 185へのコメント

どんたく様 素早い RESで恐れ入ります。

》 銅鐸を論ずるのに縄文時代から説き起こすという気宇壮大な構想は、恐らく
歴史は一時代ずつ切り取って考えるものですか？、銅鐸が弥生時代であれば、
縄文から考えるのは、当たり前だと私は思っていました。

》銅鐸を持った人たちが日本に渡来してきたときの状況について、これは違います。誤解でなければ、私の書き方が悪かったのでしょうか。祖形と考えられる「銅鐸の先祖」は、渡り物かも知れませんが、銅鐸は日本で考案された日本製だと考えています。作った人達には青銅器の製造についての知識があったと思われる。渡来した人かも知れないし、その人達から教えられたのかも知れません。

「弥生説」3は、今、短くするのに苦労しています。それで、繋ぎに「ドンたく説」にちょっと「突っ込み」をしてみようと思います。お覚悟を！
ま、子供っぽい質問なんですけどね...

- 1、銅鐸を造った「先住民」とはどういう人達を指すのですか？、青銅器鑄造の技術を、どうやって知ったとお考えですか？、
- 2、『鳴り響く雷を神の怒りの声として恐れ、この神の怒りをなり鎮めるために銅鐸を地中に埋め、雷神から雨の恵みを受けて、農作物の豊穡を祈った』について...
 - ・ 神はどうしてそんなに怒るのですか？、人間は身に覚えがあった？
 - ・ 『神の怒りをなり鎮め』て、おとなしく静かになってしまったら、その後雨は、降らなくなってしまいませんか？、ココントコがワカラナイ。
 - ・ 雨雲はイコ-ル雷雲とは限らないし、晴天の霹靂なんてのもあるし、雷神に祈るのなら、むしろ「どうぞ落ちないで下さい」ではないでしょうか？
- 3、雷神の棲家が雲の中だとは早くに気が付いていたでしょう。古代の人は優れた自然観察者で、自然について多くの知識があったに違いないと思います。その雲は太陽より低く、場所によっては足下にもなります、「雷様を下に聞く」と言う状況です。従って神位は低かったのではないのでしょうか。黄泉の国に現れたのも、神格が低いと思われていたから、ではなかったかと考えますが...
- 4、銅鐸を雷神対策だけに絞るのには、高価過ぎる気もするし、確かに、稲光を思わせる図柄もありますが、絵にはトンボやカマキリもあるし...です。

昔々、日本の国土で、最も恐れられたのは「火山の噴火」ではないかと、私は考えています。火を吐く神は同時に豊穡の女神であり、この女神は、農作物だけでなく鉱物資源も土石も生み出した、と神話にあります。如何でしょう？。

どんたく様に申し上げます。わたしは文句を言われたので「悪かった」と思い37字を超えないように協力しております。でも、他にも一行字数の多い方がいらっしやいますね。この方達は、協力を拒まれたのですか？、どんたくさんが注意をなさらなかったのですか？、後者でしたら私に対する差別だと思えます。どんたくさんだけでなく、先にあげた「先住民」の他にも、不用意に使われている言葉が多い様に感じます。大和王朝(王権)とか天皇家なども、具体的に、初代(××天皇とか)を明らかにしないと、どの時代のことか分かり難いです。いろいろの説がありますから...。言葉の中味の理解が各自で異なると、話が噛み合わなくなる恐れがあります。もうひとつ、銅鐸=祭器と決め付けている発言が多いようですが、どういう理由で「祭器」と言い切れるのか、御自分のお考えを先に発表すべきだと思います。「○○先生の説だから」ならその様に、です。でもそれって、少し寂しくありませんか？。 <弥生>

204/212 SGL02501 弥生 RE:アラミタマ・ニギミタマ(追加)
(18) 98/02/08 23:34 188へのコメント

KANAK様

「天神様」は文字の通りに、天の神様のことで、古代の人がその存在を信じた自然神の一つだと思います。多分当初は固有の名前など必要ではなく、山の神様海の神様、天の神様、地の神様、など生活に密着して信仰されていたと思われます。これらの神様がそれぞれ「眷属」を従えていると思われる様になったのは、仏教の影響でしょうか、雷様も、天の神様の眷属の一人とされた、と思います。天の神様は都会では、お稲荷さんの様に、その辺の横町などに祭られていたらしいですが、この天とは、天に恥じない、とか、天に替わって成敗致す、とか、おテントウ様が見てるよ、とか、ごっちゃになって使われて、とにかく一番偉い神様として、何だか分からないままに、庶民に親しまれているものと思います。

さて、菅原道真是御存じの様に、恨みを抱いて死んだので、御霊信仰の対称です。彼の政敵は余程ろめたかつたらしく、彼が亡くなった後に、関係者の死や落雷・旱魃などの天災が続くと、道真の怨霊が雷神となって崇っていると信じ、「天満大自在天神・太政威徳天」として祀り、祟り神として拝まれたそうです。その祟り神に対するのと落雷に対する恐怖が、一つになったと言われています。次第に、各地にある天の神様の社に道真の霊が合祀されたり、逆に道真を祀った社に雷神が合祀されたりしていく訳です。ですから、本来天の神様は「天神社」で、菅原道真是「天満宮」です。「天満宮」をテンジンサマと呼ぶのは、ごちゃごちゃになっている証拠ですね。落ち着いて考えてみれば、雷様が崇る訳なんて

doutakusinpo1998

ないじゃあありませんか。

< 弥生 >

209/212 GGB03124 たけ(tk) RE:銅鐸と雷の分布
(18) 98/02/09 00:47 060へのコメント

どんたくさん、はじめまして、たけ(tk)ともうします。(^^;)

》今回は、銅鐸の出土分布と、雷の発生頻度分布との間に関係がありそうな
》地域について見てみます。

これ、面白そうですね。

》このような雷の頻度分布を表わす全国的なマップとして、
》「年間雷雨日数分布図」(Isokeraunic Level Map: 略してI K Lマップ)
》というのがあります。(*1)

全国的な銅鐸の出土分布と重なるのでしょうか?。もちろん、

銅鐸の出土地 = 銅鐸を祀る潜在的傾向を有する人々が住んでいた 雷が多い
となるはずですから、

銅鐸の出土地 雷の多い地域

が証明できれば「このテーゼは学術的にも立派なものだと私には思われますが
如何でしょう」。(中山道さん、m(_ _)m)

たけ(tk) / GGB03124@niftyserve.or.jp

205/212 RXE12761 六爾 RE:日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)
(18) 98/02/09 00:13 191へのコメント

nifty:FREKIMT/MES/18/191 へのコメントです。

もう一件追加です。

銅鐸の復原関係の文献です。

鐸の復元研究 / 久野邦雄著. -- (BA33692173)
[檀原]: 久野邦雄遺稿集刊行会, 1997.10
174p, 図版 ; 26cm
著者標目: 久野, 邦雄

阪大 10500603492
山口大 図 0097126624

ちなみに、ここで調べるといろいろ文献が探せるぞ
<http://webcat.nacsis.ac.jp/webcat.html>

あと、出版されている本なら
<http://www.books.or.jp/>

すでに、古本になっているなら
<http://kbic.ardour.co.jp/~newgenji/cgi/bgrep0.cgi>

あと、いろいろリンク集は
<http://www.machida.xaxon-net.or.jp/~waki/myroom/kancho.html>

六爾 EmNifty 2.03

210/212 KFA03002 kikkawa RE^3:日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)
(18) 98/02/09 02:13 193へのコメント

ページ(121)

こんにちはランさん皆さん、森教授ファンが多いようで、否定的な私は少数派で明らかに旗色が悪いですね...(^_^;
「従来、梅原先生とか三木(文雄)さんと佐原さんとか、銅鐸を扱った人たちが、遺跡との関係を遺物そのものほど意識されていないということがあります。」
私も、図書館で借りてその本を読みましたが、それに関連して層位学的な研究をすべきだとしていましたが、そもそも銅鐸は単独で出ることが多く、銅鐸の鑄型とか少数例を除いては、他の遺物との同伴関係とかも判らないのが現状で、無い物ねだりをして、因縁を付けているようにも思えました。

佐原さんの他者への批判は有名で、昔はとてもシャープで、的を得たものでした。それが最近では、すっかり泥臭くなってしまって、実に残念です。
佐原館長のリアクションがどのように変わってきたのか、お教えいただけますか？

一方、森教授の昨年末のアサヒグラフの考古特集号での、NHKなどに対するエキセントリックなまでの批判を見ると、嘗ては学会では浮いていることや、マスコミでは嘗ては寵児だったのが、そうは成らなくなってきたことに対する苛立ちが強く見えたように思いました。

私的には、森教授のこれまでの発言には、郷土に対する偏愛を助長するような論調が多く、学者と言うよりジャーナリズム的な煽動の臭いが強く、一般人が古代の歴史を冷静に判断するのを妨害しているように見えて、次第に好意を持たなくなりました。
また、自然科学的研究に対しても、佐原館長の岩波新書の編著(自然科学的方法についてですが、本がどこかに行っていて題名未詳)での冷静な判断力に比べて、森教授による鉛同位体比に対する、感情的な外的論評などに不信感を持っています。

森先生だけに、「先生」をつけてました(^_^; ラン2は森先生のミーハー的ファン以上、森教授ファンの方々には申し訳ありません。m(__)m

207/212 TAB00253 yaohide
(18) 98/02/09 00:45

雷神を奉る形が変化したのでは？

どうも、ココへは初めての書き込みの yaohide です。

先日、敦賀の気比神宮へお参りに行ったのです。
神社へは、商売をしております関係で、いろんな所に年に何回かお参りに行くのですが、なぜかふと思いついたことがありました。

どんたく様の銅鐸雷神説(で、よかったかな?)を考えていたところ御幣っていうんですか、あの白木に紙が織ってギザギザになっているもの、あれが稲妻を象徴しているように感じたのです。

つまり、銅鐸の祭祀は御幣の形となって、現在も続いているのではないかと。

確かに、形も違うし、まして音も鳴るわけではありませんが、雷神を表すとしたら、別にどんな形でも構わないとおもいますし、時代の要請で変化して当たり前だと思います。

玉串に使う榊にも、あの紙を折ったものは使いますし、鏡餅にも飾りでつけますよね。
多くの神社やいろんなところに雷神を奉るとすると、いちいち銅鐸を造っているのは、原料に困ってしまいます。そこで、紙が出来たところで形を変えたなんていうふうに考えたらどうでしょう？
ちょっと安直な考え方もかもしれませんが、ふと感じたので書いてみました。

それから、これは全然関係ないことですが、気比神宮の待合室に天照大御神から神武天皇以降代々の天皇の肖像画が飾られています。
うーん、別に誰も見た人もいないから、文句の付けようもありませんが、想像だけで、よくもりっぱにらしい?雰囲気描かれたものだと感心してしまいました。

yaohide

211/212 KFA03002 kikkawa
(18) 98/02/09 02:13

RE:加茂岩倉遺跡銅鐸の埋められ方

194へのコメント

まさにkikkawaさん、かおるさんの『青銅器祭祀から墳墓祭祀移行説』ですね。
こんにちは勘太郎さん。私の見方は、前述した小林三郎教授の講演や都出教授の放ページ(122)

doutakusinpo1998

送などで示された、考古学に基づく研究に納得して、従ったもので、kikkawaさんの日頃論証を重ねられてのご発言から『青銅器祭祀から墳墓祭祀移行説』のような偉そうな物では、決してありません。(^^;

納得したとは言え、勘太郎さんが仰るような疑問は尤もだと思います。
1. 同一集団内での祭祀の変更というよりは異集団の圧力により埋めざるを確かに、敦煌における仏教経典を壁の中に隠したことを彷彿とさせますね。

一方、勘太郎さんに再度伺いますが、#111で、
“一方、吉備の楯築遺跡と言う弥生時代最大の墳墓の形態や、特殊器台は他の地域に先行するものは見られず、独自と考えられています。
他の地域からの支配であれば、権威・権力を示す祭祀は、先行する地域があって良さそうに思います。ですので、権力の移動があったとしても精々はコップの中の争いで、他の地域からの支配とは考えがたいように思います。”
と述べたことに対する、征服説による説明はどうでしょうか？

213/213 KFA03002 kikkawa RE:搬入土器と「神武東征」説話
(18) 98/02/09 07:49 206へのコメント

そういえば、森先生は邪馬台国九州説の立場から、邪馬台国東遷説をとなくて
こんにちは六爾さん。考古学者の中では、極めて少数派だそうですね。
ちなみに、私は何度か述べてきましたように、3年ほど前までは北部九州説支持でしたが、HOU SANJYOさん(当時、京大の史学科学学生)に旧来の伝世論に基づく年代観の疑問を指摘され、年輪年代など近年の編年によると、卑弥呼が巨大古墳に葬られた可能性が高いと考えられるに至って、畿内説に転向しています。

銅鐸が航海用具だったという説もありましたよね。そんな風にも考えられますのでその説は初耳です。どのようにして、使うのでしょうか？

214/216 BYW00406 かおる RE:「神武東征」とメイフラワー号
(18) 98/02/09 21:24 197へのコメント

どんたくさん、こんばんは。

「神武東征」とメイフラワー号の喩話には驚きましたが、面白かったです。

本題とは離れますが。
>>翌年4月にメイフラワー号が英国に帰港するべく出帆するまでに、約半数
>>の人が死亡したそうです。
凄い死亡率ですが、原因はインディアン襲撃ですか。

ところで、
>>恐らくテンソン系の人たちは、西の方から、瀬戸内海沿岸沿いに、相当
>>長い年月をかけて段々と東の方へ移動していったのではないかと。

>>その間、吉備の辺りにも、相当長期間にわたっていたのではないかと。
もし、そうだとしますと、瀬戸内から吉備地方に銅鐸を保持した弥生人達とは異なる様式の土器などが出土していても良いように思います。
もちろん、私が知らないだけという可能性はかなりありますが。

>>近畿地方に辿りついたときにも、最初ごく少数で、大勢の先住者たち
>>に囲まれて、非常に厳しい状況の下にあったのではないかと。

>>最初は近畿地方のどこかの片隅でヒっそりと暮らし、先住系の人たちの生活文化にも或る程度慣れ親しんでいったかもしれない。
>>それがやがて相当な年月をかけて、やっと勢力を伸ばすことができる
>>ようになっていったのではないかと。
テンソン系は前方後円墳を作った人達ということですが、彼らは長いあいだひっそりと暮らしながら、前方後円墳を作るというアイデアを保持して来たのでしょうか。
銅鐸弥生人は銅鐸という素晴らしい青銅器を作る技術と持っていた訳ですし、近畿の弥生時代の環濠集落からの出土遺物を見ても立派な農耕文化を持っていたと思います。
テンソン系と銅鐸弥生人の差は何だったのでしょうか。
巨大な墳墓を築くことができる土木技術だったのでしょうか。

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

216/216 BYW00406 かおる RE:搬入土器と「神武東征」説話
ページ(123)

(18) 98/02/09 21:57 208へのコメント

はじめまして、たけ(tk)さん。

>> たとえば、元王朝では蒙古高原の産物がたくさん使われていたとか、江戸城
>>では岡崎の食器を使っていた、とかいう傾向があるのでしょうか？。
申し訳ありません、そのいずれについても答えを持ち合わせていません。
どなたか、御存じの方が居られましたら、御教示ください。

>> この「唐古・鍵の集落が次第に衰退」し始めたころというのは、実年代では
>>いつ頃になるのでしょうか？。の前2~1世紀は衰退時期ではないですよね？。
発掘調査では、弥生後期末には環濠がほとんど埋まって機能を失っているとされています。

この弥生後期末の実年代ですが、私が参考している本では3世紀初めから中頃とされていますので、今のところは私もそう思っています。

でも、この第五様式の後半の土器編年は最近色々議論があるらしいので、本当のところは変動するかもしれません。

いいかげんな答えで申し訳ありません。

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

215/216 BYD06141 中村 勝英 REre:アラミタマ・ニギミタマ
(18) 98/02/09 21:54 204へのコメント

弥生さん(と呼ばせて頂きます)今日は・・・KANAKです。
つい何気なく追記した部分に、わざわざコメント頂いて恐縮です。
ご趣旨、ごもっともなのですが、私の疑問部分は

>>次第に、各地にある天の神様の社に道真の霊が合祀されたり、逆に道真を祀った
>>社に雷神が合祀されたりしていく訳です。ですから、本来天の神様は「天神社」

の「各地にある天の神様の社」の「祭祀と祭神」に関するものなのです。
コレを議論すれば、一寸長くなりますし「銅鐸シンボ」からズレてしまいますので
もし、よろしければ改めて(何処の会議室が分かりませんが・・・古代史?)・・・
ご意見を伺いたいと存じますが？
取り敢えずは「銅鐸国論」の続編を楽しみにさせていただきます。

なお、この問題に関しては#260(関東八連合王国?一牟佐神社の祭神)で、
中途半端に疑問を提起しましたが、或る事情で尻切れトンボになっています。
(私が#188で「古社」と言ったのは「牟佐神社」のことです。以下一部抜粋)

>神社由緒沿革によれば
>「祭神 タカミムスヒ (高皇産霊)の尊
孝元天皇

>日本書紀 天武天皇紀に、安康天皇の御代に牟佐村(現 見瀬町)主青の経営で
>あったが、当時の祭神は生雷神(即ち雷公)であった。
>江戸初期までは神原(境原)天神と称されていたが、享保の頃に菅公を奉祀した
>が、明治にいたり古道再び明らかにと、天津神である高皇産霊を奉祭して今日に
>に到る。
>境内は孝元天皇の即位された宮地である。」 とされています。

>以上のとおり、孝元天皇は後世の合祀であることは明らかですが、生雷神とは
>一体何か・・・よく分かりません。天神(雷)と生霊の混同でしょうか。

*この神社由緒沿革はチョット悪文?ですね。・・・揭示のママ転記しました。

*「牟佐村(現 見瀬町)主青」は、雄略の寵臣である「史部の身狭村主青
=ムサノスグリ アオ」ですね。

*雄略紀には「三輪君身狭」の記述があります。

*雄略紀には「葛城 一言主神」との交遊記事があります。

*雄略紀には「三輪山神=蛇身=雷神」の捕獲・崇敬記事があります。

*雄略兄安康の陵墓は「菅原伏見」とされていますが、この地は菅原氏の本拠で
「菅原神社」があります。

*垂仁紀「二十八年・・・天皇の母の弟のヤマトヒコ(倭彦)命を、ムサ(身狭)
のツキサカ(桃花鳥坂)に葬った・・・」(野見宿禰と埴輪起源)の地ですが、
野見宿禰は言うまでもなく、菅原(土部・土師)氏の祖です。

・・・ナカ カカイソノ? イチヨット イツミタカタ ダケス シルイマシタ! ヲア仔ン

217/220 VZD07512 ラン2 RE^4:日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)
(18) 98/02/09 22:01 210へのコメント

kikkawaさん みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

>> こんにちはランさん皆さん、森教授ファンが多いようで、否定的な私は少数派で明
>>らかに旗色が悪いですね...(^^;

ご安心ください。
ラン2は全面的に森先生を信奉しているわけではありません。
考古学に興味を持ち、初めて読んだ本が、森先生のカラーブック『古墳』と、中
公新書の『古墳の発掘』だったということだけです(^^^;

>> 私も、図書館で借りてその本を読みましたが、それに関連して層位学的な研究をす
>>べきだとしていましたが、そもそも銅鐸は単独で出ることが多く、銅鐸の鑄型とか少
>>数例を除いては、他の遺物との同伴関係とかも判らないのが現状で、無い物ねだりを
>>して、因縁を付けているようにも思えました。

kikkawaさん、読み違えてませんか？
森先生は、層位学的な研究をすべきなんて言うておられませんよ。
この本で述べられていたことは、銅鐸研究でも遺跡を重視すべきであるということ
です。
考古学でいう遺跡とは、層位や出土状態ももちろん含まれるけど、それだけではなく、
地形、立地、周辺遺跡との関係などすべてを含んでいます。
ないモノねだりとは言えません。

銅鐸の研究は、もともと発掘で出てくるということが非常に少なかったので、研究
史で考えると、モノを中心とした研究が主流でした。
しかし最近では、銅鐸が発掘調査によって見つかるケースがふえつつあります。
ですからこのことは森先生だけが言っているのではなく、これからの銅鐸研究の課
題であると思います。
実際に菅原康夫さんや、寺澤薫さんの研究などがそうなのではないでしょうか。
もちろん難波洋三さんや、進藤武さんらの従来の型式学的観点からの研究も見過ご
せません。

>> 佐原館長のリアクションがどのように変わってきたのか、お教えいただけますか？

楽しい話題でもないので、やめましょう。
それにラン2も佐原さんのファンでもありますので(^_^)

銅鐸の話からはそれていくけど、佐原さんがすごいなと思うところは、考古学を専
門家だけのものにするのではなく、一般の人たちにわかるようにというポリシーが
あるところです。
ですから佐原さんの書かれたものは一般書であろうと、学術書であろうと、とても
わかりやすく思います。

それだけに今回の『出雲の銅鐸 発見から解読へ』が、ラン2には内容が矛盾して
てわかりにくく、脱線が多いのが残念ということがいいかったです。
ラン2

219/220 VZD07512 ラン2 久野邦雄著『銅鐸の復元研究』
(18) 98/02/10 00:27 205へのコメント

六爾さん こんにちは。ラン2です (^o^)/
文献紹介ありがとうございます。

久野邦雄著『銅鐸の復元研究』久野邦雄氏遺稿集刊行会 1997年、手元
にあります。

1996年10月、久野邦雄さんの訃報をお聞きしました。
まだ57歳という若さです。
久野さんは、橿原考古学研究所付属博物館の主任学芸員でした。
唐古遺跡を発掘中、土製鑄型が発見され、それを契機に、兄である三宝
伸銅工業(株)の社長で、金属研究家の久野雄一郎氏とともに、製作技
法の再現や、成分分析を積極的に取り組んでこられました。

少し内容も補足しておきます。

doutakusinpo1998

第1部と、2部にわかれており、第1部が銅鐸の復元研究です。

あとがきの泉森氏の文章より引用します。

本書は原文の論文名を尊重したため、目次だけではわかりにくい天があります。ねらいは次のようになっています。

第1部 1、銅鐸の原料 2、銅鐸の色調 3、古代の銅鉱山 4、銅合金技術 5、銅鐸の観察と型式分類 6、銅鐸の音響性 7、鑄造技術 8、銅鐸と国産青銅器 9、絵画土器と銅鐸

ご参考までに (^.^) / ~~~

ラン2

218/220 YIG00127 かまくら RE:雷神を奉る形が変化したのでは？
(18) 98/02/09 22:23 207へのコメント

y a o h i d eさん、こんにちは。(^ ^)

【シンポジウム】銅鐸を考える によろこそおいでくださいました。

>先日、敦賀の気比神宮へお参りに行ったのです。

敦賀の気比神宮ですか。ちょっと知識がないので、手元の『日本史広辞典』で調べてみました。(私以外にもご存知ない方もいるでしょうし・・・)
以下抜粋ですが

気比大神宮・筥飯(ケヒ)宮とも。
福井県敦賀市曙町に鎮座。式内社・越前国一宮。旧官幣大社。
祭神は伊奢沙別(イザサワケ)命(気比大神)・仲哀天皇・神宮皇后・日本武尊・応神天皇・武内スクネ・豊玉姫。
もとは当地に古くから信仰されていた御食津神(食物の神)であるらしい。

ずいぶんと由緒正しい、格式のある神宮なのですね。

893年(寛平5)正一位勲一等 だそうです。
ご祭神の名前を見ていたら、記紀の世界そのままだし、「何かあるかも」と想像したくなります。

>どんたく様の銅鐸雷神説(で、よかったかな?)を考えていたところ
>御幣っていうんですか、あの白木に紙が織ってギザギザになって
>いるもの、あれが稲妻を象徴しているように感じたのです。

>つまり、銅鐸の祭祀は御幣の形となって、現在も続いているのでは
>ないかと。

御幣(ゴヘイ)とは、またまた『日本史広辞典』からなのですが・・・。(～;)
「紙または布帛(フハク)を木や篠竹の幣串にはさんだもの。幣束や幣帛の和訓でみてぐらともいい、御幣は幣束の尊称。幣帛は元来は神の奉物の総称であったが、のちに神の依代としての性格を強め、紙と幣串からなる御幣が広く見られるにいたった。」(抜粋)

>多くの神社やいろんなところに雷神を奉るとすると、いちいち銅鐸を
>造っているのは、原料に困ってしまいます。そこで、紙が出来たところで
>形を変えたなんていうふうに考えたらどうでしょう？

銅鐸から御幣へ、果たして繋がるものなのかどうか、皆さまのご意見をお伺いしたいと思います。

司会者 / かまくら

220/220 RXE12761 六爾 RE:搬入土器と「神武東征」説話
(18) 98/02/10 00:41 213へのコメント

nifty:FREKIMT/MES/18/213 へのコメントです。

kikkawa さん、こんにちは。

> そういえば、森先生は邪馬台国九州説の立場から、邪馬台国東遷説をとなくて
> こんにちは六爾さん。考古学者の中では、極めて少数派だそうですね。

doutakusinp01998

そうですね、吉野ヶ里の高島チュウさんくらいでしょうか。
藤森栄一先生も畿内説でしたが、最後に邪馬台国についての画期的な論考を執筆中に心臓発作であの世に旅立たれてしまいました。もし、出来ていたら、ある意味で、解明の糸口が見つかったのかもしれませんが。
杉原荘介先生も畿内説でした。幻の論考「東京湾」にそのことをお書きになれる予定だったそうです。

> ちなみに、私は何度か述べてきましたように、3年ほど前までは北部九州説支持で
>したが、HOU SANJYOさん(当時、京大の史学科学生)に旧来の伝世論に基づく年代観の
>疑問を指摘され、年輪年代など近年の編年によると、卑弥呼が巨大古墳に葬られた可
>能性が高いと考えられるに至って、畿内説に転向しています。
私は、森先生ファンですが、畿内説でも、九州説でもありません。
どちらででもないと思いますが、どこだともわかりません。そもそも、邪馬台国なるものが本当にあったのが、疑問に思います。
>
> 銅鐸が航海用具だったという説もありましたよね。そんな風にも考えられますので
> その説は初耳です。どのようにして、使うのでしょうか？

これは、銅鐸関係のすばらしいホームページをつくっておられるhisashiさんの説です。銅鐸フォーラムにもお誘いしたのですが、お返事がございませんでした。

アドレス

<http://www.enjoy.ne.jp/~hisasi/12.htm> です。

紹介文

謎の多い青銅器として知られている銅鐸は弥生時代の文化を知る上で非常に重要な文化財である。これまで農耕の祭祀用に用いられていたというのが定説であった。しかし最近では農耕の祭祀に使われていたわけではないという説もでてきている。平成8年には島根県加茂町で39個もの銅鐸が一度に見つかり、畿内=銅鐸文化圏、九州=銅剣文化圏という二元構造も完全に崩れ、新たに出雲王国の存在も加味して銅鐸の謎は深まるばかりとなった。そこで今回は銅鐸とは何かという問題に言及し、さらに出雲という新視点から銅鐸を考え、弥生文化について考察してみようと思う。(紹介文より引用)

hisashiさんの銅鐸研究のページです。現在までで私がインターネット上で発見したページでもっとも充実した銅鐸研究のページだと思います。銅鐸航海用具説を展開されておられます。

六爾 EmNifty 2.03

221/221 VZC02152 勘太郎 RE:加茂岩倉遺跡銅鐸の埋められ方
(18) 98/02/10 08:16 211へのコメント

一方、勘太郎さんに再度伺いますが、#111で、
"一方、吉備の楯築遺跡と言う弥生時代最大の墳墓の形態や、特殊器台は他の地域に先行するものは見られず、独自と考えられています。
他の地域からの支配であれば、権威・権力を示す祭祀は、先行する地域があつて良さそうに思います。ですので、権力の移動があつたとしても精々はコップの中の争いで、他の地域からの支配とは考えがたいように思います。"と述べたことに対する、征服説による説明はどうでしょうか？

.....
今のところこの点についてのうまい説明は全く浮かびません。(^^;
都出教授の『古代国家の胎動』第3回の34ページ、銅矛圈、銅鐸圈の接点に突然墳丘墓圏があらわれた、という図を眺めながらフリーズしています。この図を見るとkikkawaさんの仰ることがよく理解できます。

ただ、銅鐸祭祀圏でなぜ吉備出雲だけが墳丘墓祭祀への移行が早かったのか、また銅鐸が豊作祈願で、墳丘墓が支配権を象徴するならば共存しても良いのでは、などと思ったのですが、祭祀について何か大きな勘違いをしているのかもしれませんが。

『古代国家の胎動』第2回では「環壕集落は紀元前2世紀頃に増加し(P21)巨大環壕集落は紀元前後に急速に減少し、代わって首長居館が出現する(P27)。」
「巨大環壕集落の中心には首長の居館あるいは神殿が造られている(P23)」とあります。環壕集落では既に首長が存在し、同時期に銅鐸祭祀が行われたということは銅鐸が単に農耕祭器というだけでなく支配権をも象徴するものに変身していったのかもしれませんが。逆に墳丘墓祭祀は支配権や支配権の継承を象徴するだけでなく新嘗祭などの農耕祭祀に深く関与していたのかもしれませんが。もう少し「祭り」を勉強します。

それにしても加茂岩倉の銅鐸の埋められ方は気になります。銅鐸圏からの訣別(狗奴国からの独立?)という考えを捨てられません。

98.02.09 勘太郎

222/223 SGL02501 弥生
(18) 98/02/10 16:40

銅鐸国「弥生説」3～1

第三部 出雲国と銅鐸国の幻想 その1

出雲の荒神谷や加茂岩倉遺跡で、大量の銅鐸発掘のニュースが伝わった時に、出雲国風土記の「所造天下大神、神御財積置給處」の一節を思い浮かべ、神御財とは銅鐸かも知れないと感じた人は多かったと思います。「所造天下大神」とは「オオナムチ」のことで、この神の祖父が国引き神話で有名な「オミツヌ」の様です。私は、国引きの「オミツヌ」や造天下の「オオナムチ」の一族が、銅鐸に関係あるかも知れないと考えてみました、銅鐸に敗北した側として。

「オオナムチ」が「神御財」を積置いたのは大原郡の神原郷ですが、荒神谷のある出雲郡健部郷と隣接しています。「神御財」とは一体何だったのでしょうか。これは「オオナムチ」が戦いに負け武装解除した時の記録なのでしょう、とにかく大量です。何年か後で、別のグループが「埋納の先例」に習って、銅矛と銅鐸をその近くに埋めたとする「弥生説」には都合がよいのですが...。加茂岩倉は地名から考えて銅鐸に関係がありそうです。「オオナムチ」を銅鐸に敗北した王に当てたのには、彼の領地に銅鐸人の痕跡がある様に思えることもあります。

「オミツヌ」は最初の王ではなく、彼が来た時にはこの国はまだ小さいと嘆いています。彼が拡張し「オオナムチ」が造り固めた国に、突如侵入者が現れたのだと思います。侵入者が出雲を狙った理由は、恐らく宍道湖ではないかと考えられます。大きな湖の近辺にはよく幾つかの小湖がありますが、つまり水が豊富な地帯ということです。初期農業には河川敷なども選ばれていたかも知れませんが川の縁は氾濫が恐ろしいし、それよりも彼等の狙いは、現地民が使用している土地を奪うなどの刺激をなるべく少なくすることと、広範囲に纏まっている水の豊かな土地を捜すことであつたと思われるのです。この後に、彼等が目を付けた先が大和の中央低地であつたり、琵琶湖のほとりであつた形跡が見られます。

ところで、出雲系の神は全部「国つ神」なのでしょう。古事記は、恭順した神を国つ神と書くようです。すると、今まで出雲の神が「国つ神」と理解されていたのは「大国主」が恭順したと思われていたからのようです。古事記に、はっきり「国つ神」と書かれたのは、大山津見、猿田毘古、槁根津日子、鷲持、井氷鹿、石押分、の六人だけなのです。「大国主」が実際は殺されたと解釈すれば、「大国主」も「事代主」も「国つ神」ではないことになります。その他の出雲の神全員には「天...神」の名前はあっても「国つ神」と書かれた神はいません。ですから、高天が原から神が来た時に現地にいた者達を、先住民=国つ神、とするのは違ふと思います。「大国主」と「事代主」の二人だけが先住民(国つ神)で、他の出雲の神々は先住民ではないというのはとても変です。つまり古事記には先住民=国つ神という等式はないのですから、安易に出雲系の神を「国つ神」と書くべきではなく、また「天つ神」と「国つ神」の対立も、無いと思います。

「国つ神」の「国」とは何処でしょう、それは高天が原の神達が一大決意を持って押寄せた「葦原中国」だと思えます。では「葦原中国」とは何でしょう、それを逆説的に言うと、上に挙げた「国つ神」がいたところになります。大山津見、猿田毘古が出雲国、それと、槁根津日子、鷲持、井氷鹿、石押分がいた国、即ち、後の神武...実は崇神、が建てた国(この解説は又別に)です。「国つ神」とは、「葦原中国」にいた先住人の中で、銅鐸人に従った王のことと思います。ですから「葦原中国」も「国つ神」も、神武記を最後にこの言葉は消えてしまうのだと思います。多分そうです、ちょっと自信は無いのですが。(続く)

223/223 MHB01602 M U S E 利器の鉄と祭器の銅
(18) 98/02/10 18:08 219へのコメント

Re:#219

ラン2さん、こんにちわ。MUSEです。少し、教えていただきたいことがあって出て参りました。

お手元の久野邦雄著『銅鐸の復元研究』は1997年と最新刊のようですが、ここでは銅鐸の化学的成分を個別に分析したデータを掲げてますか。銅・錫・鉛の成分比を知りたいのです。特に出雲の国出土の銅鐸について。

それと、青銅の産地を鉛同位体比法から推定する手法がありますが、これについて、英国の研究者（ラッドフォード大学のP・バッド氏）が批判的見解を表明していますね。その方法では鉛の産地すら確定できないと。こちらへの言及も教えてほしいのです。

MUSEは、銅鐸の大半は、海外から輸入の鉛と国内の山々にころがっていた自然銅（純度90%以上）で製造された、という森秀人氏の主張に共鳴していますが、特に出雲国での自然銅として大正年間まで採鉱していた銅鉾山の宝満山（八束郡東出雲町大字内馬）の存在に注目しました。自然銅は、銅鉾石の一部が地表で樹枝状に析出するものだそうですから。しかも、この宝満山という名称が福岡県の太宰府市に所在する宝満山（龜門山・三笠山）に一致することに目がテンになりました。

この山は筑前国（福岡県の一部）の神山として崇敬されていましたが、この山麓こそ、本フォーラムでMUSEが9年前から邪馬台国女王・卑弥呼の「都」と比定した場所ですので、『古事記』の出雲神話も現実味のある伝承に映りました。

邪馬台（カマト）国が北部九州に所在したことを前提にするなら、紀元1世紀の「金印」が志賀島（福岡市）で発掘されたという事実から、『魏志倭人伝』のいう「華奴蘇奴（カナサク）国」を志賀島に求めることができます。「金印」出土地は志賀島村金ヶ崎（カナガサキ）という地名でしたから。そして、それは、『古事記』の伝える神代神話のなかの「金折（カナサク）神」に一致します。さらに、この神は志賀島を本貫とする阿曇連らの祖先神で綿津見神の子とされますから、天照大神と同世代に誕生したといえます。つまり出雲神話で活躍するスサノオノミコトは、天照大神の弟ですから、出雲神話は邪馬台国時代の事象を核に構成されていると推測できます。また、この時代を考古学的には弥生時代の終末期とするなら、銅鐸の消滅も卑弥呼在世中の3世紀前半と推論されましよう。他方、阿曇連は近江国琵琶湖付近に進出していますから、滋賀県出土の銅鐸が出雲国に次いで多いのも何か関係があるのかも知れません。

ところで、銅鐸が弥生時代を最後に姿を消したのは、金属器としての青銅と鉄では、鉄の実利的効用が認識されたのに対して、青銅は祭器という用途にその活用を求めた、と考えます。鉄という素材が軍事面だけでなく、工具や農具などの日常生活財の製造にも進出できる価値を秘めているからです。たとえば、銅器の製造にも鉄器の助けが必要でした。青銅製品の鑄造には千度以上の高温が要求され、それには、燃料源となる木炭も大量かつ集中的に投下しなければなりません。したがって、木材の伐採にも石斧よりも4倍以上も効率的な鉄斧が求められました。つまり、鉄器が使えたおかげで、銅鐸も国内で鑄造できたわけです。もし、銅鐸が宗教的シンボルなら、銅という素材に対する信仰も鉄の存在が知られるにつれてゆらぐでしょう。銅よりも優れた鉄という金属の存在を認知させられたばかりでなく、鉄剣や鉄鏃（ヤジリ）などの鉄製武器を豊富に保有する敵対勢力が現れるなら、生命の安全すら保証されないことも認識させられたでしょう。

出雲神話のなかに「国譲り神話」がありますが、なぜ、大国主命は戦わずして武装解除に応じたのかも、こうした側面から説明できると思います。日向という九州南部から、長弓よりも威力のある鉄鏃（ヤジリ）の半弓で武装した勢力に遭遇したとすれば、大国主命はその軍事力をよく認識していたのだと思います。もちろん、このような半弓を楽々と操る体力の持主が敵となった場合を予測しての行動だったのでしょうか。

参考

岡本健一 『古代の光 〔歴史万華鏡〕』 三五館 1996年
 森 秀人 『古代史論争 日本の青銅器文化』 朝日新聞社 1982年
 佐原 真 『斧の文化史』 東京大学出版会 1994年

98-02-10

MUSE

224/226 KFA03002 kikkawa RE^5:日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)
 (18) 98/02/10 22:11 217へのコメント

考古学に興味を持ち、初めて読んだ本が、森先生のカラーブックス『古墳』と、ランさんと同様に、私が最初買った考古学関連の本は、森浩一(1983)『日本の古
 ページ(129)

墳文化』(NHK市民大学テキスト)でした。なお、文献史学に関する本は、ずっと廻ります。

森教授・編著の本は、図書館や書店で大量に目に付き、素人目には凄く博学に見えたので、当分の間は最も発言に注目した学者でした。

ところが、既述のように森教授は自らの仮説に都合が悪く見えるデータには、エキセントリックな反発を示すことが多々あるのに気付きました。自分が分析・計測系な事もあり、一つのテーマに対して自ら詳細に調べて、“データに語らせる”タイプの学者の方々に、ずっと好感を抱くように成りました。私の嗜好は、古代史ファンとしては渋め? (^.^;

言葉は悪いかも知れませんが、森教授は、学者と言うより、活動家として辣腕に感じました。この辺りのカリスマ性が、一般に人気が高い理由でしょうか?

kikkawaさん、読み違えてませんか? 森先生は、層位学的な研究をすべきなんてこのシンポジウムに備えて読んだときに、そのような論調もあったように記憶していたので、再び市立図書館で本を見ようと今日行ったら、貸出中でした。後日、確認したいと思います。m(__)m

考古学でいう遺跡とは、層位や出土状態ももちろん含まれるけど、それだけではなく、地形、立地、周辺遺跡との関係などすべてを含んでいます。ないモノねだりと考古学が、宝探しから学問に発展した時に、現地調査の手法として、地史・古生物学から“層位や出土状態”の概念を受け継いだのでしょね。

地史・古生物学では、“地形、立地、周辺地質との関係”などを積み重ねて、過去の地理・環境・生物分布などの復元を図りますね。

古代史においては、歴史地理学で、“地形、立地、周辺遺跡との関係”に着目して研究を進められ、FREKIJ/MES/2/688の『「常陸の古代道」講演会を聴いて』で紹介した、木下良・元国学院大教授の律令時代の道の研究は、良い例だと思います。

と言うことで、寧ろ当たり前の話で、それぞれの専門分野で理に叶った研究が進められるべきなのは自明でしょう。その観念よりも、具体的に如何なる調査を行うかが重要だと思います。上記のように、私は直ちにその本にアクセスできないので、どのような方法を書かれていたか、教えて頂けませんでしょうか?

森教授は、昨年末のアサヒグラフの特集号で、銅鐸を直ぐに洗浄せずに周りの土を調べるべきだと、何度も繰り返しておられ、その通りでしょうが、観念ではなく具体的な調査法が示されていないのが残念でした。

それだけに今回の『出雲の銅鐸 発見から解読へ』が、ラン2には内容が矛盾しててわかりにくく、脱線が多いのが残念ということがいいかかったのです。

私は読み方が浅いようで、舞台裏の発言が聴けて興味深かったとしか思いませんでした。(^^; 具体的に、佐原館長らのどんな点に矛盾がありましたか?

私が、銅鐸研究に関して佐原館長が凄いと思うのは、新旧関係が殆ど判らない状況での型式編年案が、複数の銅鐸を出土する例や鉛同位体比などと調和的で、的を射たものと考えられるに至っていることです。古代人の心の移り変わりを、深く理解されているのでしょうか?

225/226 KFA03002 kikkawa RE:搬入土器と「神武東征」説話
(18) 98/02/10 22:11 220へのコメント

藤森栄一先生も畿内説でしたが、・・・杉原荘介先生も畿内説でした。こんにちは六爾さん。これらの方々は、高名なので名前だけは知っていますが、具体的な説は全然知りません。そのテーマに関する研究は、どのような内容が知られているのですか?

そもそも、邪馬台国なるものが本当にあったのかが、疑問に思います。対馬を初めとして比定されている国々もあり、邪馬台国の記述も具体的で、例えば卑弥呼の墓に相当する巨大な古墳が比定地に存在するように、私はそのようには感じません。六爾さんが、そう思われるのは何故ですか?

アドレス <http://www.enjoy.ne.jp/~hisasi/12.htm> です。早速見てきました。流水紋・袈裟型紋などを海に見立てているのですね。確かに、福井県井向1号銅鐸のように、舟を描いた例もあり、魚の絵も結構見られます。

とは言え、佐原真・構成(1997)『銅鐸の絵を読み解く』(小学館)には、登場する動物の数としては、鹿...135例(32.9%)、人...59(15.2)、魚...40(10.3)、サギ...26(6.9)、猪...27(6.9)と、計数されているように、陸上動物の方が多く、全てを航海用具に結び付けるのは、幾ら何でも極論に思います。

一方、農耕賛歌説については、上記の本の「「農耕賛歌」説の克服から」の項に、以下のような記述がありました。

“春成 佐原さんも、一九九五年の「銅鐸の美」典の解説やカタログまでは小林さんの「農耕賛歌」説を支えてきていたし、本書に収録したフォーラムでもそうでした(72ページ)が、やっと小林説では駄目だと宣言しましたね。

佐原 かつては、師の影を踏もうとして踏めず、今では、踏みつけた足を向ける先に迷っている。

春成 伝香川銅鐸や、神岡4・5号、谷銅鐸の絵については、いろいろな人がいろんな解釈を出していましたね。

佐原 本書には、知られている銅鐸の絵をすべて図示しましたから(資料1~51)、読者が新しい解釈を生み出すことを期待して、ひとつおし紹介しておきましょう。さまざまな解釈をかつて僕は、(A)日常生活派・(B)季節派・(C)画題位置重視派に三大別しました。”

銅鐸の絵を、一つのテーマに限定する見方は、影を潜めつつあるのでしょうか？

226/226 VZC02152 勘太郎
(18) 98/02/10 22:46

アエタ族のギター

1月28日NHK・E TV特集でフィリピン・ピナツボ火山噴火で山麓から追われた原始生活を守っているアエタ族の生活状況を放映していました。最高神アポ・ピナツボを中心にアニトという精霊(善霊)とカマナという悪霊が土地を支配し精霊を汚したり、知らずに悪霊の支配地に入り込むと祟りがある、と信じられています。アラミタマ・ニギミタマを思わせます。精霊を呼ぶのに楽器(なんとギターです)を演奏しシャーマンが踊ります。やがて神はシャーマンにとりつきます。祭器はありません。祭祀に基本的に必要なものは音楽と踊りかな、と思いました。銅鐸を鳴らさなくなったのは神おろしの楽器から依り代に役割変更したのではないかと思ったりします。ということは銅鐸に代わる新しい楽器が登場したのか、例の祝詞を読むときの「オーオー…」という声に代わったのか…。想像は尽きません。

98.02.10 勘太郎

227/228 QWD02544 どんたく RE:銅鐸国「弥生説」2
(18) 98/02/11 01:44 203へのコメント

弥生さん、こんにちは。どんたくです。

>>銅鐸を持った人たちが日本に渡来してきたときの状況について、>>これは違います。誤解でなければ、私の書き方が悪かったのでしょうか。

これは私の書き方が悪かったです。弥生さんのおっしゃる通りと理解します。

>>「ドンたく説」にちょっと「突っ込み」をしてみようと思います。お覚悟を！。

やっぱり、思ってた通り、きましたね。漫才でも、女が「突っ込み」、男が「ボケ」というのが、普通のパターンのようなです。(^^)

>>1、銅鐸を造った「先住民」とはどういう人達を指すのですか？、

#74「神々の体系」に、

- * 高天の原系(天孫系=支配者) : イザナギ・アマテラス・ニニギ
- * 根の国系(先住系=被支配者) : イザナミ・スサノヲ・オホクニヌシ
- * ということの二つの系列の対立があり、
- * やがてこれが高天の原系(天孫系)によって統合される。

と書きましたように、天孫系の人たちが入ってくる前からいた先住系の人たちという意味で使っています。

>>青銅器鑄造の技術を、どうやって知ったとお考えですか？。

『祖形と考えられる「銅鐸の先祖」は、渡り物かも知れませんが、銅鐸は日本で考案された日本製だと考えています。作った人達には青銅器の製造についての知識があったと思われます。渡来した人かも知れないし、その人達から教えられたのかも知れません。』(以上、弥生さんの #203 からの盗作です)

恐らく何等かの形で大陸の方から技術が入ってきたのではないのでしょうか？

>> 2、 『鳴り響く雷を神の怒りの声として恐れ、この神の怒りをなり鎮めるため
>> に銅鐸を地中に埋め、雷神から雨の恵みを受けて、農作物の豊穰を祈った』
>> について...
>> ・ 神はどうしてそんなに怒るのですか？、人間は身に覚えがあった？

どうして怒るのかは分かりません。
でも、雷の音って、恐ろしいと思うのが普通でしょう？

>> ・ 『神の怒りをなり鎮め』て、おとなしく静かになってしまったら、
>> その後の雨は、降らなくなってしまうませんか？、ココントコがワカラナイ。

雷が鳴って降る雨もありますし、雷が鳴らなくても降る雨もあります。

カミナリサマには、
ゴロゴロ・ピカピカと、人を驚かすような恐ろしい面
雨を降らせて福をもたらす、やさしい面
の両面があると考えます。

恐ろしい面をなくして、やさしい面を出して欲しいと願う、というわけです。
弥生さんも、「お覚悟を！」なんて恐ろしい面を出されるよりも、もっと
やさしい面を出して戴いた方が、こちらとしては助かりますです。(^^)ジョーダン

>> 3、雷神の棲家が雲の中だとは早くに気が付いていたでしょう。古代の人は優れ
>> た自然観察者で、自然について多くの知識があったに違いないと思います。そ
>> の雲は太陽より低く、場所によっては足下にもなります、「雷様を下に聞く」
>> という状況です。従って神位は低かったのではないのでしょうか。黄泉の国に現
>> れたのも、神格が低いと思われていたから、ではなかったかと考えますが...

私は、「太陽信仰をもった天孫系の人たちが入ってくる前の先住系の人たちは、
太陽信仰とは違う別の宗教をもっていた。それが雷神信仰であった。」
というように考えています。

「雷様を下に聞く」というのは、太陽信仰が入ってきてからの思想でしょう。
(#85「柿本人麿呂」参照)

「弥生説」は「どんたく説」とは全く違うようですので、それだけ余計に
興味シンシンです。

ただ、鈍な私には、どうも分かりにくいところがありますので、できるだけ
分かりやすく書いてくださいね。お願いします。

QWD02544 どんたく

228/228 QWD02544 どんたく RE^2:雷神を奉る形が変化したのでは？
(18) 98/02/11 01:44 218へのコメント

y a o h i d eさん、はじめまして。 どんたくです。

「どんたく説」をお読み戴いて、どうも有り難うございます。m(_ _)m

ただ、前にも書きましたように、これを読まれるときには、よ～く
眉に唾をつけて読んでくださいね。(^^)

>>神社へは、商売をしております関係で、いろんな所に年に何回か

神社にお参りされるたびに、ご由緒書を貰われたら、ひとつの
コレクションができあがりそうですね。

>>つまり、銅鐸の祭祀は御幣の形となって、現在も続いているのでは
>>ないかと。

>>.....
>>多くの神社やいろんなところに雷神を奉るとすると、いちいち銅鐸を
>>造っているのは、原料に困ってしまいます。そこで、紙が出来たところで
>>形を変えたなんていうふうに考えたらどうでしょう？

面白いひとつの着想ですね。(^^)

私などは、なんでもかんでもすぐにカミナリサマに結び付けてしまおうとする方なんですけど、御幣をイナヅマと結び付けるということは、考えもしておりませんでした。(^^)

雷神を祭る神社でだけ御幣を使っているのだったら、恐らく結び付けて考えたかもしれませんけど・・・。

それから、銅鐸の時代の終わり頃までに、日本に紙があったかどうかはわかりません。

中国では、後漢の初めに蔡倫が紙によって、紙が発明されたと言われてきましたが、最近では敦煌その他から前漢時代の紙が出土しているようですから、西暦紀元前から紙があったということになります。(*1)

しかし、日本のように湿気の多いところでは、紙などは残らないでしょうから、いつ頃から紙というものがあつたかは、中々分からないでしょうね。

これぞ、カミのみぞ知る、というところでしょうか。

【参考資料】

(*1) 近つ飛鳥博物館開館記念特別展「シルクロードのまもり」図録
1994.10.大阪府立近つ飛鳥博物館

QWD02544 どんたく

229/229 VZC02152 勘太郎
(18) 98/02/11 18:34

銅鐸祭祀から墳丘墓祭祀へ / 土木技術

またまた軽薄な思いつきです。
銅鐸祭祀から墳丘墓祭祀(都出先生の言葉をそのまま使わせていただきました)への転換は土木技術の革新によるもの、というのはどうでしょう。
環境集落に必要な土木技術は土を掘ることだけだと思います。それに対して墳丘墓を造るには土を盛り上げる技術が必要です。ただ盛り上げるだけでは風水により直ちに崩壊するでしょう。これは相当高度な技術が必要かと思えます(専門の方、そうですよネ)。
1. 土を盛り上げる技術の進歩により今まで開墾不可能だった荒れ地を開き新田を作ることになり、農業生産が飛躍的に向上した。
2. その結果、富の集積が進み大金持ちが現れ新技術を使って墳丘墓を造り出した。
3. 裕福になった吉備出雲集団は銅鐸祭祀集団から離脱した。

なんてのはどうでしょうか。

98.02.11 勘太郎

230/235 QWD02544 どんたく RE:「神武東征」とメイフラワー号
(18) 98/02/11 20:57 214へのコメント

かおるさん、こんにちは。 どんたくです。

》本題とは離れますが。
》>>翌年4月にメイフラワー号が英国に帰港するべく出帆するまでに、約半数
》>>の人が死亡したそうです。
》 凄い死亡率ですが、原因はインディアンの襲撃ですか。

インディアンの襲撃ではなく、いわば自滅ともいうべき状態だったようです。

当初は Mayflower と Speedwell という2隻の船に分乗して出帆しましたが、Speedwell の故障のため、2度英国に引きかえし、結局 Speedwell を諦めて Mayflower 1隻に全員が乗り込み、1620年9月に再出港しました。

160トンの帆船に、35名の乗組員と110名の乗客(うちPuritansは35名)。
家具類、鶏、山羊、豚、犬、食料、飲料なども。
出港が予定より遅れたため、シケ続きの季節に入った海をこえて、
66日目の1620年11月21日にマサチューセッツ州のコッド岬に到着。

ここは緯度的には北海道と同じ位で、寒いところ。
寒さと飢えとで病人続出。約半数が4月までに死亡。
1621年11月になって、漸く最初の収穫がとれた。
(これが米国の Thanksgiving = 感謝祭 の始まり)
という状況だったようです。

これに比べれば、神武天皇の方が、少なくとも寒さに関しては、大分
恵まれた環境にあったのでしょね。(^^)

》>>その間、吉備の辺りにも、相当長期間にわたっていたのではないか。
》もし、そうだとしますと、瀬戸内から吉備地方に銅鐸を保持した弥生人達
》とは異なる様式の土器などが出土していても良いように思います。
》もちろん、私が知らないだけという可能性はかなりありますが。

私の「妄想」におつきあい戴いて、有り難うございます。m(_ _)m
残念ながら、私は考古学に関する知識が欠落しているものですから、
ご返事のしようがなくて・・・。
ウム。確かにかおるさんの言われるような点は疑問として残りそう
ですね。
ただ、古墳の祖形ともいえるべきものが吉備の方にあるようですので、
これはテンソン系の人たちが作ったものなのではないか、という感じが
しますが・・・。

>> テンソン系は前方後円墳を作った人達ということですが、彼らは
>>長いあいだひっそりと暮らしながら、前方後円墳を作るというアイデア
>>を保持して来たのでしょうか。

エジプトのピラミッドにせよ、日本の古墳にせよ、大きな構築物を作る
するには、大きなマンパワーと年月と技術を要します。
そしてこれは、大変な実力をもった権力者でなければ出来なんでしょう。
これだけの動員力をもてるだけの勢力になるには、相当な年月が必要な
感じがします。
そして、大きな古墳を作れるような強大な勢力になってから、初めて
古墳による新しい祭祀形態が実行できたのではないかと思います。

この辺り、すべて「妄想」の域を出ませんので、あしからず。

QWD02544 どんたく

231/235 QWD02544 どんたく RE:銅鐸と雷の分布
(18) 98/02/11 20:57 209へのコメント

たけ(tk)さん、はじめまして。 どんたくです。

「どんたく説」に関心をもって戴いて、有り難うございます。m(_ _)m

>>> このような雷の頻度分布を表わす全国的なマップとして、
>>> 「年間雷雨日数分布図」(Isokeraunic Level Map: 略して I K L マップ)
>>> というのがあります。(*1)

>>
>> 全国的な銅鐸の出土分布と重なるのでしょうか？
>>

>> 銅鐸の出土地 雷の多い地域
>> が証明できれば「このテーゼは学術的にも立派なものだと私には思われますが

銅鐸出土地全体に対してこのようなことが言えればいいのですが、
実はなかなかそうは行かないところが悩みの種でして・・・。(^^)

I K L (年間雷雨日数) マップというのは、米国で作られたのを真似して、
日本でも作られています。
経度1度、緯度1度を夫々4等分しますと、1辺約30 kmの方眼の柵目
ができます。
このような柵目で全国を覆い、各柵目ごとに年間雷雨日数の数値を入れて
あります。

ただ、このような粗い柵目では、大雑把なことしか言えません。
細かいローカル地域について、落雷頻度の分布を知ろうと思えば、
このI K L マップでは不十分で、さらに特別に統計データをとる必要が
あります。

#60「銅鐸と雷の分布」で述べたものの雷頻度についても、
「1.琵琶湖東南部」については、I K Lマップから、
「3.六甲山麓」については、ローカルに特別にとった統計
(配電線に生じた落雷事故の数年間にわたる統計)から、
といった具合です。

この他の銅鐸出土数の多い地域については、I K Lマップだけでは
大雑把過ぎて、もっとローカルな特別な雷頻度に関する統計がないと
何とも言えません。
しかし、残念ながら、そのようなデータが無いのが実状です。

このような状況ですので、全国的に見て、
「銅鐸の出土地 雷の多い地域」
と、歯切れよく明快に言い切ることができずにあります。

しかし、#60に記したように、少なくとも近畿地方の中で一番銅鐸
出土数の多い代表的な地域については、銅鐸と雷との間に相関がある
と見てもよいのではないかと思っています。

QWD02544 どんたく

232/235 VZD07512 ラン2 向日市文化資料館
(18) 98/02/11 23:10 018へのコメント

みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

先日、向日市文化資料館へ行ってきました。

向日市文化資料館は、向日市出土の考古資料(とくに長岡京関係が主ですが)
が展示されています。

入場無料のとても小さなスペースです。
周辺には古墳、長岡京関係の史跡が点在し、散策の拠点にいかがでしょうか。

ここには、#63の日本最古の銅鐸鋳型の巻で紹介した鶏冠井遺跡出土銅鐸鋳型
と、その復元模型の銅鐸鋳型、銅鐸が展示されています。
鶏冠井遺跡の報告書も、受付の横に開架で置かれているので、ご参考に(^_^)

どんたくさんと初めてお会いしたのは、この展示ケースの前でしたね(^_^)
あの時はたしか中山修一先生の遺品が展示されていましたが。

【場所】 向日市寺戸町南垣内40-1

【電話】 075-931-1182

【交通機関】 阪急東向日駅下車徒歩15分
JR東海道本線向日町駅徒歩20分

【開館時間】 10時～18時

【休館日】 月曜日、祝日 / 無料

233/235 VZD07512 ラン2 RE:利器の鉄と祭器の銅
(18) 98/02/11 23:11 223へのコメント

MUSEさん いらっしやい。ラン2です (^o^)/
このシンボも残るは2週間弱ですが、どうぞ楽しんでくださいませ。

>> お手元の久野邦雄著『銅鐸の復元研究』は1997年と最新刊のようですが、そ
>> こでは銅鐸の化学的成分を個別に分析したデータを掲げてますか。銅・錫・
>> 鉛の成分比を知りたいのです。特に出雲の国出土の銅鐸について。

前にも書きましたとおり、『銅鐸の復元研究』は久野邦雄さんの遺稿論文集
ですので、載っている論文はほとんど60年代～80年代に書かれて発表された
ものを集めています。

ですからMUSEさんの希望にそうデータは、無いように思います。
個別に分析したデータが載っていても、それはよく知られた例(愛知県朝日
遺跡の銅鐸)ですし・
ただ古代の銅合金技術ということから、国内銅鉱山の分布と、青銅器の出土
ページ(135)

遺跡の分布などについての考察などはMUSEさんの興味をひくのではない
でしょうか。初出は下記の本です。

「弥生時代の青銅器の原料について―特に主成分である銅について」
『末永先生米寿記念献呈論文集』所収 末永先生米寿記念会 1985年
『銅鐸の復元研究』は、たぶん1700円だったと思います。

普通の書店では取り扱っていませんが、檀原考古学研究所に残部があれば、
問い合わせれば手に入ると思います。

>> それと、青銅の産地を鉛同位体比法から推定する手法がありますが、これに
>> ついて、英国の研究者(ラッドフォード大学のP・バッド氏)が批判的見解
>> を表明していますね。その方法では鉛の産地すら確定できないと。こちらへ
>> の言及も教えてほしいのです。

ラン2は鉛同位体比法については、まだまだ手が回りません(^; ;
kikkawaさんならお詳しいのではないのでしょうか?
フォローの方よろしくお願いします m(_ _)m

インフルエンザの予防注射の副作用で、頭が働かないラン2でした。

234/235 VZD07512 ラン2 銅鼓のまつり
(18) 98/02/11 23:11 226へのコメント

勘太郎さん こんにちは。江南にも、慶州にも行けなかったラン2です(;_;))

興味深い民族例の紹介、ありがとうございました。
実は中国の南の方で行われている、銅鼓のまつりとの比較が昔からいわれてい
るんですよ(。)

銅鼓とは、中国西南部、インドシナ半島、インドネシア、ビルマにわたる広範
囲な地域に分布する、青銅製の太鼓です。
紀元前3世紀から祭祀に用いられ、今での使用している民族があるそうです。
銅鼓は出土状態、絵画・文様・変遷など、銅鐸と共通性が見られると指摘され
ています。
滋賀県銅鐸博物館には、現在も行われているこの銅鼓のまつりをビデオで紹介
しており、そのまつりの姿に圧倒されて見たのを思い出しました。
銅鼓は、普段は地中に埋めておき、使うときだけ取り出すそうです。

【参考文献】

『古代史発掘5 大陸文化と青銅器』講談社 1974年

235/235 VZD07512 ラン2 RE^3:雷神を奉る形が変化したのでは?
(18) 98/02/11 23:11 228へのコメント

yaohideさん いらっしやい。みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

ラン2は、御幣といえば、やはりカミの依代とまず思ってしまう。

たいてい今の御幣ってのは紙ですよ。でも民俗調査などで地方へ行くと、たとえばラン2が実際に見た例なんかで
は、山の神への御幣として、「削りかけ」または「削り花」と呼ばれる、木
の先を、薄く幾重にも削ったものが使われていました。

これなんか御幣の祖形のような気がするんですけど、どうでしょうか?

では また (^.^)/ ~~~ ラン2

236/236 CXN00172 大三元 Re:RE^3:雷神を奉る形が変化したのでは?
(18) 98/02/11 23:27 235へのコメント

ラン2さん、お話をさせて頂くのは初めてかも。。

>>でも民俗調査などで地方へ行くと、たとえばラン2が実際に見た例なんかで
>>は、山の神への御幣として、「削りかけ」または「削り花」と呼ばれる、木

アイヌの祭壇(ヌサ)などでもイナウというものを使い、削りかけ、と訳されて
います。ご覧になった「地方」はどちらでしたでしょうか。

>>これなんか御幣の祖形のような気がするんですけど、どうでしょうか?

ええ、そういう説も見たことがあります。

よろしく。m(_ _)m

***Homepage: <http://www.alpha-net.or.jp/users/gens/>

237/237 QWI01226 もりきん RE: 議題 4 なぜ銅鐸は使用されなくなった
(18) 98/02/12 05:54 065へのコメント

みなさん、こんにちは。
読んでるだけでは我慢できなくなってきましたので、参加させてください。

こんな筋書きはどうでしょうか。
銅鐸以外にゴリヤクのある新興宗教が現れた。

たとえば、どんたく説にしたがって、
毎年、稲に実が入る時期を見計らって、それぞれのクニの首長がみんなを集めて、
銅鐸による豊作のお祭りを行っていました。米の生産量はどのクニもにたような
ものです。

ところがY国では、日の神より神託をうけたという巫女の指示に従って、農作業
を行っています。実はこの巫女の指示は鬼道などではなく、大陸から輸入した最新
の農業技術と曆による、科学的な(その当時にしてみればですが)ノウハウに
拠るものだった。そして、そのクニでは鉄を積極的に輸入した(もしくはでき
た)。鉄器による農耕機具の大量生産が農作業の効率化を生み、余った労働力が、
開墾や灌漑工事に当てられた。余分な富を再投資することで、さらに豊かになっ
ていったと思います。
これらのことすべてが、この巫女に対する「神のお告げに従ったお陰」だとい
うことにすれば(むしろそれがマツリゴトということでしょうが)、このクニのこ
の信仰を取り入れるクニ(の指導者)が加速度的に増えていくってこと、ないで
しょうか。Y国のフランチャイズになることによって、その神託(ノウハウ)を
授かり、自らの富を増やすことができるなら、銅鐸信仰も捨てた。政治家はいつ
の時代にも実利で動く、ってことですか。

もりきん(QWI01226)

238/241 VZC02152 勘太郎 RE: 銅鼓のまつり
(18) 98/02/12 18:23 234へのコメント

ラン2さん こんにちは
インフルエンザのワクチン、10月ぐらいに打っておけ、と知り合いの医
者が言っていましたが2月になって打つ人も珍しいですね。

江南にも、慶州にも行けなかったラン2です(;_;)
なんとも、残念でした、としか申し上げようがありませんが「ラン2の便
利なやつ」様もすっかり回復されたようですし、まだまだチャンスはありま
すね。勘太郎はもう一度加耶諸国の故地を訪ねたいと懐と女房殿の顔を伺っ
ています。釜山では飛行機で知り合った2世の方に『遊郭』に誘われビック
リ仰天でした。他国のことながらこれは廃止しなければと思いました。

実は中国の南の方で行われている、銅鼓のまつりとの比較が昔からいわれて
いるんですよ(°_°)
銅鼓とは、中国西南部、インドシナ半島、インドネシア、ビルマにわたる広範
囲な地域に分布する、青銅製の太鼓です。
紀元前3世紀から祭祀に用いられ、今での使用している民族があるそうです。
銅鼓は出土状態、絵画・文様・変遷など、銅鐸と共通性が見られると指摘され
ています。
ヨタ話のつもりで書き込んだのですがいいレスをいただき感激です。たし
か「世界不思議発見」で銅鼓はナベから作られた、と言っていました...

滋賀県銅鐸博物館には、現在も行われているこの銅鼓のまつりをビデオで紹介
しており、そのまつりの姿に圧倒されて見たのを思い出しました。
わたしも昨年秋に行ったのに、、見過ごしてしまいました。(/_;)
草津のイザサ神社に行くついでにもう一度行きます。

銅鼓は、普段は地中に埋めておき、使うときだけ取り出すそうです。
へーっ、銅鐸そっくりですね。人間の祖先はリスかカラスか犬か?(^^;

doutakusinp01998

それにしてもギターが神おろしの楽器とは、もし当時韓人が銅鐸祭祀を見たら「何だ、鈴をありがたがって拜んでやがる」と思ったことでしょうか。またまた博学になりました。ありがとうございました。

98.02.12 勘太郎

239/241 KFA03002 kikkawa 鉛同位体比・再論(RE:利器の鉄と祭器の銅)
(18) 98/02/12 19:36 233へのコメント

ラン2は鉛同位体比法については、まだまだ手が回りません(^_^; kikkawaさんならお詳しいのではないのでしょうか？ フォローの方よろしくお願ひします
こんにちはMUSEさん。ラン2さんから振られましたので、コメントします。

鉛同位体比の研究ですが、質量分析計の開発により1922年にノーベル化学賞を受賞(<http://nobelprizes.com/nobel/chemistry/1922a.html>)された、ケンブリッジ大のアストン教授(Aston, F.W.)が、1933年に"The isotopic constitution and atomic weight of lead"と題する論文を発表したのを皮切りとして、自然界への応用研究が進められ、遙か以前に確立した、枯れた手法として広く用いられています。

総合誌であるNature, Scienceや専門誌において、放射性核種の壊変を用いた地質の研究に関する論文で、地質試料の鉛同位体比のデータは、 $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ (^{87}Sr は ^{87}Rb の崩壊で付加)、 $^{143}\text{Nd}/^{144}\text{Nd}$ (^{143}Nd は ^{147}Sm の崩壊で付加)と共に、ルーチン的に示されている例が多く見られますので、確認して下さい。

専門書としては、Dow, B.R.(1970) "Lead Isotopes" (Springer-Verlag) に、原理や世界各地のデータが載っています。日本語の解説としては、『季刊 邪馬台国』にしばしば転載されている、馬淵久夫教授の論文をご覧になるのが良いと思います。

お手元の久野邦雄著『銅鐸の復元研究』は1997年と最新刊のようですが、そこでは銅鐸の化学的成分を個別に分析したデータを掲げてますか。銅・錫・鉛の成分比を知りたいのです。特に出雲の国出土の銅鐸について。

『荒神谷遺跡と青銅器 科学が解き明かす荒神谷の謎』所収の平尾論文に、荒神谷の銅鐸の化学分析データと、昔の分析のコンパイルデータが載っています。分析技術の進歩や、分析者による技術の差があるので、単純な比較は問題と成ります。

これについては、旧日本古代史#2476(96/02/29)「RE:森浩一教授の雑誌寄稿記事を読んで」に、以下のように紹介しました。

【再録1開始】

鉛同位体ですが、森さんが挙げていた、島根県古代文化センター編(1995)『荒神谷遺跡と青銅器 科学が解き明かす荒神谷の謎』(同朋社出版)を、市立図書館で見つけました。これには、平尾良光他「荒神谷から出土した青銅製品の化学組成」と、久野雄一郎「荒神谷青銅器はどこでつくられたか」の両方が載っており、読者が両論を比較することができ、便利です。

青銅そのものに関しては、久野さんは専門家らしく詳しいことが判りますが、こと分析については、分析化学の専門家である平尾さんに比べて、おやっと思えることが幾つかあります。顕著な例としては、化学分析データについて、平尾さんは主成分が銅・錫・鉛は分析精度が3%、その他は5%としており、トータルは97.0-103.3%で、トータル表示も最も表示桁の少ない元素(銅)に合わせて丸めています。一方、久野さんは一例だけを挙げていますが、107.736%と頼りない数字で、表示桁も最も表示桁の多いものに合わせたもので、分析を知らない人だと言うことが一目で判りました。これでは、久野さんの分析データの議論は信用できないと直ぐ思いました。
《再録1終了》

それと、青銅の産地を鉛同位体比法から推定する手法がありますが、これについて、英国の研究者(ラッドフォード大学のP・バッド氏)が批判的見解を表明していますね。その方法では鉛の産地すら確定できないと。こちらへの言及も教えてほしいこの問題は、MUSEさんが、旧日本古代史#2459(96/02/22)「雑誌『新潮45』に古代史のことが」で、森教授が『新潮45』96年3月号で、鉛同位体比に基づく研究について、疑問を投げかけたことと同じ話ですね。

私は、MUSEさんの記事に対して、#2461「鉛同位体比と年輪年代学の古代史への適用」にコメントしており、その中から鉛同位体比に関する部分を再録します。

【再録2開始】

その次は、鉛同位体についてですが、森さんは日本産の鉛で外れた値を示し、中華・華南の鉛と区別が困難な神岡の鉛をことさらに取り上げて、反論の材料にしようとしています。しかし、これまでの文章を見ても感情的に否定しているだけで、理詰めとは程遠いものを感じます。

過去のログを検索すると、#1463(94/10/23)で、「今日の読売新聞(東京本社版) ページ(138)

に、話題の丹後半島・太田南5号墳出土の青竜3年銘の方格規矩四神鏡の鉛同位体分析結果が出ていました。国立文化財研の測定によると中国南部の値を示し、島根県・神原神社古墳の景初3年銘、及び山口県・竹島古墳の正始元年銘の三角縁神獸鏡の値とも良く似ているそうです。中国出土の方格規矩四神鏡の測定結果は載っていませんでしたが、こちらとも良く似ているのかな？」と書いていました。

三角縁神獸鏡の生産地を巡る議論で、鉛同位体の研究に不満があるのかな？

その文章を読むと、あたかも馬淵さん達が神岡の鉛のデータを隠蔽していたかのように見えますが、実際には違いますね。季刊『邪馬台国』53号に再録された馬淵さんの論文の中で、「神岡鉾山の問題は産地推定によくある特殊例である。この鉾山は大陸性の古い地層の中にあり...このような場合には考古学的考察を加味して考える必要がある...古代に神岡鉾山だけが開発されていたとは考え難い」と述べています。

鉛同位体の値を決める理由について、『地球科学6 地球年代学』（岩波書店）の第3章：マントルと地殻の進化に、鉛鉾床の鉛(Pb)同位体比について載っており、その特徴は以下のようにのまとめられています。

「(1) 同一の鉾床内ではPb同位体比はほとんど同一の値を示す。
(2) 鉾床の生成年代がほぼ同じものは、地域的にきわめて離れていても - たとえばオーストラリアとカナダといった場合に - ほぼ同じ同位体比を示す。
(3) 鉾床鉛を207Pb/204Pb - 208Pb/204Pbダイアグラム上にプロットすると、ほとんど単一成長曲線上に分布する。

ただし、ここで注意すべきことは、こうした特徴を示すのは大規模な鉛鉾床の場合で、岩脈状に晶出している小規模なものは、他の岩石の鉛の汚染が普通で、必ずしも均質性を示さない。」

遺跡の面から見ると、神岡は山奥の鉾山ですが、そこが古くから鉛の生産を始めていたことを示す遺跡が有るのかと言う問題には何も触れていません。

『日本の地質5 中部地方II』（共立出版）の第10章：地下資源に、三井金属工業(1970)『神岡鉾山史』を引用して、「日本最大の鉛・亜鉛の鉾山で、岐阜県吉城郡神岡町にあり、鉾山の開発は720年頃(養老年間)にさかのぼるといわれ、当初は銀を採掘していた。中～近世にかけて多数の小鉾山にわかれて採掘され、銀・銅・鉛の総生産額では全国有数の規模であった。」としています。

ちなみに、WWWで項目検索したら、<http://www.namos.co.jp/gifu/kamioka2.html>に、「神岡鉾山の歴史を知るには神岡城・高原郷土館に隣接する鉾山博物館が最適。ここには江戸から現代にいたる貴重な資料が展示されてある。」と有りました。

遺物の面から見ると、神岡の鉛を使った青銅器が古くから使われていたとするなら、その後も続けて同様の同位体比が見られる筈です。これについての吟味の話もありません。

馬淵さん達による古銭の研究(『考古学と自然科学』19号、1982)では、皇朝十二銭の内測定できた万年通宝・神功開宝・富寿神宝・乾元大宝は、いずれも普通の日本の鉛の値を示し、江戸時代の寛永通宝の内、山城と豊後で鑄造されたと思われるものは神岡に近い値を、長門と備前は通常の日本の鉛の値を示しています。

この分析結果を見ると、古くは神岡の鉛は使われていないようで、『神岡鉾山史』の記述に調和的な様に思います。その論文から10数年経ちますが、最近のデータを御存知の方はいらっしゃいませんか？

森さんの話は、自説に好ましくないものには、実証的な考察を欠いた感情的な批判を行い、考古学者の見解とは思えないように感じました。MUSEさんは、この点について如何ですか？

《再録2終了》

以下は、補足コメントです。

鉛鉾床の鉛同位体比は、その生成に至る履歴が似ていれば値が近く、そうでなければ異なる値を示すと言う現象に基づいて、鉾床の推定を行おうとするもので、各地の鉾床のデータを比較すれば、その有効性・限界は自ずから明らかに成ります。

東村武信・京大原子炉教授(1986)『考古学ライブラリー 石器産地推定法』(ニュー・サイエンス社)に示された、黒曜石・サヌカイトの産地推定と、考え方自体は同様なので、この本が参考に成るでしょう。

なお、森教授らがケチを付けている、化学反応による同位体比の変動ですが、軽元素ではその効果は結構あり、古水温・気温・氷床の消長の推定に用いる酸素・水素の安定同位体比や、人骨のコラーゲンにより過去の食生活の推定に用いる窒素・炭素の安定同位体比の研究などに、利用されています。

一般的に、重い元素になるほど、自然界における質量分別効果は小さくなり、水素では30%以上の変動を示すのに対して、炭素では約3%と小さくなります。

濃縮ウラン(235U)を生成するのに、僅かな分配の差を膨大に重ねることにより作り出しているように、重元素では変動がずっと小さくなります。鉛は、安定な元素と

してはビスマスに次いで重いもので、その影響は ^{238}U ・ ^{235}U ・ ^{232}Th の娘核種の寄与分の違いと比べると、影響は微々たるものです。

また、皇朝十二銭の鉛原料については、旧日本史・古代#80(97/04/01)「皇朝十二銭の化学組成と鉛の原産地」で、最近の研究を紹介しました。

【再録3開始】

他の博物館の展示案内のポスターを見ると、歴博(千葉県佐倉市)で、5月18日まで「お金の玉手箱 - 銭貨の列島2000年史 - 」(入場料: 大人400円)をやっていることを知りましたので、こちらも見に行きました。

歴博は銭貨の文化を多方面から見ようとするもので、その製造法についての古い絵巻や復元実験なども紹介されており、興味深いものでした。

私にとっては、自然科学的研究の展示が興味を引かれ、古代史に関連することでは、皇朝十二銭の化学組成と鉛の原産地について、分析結果が紹介されていました。以下、解説書(1800円)や馬淵久夫さんの研究論文を基に紹介します。

解説書の論文集に、齋藤努・高橋照彦「古代銭貨 - 「皇朝十二銭」 - の化学分析」が掲載されており、従来の断片的な研究を、網羅的にすることによって検証しています。化学分析は、12銭の全てについて、鑄ではなく金属部分を用いた、それぞれ3~10試料の分析データがプロットされています。なお、分析方法の記述は有りませんでした。他の論文には中性子放射化分析が示されており、これもそうかも知れませんが、

ちなみに皇朝十二銭とその発行年は、1.和同開珎(銀銭も) 和銅元(708)年、2.万年通宝(金銭の開基勝宝と銀銭の大平元宝も) 天平宝字4(760)年、3.神功開宝 天平神護元(765)年、4.隆平永宝 延暦15(796)年、5.富寿神宝 弘仁9(818)年、6.承和昌宝 承和2(835)年、7.長年大宝 嘉祥元(848)年、8.饒益神宝 貞觀元(859)年、9.貞觀永宝 貞觀12(870)年、10.寛平大宝 寛平2(890)年、11.延喜通宝 延喜7(907)年、12.乾元大宝 天徳2(958)年 です。

青銅は本来は銅・錫・鉛の合金ですが、最初の4つは錫を数%以上含むものが多いのに対して、それ以降は殆どが1%以下で、日本に錫資源が少ないことを反映したとしています。

後になるほど、鉛の比率が大きくなる傾向があり、特に最後の乾元大宝では100%近く鉛であるものも有ります。

最初の3つは鉄を数%も含むが、それ以降は殆どが1%以下に成ることで、銅の原鉱石が製錬法の変化のいずれかを反映するものとしています。

銭貨の発行の停止は、資源の枯渇を大きな理由と考えているようです。

銅資源は、仏像など寺での消費が大きかったようで、東大寺の大仏は、平安時代の鑄銭司の年間目標の10年分に相当するそうです。

次は、鉛同位体についてです。その前に、馬淵さんなどのこれまでの研究成果(例えば、『季刊 邪馬台国』60号の特集)を振り返ると、型式I~II-1の銅鑄は半島の鉛、型式II-1~IVの銅鑄や前漢鏡は華北の鉛、後漢中期以降の漢式鏡は華中・華南の鉛と、かなり明瞭な分類が出来ようです。弥生時代には日本製の鉛は殆ど使われていないようで、佐賀県久里大牟田出土の鉛矛は、稀な例とのことでした。

馬淵久夫ほか(1983)「古代東アジア銅貨の鉛同位体比」(考古学と自然科学16)では、皇朝十二銭から4種を分析し、 $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}=0.847\text{--}0.848$ ・ $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}=2.090\text{--}2.091$ と、分析誤差に近い殆ど同じ値を示し、主要な日本の鉛の分布範囲、 $0.840\text{--}0.851$ 、 $2.079\text{--}2.105$ の中でも、周防の鑄銭司に近い山口県桜郷の鉛と似ており、この地域が鉛の供給地と考えても矛盾しないことを、指摘しました。

今回は、分析を皇朝十二銭全てに広げ、中でも和同開珎については幾つもの分析を行っています。結果はやはり、 $0.847\text{--}0.848$ ・ $2.089\text{--}2.091$ と、極めて揃っており、馬淵さんの予察的研究の結果を確認するものとなり、青銅の鉛資源は、殆ど1ヶ所に限定されていたことが考えられます。また、鉱山のデータについても、現在のものではなく、実際に古代の遺跡から発掘されたものと比較しています。山口県美東町の長登銅山跡・平原遺跡では、銅だけでなく、鉛塊や鉛製錬時のスラグが発見されており、これらを幾つか分析すると、良く一致する結果が得られています。

なお、『延喜式』には、銭貨の鉛供給地としては、長門と共に豊前が挙げられているが、こちらの鉱山の実体が不明であり、今後の検討課題となることも示しています。皇朝十二銭以前の銭としては、畿内周辺の都城や寺院あわせて15ヶ所から見つかっている、無文銅銭・銀銭があるとのことですが、この銅銭の化学組成や鉛同位体がどうなのかは言及がなく、未測定なのかも知れませんが、興味があります。

ところで、馬淵さんの分析データに基づく解釈に対しては、久野雄一郎・森浩一の両氏が、弥生時代から日本での銅や鉛の本格的な精錬を想定し、激しい反発をしていることは、あちこちの発言に散見しますね。特に、著名な鉱山である飛騨の神岡の鉛は、 $0.857\text{--}0.860$ ・ $2.113\text{--}2.129$ と、日本の一般的な値と大きく違って、華中・華南夕

イブの値を示すことを引き合いに出して、馬淵さんの結論に疑義を唱えています。

日本列島の日本海側の海岸線に注目すると、能登～飛騨が突出しているのが目立ちますが、約2000-1500万年前に日本海が拡がって大陸から分離した時に、大陸の古い地殻と一緒に連れてきたものとか推定されているようです。そのために、通常の日本の値と異なるのでしょうか。

前述の馬淵ほか(1983)では、製造地が異なるとされる寛永通宝を4つ分析して、長門は、0.847・2.092と、前述の皇朝十二銭や地元の値と良く似ており、備前は、0.850・2.103と、兵庫県の生野鉱山に似ているのに対して、山城と豊後は、0.860・2.124-2.125と華中・華南タイプに入りますが、当時の日本は鉱業の盛んであり、中国商船の記録には日本からの輸出品に銅と鉛が記されることから輸入とは考えられず、この値に該当する神岡の鉛を使っていたことが推定されます。

飛騨では、古墳時代後期に成って、ようやく古墳の築造が本格化するようで、『延喜式』の主計でも、“調、不輸、但浮浪人輸商布。庸、輸商布。”と、他の国々に比べて極めて簡略で、古代には大した開発はされていなかったことを窺われます。確認していませんが、神岡鉱山の開発を記した記事は、ずっと後世にならないと登場しないのでは？ 久野さんや森さんの発言には、古代に遡る神岡鉱山の遺跡の有無や文献などの指摘がないように思います。

神岡の鉛は、皇朝十二銭には見られず、近世には広く使われているようで、もちろん弥生時代には開発されていなかったのでは無いでしょうか？
《再録3終了》

この長文を読まれた方は、お疲れさまでした。m(____)m
(注：タイプミスなどに基づく、てにおはやデータの誤りに気付いたものは、訂正の上で再録しました。)

240/241 VZD07512 ラン 2 RE:銅矛の埋め方
(18) 98/02/12 23:03 036へのコメント

どんたくさん みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/
亀レスでごめんなさい。

どんたくさんが#36で紹介してくださった、北九州市重留遺跡の広形銅矛についての補足させていただきます(^_^)
神戸市立博物館での「'97考古速報展」で、ラン2もこの展示の前で足を留めた1人です。

>>福岡県北九州市重留(シゴト)遺跡出土
>>弥生時代後期(約1,800年前)
(中略)

>>弥生時代後期の竪穴住居に、祭器(銅矛)を埋納するための穴を設け、
>>埋めては掘り出すという行為を繰り返した跡が見つかった。
>>同じ銅矛が祭りに使われ、同じ場所に埋め戻され、保管されたのであろう。

最近いただいた本の中で武末純一さんが、この広形銅矛についてふれておられましたので紹介します。

それによると、竪穴住居の穴に埋められたまま出てきたということなので、家の中のマツリに使われたのかと疑問に思い、現地へ行って確かめられたところ、住居は、通常の1.5~2倍と大きく、ほかの住居群とは少し離れているそうです。
住居も2回建て替えられていることから、ここが神聖な場所として選ばれ、土中に銅矛を保管し、ムラ全体のマツリの際にとりだして使うことが一定の期間くりかえされたであろうことを、推測されています。

これは青銅器のマツリが、集落の中でも行われていたことを考えさせるとも重要な資料であると思います。

【参考文献】

武末純一「コラム ムラの中の青銅器」広瀬和雄編著『縄紋から弥生への新歴史像』所収 角川書店 1997年 ¥2300

*この本はおもしろかったです (^o^)/ 新鮮でした。

縄紋文化が発展して弥生文化となったという教科書通りの歴史観ではなく、縄紋文化と弥生文化が、全く異質の原理と構造を持つモノとして捉えた、新しい歴史像をしめされています。
ラン2

241/241 VZD07512 ラン 2 RE^5:雷神を奉る形が変化したのでは？
ページ(141)

(18) 98/02/12 23:03 236へのコメント

大三元さん こんにちは。ラン2です (^o^)/
学生時代、アイヌ語を独学で勉強しようとして挫折した過去を持つラン2としては、大三元さんのご発言、いつも興味深くROMさせていただきます(^_^)

>>アイヌの祭壇(ヌサ)などでもイナウというものを使い、削りかけ、と訳されて
>>います。ご覧になった「地方」はどちらでしたでしょうか。

わたしが見たのは、三重県の熊野市です。
土地の古老が、実際に作ってくれました。小刀で、木の先を薄く削っていき、花が
咲いたような感じです。

今、民俗学事典をひくと、一般的な用語のようにもとれました。

では 銅鐸シンポ、最後まで楽しんでくださいね。 ラン2

242/242 RXE12761 六爾 RE:日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)
(18) 98/02/13 00:35 224へのコメント

nifty:FREKIMT/MES/18/224 へのコメントです。
kikkawa さん、こんにちは。

> 考古学に興味を持ち、初めて読んだ本が、森先生のカラーブックス『古墳』と、
> ランさんと同様に、私が最初に買った考古学関連の本は、森浩一(1983)『日本の古
>墳文化』(NHK市民大学テキスト)でした。なお、文献史学に関する本は、ずっと遡り
>ます。

同じですね。
でも、私は『古墳の発掘』『巨大古墳の世紀』もいい本でしたね。このほかに
も一般向けのものが『古墳文化小考』でしたか、でも、森先生の本当の業績は
『日本遺跡発掘物語』などでの学史の間に埋もれてしまった人々を発掘したこと
でしょうか。

先土器時代の東日本のところで、相沢先生が登場していました。たぶん、一般
のところに登場した最後だったのでしょう。写真入りです。(^^)

> 森教授・編著の本は、図書館や書店で大量に目に付き、素人目には凄く博学に見え
>たので、当分の間は最も発言に注目した学者でした。

> ところが、既述のように森教授は自らの仮説に都合が悪く見えるデータには、エキ
>セントリックな反発を示すことが多々あるのに気がきました。自分が分析・計測系な
>事もあり、一つのテーマに対して自ら詳細に調べて、“データに語らせる”タイプ
>学者の方々に、ずっと好感を抱くように成りました。私の嗜好は、古代史ファンとし
>ては渋め?(^^;

> 言葉は悪いかも知れませんが、森教授は、学者と言うより、活動家として辣腕に感
>じました。この辺りのカリスマ性が、一般に人気が高い理由でしょうか？

この点は納得です。高校一年の時に最初に講演会をお聞きしたときの感動が今
にも続いています。来月の講演会が楽しみだったりして。

キッカワさんは『考古学京都学派』はお読みになりましたか、末永門下生の人
々が師の死後、結局大きく二つに別れてしまうという悲しい事実を述べていま
す。結局、森先生の孤立化もこのときから始まっているのかもしれない。

(;_;

>

> それだけに今回の『出雲の銅鐸 発見から解読へ』が、ラン2には内容が矛盾して
>てわかりにくく、脱線が多いのが残念ということがいいかったです。

> 私は読み方が浅いようで、舞台裏の発言が聴けて興味深かったとしか思いません
>でした。(^^; 具体的に、佐原館長らのどんな点に矛盾がありましたか？

私も、ただおもしろ読み物として読んでしまいました。(^^;)

> 私が、銅鐸研究に関して佐原館長が凄いと思うのは、新旧関係が殆ど判らない状況
>での型式編年案が、複数の銅鐸を出土する例や鉛同位体比などと調和的で、的を射た
>ものと考えられるに至っていることです。古代人の心の移り変わりを、深く理解され
>ているのでしょうか？

そうですね、とてもすごいことだと思います。

最後に、ちょっと、通好みの考古学者ですが、私の先生の坂詰秀一先生はいか
がでしょうか、とても地味な先生ですが、考古学史を大事にする点では齊藤忠
先生のもっとも有力な跡継ぎでしょうか。私は、ちょっとでも見習いたいと思
ってホームページなどを作っているのですが、、、、(^^;)

六爾(RXE12761@niftyserve.or.jp)

243/244 QWD02544 どんたく 「もりきん説」登場、熱烈歓迎！
(18) 98/02/13 20:50 237へのコメント

もりきんさん、こんにちは。 どんたくです。

>>読んでるだけでは我慢できなくなってきましたので、参加させてください。

>>

>>こんな筋書きはどうでしょうか。

「もりきん説」のご登場、熱烈歓迎！

「どんたく説」の場合には、記・紀の神武東征説話に毒され(？)、また、「高地性遺跡の存在はその当時にある種の緊張があったことを示しているのではないか」、などという説の影響も受けて、「力」を背景にした勢力の交替ということを想像しています。

それに対して、もりきんさんのお考えは、「銅の文化から鉄の文化への移行は、ある意味で自然の成り行きであった」としておられるように受け取りました。確かにこれも、肯ける一つの考え方でしょうね。ムム、ムム

「もりきん説」のご披露、まことに有り難うございました。m(_ _)m

「読んでるだけでは我慢できなくなってきた」色々な方々の色々なお説を、どんどんたくさんアップして戴けると、この「銅鐸シンポ」もますます盛り上がるだろうと、期待しています。

QWD02544 どんたく

244/244 VZC02152 勘太郎 銅鐸とは何か？
(18) 98/02/13 21:58 203へのコメント

弥生さん みなさん、こんにちは

いまさら「銅鐸とは何か」なんてオチョクってるんとちゃうか？と思われるかも知れませんが、勘太郎は弥生さんの#203のご発言もうひとつ、銅鐸=祭器と決め付けている発言が多いようですが、どういう理由で「祭器」と言い切れるのか、御自分のお考えを先に発表すべきだと思います。「〇〇先生の説だから」ならその様に、です。でもそれって、少し寂しくありませんか？。 <弥生>
を見て「何ゆうてけつかるねん！そんなもん祭祀用具に決まってるやんけ」と思っていました。が考えれば考えるほど解らなくなってきました。(^^;

祭器説：祭器とは何か？神を呼び降ろすための小道具？

神社を念頭に置くと祭器としては御幣ぐらいしか思い浮かびません。御幣は振り動かすものでずっと置いて眺めるものではありませんね。

降霊の小道具としては当てはまらないかも...。多分x

依り代説：これは少し可能性があります。でも銅鐸はしばしば磐座の近くに埋められています。むしろ磐座や巨木の方が依り代として相応しいように思えます。でx

ご神体説：ご神体は山とか巨木とか、むしろ大きくて威圧感のあるものがご神体に相応しいようで、後期の銅鐸は大きくていい線いっているがちょっと無理な感じがします。これも多分x

楽器説：はじめはきつと降霊の楽器だったと思います。ラン2さんに教えていただいた銅鼓と同じ役割だったと思います。それが何で倭国だけ楽器でなくなったのか？木鼓とか別の楽器の方がリズム感があって楽しいから窓際に置かれていたのを演出家が舞台背景として再生産したのか？(背景の置物説)

どんたく説：結構説得力がありますが、どのように使用されたのか不明
火種保護器具説：勘太郎のハンドルの由来となった人(大叔父)の説。説明不要デスネ

供物入れ説：供え物にハエがたからないよう蓋をした。(^^;
人身御供の心臓を入れた(インカカ バキョ(.))\ (^^;)

えーっと、六爾さんにお尋ねします。諏訪大社では昔一年神主という制度があって一年神主を勤め終えると殺された、という話をどこかで読みましたがどういう殺し方をしたのでしょうか？

doutakusinpo1998

とりあえず思いつくまま列挙しましたがサッパリわかりません。あれこれ用途を考えたが結局使いものにならなくて×印をつけて埋めちゃったナーンテ、

弥生さんのご発言をうじうじ噛みしめている 勘太郎
98.02.13

245/245 VZC02152 勘太郎 銅鐸とは何か, part2
(18) 98/02/13 23:12 203へのコメント

みなさん こんにちは、

勘太郎は銅鐸シンポジウムが終わらないうちにいっぱい質問をしなければとアセっています。明日から熊野三湯めぐりに行くのでその間に質問タイムが終わってしまつては大変と必死で書き込みをしています。雑になるところはゴメンナサイ。

銅鐸とは何か、パート2

古い水晶玉説：銅鐸を叩いてその音色の違いで明日の天気を占った。

除虫器具説：銅鐸を鳴らして、あるいは叩いて虫を追っ払った。

同盟国のしるし説：金印下賜と同思想で銅鐸配給元国から同盟諸国に同盟のしるしとして配給された。その後邪馬台国では畿内式、狗奴国では三遠式と分化しはじめ遂に分裂抗争をはじめた。両国の接する近江野洲では両方の銅鐸を埋めて手打ち式をした。
銅鐸の絵はそれぞれの国の特産物やら特色を描いた。
(アレツ、いつの間にか邪馬台国畿内説になっているゾ)

以下はパネリストの皆様への質問です。

1. 加茂岩倉遺跡に×印のついた銅鐸がありました。これは銅鐸霊の封印でしょうか？
2. ×印のついた銅鐸に傾向はあるのでしょうか？

98.02.13 勘太郎

246/253 GGB03124 たけ(tk) RE:銅鐸と雷の分布
(18) 98/02/14 13:06 231へのコメント

どんたくさん、こんにちは、たけ(tk)です。

》 経度1度、緯度1度を夫々4等分しますと、1辺約30kmの方眼の柵目

電力業界とタイアップして詳細なものを作ってもらおうとか・・・

》 しかし、残念ながら、そのようなデータが無いのが実状です。

データがないときに、予想を立てて、後日証明される、つてのがカッコいいですね。

247/253 GGB03124 たけ(tk) RE:搬入土器と「神武東征」説話
(18) 98/02/14 13:06 216へのコメント

かおるさん、こんにちは、たけ(tk)です。

》 どなたか、御存じの方が居られましたら、御教示ください。

あ、そこまでやらなくてもいいです。ただ、考え込むほどの矛盾ではないのではないかと、いうことをいいたかったです。

- -

》 >> この「唐古・鍵の集落が次第に衰退」し始めたころというのは、実年代では
》 >>いつ頃になるのでしょうか？。 の前2～1世紀は衰退時期ではないですよね？。

》 発掘調査では、弥生後期末には環濠がほとんど埋まって機能を失っていると
ページ(144)

doutakusinpo1998

》されています。
》この弥生後期末の実年代ですが、私が参考している本では3世紀初めから
》中頃とされていますので、今のところは私もそう思っています。
》でも、この第五様式の後半の土器編年は最近色々と議論があるらしいので、
》本当のところは変動するかもしれません。

ということは、要するに、

》107/190 CXN00172 大三元 Re:質問1 銅鐸王国について
》前3世紀と言うと、雑駁に言って弥生時代の始まり、後3世紀と言うと卑弥呼が
》死にイヨ(トヨ?)に引き継いで、邪馬台国のその後が見えなくなる頃ですね。

ですね。

卑弥呼というのは「倭国が乱れ、たがいに攻伐すること歴年、そこで『共に』
一女子を立てて王とした」とあるように、内乱状態にあった各国が停戦のため
の協議をして、おそらく政治的には無害な、巫女さんをおつかうことによって、
「まあまあ」で収めた、というものでしょう。

この卑弥呼をおつかいだ勢力が、奈良盆地の勢力だったのか、それ以外から来た
勢力だったのか。銅鐸や銅剣を祀ることを禁止して、鏡を重視するようになった
発想はどこから来たのか。

》202/209 VZD07512 ラン2 RE^2:搬入土器と「神武東征」説話
》この纏向遺跡というのはホント不思議な所で、大きな溝、大型の施設跡、たくさん
》の祭祀跡、各地の搬入土器が出てくるけれど、肝心の住居跡がほとんど見つかって
》ない。普通はアレだけ掘ったら、多少は生活臭がでてきそうなものなのに・・・

唐古・鍵の集落が次第に衰退して、「生活の匂いがしない纏向」が出現した
というのは、唐古・鍵の集落の勢力が他の国を圧倒してその都を継続したの
ではない、ということの意味していると思います。

「鏡」という発想は、「日神」「月神」の発想に近いのではないかと感じて
います。「日神」「月神」は対馬や杵岐で祀られていた形跡がある。また、ス
サノウと天照との間のウケヒも日本海の半島と列島の中間の島々を舞台として
行われている。

- * 対馬島下県郡アマテル(阿麻[低-人]留)神社、天日神命対馬県主祖、
岩波文庫版日本書紀3、p.131
- * 杵岐島杵岐郡月読神社。天月神命、杵岐県主等祖。同書p.129

そんなこんなから、「日神」「月神」を祀る人々があちらの方からやってき
て、纏向で調停役の巫女さんをおつかう政治を始めたのではないかを想像して
おりますが、どんなものなのでしょうか？

- -

あ、そうだ、

》ご面倒でしょうが、1行37文字以内くらいに区切って書いて戴くと助かりま
》す。m(_ _)m

たけ(tk) / GGB03124@niftyserve.or.jp

熊谷秀武 / GGB03124@niftyserve.or.jp

248/253 MHB01602 M U S E 古墳の沿岸立地
(18) 98/02/14 16:26 229へのコメント

Re:#229

勘太郎さん、はじめまして。MUSEと申します。

銅鐸祭祀から墳丘墓祭祀への転換は、土木技術の革新によるもの、という
勘太郎さんのアイデアは決して「軽薄な思いつき」ではないと思います。
鉄器による農耕技術の革新により農地が拡大し、人口扶養力もまして生活
が安定します。そして、大規模工事への参加も容易になるのは明かだとお
ページ(145)

もいますから。
 巨大な古墳が造築されるなら、他の地区の人々へのデモンストレーション効果も大きかったでしょう。そして、銅鐸との関わりを断念した、との見方もできますね。
 おそらく、海岸に沿って古墳が立地されたのも当時の交通路が海道をメインにしたことと無縁ではないでしょう。それに、古墳の周囲を水堀でめぐらすなら、干ばつ時に「ため池」としての機能も果たせます。
 また、古墳に植林するなら雨水を保水できますから、この「ため池」に自動的に貯水するという省エネ農耕技法が完成したことになります。

瀬戸内海沿岸、大阪平野に巨大な古墳が作られたのも、沖積平野での水田耕作を可能とする鉄製農具の普及があったばかりでなく、干ばつに対するこのような農政の確立も大きかったように思えます。
 その上、海岸立地の農耕となると、コメ食とは不即不離の関係にある塩分の摂取が容易となる利点も生じます。

中国の漢帝国は、食塩の専売で国家財政を賄いましたが、日本古代国家では、このような歳入は期待できませんでしたが、それでも、繁栄する基礎を築いた、われらの祖先の手工には脱帽する思いであります。
 ちなみに、中国の史書は、邪馬台国では租税を徴収している、と伝えていきますね。

98-02-14

M U S E

249/253 MHB01602 M U S E RE: 利器の鉄と祭器の銅
 (18) 98/02/14 16:26 233へのコメント

Re:#233

ラン2さん、その後のカゼの症状はいかがですか。どうぞ自愛のほどを。

久野邦雄著『銅鐸の復元研究』には、私の望む情報は記載されていないとのこと。了解しました。
 ひょっとして、編集時点での情報として、発行者が掲載したのではないかと淡い希望を抱いたので、お調べいただいたわけですが。

幸いにも、朝日新聞発行の『アサヒグラフ別冊 銅鐸の谷』（1997年11月）での、久野邦雄氏の実兄・雄一郎氏の寄稿で、私の知りたいことにも触れていましたので、今は満足しております。どうもありがとうございました。

ただ、久野雄一郎氏も言及されていますが、出土した銅鐸のすべてについて、寸法の計測は熱心でも、重量・密度・成分といった科学的データを収集する基本姿勢を貫いているのではないようですね。最近の非破壊検査装置があれば、銅鐸を損傷することなく、これらのデータを計測できるはずでは、と思ってしまう。
 特に、密度は簡単な道具でアルキメデスの原理で計れますから、ぜひ実施してほしいものです。多数の銅鐸が同一地点で発掘された場合、この密度情報だけでも、かなりの知見が得られますから。

とにかく、お手をわずらわせてすみませんでした。

98-02-14

M U S E

251/253 MHB01602 M U S E 鉛同位体比法の根本原理に疑問符
 (18) 98/02/14 16:28 239へのコメント

Re:#239

kikkawa さん、鉛同位体比法について、くわしい説明をいただき、ありがとうございます。

折角のご労作ながら、当方の疑念は解消しませんでした。kikkawa さんの論調は、最近の研究動向と、それによる日本の考古学界への影響に触れていないからです。

今、問題となっていることを、岡本健一氏は、自著のなかで、

第一章（岡本健一『古代の光 [歴史万華鏡]』三五館 1996.10.04）

・・・
・・・
・・・

青銅器の産地の謎 いまや鉛に産地の指紋なし 75°-ジ

と目次に掲げ、久野雄一郎氏（三宝伸銅相談役・檀考研指導研究員）から送られた、イギリスの専門誌に掲載された論文の、

「考古学における重金属同位体の新研究」

を参照しながら、ペーパーの著者は、《地中海東部の鉛はどこもよく似ていて、産地の推定はできない》と主張していると、紹介されます。ちなみに、論文の著者は、P・バッド氏（英ブラッドフォード大学）で、岡本健一氏は毎日新聞編集委員（京大・史学科出身）の肩書を持ち、多分、邪馬台国畿内派なのですが、同論文の追試を求めるとのコメントを発しています。

また、P・バッド氏の研究による結論として、久野雄一郎氏は、『アサヒグラフ別冊 銅鐸の谷』（朝日新聞社 1997年11月発行）の寄稿論文「銅鐸科学事始」で、つぎのように述べています。

《鉛同位体比法は「鉛を加熱したり、溶かしたりしても鉛同位体比は変化しない」という根本原理のうえに築かれた方法であるが、英国ブラッドフォード大学の最近の研究はこの根本原理を疑問視する見解を発表しており、日本における研究も修正を迫られるようになった。》同書p.96

このように、鉛同位体比法の計測値の精度を問題にしているのではなく、この方法で鉛産地を特定できるか、が問われているのです。

また、これに関する議論は、私の、旧3番会議室【日本古代史】#02486でも、同様の懸念を伝えていきますから、この分析方法による銅鐸の産地推定データを提出する方は、この疑念を払拭する理論的説明を、まず述べてほしいと思います。

ちなみに、海外の研究では、日本ほど産地特定に成功していないそうです。馬淵久夫氏のグループは、英国から輸入した質量分析装置で高精度計測が可能となったと主張されますが、現代の銅・鉛・錫を原材料にして青銅製品を作り、そのモデルで鉛産地を特定できることを確認したのでしょうか。古代のサンプルでテストしなくても、現代のサンプルでも容易にこの分析手法の有効性を評価できるはずですから。

98-02-14

MUSE

250/253 MHB01602 MUSE RE: 議題4 銅鐸退場の理由
(18) 98/02/14 16:27 237へのコメント

Re:#237

もりきんさん、はじめまして。MUSEと申します。

すでに、どんたくさんからのResがありますが、私からも。

銅鐸の流行が退潮した理由を、卑弥呼タイプのライフスタイルが隆盛となるキザシに求めるワケですか。なるほど、と思います。

でも、どうして、銅鐸信者を抱える地域リーダーは、同様な経済システムを構築しなかったのでしょうか。武力の根源が鉄器ならば、それらを朝鮮半島から輸入するルートを確立すれば可能だったはずですが。もちろん、現代のように米ドルのような外貨を用意しないと相手も交易の対象としないでしょう。

それには、まず、相手の欲しがる交換手段を開発生産しなければなりません。卑弥呼の場合、これは魏皇帝への献上品が「絹布」であったことから、絹製品の生産がその交換手段と推測できます。あるいは、人身売買も考えられるでしょう。または、動乱の中国から日本に亡命した中国人を送り返して、相手の感謝の念に相当する返礼物を期待する手もあります。

しかし、これらのうち、いずれかの対策が実行可能だとしても、最大のネックは、北部九州のリーダーによって制海権が握られていたからでは、と考えます。

これらの地域リーダーが本州に居を構えるかぎり、朝鮮半島への海上交通路がオープンでないからこそ、卑弥呼政権と握手する必要があったのではないのでしょうか。

そのためには、卑弥呼が主宰する宗教に帰依しなければならなかった、と推測するならば、彼らの宗教的シンボルであった銅鐸の運命がどうなるかは自ずと予想されましょ。

しかも、卑弥呼政権は、交渉相手の地域リーダーの身分にもそれなりの配慮をするのを常套手段（卑弥呼は共立されて女王となっている）としているならば、彼らの傘下に入るのも悪くはないと考えるでしょうね。事実、大國主命は「新築の宮殿」を要求して、それが受け入れられていますから。

もりきんさんの分析を読みながら、卑弥呼をリーダーとする、ある宗族（父系集団）は、全国統一のヴィジョンに従い、早くから大陸との交渉に乗り出していたことが、銅鐸文化圏への進出を可能としたのかな、との感想をもちました。当時の中国は、覇権を争う戦乱の時代でしたから。

とはいえ、国際情勢をこのように分析するための大前提は、邪馬台国を北部九州にセットしたことにあるからで、そうでないと、単なるドラマ脚本と変わらないように思います。

第三部 出雲国と銅鐸国の幻想 その2

出雲には「国譲り」と言われる大転換期があったことが、風土記には無く神話にあります。この事件の起きた時点での国名は「葦原中国」として登場します。「出雲国」の名前があるのにはです。この「葦原中国」が何を指すのか、九州？、出雲？、日本全土？と、分かり難かったのですが、古事記は「葦原中国」と「豊葦原...水穂国」を分けて、出雲国を「葦原中国」と呼んでいます。ヤマト地帯も銅鐸が入る前は「葦原中国」（神武記：紀国での高倉下の夢の中）と呼ばれる条件を備えていたのではないかと思います（この箇所は意味が取り難いですが）。その後の、天皇の歌の「葦原のしけしき小屋に菅豊...」の「葦原」も、占領前のヤマト地帯を指すものかと思えます。葦原と呼ばれる湿原地に、土地の貴族の家を建てるとい情景が変だし、伊須氣余理比賣の家の所在について、昔は山百合を「佐葦」と称したなどと「葦と葦」が似通っていることから、彼女の家が「葦原」に建っていたと、思わせようとする作為が（漢字を用いてからの）感じられます。この歌は、天皇や貴族ではなく庶民が詠んだものだと思います。それを、ここに引用したのは「葦原中国」とは、大規模な水田耕作が始まる前の、葦原の繁る（水田予備地）国土のことで、更に銅鐸人に占領されるべき国で、伊須氣余理比賣の国もそいう「葦原中国」だったと告げているのではないのでしょうか。

古事記では「大國主神」には五つの名前がありますが、複数の名を「亦名」で連ねる手法は全部別人だと思えます。古事記の出雲神話はこの中の一人の行動であったり、一つの事件に複数の名前を使ったりしています。「オオナムチ」を除いた「葦原色許男神・八千矛神・宇都志国玉神」の活躍時が、銅鐸以前かその後ののか、或いは固有名詞ではないのか、の調査は、未だ手を付けていないので今後の課題です。出雲風土記には、意宇・嶋根・秋鹿・神門・飯石・大原・出雲・仁多・楯縫の九郡があり、意宇郡～大原郡までの六力郡には、スサノヲ神本人か子供の子孫の伝承があります。同じく古事記に見受けられるアチスキタカヒコの名も、オオナムチの子として風土記のあちこちに登場します。古事記では大國主の子でありながら、天若日子の友人として登場し、まるで高天が原の神であるかの様ですが、この「友人のような儀兄弟の様な」二人も、本来は出雲の神ではなかったか、出雲に「天...神」がいたのだと思います。私は、風土記も古事記と同じ様に「系譜繋ぎ」をしている？、と疑っていますがこれも今後の課題です。

殆どの方が疑問を感じるであろう「国譲り神話」のその箇所は、出雲国と「国
ページ(148)

譲り交渉」が纏まると、高天が原軍団は何故か「竺紫の日向の高千穂のくじふる嶺」と云う場所に行ってしまうという記述です。この訳の分からない話は、何を物語っているのでしょうか。「竺紫の日向...」と「出雲」とが、別件の占領だったのではないかと考える余地がありそうです。元は同族？の彼等が、九州と出雲の二手に別れたのか、九州を制覇してから一族の別派が出雲に向かったのか、そのどちらかが考えられますが、どちらとも断定出来ません。その二系統が実は兄と弟、銅と鉄、などでの対立関係にあり、このことが銅鐸の記憶が消されたこととも関係があるようにも考えられる...と思っています。

「銅鐸国」が出雲から始まったという仮説には、出雲から銅鐸鑄型が出土していないと云う弱点があり、その点は良く分かりません。これから出るかも知れないという期待もありますが、初期の鑄型は石製だが次第に土製のものも出来て、それは銅鐸が出来上がり次第壊されたという説もあるようです。しかし、ヤマトから石製の鑄型が出土していますから、初期と考えられる出雲が土製の鑄型を用いたというの、理屈に合いません。私は出雲とその周辺の占領政策が成功し、東に移動する時に、石製鑄型を持ち去ったのではないかと考えてみました。九州からも鑄型と鑄型形（外枠？）が出てると現地の方から聞きましたが、これは『鶏冠井銅鐸鑄型より絶対に新しい』のですね？（#063ラン2さん）。すると、日本最古の鑄型は九州より持ち出された、とも考えられないでしょうか？。技術的には、銅鐸から鑄型を作ることも出来るのでしょうか？。などと考えると、鑄型の出土問題は、大したことではないのでしょうか？。次回は【銅鐸の正体】ですが、あまり期待しないで下さい。

253/253 SGL02501 弥生 RE:銅鐸国「弥生説」2
(18) 98/02/14 17:15 227へのコメント

どんたく様
ボケをやって下さるとは有り難うございます。これで巡業しましょう。
皆さんと違って、どうしても「どんたく説」に納得できない部分があります。
私は、雷神の存在も、恐怖心も否定するものではありません。ですが、もっと、怖い神もあつたらうと思ひ、製造に手間暇かかり、高価でもあるらしい銅鐸が、どうして「雷神様」に限るのが、どうもよく分からないのです。

》私は、「太陽信仰をもった天孫系の人たちが入ってくる前の先住系の人たちは、太陽信仰とは違う別の宗教をもっていた。それが雷神信仰であった。」
・ここなんですけど、『別の宗教』が、『雷神信仰』と考えられた根拠は、落雷地だけなのではないでしょうか、どんたくさんのおっしゃるように、関東地方にはあまり、当てはまらない様です、ピンと来ないのはそのせいなのでしょうか。

》「雷様を下に聞く」というのは、太陽信仰が入ってきてからの思想でしょう。
・思想ではないと思います、私は古代人の実感だと書いたつもりです。

他にもいろいろありますが、今回は二つだけ質問をします。

1、「健御雷之男神」をどう思われますか？

ご承知の様に私は古事記からアプロ-チしています。それで、太陽信仰の前に月神信仰、その他があつたと思ひますが、雷神信仰はよく分かりません。健御雷之男神は大国主の敵で、高天が原系みたいですが...。わたしは、「剣」の神格化のように思ひますが、それにしても、何故「雷」なのでしょう。

2、どんたく説には、銅鐸の巨大化の説明はありましたっけ？。

#053「埋める儀式」が必要なら、小さくする傾向になりはしませんか？、ついでに、埋納地の焚き火の痕跡は、銅鐸に限らず、土・場所、の清めでは？。

もう一つ仮説を考えました。（冷静に読んで下さい）
銅鐸は「水神信仰」である、豪雨は水害をもたらし、家も田も流され死者も出る、これは水神の怒りであるから、銅鐸を造り埋納して、神の怒りを鎮め、静かに降るように祈った。水神のアレミタマを宥めて、旱魃の無きように、農作物に豊かな水を与え給えと、ニギミタマに祈願するのである。
水神信仰である証拠に、銅鐸に「流水紋」がみられる、神社に付き物の紙製御幣の形は、水の流れ、特に日本の谷を流れる激流をかたどっている様ではないか。なお土中に埋めるのも、水神が、水脈をつかさどることに深い関係がある。よって、{銅鐸=水神祭祀=降雨儀式=初期水耕豊穰儀式、の線でよいような気がした}。{ }は(#142) K A N A Kさんのモジリです。（また盛り上がると嬉しい。）

水神が如何に恐ろしいかは、現代の我々の生活の中にも見受けられます。しかもこの神は「祟り・災い」をもたらすのだそうです。雷様は、家の中に逃げ込めば、大抵は免れますが、水神様、特に井戸神様は、次々に人の命を奪うとか...。近所のバアサマ『このマンションで次々にお葬式が出るのは、建てる時に井戸を埋めたからや、ちゃんと、お払いをしないといかん』少し若い層の声『ウツソ -、高齢化のせいでしょ、でも、お払いやっとか』若者達『バッカミタイ、一万円
ページ(149)

は勿体ないよ・小遣いに頂戴！』ま、現実はこのものですが。 < 弥生 >

254/258 BYD06141 中村 勝英 REre:銅鐸国「弥生説」2
(18) 98/02/14 18:54 253へのコメント

弥生さん、どんたくさん・・・KANAKです。
お忙しいようですが、ご覧頂けるでしょうか？

以下は#215でどんたくさんの「雷神信仰」に関して提起・保留した「天神信仰」についての疑問です。
「銅鐸シンボ」のテーマとは少しずれるような気がしましたので、遠慮していましたが、思いがけず弥生さんに「モジリ引用」頂きましたので、思い切ってUPします。

#188KANAK

>「銅鐸=雷神信仰」が民衆の底流に残り「天神さん」に繋がったりしたら面白い
>のですが・・・差し当たっては”SF的妄想”に止めて置きます。

#204弥生さん

>>「天神様」は文字の通りに、天の神様のことで、古代の人がその存在を信じた
>>自然神の一つだと思います、多分当初は固有の名前など必要ではなく、山の神様
>>海の神様、天の神様、地の神様、など生活に密着して信仰されていたと思われま
>>す。・・・

私は、まず最初に古代の人がその存在を信じた自然神の一つ”天の神様”があるのかどうかを疑問に思っています。
むしろ、天象については”空・日・月・星・嵐・雲・雨”等の各々が”神”と認識された可能性が大きいのでは無いでしょうか？

空 = Vacant?

日 = 天照大神	皇祖神としての側面	雲 = ??	
月 = 月読神		雨 = ??	広瀬神(天武期?)
嵐 = 素戔嗚神?	氏族神としての側面	風 = ??	竜田神(天武期?)
星 = 筒男???	海神としての側面	雷 = ??	

これらを統合する”天の神様”と言う信仰対象の存在は確認出来るのでしょうか？
例えば”お天道(テト)さん”と言う一見”天の神様”的概念も、実際には”日 太陽”として理解されることが多いと思います。

Cf. ”お天道さんの高いうちから・・・”
”お天道さんが沈んで・・・”
”真っ赤なお天道さん・・・”

>>・・・この天とは、天に恥じない、とか、天に替わって成敗致す、とか、

確かに、この様な”天”の概念も有りますが、コレは”宗教=信仰”と言うよりむしろ中国の”思想=倫理”に由来する様な感じがするのですが？
(”天罰テキメン”辺りは微妙なところですが・・・)

確かに東アジア諸民族においては、個々の天象を総合する”天=天神=天帝”の抽象的概念と信仰が有るようですが、倭国においては何故か其れらとは異なっていた様な気がするのです。

>>・・・これらの神様がそれぞれ「眷属」を従えていると思われる様になったのは、>>仏教の影響でしょうか、雷様も、天の神様の眷属の一人とされた、と思います。

さらに、”天の神様”が”「眷属」を従えている”という概念或いは信仰形態が実際に認められるでしょうか？

”雷様”以外の”天の神様の眷属”とは何でしょう？

私は、寡聞にして存じませんが、弥生さんが具体例をお持ちでしたら、是非お教え頂きたいと思います。
(羽衣伝説の”天女”や”雷神風神”もチョット違う気がします)

>>次第に、各地にある天の神様の社に道真の霊が合祀されたり、逆に道真を祀った社に雷神が合祀されたりしていく訳です。ですから、本来天の神様は「天神社」>>で、・・・

かといって私は、”日・月”と並ぶ存在として”雷=天神”と認識・崇拜されたかどうかは現時点では判断出来ません。

だからこそ”道真合祀”以前の”各地にある天の神様”とは何だろうと思っているのです。

(#215・牟佐神社由緒書”当時の祭神は生雷神(即ち雷公)であった”?)
弥生さんの仰るような簡明な”天の神様”論では片づかない様に、思うのですが
・・・如何でしょう? (矢張り本論からズレてますね)

なお、「天神神社」における”道真合祀”以前の”祭祀・祭神・伝承”について
ご存じの方・・・お知らせ頂ければ有り難いのですが。

256/258 QW101226 もりきん 珍説 銅鐸祭り
(18) 98/02/14 21:43 245へのコメント

勘太郎 さん、こんにちは。
やっぱり、雷を象徴したものだと思います。どんたく師匠とはちょっとニュアンスが違うかも知れませんが、基本的にはどんたく説に一票。

夏、9月頃ですか。首長が村中にふれを出します。「今年は十年に一度の雷祭りの年じゃ、注文しておいた銅鐸が届いたので、明日夕方、雷の丘に集合するように」

その日は朝から村中総出で、ごちそうを作り、雷の丘を掃除します。雷の丘とは、その村が先祖代々銅鐸祭司を行い、数々の銅鐸が埋められている聖地です。

「稲妻は、稲の花が咲く頃、稲と交わり、実を成す。」と考えた古代人は銅鐸の輝きを雷光に、その音を雷鳴に見立て、落雷を再現することによって、米の豊作を祈願しました。

丘の上の広場に集まり、跪いた一同の前にはご馳走を供えた祭壇、その向こうにはやぐらが組んであり、つり下げられた銅鐸が西日を浴びてきらきら光っています。その輝きは目も眩むばかり。やがて、巫女が現れ銅鐸をたたきます。皆畏れるようにひれ伏し、願い事をつぶやきます。豊作ばかりではなく、家内安全・商売繁盛・交通安全・いい男が見つかりますように・プレイステーションが買ってもらえますように(ワウウウ)。その後、村のおもだったものが次々に銅鐸をたたきます。その度にひれ伏す動作が繰り返され、一巡すると、再び巫女が現れます。銅鐸をはずし、頭上に掲げます「祈るのじゃ」。呪文を唱えながらゆっくりとおろしてゆき、すでに、しきたり通り、前回の横に掘られた穴に埋納されて、儀式は終わります。

つまり埋めることで、落雷の儀式が完結するのです。当然、豊かな村は毎年のように行ったでしょうし、銅鐸の大きさも財力に合わせて違ったかも知れません。

カンゲッ!! よそ行って言わんように

もりきん(QW101226)

255/258 QW101226 もりきん RE:「もりきん説」登場、熱烈歓迎!
(18) 98/02/14 21:43 243へのコメント コメント数:1

どんたく さん、こんにちは。
自分の発言ながら、読み返してみると情けないなと思ってたところです。
暖かいコメント有り難うございます。

>「どんたく説」の場合には、記・紀の神武東征説話に毒され(?)、
>また、「高地性遺跡の存在はその当時にある種の緊張があったこと
>を示しているのではないか」、などという説の影響も受けて、

先日、NHKの『古代国家の胎動』でも、高地性遺跡を結んで、瀬戸内から大和に至るのろし通信の実験をやりました。当時、畿内がいかに西からの侵攻を恐れていたかのように思えます。しかし、かおるさんが#189で、書いておられるように、搬入土器や近畿型石鏃(こんな言い方は不適切?)の例などから、西日本選手権が実際に行われたのかな・・・と誤ってしまいます。九州勢の軍事力に圧倒されて、実際の戦闘はなく畿内が降伏した、という説明もあります。

最近、考えだしたのですが、文化の転向というのは我々が思っているほど深刻ではないのかも知れません。早い話が、日本の戦前と戦後ではまるで、外国のように違いますよね。体の大きさまで違う。今の若い衆を見ると、背は高い足は長い顔は小さい(クス)。思想や宗教、生活習慣なんかは裏表ぐらい違います。かといって、アメリカ人が大量にやってきて混血したわけではない。

>「力」を背景にした勢力の交替ということを想像しています。
>それに対して、もりきんさんのお考えは、「銅の文化から鉄の文化
>への移行は、ある意味で自然の成り行きであった」としておられる
>ように受け取りました。

>確かにこれも、肯ける一つの考え方でしょうね。ウム、カホ

有り難うございます。

『「力」を背景にした』ということがなかった、とは思いません。ただ基本的には、弥生人も、エライ人から庶民まで、より豊かで便利な生活を求めた結果、銅鐸に対する信仰心が他へ向かされたと思います。

以上、4頭身の もりきん でした。

もりきん(QW101226)

【おまけ】

海戦に長けた九州軍が淡路島に軍事拠点を置き、大阪湾に殺到する。精強なる大和陸軍が、ことごとくこれを撃破、上陸戦が膠着状態に陥ったとき、半島からオブザーバーとして参加していた軍事顧問が提案した作戦を実行する。それは、西軍選り抜きの隼人部隊を別働隊として紀伊水道を南下させ、熊野山中を大迂回して、大和軍本拠を背後から突き、挟み撃ちにする作戦だった・・・とか想像するだけでゾクゾクします。その方がおもしろいですよね。

258/258 BYW00406 かおる RE:「もりきん説」登場、熱烈歓迎！
(18) 98/02/14 23:04 255へのコメント

もりきんさん、こんばんは。
本当に良く来ていただきました。

>> 『「力」を背景にした』ということがなかった、とは思いません。ただ基本的には、弥生人も、エライ人から庶民まで、より豊かで便利な生活を求めた結果、銅鐸に対する信仰心が他へ向かされたと思います。(改行多謝)

そうだといいのですが、弥生終末期から古墳時代には、近畿では環濠集落が解体されて、そこから飛び出した首長クラスが豪族居館とも言えそうなものを構えます。

この事実から、環濠集落内ならどう柵で区切ってもみんな一緒という感じで祭りでできるでしょうが、首長が別の場所に住居をかまえるようになるし、皆を使って自分達のでっかい墓を作って偉そうな葬式をやるようになると、もつ皆はいっしょというような虚構は信じられなくなって、それまでの共同体の祭りは続けられなくなってきたのかなんてことを最近は妄想しています。

>> 【おまけ】

>> 海戦に長けた九州軍が淡路島に軍事拠点を置き、大阪湾に殺到する。と思いきや、淡路島を制圧する前に、大和と連合した吉備・阿波・讃岐海賊による瀬戸内海ゲリラ戦で壊滅してしまうので、近畿に北九州の土器はやってこなかったのである。
ゴミでした。

P.S

3月1日の桜井古墳オフが楽しみです、

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

257/258 BYW00406 かおる RE:搬入土器と「神武東征」説話
(18) 98/02/14 22:29 247へのコメント

わっ、たけ(1k)さんが熊谷さんだったとは驚きました。

日本史館2 番会議室はROM中心ですが、干支シフト論は以前から読ませて頂いております。

困ったなあ(; ; ;)。

>> あ、そこまでやらなくてもいいです。ただ、考え込むほどの矛盾ではないの>>ではないか、ということをお願いただけです。

そう思えると楽なのですが、土器の移動は弥生後期まではあまりみられないのですが、弥生終末期から前方後円墳出現期にかけては様相が大きく変わるようです。

その様相とは「第1は500kmを超える遠隔地の土器が移動したり、直接影響をおよぼすようになること。第2は弥生時代にはとうてい考え難い高率の搬入土器が認識できるようになること。大和や河内の土器が実際北部九州の遺跡で相当確認されており、交通網がまだ未整備なこの時期の動態には古墳の出現と密接不離な人々の異常な動きが投影されている。」(「土師器の移動」(森岡秀人)「古墳時代の研究6土師器と須恵器」所収(雄山閣))ということから考えますと北部九州の土器だけが纏向遺跡から殆ど出ていないことは、大和を中心とした古墳時代の形成には、北部九州の影響は少ないのかもしれないと思ってしまうのです。

>> そんなこんなから、「日神」「月神」を祀る人々があちらの方からやってき
ページ(152)

doutakusinpo1998

>>て、纏向で調停役の巫女さんをつく政治を始めたのではないかを想像してお
>>りますが、どんなものでしょうか？

弥生時代の北部九州は、鏡は威信財のように銅剣などと一緒に自分の墓に副
葬していて、祭祀の中心的な祭器は銅矛となっていたようですので、「日神」
「月神」を祀る人々とは壱岐や対馬の勢力がやってきたということでしょうか。
でも、このあたりも銅矛が大量に出土していますので、このあたりの祭器も銅矛
のように思えますが、どうでしょう。
それとも、弥生の終末期に宗旨替えしたのでしょうか。

それとも、こういう考え方がおかしいのでしょうか。

>>ご面倒ですが、1行37文字以内くらいに区切って書いて戴くと助かり

>>ます。m(_ _)m

失礼しました。

ルーラーを40文字で設定していましたので、ご覧になれなかったかもしれま
せんね、設定を変更しました。

これからも、よろしくお願いします。

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

259/262 TAB00253 yaohide RE:RE^5:雷神を奉る形が変化したのでは？
(18) 98/02/14 23:39 241へのコメント

みなさん、ありがとうございます。

銅鐸が、武器や単なる楽器でなく、何らかの祭祀など宗教的な
目的で存在したのなら、形を変えて存在している可能性は否定
できないと思います。

銅鐸が禁止もしくは廃棄処分が決められたにしても、
信仰が簡単に消え去るとは思えません。
まして、先祖代々教えを受けた祭祀が、王が変わった
位でなくなるとは思えないのです。

ですから、銅鐸が捨てられたり造られなくなっても、神様はなく
ならないはずですよ。

テキストだけででしたから、雰囲気伝わらなかったかも
しれませんが、白木の10cm角くらいで、長さが1m50cmくらい
のものに、例の折り込んだ1辺が15cmくらいの紙が、ついているのです。
大きいですよ。

「地震、かみなり、火事、おやじ」というくらい日本では怖いものの
代名詞でしょう。あと、雷の字のついた神様も結構いますよね。
どんたくさんの雷神説、なかなかおもしろいです。

案外あまりに身近にあって、かえって気がつかないものに手がかりがあるかも
しれないとおもいました。

yaohide

260/262 QWD02544 どんたく RE:銅鐸と雷の分布
(18) 98/02/14 23:48 246へのコメント

たけ(tk)さん、こんにちは。 どんたくです。

#247:

>> たけ(tk) / GGB03124@niftyserve.or.jp

>>

>> 熊谷秀武 / GGB03124@niftyserve.or.jp

あれまあ、たけ(tk)さん = 熊谷秀武さん とは！

ページ(153)

今まで全く気がつきませんでした。(^^)
どうも失礼しました。m(_ _)m

>> 電力業界とタイアップして詳細なものを作ってもらおうとか・・・。

IKLマップは、気象台と電力会社とがタイ・アップして作られたものと理解しています。
電力会社としては、これ以上細かい地域分けをしたマップは、普通必要ないということでしょう。

ただ最近、電力会社はレーダーを使って雷の地点を確かめる方法も色々やっているようですので、場合によっては細かいデータをとることもできるかもしれません。

でも、
『「どんたく説」のために、落雷データを細かく整理して欲しい。』
なんて、頼むわけにもいきませんしねえ。

QWD02544 どんたく

261/262 QWD02544 どんたく RE:銅鐸国「弥生説」2
(18) 98/02/14 23:48 253へのコメント コメント数:1

弥生さん、こんにちは。 ボケの どんたく です。(^^)

>>皆さんと違って、どうしても「どんたく説」に納得できない部分があります。

良識あるみなさんのことです。
何もみなさんが「どんたく説」に納得しておられる訳ではありませんから、ご安心のほどを。(^^)

何しろ、まだまだ謎に包まれた銅鐸のことです。
いろいろな説があって当然かと思ってます。

>>『別の宗教』が、『雷神信仰』と考えられた根拠は、落雷地だけ
>>なのでしょうか

いえいえ、そうではありません。
「どんたく説」シリーズで書かせて戴いたように、銅鐸と落雷とを結び付けて考えることから出発したのは事実ですけど、それから後いろいろ当たって見ると、

先住系と雷
先住系と銅鐸
というものが、どうも関係がありそうだと思えてきた、
ということです。

>>1、「健御雷之男神」をどう思われますか？

普通皆さん、雷の神様と言えば、一番最初に頭に浮かぶのは、この神様
なんでしょうね。

実は、私もこの神様の存在については、頭を悩ませています。(^^)

タケミカツチとフツヌシが出雲に出かけて行って、大国主を屈服させてしまうわけですが、普通はタケミカツチが雷、フツヌシが劍というように考えられているのではないのでしょうか？

『どんたくは「雷は先住系の神様だ」というけれども、テンソン系にも雷の神様が居るじゃないか？』
と言われれば、その通りなんですけど、では逆になぜタケミカツチが出雲に行くという話になったのでしょうか？

それまでも出雲に出かけて行った神様はあったが、みんなうまく出雲側に懐柔されてしまって、出雲を服従させるという目的を果たすことができなかった。

そこで業を煮やした高天原の神々、最後の切り札として選んだのが、タケミカツチとフツヌシ。

「雷神信仰をもつ先住系を屈服させるには、このタケダケしい神を
ページ(154)

差し向け、出雲のカミナリ族を威圧するのが一番よかろう。」
 ということになったのでしょうか。
 そして、見事期待どおりに成功したのであります。

すなわち、タケミカヅチは、イカヅチをも屈服させようような、
 タケダケしい神様であった、ということで、その功績を称えて、
 タケミカヅチという名前と呼ばれるようになったのではなかろうか、
 と・・・・・・・・。チョット、外シイか？

ところで弥生さんに教えていただきたいのですが、この出雲征服の
 立て役者のタケミカヅチは、その後どうなったのでしょうか？

まさか、「タケミカヅチはフツヌシの別名だった」などということはない
 でしょうか？

>>2、どんたく説には、銅鐸の巨大化の説明はありましたっけ？。

#47:『RE:用語解説、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸』をご覧戴いた
 でしょうか？ あれが私の説明？です。(^^)

冠婚葬祭すべて段々派手になって行くのが、世の習わし。
 時々奢侈禁止令が出たりして、一旦は地味になったとしても、
 暫く経つとまたもや派手に・・・・。

これは日本だけの話ではないと思います。

タイの国は仏教国で、工場などの敷地の一角には、日本のお稲荷さんと
 同様に、仏教の祠を置く習慣があります。

建物の竣功式の時に、関係者一堂が居並ぶ前で、チェーン・ブロック
 などを使って、人間の背の高さより高い台座の上に、祠を持ち上げて
 安置する儀式が行なわれます。

中々スムーズには作業が進まなくて、吊り上げた祠を落としかけたり、
 参列者をジリジリ・ヒヤヒヤ・ドキドキさせます。

それならできるだけ小さな祠にしておけばよさそうなものですが、
 実状はさにあらず。

上等な祠ほど、きらびやかで、大きさも大きいようです。

人間の対抗心、自己顕示欲というものは相当に強いもののようです。

QWD02544 どんたく

262/262 BYD06141 中村 勝英 RE ^ 2 :銅鐸国「弥生説」2 (追加)
 (18) 98/02/15 01:44 261へのコメント

弥生さん、今日は・・・・・・・・KANAKです。
 "モノはついで"と申しますので、追加レスさせていただきます。

>>1、「健御雷之男神」をどう思われますか？
 >>月神信仰、その他があったと思いますが、雷神信仰はよく分かりません。健御雷
 >>之男神は大国主の敵で、高天が原系みたいですが...。わたしは、「剣」の神格化
 >>のように思いますが、それにしても、何故「雷」なんでしょう。

健御雷之男神	・名称	武甕槌・建甕槌(紀)建御雷(記)建御賀豆智(春日祝詞)
	出生	火神 軻遇突智-剣-血-甕速日神 との関係
	別名	建布都・豊布都
	神社	鹿島神宮・石上神社・春日大社
	氏族	中臣・藤原
	事跡	国譲神話 建御名方神を降す(剣刃を利用) 神武神話 高倉下 霊剣フツミタマを神武に下す

以上より「武」「怒」「火花」「速」「剣」が連想されます。
 また「天→地」を連結するものが感じられます。(神武神話)
 命名は「雷 イカズチ」を含んでいます。

そこでSF発想を展開すると・・・・・・・・ジュピターの杖・・・・・・・・即ち神の剣「雷光」です。
 ページ(155)

では何故に「雷神」を崇拜する氏族に「雷光 = 雷神」をもって戦いに充てたか？

これすなわち「目」には「目」「齒」には「齒」・「劍」には「劍」
「戦車」には「戦車」・「雷神」には「雷神」これぞ戦争の常道なり。ナテ！

”即ち彼が「主神」は我が「従神」なり、何ぞ恐るることあらんや・・・”
と言ったかどうか？・・・KANAKの知るところでは有りませんが。

私には確信がありませんので、SF仕立てと致しました。ご寛恕下さい。

263/264 GGB03124 たけ(tk) RE:搬入土器と「神武東征」説話
(18) 98/02/15 21:08 257へのコメント

かおるさん、こんにちは、たけ(tk)です。

》 わっ、たけ(tk)さんが熊谷さんだったとは驚きました。

わっ、ホントだ、たけ(tk)さんが熊谷さんだったのを消すのを忘れてた。

》 土器の移動は弥生後期まではあまりみられないのですが、弥生終末期から前方
》 後円墳出現期にかけては様相が大きく変わるようです。
》 その様相とは「第1は500kmを超える遠隔地の土器が移動したり、直接影響
》 をおよぼすようになること。第2は弥生時代にはとうてい考え難い高率の搬入土
》 器が認識できるようになること。

これは、元々は比較的に孤立的だった各地域が、列島全体(+加羅)の政治
統合の動き=内乱=を経て、統合されたということだと思いますよ、

》 大和や河内の土器が実際北部九州の遺跡で相当
》 確認されており、交通網がまだ未整備なこの時期の動態には古墳の出現と密接不
》 離な人々の異常な動きが投影されている。」(「土師器の移動」(森岡秀人)
》 「古墳時代の研究6土師器と須恵器」所収(雄山閣))ということから考えます
》 と北部九州の土器だけが纏向遺跡から殆ど出ていないことは、大和を中心とした
》 古墳時代の形成には、北部九州の影響は少ないのかもしれないと思ってしまうの
》 です。

という、土器に関しては、纏向には北部九州以外の各地からは搬入されて
いるが、北部九州との関係では、畿内 北部九州の一方通行だった、ってこと
ですか・・・。

ウケヒでは筑紫と紀伊・奈良盆地との痛みわけになっているのが関係あるの
かな？。

日神が自分の剣を噛んで筑紫の宗像の神を産んでスサノオに与える。日神は
スサノオが産んだ出雲、山背、熊野(これは紀伊の熊野でもあろうと思う)の
神を受け取った、とある。

その前に、先遣部隊が葦原中国(唐古・鍵?)の保食神を間違って殺してい
たりする。

銅剣が祀られなくななくなるのも銅鐸と同時期ですよ？。

出雲で四隅突出墳がなくなる時期はどうなんでしょ。この唐古・鍵 纏向の
時期ですか？。

》 弥生時代の北部九州は、鏡は威信財のように銅剣などと一緒に自分の甕棺に副
》 葬して、祭祀の中心祭器は銅矛となっていたようですので、「日神」
》 「月神」を祀る人々とは壱岐や対馬の勢力がやってきたということでしょうか。

「壱岐や対馬」よりもうちょっと向こうの勢力を想定していました。(^^;)。
列島内部での内戦によって各地域が疲弊していたときに、同じ倭人の地域の勢
力が朝鮮半島を挟んでまず北九州の勢力と対決した後に、ウケヒにより停戦し、
出雲～山背～紀伊あたりに侵入し、纏向に「調停者」的な政権を作った。と・・・。

金海の大成洞遺跡の発掘状況などはご存じありませんか？。

たけ(tk) / GGB03124@niftyserve.or.jp

264/264 GGB03124 たけ(tk) RE:銅鐸国「弥生説」2
(18) 98/02/15 21:09 253へのコメント

弥生 さん、こんにちは、たけ(tk)です。

今日は「日本語をさかのぼる」(大野晋、岩波文庫C92)を読んでいたのですが、p.194に

『カミといえば、「雷」をさすことが極めて多い。奈良時代にも「伊香保嶺(ネ)にかみな鳴りそね」(万葉3421)などと歌われているし、平安時代には、カミが雷鳴をあらわす例は随所にみられる。このことはカミの意味を考えるうえで重要なことと思われる。次にカミとしてさされるものは、虎とか蛇とか狐とかの恐るべき動物である。・・・(源氏では「後代では」という意味だと思う)カミは、鬼や狐、木魂など、妖怪の仲間として扱われている。オオカミ(狼)もカミの一種であった。こうしたカミの他に山や坂、池、海、道などの境界を領有してそこに鎮座し、通行する人間に威力をふるうカミがある。・・・これらはいずれも人間の恐怖の対象である』

というのがありました。「カミ」系の人々にとっては、カミが鳴る=雷だったようです。しかし、「神」を意味するヤマトコトバには「カミ」の他に

「チ」=カグツチ、オロチ= 『自然界に存在して活動した、はげしい原始的な勢力、活力』、
「ヒ」=ムスヒ、マガツヒ= 『日(太陽)の持つ力の神格化であるといわれている』
「ミ」=ヤマツミ、オカミ= 『山や海、雨水を支配する霊格の一つ』

などもあるよう。「チ」系の雷は「イカツチ(巖つち)、ミカツチ(御(ミ)+イカツチ)」、「ミ」系の雷は「オカミ(龍神)」でしょう。

「カミ」、「チ」、「ヒ」、「ミ」が当時の民族構成を反映していると面白いな、なんて思っています。が、別の話し。

でもないか、ミカツチ(雷)がカミ(雷)を従えたとしたら、カミ=雷=は「先住民族」の言い方で、イカツチ=雷=は征服者側の言い方、かな？。

縄文語？ アイヌ語だとどうなんでしょう？。 >大三元さん

たけ(tk) / GGB03124@niftyserve.or.jp

265/268 SGL02501 弥生 暫く、失礼いたします
(18) 98/02/15 22:32

失礼して一緒にします。KANAK様、かまくら様、どんたく様、左から読んでも右から読んでもKANAKさんという書き出しで、実は#215へのRESを書いたのですが、銅鐸と関係がないので自ら没にしていました。だけど、また来ちゃったので仕方なくUPしたいと思って、ちょっと書いたのですが、やっぱり「天の神様」についての説明は他の機会にしたいと思います。一つだけ質問？、の様なものを書いておきます。

》弥生さんの仰るような簡明な「天の神様」論では片づかない様に、思うのですが「はばかりさま」ではございますが、わたしは簡明に片付けたいと思うのです。KANAKさんは、その昔、「指切りゲンマン」では足りず「鍵かけた」その後「天の神様に鍵をあげ」ませんでしたか？、あの「天の神様」は、何だったとお思いにありますか？。少なくとも、菅原道真や雷様ではなかった様な気がします。一般には「由緒のある神社があり、分祠が至る所に勧進され、庶民に親しまれる神となる」と説明されるらしいのですが、「自然神」に限ってはもっと前に下地があったからこそ、庶民の神になるのではないかと思うのです。これは民俗学の世界に近いと思っています。「人間が畏敬した最初の神は自然神」とは私の思想です。》そこでSF発想を展開すると・・・ジュピターの杖・・・即ち神の剣「雷光」です。それ、いいですね。「アマカケルリュウノヒラメキ」なんてのを思い出した！。#215の因縁があるので、KANAKさんの#254だけ急いで取り出して読みました。
ページ(157)

そうそう、先日は無断で「モジらせて」戴きまして、失礼いたしました。

司会者様、暫くお休み状態になると思います。毎月20日以降はどうしても用事があります、今月は短いのでもう始めないとなります。銅鐸「弥生説」は書いてありますので暇を見てUP出来るつもりですが、RESがあっても御返事は無理だと思えます。出来るだけ頑張りますが、ダウンするだけでも（溜めると大変）やっとなので、悪しからずご了承下さい。今ごろ盛り上がりつつも困っちゃう。

どんたく様
私にRESがあるらしい、とダウンしながら、気が付いたのですが、読むと御返事をしたくなるので、今は読まずに我慢しています。月末まで出られないといけないので、一言御伝えしておきます。「どんたく説」の雷神信仰の部分は私もそうだろうな、と思って、弥生説とどこかで一緒になるかも知れないと考えていたのですが、どうなりますか。どんたくと一番異なるのは「先住民」の捕え方の様に思われてそれをシツコク伺いたいのですが、今までのところでは、はっきりとは分かりません。テンソソクも曖昧です。その所の「大坂説」を今度お願い致します。暇が出来次第、第一番にどんたくさんのUPを読ませて戴きます。 < 弥生 >

266/268 KFA03002 kikkawa RE:日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)
(18) 98/02/15 23:29 242へのコメント コメント数:1

『考古学京都学派』はお読みになりましたか、末永門下生の人々が師の死後、結局大きく二つに別れてしまうという悲しい事実を述べています。結局、森先生の孤立その本は、発売当時に話題になっていて、本屋でパラパラと見た記憶がある程度で、地元の図書館には入らなかったもので、残念ながら読んでいません。暴露話とか凄いとか聞きました。読まれた感想を紹介していただけませんか？

六爾さんと違って、私は自然科学関係を除いて考古学史は殆ど知らず、人間ドラマを良く知らないで、学説の流れなどの読みが極めて浅いと自覚しています。この面でも、もっと知っておいた方が、考古学を楽しむのに良さそうですね。

その一方で、旧・古田史学研究会のログを読み直すと、特定の学者の方に傾倒しすぎると、学説の評価の点で私情を入れてしまい、客観的な判断が困難になる不安もあり、バランス感覚が難しいところですね。
熱く考古学史を語るのは私の柄ではなく、今まで通りに無機的にデータを扱って議論するのが向いているかなとも思ったりします。(^^;

通好みの考古学者ですが、私の先生の坂詰秀一先生はいかがでしょうか、とても地味な先生ですが、考古学史を大事にする点では斉藤忠先生のもっとも有力な跡継ぎ勉強不足で、坂詰先生については知らないのですが、どの分野で活躍されている学者の方ですか？

268/268 RXE12761 六爾 RE:日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)
(18) 98/02/16 01:40 266へのコメント

nifty:FREKIMT/MES/18/266 へのコメントです。
kikkawa さん、こんにちは。

> 『考古学京都学派』はお読みになりましたか、末永門下生の人々が師の死後、結局大きく二つに別れてしまうという悲しい事実を述べています。結局、森先生の孤立
> その本は、発売当時に話題になっていて、本屋でパラパラと見た記憶がある程度で、
> 地元の図書館には入らなかったもので、残念ながら読んでいません。暴露話とか凄いと
> か聞きました。読まれた感想を紹介していただけませんか？
私の梅原マツチ先生という呼び名はこの本の中にあつたものです。あと、末永雅雄先生の伝記にもそんなことが書いてあつたかな。小林行雄先生のこともぜひいぶん知りました。そうですね、この本の感想としてはすごい一言です。よくもまあ、このようにずばずば書けたなあと思います。でも、ためになりました。

>
> 六爾さんと違って、私は自然科学関係を除いて考古学史は殆ど知らず、人間ドラマを良く知らないで、学説の流れなどの読みが極めて浅いと自覚しています。この面でも、もっと知っておいた方が、考古学を楽しむのに良さそうですね。

そうですね、結局最後は人間ですからね。
> その一方で、旧・古田史学研究会のログを読み直すと、特定の学者の方に傾倒しすぎると、学説の評価の点で私情を入れてしまい、客観的な判断が困難になる不安もあり、バランス感覚が難しいところですね。
全く、同感です。

doutakusinpo1998

> 熱く考古学史を語るのは私の柄ではなく、今まで通りに無機的にデータを扱って議論するのが向いているかなとも思ったりします。(^^; そちらの方はよろしくお願ひいたします。私も勉強させていただいております。
> 通好みの考古学者ですが、私の先生の坂詰秀一先生はいかがでしょうか、とても地味な先生ですが、考古学史を大事にする点では斉藤忠先生のもっとも有力な跡継ぎ
> 勉強不足で、坂詰先生については知らないのですが、どの分野で活躍されている学者の方ですか？

一言でいうと、立正大学の先生ですから、仏教考古学を中心とした歴史考古学がご専門です。日本における歴史考古学という研究分野を確立された方です。ただ、そのご専門領域は広く、旧石器から江戸まで穴がございませぬ。最近では考古学史をご専門にご活躍です。これは斉藤忠先生のお仕事の一部でも引き継がれようのご決心からだとお聞きしております。私六爾もこの部分が一番惹かれる部分です。あと、『考古学ジャーナル』という雑誌がありますが、この雑誌の編集に創刊以来芹沢長介、江坂輝弥の両先生と携わっております。

六爾(RXE12761@niftyserve.or.jp)

六爾 EmNifty 2.03

267/268 KFA03002 kikkawa RE:鉛同位体比法の根本原理に疑問符
(18) 98/02/15 23:30 251へのコメント

RE:鉛同位体比法の根本原理に疑問符

折角のご労作ながら、当方の疑念は解消しませんでした。kikkawaさんの論調は、最近の研究動向と、それによる日本の考古学界への影響に触れていないからです。こんにちはMUSEさん。前回紹介したように、鉛同位体比の研究は、枯れた技術であり、精度・感度と言ったテクニック面では次第に向上はしていますが、本質的な面では、そう変わっていないと理解しています。

“第一章(岡本健一『古代の光 [歴史万華鏡]』三五館 1996.10.04)

岡本健一さんは文献史学の専門家であり、鉛同位体比に関して理解度が高いとは思えませぬので、その記述を示すのは妥当とは思えませぬ。

以前にも紹介したように、『季刊 邪馬台国』62号の、p.259-265「馬淵久夫氏の鉛同位体比研究についての久野雄一郎氏の批判」での、編集部(安本美典教授)による「久野雄一郎氏の鉛の同位体比研究を見ると、論旨が、はなはだ不透明である。趣旨が、理解しにくいし、論理的とも思えない。」で始まる評価記事が、的を射していると思います。久野さんの発言については、これを参考にして下さい。

《地中海東部の鉛はどこもよく似ていて、産地の推定はできない》と主張している前回も紹介したように、鉛鉱床の履歴が似ていれば、同位体比も類似しますから、その様な場合は識別が困難なのは当然です。日本と、朝鮮半島や中国大陸の地質の履歴は、著しく異なりますから、アジア大陸のかけらである能登や飛騨を除けば、値が明瞭に区別できるという理由が理解できます。

そのような水掛け論の定性的な議論ではなく、『季刊 邪馬台国』60号 などに示された馬淵教授など実際のデータを見て議論するのが、健全だと思います。

《鉛同位体比法は「鉛を加熱したり、溶かしたりしても鉛同位体比は変化しない」という根本原理のうえに築かれた方法であるが、英国ブラッドフォード大学の最近の研究はこの根本原理を疑問視する見解を発表しており、日本における研究も修正全然「変化しない」とは、まともな科学者は言いませんので、怪しげなレトリックでしょう。

前回も、軽元素では質量分別作用による同位体比の変動が著しいこと、重元素ではその効果が少ないことを記しました。この手の議論は、安定同位体比研究の初期段階で様々なデータを取って考察されたものです。放射性核種の壊変による付加分と比べて、影響のオーダーが小さなものと見なされることが重要です。

久野さんや森教授の、鉛同位体比研究に関するこの手の批判では、具体的なデータを示して影響を見積もるなど、科学的な手法を用いず、あくまで情動に働きかけようとする、活動家的なレトリックが多すぎるように思います。

馬淵久夫氏のグループは、英国から輸入した質量分析装置で高精度計測が可能と

『季刊 邪馬台国』60号のp.119によると、東文研の質量分析計は、昭和52年4月から平成元年9月までは、日本電子社製JEOL-05RBを、平成元年10月以降は、VG Isotope社製VG Sectorを使用と示されています。

その直ぐ後に、京都府椿井大塚山古墳出土の銅鏡36枚について、以前に前者の装置で分析していたのを後者で再測定されたデータを示されていますが、それは精度・感度が向上したと言うことで、大卒の結論は変わっていません。

と言うわけで、以前の測定データが使えないと言うことは決してありません。何度

も口を酸っぱくして言いますが、鉛同位体比は、質量分析計を開発したノーベル賞化学賞受賞者のアストン・ケンブリッジ大教授に始まる、研究初期に様々な影響が考察された、枯れた技術です。

269/276 VZC02152 勘太郎 RE:古墳の沿岸立地
(18) 98/02/16 08:06 248へのコメント

MUSEさん、はじめまして
いつもレベルの高いご発言、薄識の勘太郎には勉強になります。

銅鐸祭祀から墳丘墓祭祀への転換は、土木技術の革新によるもの、という勘太郎さんのアイディアは決して「軽薄な思いつき」ではないと思います。ありがとうございます。そう言っていたと大変嬉しいですが、本当は文献や考古学的発見の裏付けをしなくてはならないのに薄識の方のフォローを期待して頭に浮かぶとすぐにキーを叩いてしまいます。(^^;

おそらく、海岸に沿って古墳が立地されたのも当時の交通路が海道をメインにしたことと無縁ではないでしょう。それに、古墳の周囲を水堀でめぐ「用水路」ということが頭にありそこまでは思いが至りませんでした。しかし仰るとおり「海道」「貯水池」などとの関連のほうが説得力を感じます。

その上、海岸立地の農耕となると、コメ食とは不即不離の関係にある塩分の摂取が容易となる利点も生じます。
ちなみに、中国の史書は、邪馬台国では租税を徴収している、と伝えていきますね。
弥生人や古墳時代人にとって米とは、米を大切なものとする背景とは、どういうものであったのか、やはり「大変うまいもの」であったのでは、と想像しています。それまでの食物に比べて最大の特徴は「淡泊な旨み」と「しっかりした食後感」だったと思います。もちろん「安定した供給」も大切な要素です。

しかし庶民はどの程度米を食うことができたのか、
今NHKで放映している「古代国家の胎動」で都出先生は税率を3~10%と計算しておられます。残り90~97%が本当に庶民の口に入ったとすれば結構豊かな食生活だったのかな、とっていますが、はたして...

レスありがとうございます、今後ともよろしく願い申しあげます。

98.02.16 勘太郎

270/276 YIG00127 かまくら RE:暫く、失礼いたします
(18) 98/02/16 21:03 265へのコメント

弥生さん、こんにちは。(^ ^)

> 司会者様、暫くお休み状態になると思います。毎月20日以降はどうしても用事があります、今月は短いのもう始めないとなります。銅鐸「弥生説」は書いてありますので暇を見てUP出来るつもりですが、RESがあっても御返事は無理だと思えます。出来るだけ頑張りますが、ダウンするだけでも(溜めると大変)やっとなので、悪しからずご了承下さい。今ごろ盛り上がりつつも困っちゃう。

そうですか。用事があるとなれば、残念ですが仕方ないですね。(; ;)
今回のシンポジウムだけに限らず、「弥生説」についての議論は続けて行って欲しいと、個人的な希望ではありますが持っておりますので、お時間ができましたら、また再開なされて下さいませ。m(__)m

司会者 / かまくら

274/276 BYD06141 中村 勝英 RE ^ 2 : 暫く、失礼いたします
(18) 98/02/16 23:19 265へのコメント

弥生さん、ご多忙中失礼します・・・KANAKです。
(後でお暇なときに、チョコット見て下さい)

>> KANAKさんは、その昔、「指切りゲンマン」では足りず「鍵かけた」その後に「天の神様に鍵をあげ」ませんでしたか？、あの「天の神様」は、何だったと思いにいなりますか？。少なくとも、菅原道真や雷様ではなかった様な気がします。

doutakusinp01998

八バカリナガラ、蚊泣麻呂奴・・由緒不明の"撰河泉"の庶民なりせば、その昔の「指切りゲンマン」等は一向に存じおりませぬ。伏「跡」ト「跡」!
(後に東国方面?では何か呪文を唱えると知りましたが、その昔は単に指切りをして"嘘ついたら指が落ちるで・・"と念を押すだけだったと思います。
ただ、一部では「指切りゲンマン・・・針千本」と言った様ですが、これも維新後の東国からの伝播では無いかと思ひます・・上岡探偵局長に調べてもらいましょうか?)

従って、現在でも「鍵かけた・・」は知りません。我が家の卑彌乎にも確かめました
が、"ワレシラス"と宣うております。故にお答えのしようがありません・・・。

なお、「人間が畏敬した最初の神は自然神・・・」は大賛成です。
不肖蚊泣麻呂は今日でも辺地の「古社」を探訪する度、森羅万象・天地日月・山川草木
岩石砂礫・水金地火木土天海冥・子牛寅卯・・・に思いを致し
「なにごとのおわしますかは知らねども・・・ありがたし」と涙する純朴な庶民です。

これを「天にまします・・」とか「雷神・・・」とか「管公・・」とかサカシキ論を
立てるは不遜のキワミと心得ますが、・・・ヤメラレマヘン!

モジリ歓迎・・・またいずれの日にか シユレアラゲラ!

271/276 KFA03002 kikkawa RE:日本最古の銅鐸鑄型の巻(^ ^)
(18) 98/02/16 22:07 268へのコメント

一言でいうと、立正大学の先生ですから、仏教考古学を中心とした歴史考古学がご
専門です。日本における歴史考古学という研究分野を確立された方です。
六爾さん、早速のレスを有り難うございます。、白川太一郎(1995)『歴史考古学
発掘された飛鳥・奈良・平安時代』(放送大学テキスト)の、総合参考文献「歴史考古
学の成果の項」を見ると、坂詰秀一・森郁夫編(1983~1986)『日本歴史考古学を学ぶ
全三巻』(有斐閣)がありました。今後、坂詰先生の著書に注目することにします。

あと、『考古学ジャーナル』という雑誌がありますが、この雑誌の編集に創刊以来
芹沢長介、江坂輝弥の両先生と携わっておられます。
そうだったのですか! 1~2年前まで、最寄りの市立図書館の広くもない雑誌コー
ナーに、何故か『考古学ジャーナル』が置いてあり、重宝していました。考古学関係
者の司書の方が選んでいたのでしょうか? 高すぎるからかどうか、とうとう消えて
しまったのは残念です。(;-;

272/276 KFA03002 kikkawa RE:鉛同位体比法の根本原理に疑問符
(18) 98/02/16 22:07 267へのコメント

自己フォローです。議論の参考に、データ等を補足します。

以前にも紹介したように、『季刊 邪馬台国』62号の、p.259-265「馬淵久夫氏の
鉛同位体比研究についての久野雄一郎氏の批判」での、編集部(安本美典教授)に
“久野雄一郎氏の鉛の同位体比研究を見ると、論旨が、はなはだ不透明である。趣
旨が、理解しにくいし、論理的とも思えない。”で始まる評価記事が、的を射て
島根県古代文化センター編(1995)『荒神谷遺跡と青銅器 科学が解き明かす荒神谷
の謎』(同朋社出版) 所収の、久野論文に対する論評の一部を紹介します。

“荒神谷出土の銅剣や矛や鐸が、日本産の原料を用いているというのなら、そして、
日本の神岡鉱山の鉛をふくめていないことを批判するのなら、神岡鉱山の鉛のデータ
をもちだせば、荒神谷出土の銅剣や銅矛や銅鐸と、そうとういど鉛同位体比が重な
るというデータを示さなければならない。しかし、そのようなデータは示されていな
い。批判のことはだけがあつて、実質がない。無茶苦茶といわざるをえない。・・・
久野雄一郎氏は、質量204の鉛の量を分母にした値を変数としてさかんに用いてい
る。質量204の鉛は、含有量がすくなく、これを分母に用いると、誤差が大きくなる。
誤差が大きくなるため結果があいまいになる。わざわざ誤差が大きく、重なりあつよ
うな資料をもちい、「結果が重なりあい、だから、鉛同位体比の研究は、あまり信用
できない」という議論をしている。馬淵久夫氏らは、結果が、シャープに弁別でき
るような変数をとって議論している。久野雄一郎氏は、質量204の鉛を分母にしたデ
ータを用いて、クラスター分析をするなど、みずからの用いた方法が「不適切」である
のに、結果の「不適切」さを、鉛同位体比研究そのもののせいにしてしている。
久野雄一郎氏のクラスター分析についての考察は、全く不適切で、信用できない。
「クラスターの数と同数の鉱山から採れた鉛が使用されなければならない」などとい
うのは、まったくナンセンスである。クラスター分析の方法によって、クラスターの
数は変わってくる。また、同一のクラスター分析法を用いても、どの水準でクラス
ター(グループ)をまとめるかによって、クラスターの数は変わってくる。久野雄一郎氏
の議論は、批判のための批判というほかない。・・・”

ページ(161)

このように、安本教授は久野さんを批判されています。
前に指摘しましたように、久野さんは分析データの誤差に関する概念が欠落するなども合わせると、鉛同位体比を解析する上での、基本が出来ていないように思います。

前回は、軽元素では質量分別作用による同位体比の変動が著しいこと、重元素ではその効果が少ないことを記しました。この手の議論は、安定同位体比研究の初期段階で様々なデータを取って考察されたものです。放射性核種の壊変による付加分と比べて、影響のオーダーが小さなものと見なされることが重要です。
安定同位体比の自然界における変動に関しては、Hoefs, J. (1980) "Stable Isotope Geochemistry 2nd ed." (Springer-Verlag) を見ると、同位体比の質量分別効果に関する理論的考察としては、水素の安定同位体である重水素の発見で、1934年にノーベル化学賞を受賞 (<http://nobelprizes.com/nobel/chemistry/1934a.html>) された、シカゴ大のユリー教授 (Urey, H.C.) が1947年公表の、"The thermodynamic properties of isotopic substances" などの論文が、列挙されています。

『季刊 邪馬台国』60号のp.119によると、東文研の質量分析計は、昭和52年4月から平成元年9月までは、日本電子社製JEOL-05RBを、平成元年10月以降は、VG Isotope社製VG Sectorを使用と示されています。
その直ぐ後に、京都府椿井大塚山古墳出土の銅鏡36枚について、以前に前者の装置で分析していたのを後で再測定されたデータを示されていますが、それは精度・感度が向上したと言うことで、大枠の結論は変わっていません。
前回の記述に誤りがあり、失礼しました。正しくは、最初に32枚の鉛同位体比を測定したのは、室蘭工大の日立製RMU6改(A)で、その内の4枚を東文研の日本電子社製JEOL-05RB(B)で確認し、近年に成ってVG Isotope社製VG Sector(C)で再測定したものでした。

参考に、3台の質量分析計で測定したデータの内、#56「鉛同位体比と佐原編年」で示した銅鐸の鉛同位体比と比較しやすいように、207Pb/206Pbの値を示します。
鏡の番号は樋口記載に準拠しており、1は内行花文鏡、2は方格規矩鏡、3-36(26-30は欠番)は三角縁神獸鏡、37は画文帯神獸鏡です。

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
A	.8746	.8651	.8651	.8613	.8615	.8581	.8676	.8654	.8605	.8590	.8568	.8576
C	.8738	.8644	.8611	.8600	.8620	.8582	.8654	.8656	.8587	.8588	.8565	.8596
番号	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
A	.8626	.8599	.8631	.8623	.8536	.8520	.8590	.8600	.8586	.8578	.8613	.8567
B	.8628	.8592	.8626			.8512						
C	.8628	.8596	.8631	.8593	.8524	.8514	.8615	.8623	.8593	.8574	.8594	.8570
番号	25	31	32	33	34	35	36	37				
A	.8610	.8590	.8572	.8607	.8649	.8570	.8611	.8182				
C	.8595	.8598	.8586	.8619	.8616		.8611	.8221				

最も分析機器のグレードに差がある、1964年に室蘭工大が導入した日立製RMU6改により1975年に測定した値と、1989年に東文研が導入したVG Isotope社製VG Sectorで1993年以降に測定した値を比べても、両者の差は.002(0.3%)程度で、鏡の鉛同位体比タイプを誤るような違いは見られません。
ちなみに、29枚全ての三角縁神獸鏡と方格規矩鏡の鉛は、後漢中期以降の漢式鏡タイプと同じ範囲に、内行花文鏡は前漢鏡タイプの範囲に、画文帯神獸鏡は朝鮮半島のラインに乗っています。

P.S. ライブラリのログを調べていたら、MUSEさんは、歴史フォーラム発足当日！の92年11月1日に、古代史会議室の#3で“会議室「古代史」に期待 MUSE”とのタイトルで発言され、それ以前もNiftyやPC-VANで活躍されていたんですね。

273/276 VZC02152 勘太郎 RE:珍説 銅鐸祭り
(18) 98/02/16 23:14 256へのコメント

もりきんさん、こんにちは
どんたく説へ一票、ありがとうございました。

銅鐸をめぐる古代人の描写、イキイキとしていて想像力の乏しい勘太郎にもよく理解できました。「よそ行って言わんように」します。

考古学の部屋にOBITOさんが#4787で以下の情報をあげておられます。
シンポジウムに関係ありそうですので無断転載させていただきました。

さて、この時期にまことにタイムリー(^)なお知らせなのですが、
2月20日(金)の深夜1時40分(正確には21日ですが・・)に
6チャンネル(ABC)で、次のような番組が放送されます。

「銅鐸に思いを馳せて・ある鋳物職人の挑戦 - 銅鐸の復元」

勘太郎は土日一泊で熊野三湯めぐりをしてきました。合計4回も湯につか
ってパサパサです。近畿自動車道と歌山線は和歌山インターの先で岩橋千塚、
鳴神のそばを通過します。「このあたりに銅鐸埋まってへんかなあ」と思い
ながら眺めていました。では、

98.02.16 勘太郎

275/276 QW101226 もりきん RE^2:「もりきん説」登場、熱烈歓迎!
(18) 98/02/16 23:35 258へのコメント

かおるさん、こんにちは。
> そうだといいいのですが、弥生終末期から古墳時代には、近畿では環濠集落が解
>体されて、そこから飛び出した首長クラスが豪族居館とも言えそうなものを構え
>ます。
ははは 調子に乗って墓穴を掘ってしまいました。全く仰せの通り。

もりきん(QW101226)

276/276 QW101226 もりきん RE^2:議題4 銅鐸退場の理由
(18) 98/02/16 23:35 250へのコメント

MUSEさん、初めまして、コメント有り難うございました。そこまで深読み
しての発言ではないので、すっごいと感心しています。

> 銅鐸の流行が退潮した理由を、卑弥呼タイプのライフスタイルが隆盛となる
> キザシに求めるワケですか。なるほど、と思います。
そうです。そうです。私の言いたかったこと、一言で言えば、「ライフスタイル
が・・・」です。自分でも今、解りました(ト赫)。

ただ、確かに、邪馬台国の卑弥呼をイメージして書いた筋書きではありますが
が、具体的な「邪馬台国の卑弥呼が・・・」ではないと思っています。それでは
銅鐸の消え始める時期が3世紀初めということになります。ちょっと遅すぎませ
ん?なぜかと聞かれると困りますが。

今後ともよろしく

もりきん(QW101226)

277/277 MHB01602 MUSE 超高温に曝される鉛
(18) 98/02/17 13:23 272へのコメント

Re:#272

kikawaさん、いま問題にしているのは、鉛同位体比法によって、考古学的
遺物である青銅製品の鉛成分から青銅産地を推定できるか、ですよね。
そのため、東アジアの鉛鉱山で採掘された鉛を"Reference" (比較基準)に
しているのが、馬淵久夫氏グループのスタンスだと理解しております。
ところが、P・バッド氏は、その"Reference"となる鉛は高温になると鉛同
位体比値に変化があるのを発見したのでないか、というのがMUSEの推測
なわけですね。
理科年表によると、銅の融点は、セ氏1085度、鉛の融点は328度ですから、
銅のなかに閉じ込められた鉛成分の一部は銅の融点以上に熱せられて、一部
の鉛はガス状となって炉外に出ていくでしょう。
その場合、各鉛同位体が一定の割合で排出されるか、がポイントになります。
これは、実験で確認されているのでしょうか。

久野雄一郎氏に批判された馬淵久夫氏は、

馬淵久夫「島根県荒神谷遺跡出土銅剣の鉛同位体比の
解釈について」『保存科学』36号 1997

にて、従来の考えに変更はないとしながら、《鉛鉱石の同位体比值とを直接、結び付けることは危険》と述べているそうです（アサヒグラフ別冊『銅鐸の谷』p.96-97）。つまり、鉛鉱石データで、これまで銅鐸の産地を推定したのは無理があるということを認めたと見えます。

しかも、これ以上に重大だと思ったのは、銅製品製造を本業とする久野雄一郎氏が、銅の鑄造には仕上がりの重さのほぼ2倍の重さの原料が必要で、そのうちの何割かはスクラップの青銅を混入して欠陥の少ない銅鐸を生産するという発言でした。したがって、原料を金属工学的に分析する能力のない古代人は、過去の履歴も知れない青銅スクラップの再使用を続けた可能性も高いでしょう。これでは、現代になって鉛同位体比を精度よく測定しても、そのデータをどう解釈すべきか、途方に暮れるのではないのでしょうか。

ちなみに、久野雄一郎氏は、日本の鉛鉱床は、神岡鉱山型（岐阜県）、別子型（四国北部）、および黒鉱鉱床型（東北地方）に大別されるが、馬淵久夫氏グループは、このうち黒鉱鉱床型のみを判定基準に加えている点にも批判の目を向けていますね。

最後に、統計的検定で判断したいのであれば、1コの銅鐸から1コの測定データといった少数のサンプル・データに頼るよりは、各銅鐸の30部位以上から、平均値と分散を求めるようにして、正規分布を仮定できる環境で実施してほしいものだと思っております。これだけでも、その銅鐸に青銅スクラップが混入しているか、をテストできる分析が可能だと思いますから。

p.s.
季刊誌『邪馬台国』の60～63号は保有しています。

98-02-17

MUSE

278/279 MHB01602 MUSE 衣食足りての・・・政治
(18) 98/02/17 18:36 269へのコメント

Re:#269

勘太郎さん、こんにちわ。

コメというのは、朝鮮半島の北部や中国の北部では為政者の食べ物で、多くの方はムギを常食としたそうですね。それに対して、わが倭国では、気象条件に恵まれている地域では、大小の河川が走っている関係で、小さな沖積平野でも水田耕作を始めるのも容易だったように考えます。しかも、イネを刈らずに穂だけを摘みとる石包丁なるもので、熟した稲穂を収穫しましたから、成長期間の揃ったイネで次回のタネ蒔きを実施できるとなると、自然に品種改良しながら農耕技術も発達したのではないかと想像してます。これに農具も鉄製品に転換して行くなれば、巨大な古墳の建造にも労力を提供できるというものです。そして、西日本をシーズンごとに襲来する台風を避けるために、そのイネも早稲（ワセ）に特化するなら、そこそこの収穫が期待できたのではないのでしょうか。こうした農耕技術の花が開いたのが考古学でいう弥生終末期から古墳時代と捉えております。何しろ、日本列島の8割以上が山岳地帯とはいえ、未開拓の平野は人口に比べ広大だったでしょうから。

ここで、重要なのは、河川流域に立地するため、その洪水対策には集団での力を結集する必要があったことです。そして、このような共同作業には優れたリーダーが求められるのは必然ですから、やがて、それが、国にまで成長していったのが、漢書の伝える「倭国は分かれて百余国あり」となったのでしょう。これに出雲地方が含まれているか、は不明ですが。

西暦107年に「倭面土国王」が他の国王160人（最大）とともに中国を訪問していますが、この倭面土国王とは「カマト」即ち「邪馬台国」と推測するならば、女王・卑弥呼の所属する宗族に連なる一族の一人と考えられます。この邪馬台国では五穀が生産されていると中国の歴史書は伝えますので、3世紀の女王国は、今のような農業が主流であったといえるでしょう。すでに階級も生まれ、法律を遵守する精神も普及していたようですから、

「衣食足りて何とやら・・・」で、食生活も安定していたのではないでしょう

か。軍人のほかに、漢字が書ける人間もあり、高級官僚が存在していたことから、その行政能力もかなりあったと思います。

特に、租税を徴収するには計算能力に秀でた人材が不可欠ですから、水田の面積を測るのに必要なピタゴラスの定理を理解するか、それともそのノウハウをマスターした官僚を抱えていたのは間違いないでしょう。

こうした人材は当時の中国でもエリートだったといわれますから、女王・卑弥呼のリクルートには敬服させられます。

同時代の中国には円周率を演繹的に計算する公式を考えだした世界の数学者もいましたから、人材供給源は中国かな、とは思いますが、もしそうなら、倭国からの招請に応じた理由も知りたいものです。

魏国が公孫淵を滅ぼし、中国・朝鮮・日本との間の海上ルートがオープンになると、間髪を入れずに卑弥呼は中国へ使者を派遣するといった外交センスに優れた面も見られますね。こうした行動は国内の政治が安定していないとなかなか実行できないと思います。

このように卑弥呼の内政が成功して国内が繁栄すると、本州の西部に展開している他の国々へ、その統治ノウハウの移植を図ろうとした動きのひとつが、『古事記』の「出雲神話」で描かれる「国譲りエピソード」だといえ、安直なシナリオに見えるかも知れません。

でも、たとえ表面上は武力侵略に見えてもコメ食が安定供給されるシステムを提供されたとしたら、民の人心はどちらに傾くでしょうね。食だけでなく、絹という衣生活の革新も伴っていたのですから。

98-02-17

MUSE

279/279 CXN00172 大三元 銅鐸と縄文語(?)

(18) 98/02/17 20:41 264へのコメント

たけ(tk)さん、初めまして、、(^^)

>> 縄文語? アイヌ語だとどうなんでしょ?。 >大三元さん

呼び出されたので、出てきましたが、あまり気の利いた対応、言いがかり、はまだ見つけて居りません。まず、お書きになって居られる諸点について:

>> 時代には、カミが雷鳴をあらわす例は随所にみられる。このことはカミの意味を考えるうえで重要なことと思われる。次にカミとしてさされるものは、虎とか蛇とか狐とかの恐るべき動物である。・・・(源氏では「後代では」という意味だと思う)カミは、鬼や狐、木魂など、妖怪の仲間として扱われている。オオカミ(狼)もカミの一種であった。

自然現象や動植物をも kamuy と呼ぶのはアイヌもそうですね。元々は悪魔なり恐ろしいもののことを言ったようです。

雷鳴のことはkamuy hum と言います。でも、hum には「音、匂い、味、体感、直感」などの意味合いもあります。

>>山や坂、池、海、道などの境界を領有してそこに鎮座し、通行する
>>人間に威力をふるうカミがある。・・・これらはいずれも人間の恐怖の対象
>>である』

これは「荒神」(アラブル神)として、アイヌ語 ar hur(=片山)などの意味に通じるものがあると指摘したことがあります。

>>というのがありました。「カミ」系の人々にとっては、カミが鳴る=雷だった
>>ようです。しかし、「神」を意味するヤマトコトバには「カミ」の他に

アイヌ語でも kamuy と書く(発音すると)、まあ、和語の「神」と訳していますが、kamiyasi (kamiyasi, kamuyasi, kamunasi)で化け物、魔物、の意味となる語があり、同語なのかとか相互関係など未明(私には)です。

「チ、ヒ、ミ」に直接的な言いがかりは見つかりませんが、次はチョット面白い。
tumunci 悪魔、悪鬼
mintuci 河童 (cf. ミツチ)

他に「チ」で終わる単語には、今調べてみたけど、親族関係を表す語が多いです
ページ(165)

doutakusinp01998

ねえ。huci祖母 mici父 maci母 hekaci少年 matkaci少女。他にも、opici放す、nukarci ~を見る、などもあります。。

ci だけだと、各種代名詞(私、我々、貴方)、接頭辞として再帰的表現、煮える、陰莖、などの意味だそうです。

hi は「こと、もの、とき、ところ」などの意味を付与するようで、
tuyma hi だと 遠い・所
ku=matnepo an hi 私の=娘が・居た・とき みたいな使い方があります。

pi だと 種(たね)の意味です。
mi は 着る だそうです、チョイト難癖付けにくいですね。。
ni の転化を想定しても、これは 木

>> でもないか、ミカツチ(雷)がカミ(雷)を従えたとしたら、カミ=雷=は
>> 「先住民族」の言い方で、イカツチ=雷=は征服者側の言い方、かな？

「ミカ」は「カミ」の倒語か、なんて昔笑ったことがありましたね。(^^)

***Homepage:<http://www.alpha-net.or.jp/users/gens/>

280/280 VZD07512 ラン2 RE^2:銅鼓のまつり
(18) 98/02/17 22:16 238へのコメント

勘太郎さん みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

>> インフルエンザのワクチン、10月ぐらいに打っておけ、と知り合いの医
>>者が言っていました。2月になって打つ人も珍しいですね。

はい。その上、ワクチンを打った次の日から寝込むおとぼけ者です (;_;) やっと復活させてもらいます(*^^*)
銅鐸シンボも、ますます盛況で、とてもうれしいです。

さて銅鼓のまつりですが、明日2月18日の深夜1時(正確には19日)、関西でえば2チャンネル(NHK総合)で、以前、衛星第2で放送された『中国55少数民族音楽の旅・天と地と時を奏でる』が再放送されます。これは少数民族の音楽を4年間にわたり取材したドキュメンタリーで、銅鼓を使って行われるまつりが取り上げられています。

なんか今週は要チャックのTV番組が続きますね(^^)
では また (^^)/ ~~~ ラン2

281/285 KFA03002 kikkawa RE:超高温に曝される鉛
(18) 98/02/17 22:56 277へのコメント

ところが、P・バッド氏は、その"Reference"となる鉛は高温になると鉛同位体比値に変化があるのを発見したのでないか、というのがMUSEの推測なわけです。これまでも、この人物の名前だけが出てきて、その研究の中身を具体的・定量的に紹介されないのは、不満に思っています。ちなみに、同位体分別の研究は、ウラン235の濃縮により原子爆弾を作る軍事目的もあり、優秀な学者が動員されたのは良く知られており、アストン教授・ユリー教授のような、この分野でノーベル賞を授賞された方々の研究を覆すような大発見なら、とっくに話題に成っているはずですが... その論文の内容を具体的に紹介していただけませんか？

ところで、同じ元素でも質量数が違えば、結合エネルギーが若干異なることにより、相が変化するときには分配に差を生じます。高温になると、熱振動の効果が卓越して質量数の差異の効果が薄くなり、同位体の分別作用が極めて小さくなります。前回紹介した、Hoefs, J. (1980) "Stable Isotope Geochemistry 2nd ed." (Springer-Verlag) には、炭素・酸素・硫黄についての測定値が載っています。分配係数の対数と、絶対温度の逆数の自乗とが比例するケースが多くです。と言うことで、MUSEさんの想像とは逆に、高温では質量分別効果はずっと小さいのが真相です。

理科年表によると、銅の融点は、セ氏1085度、鉛の融点は328度ですから、銅のなかに閉じ込められた鉛成分の一部は銅の融点以上に熱せられて、一部の鉛はガスこれも、定量的な議論をした方がよいでしょう。同じく理科年表を見ると、青銅主原料の各単体の1気圧における融点・沸点は、銅：1085・2580、錫：232・2270、鉛：328・1750であり、鉛の沸点は銅のページ(166)

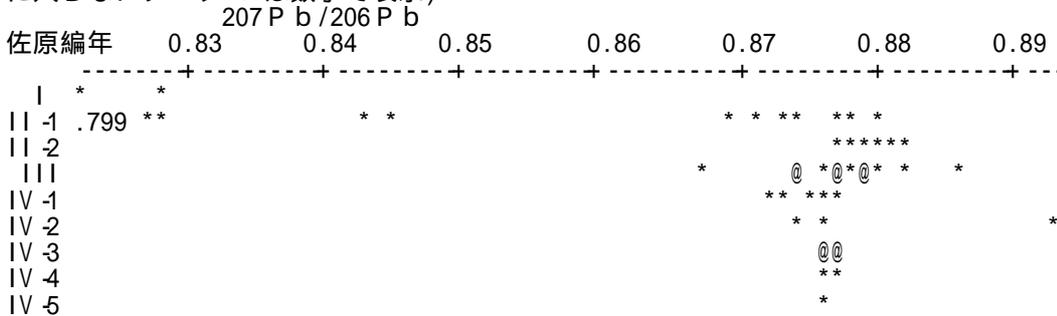
融点よりも665 も高いです。

温度と蒸気圧の関係を表すClausius-Clapeyronの式 ($\ln P = -H_{vap} / (R * T) + \text{const}$) に、パラメーターを入れて計算すると、 $\log P = -9400 / T + 4.65$ で近似され、銅の沸点：1358 Kでは、鉛の蒸気圧は0.005気圧と見積もられます。実際には、青銅の融点は銅単体よりもずっと低いですから、蒸気圧はもっと小さく成りますね。

従来の考えに変更はないとしながら、《鉛鉱石の同位体比値とを直接、結び付けることは危険》と述べているそうです（アサヒグラフ別冊『銅鐸の谷』p.96-97）。つまり、鉛鉱石データで、これまで銅鐸の産地を推定したのは無理があるというこれも、その論文の文面をきちんと示していただかないと、これまでの森教授・久野さんの手口から見て、曲解している可能性が消せませんね。

したがって、原料を金属工学的に分析する能力のない古代人は、過去の履歴も知れない青銅スクラップの再使用を続けた可能性も高いでしょう。そう言う仮想的なスローガンで留まるのではなく、実際の鉛同位体比のデータを見るのが実証的でしょう。#56で紹介したグラフと照合します。

それらを佐原真・歴博館長の型式編年と比較したものが、以下の図です。
なお、I：菱環紐、II：外縁付紐、III：扁平紐、IV：突線紐 に相当します。
*はその範囲にデータが1-2個、@は3個以上見られることを示します。（この範囲に入らないデータ1つは数字で表示）



実際には、佐原編年のIV-3~5に相当する、装飾が著しく巨大で多くの青銅原料を必要とした、近畿式・三遠式の銅鐸は、鉛原料の値が極めて揃っており、その想像とは逆に、この時期の鉛原料は行き当たりばったりのものではなく、鉛原料の供給ルートが確立していたことが窺えます。ここでも、久野さんは実証性を全く欠いていますね。久野さんの予想が的外れであるのは、古代人の技法の理解に程遠いからかも？

ちなみに、久野雄一郎氏は、日本の鉛鉱床は、神岡鉱山型（岐阜県）、別子型（四国北部）、および黒鉱鉱床型（東北地方）に大別されるが、馬淵久夫氏グループは、このうち黒鉱鉱床型のみを判定基準に加えている点にも批判の目を向けていますね。これも、思考パターンが本末転倒で、先ずは古代の鉛原料の同位体比が、どの範囲に入るかから、どの成分を考慮すれば良いかが判ります。もし、様々なタイプの鉱山の鉛が使われていたら、同位体データの分布がもっとばらつくでしょう。そう言う定量的な議論が欠けています。

#239に再録した、齋藤努・高橋照彦「古代銭貨 - 「皇朝十二銭」 - の化学分析」によると、全ての銭種の鉛同位体比は極めて揃っていて、一ヶ所からの供給を強く示唆します。『延喜式』には、銭貨の鉛供給地として長門と豊前が上げられ、山口県の山口県美東町の長登銅山跡・平原遺跡出土の鉛塊や鉛製錬時のスラグの値と一致することを紹介しました。

1コの銅鐸から1コの測定データといった少数のサンプル・データに頼るよりは、各銅鐸の30部位以上から、平均値と分散を求めようにして、正規分布を仮定『季刊 邪馬台国』60号のP.217にあるように、確認のために、鳥取県の泊銅鐸について3つ欠片で分析を行い、分析精度内で一致するデータが得られています。製造工程から考えて、一度に融かした青銅原料で一つの銅鐸に流し込むのが一般的でしょうから、熔融時に鉛同位体比は均質化するでしょう。毎回そのような測定をしても、マシンタイムを無駄に使うだけで、賢明ではないでしょう。工学的な考察を抜きにした、統計的な議論には意味があるとは思えません。そうではなくて、湯の周りが悪く鑄掛けをしている銅鐸に対して、別に測定を行った例では、和歌山の亀山1号銅鐸(佐原型式III)で、本体と鑄掛け部分に有意な差が得られています。

p.s. 季刊誌『邪馬台国』の60~63号は保有しています。
久野さんや森教授の手口は、定量的な議論を行わない、自然科学系では全く相手にされないトンデモ紛いなやり方であり、安本教授が言うように、“データは示されて
ページ(167)

doutakusinp01998

いない。批判のことばだけがあって、実質がない。無茶苦茶といわざるをえない。”、
“議論は、批判のための批判というほかない。”ものと思います。

282/285 QWD02544 どんたく RE:銅鐸とは何か, part2
(18) 98/02/18 00:02 245へのコメント

勘太郎さん、こんにちは。 どんたくです。

>> 以下はパネリストの皆様への質問です。
>> 1. 加茂岩倉遺跡に×印のついた銅鐸がありました。これは銅鐸霊の封
>>印でしょうか？
>> 2. ×印のついた銅鐸に傾向はあるのでしょうか？

上田正昭「古代出雲文化展の意義」(「古代出雲文化展」図録 p.10)
に、次のような文章があります。

『(神庭荒神谷遺跡の)358本の銅剣のうち344本の茎加に×印が
タガネなどで刻されていた。
.....
銅剣の×印には除災・避邪の意味があったのではないかと推測される。
加茂岩倉遺跡の銅鐸「×印」も注目される。』

このような考え方から、×印は、「バツ」印ではなく、(邪悪を)封印
する意味での「シメ」印ではないか、というような言い方もされている
ようです。

でも、本当のところ、よくわかりませんねえ。
タガネのようなもので印をつけるとすれば、印や三角印よりも、
×印をつけるのが、一番つけやすいような気がしますから.....

難波洋三「加茂岩倉銅鐸が語るもの」(「古代出雲文化展」図録 p.26)
には、次のように書かれています。

『「×」の刻線
加茂岩倉遺跡出土銅鐸には、鈕の片面の菱環頂部に「×」を刻した
例がある。3月14日現在、この刻線を有する例は、II-1式の22号、
II-2式の5・11・13・28・31・32号、III-2式の1・18・23・26・35号、
以上の12個であるが、クリーニングが進めば例はさらに増えるであろう。
.....
これらの「×」が同じ集団によって同じ頃に刻されたのであれば、
その時期はIII-2式の成立以降、すなわち埋納にそれほど先立たない
頃となる。』

加茂岩倉銅鐸39個のうち、
高さ40数cmの大きいもの : 20個
高さ30cm前後の小さいもの : 19個

大きい銅鐸 > 小さい銅鐸 というように
「入れ子」になっていたとされるもの : 15組(推定を含む)
(その他のものも入れ子になっていたかも知れないが、分からない)

となっていますが、上記12個の×印のある銅鐸のうち、
22号(高さ31.0cm)、23号(高さ49.0cm)を除く10個は、
何れも入れ子の外側の方の銅鐸です。

但し、入れ子の内側の銅鐸は、まだ砂がついたままの状態だったりして、
×印があるかどうか確認できていないものもあるようです。

QWD02544 どんたく

283/285 RXE12761 六爾 なんでも鑑定団で銅鐸を鑑定
(18) 98/02/18 01:33 コメント数 : 1

こんばんは。

以前なんでも鑑定団で銅鐸の鑑定があったそうです。

おもしろそうなのでアップしてみました。

「銅剣・銅鏡・銅鐸」

氏名

吉井良英さん（神戸市）

エピソード

曾祖父が古代のものが好きで集めていた中の逸品。阪神淡路大震災で蔵が倒壊し、そこから掘り出したもの。

自己評価

1,460,000

鑑定評価

1,700,000

寸評

銅剣が35万円。日本には島原で2本しか発見されていないような形のもので中国の唐時代のものだと思われる。銅鏡が一番評価できて50万円。これは副葬品であったという証拠の朱がウブなまま残っている。出土は松坂の近くで古墳が多い場所。中国から渡来したオリジナル品だと思われる。この文様は日本でも写されているが、これは本物。銅鐸は水差しに加工されているので40万円。本来の形のままなら1千万円はする。江戸時代に文人が粋だということで水差しにしたのだろう。小型のは風鐸とい

オリジナルページ

<http://www.tv-tokyo.co.jp/kantei/k70429.htm>

***** 六爾 (RXE12761@niftyserve.or.jp) *****

285/285 YIG00127 かまくら RE:なんでも鑑定団で銅鐸を鑑定
(18) 98/02/18 07:21 283へのコメント

六爾さん、こんにちは。(^^)

【シンポジウム】銅鐸を考える も後半をすぎ、いよいよ盛り上がり
大変嬉しく思っております。ラストスパート皆さまよろしくお願
いたします。m(__)m

>以前なんでも鑑定団で銅鐸の鑑定があったそうです。

普段この番組を見てないので、全然わかりませんでした。
でも、銅鐸のような貴重なものまで出されるんですね。お宝だから当然
なんでしょうが、その古さが現実離れしてるっていうか・・・。(～;)

>銅剣が35万円。日本には島原で2本しか発見されていないような形のもので中国の
>唐時代のものだと思われる。銅鏡が一番評価できて50万円。これは副葬品であった
>という証拠の朱がウブなまま残っている。出土は松坂の近くで古墳が多い場所。中国
>から渡来したオリジナル品だと思われる。この文様は日本でも写されているが、これ
>は本物。銅鐸は水差しに加工されているので40万円。本来の形のままなら1千万円
>はする。江戸時代に文人が粋だということで水差しにしたのだろう。小型のは風鐸とい
>い神社などの四隅につるしたもので45万円。

高い安いは相場があるんでしょうが、思ったより価格がおさえられている
ような気がしないでもありません。好事家にとってはたまらないもので
も、興味のない人にとってはただの大昔の銅製品 ってことなんですか？
銅鐸を水差しに加工するなんて、「文人の粋」もうらめしくなってしまう
ます。所有者の方も本来の形だったら一千万円と聞いた時は、ちょっと
ため息だったりして・・・。

ところで番組に持ち込まれた銅鐸等はその後どうなったのでしょうか？

司会者 / かまくら

284/285 RXE12761 六爾
(18) 98/02/18 01:33

銅鐸鑄造技術に関するホームページ

こんばんは、みなさま。

銅鐸の鑄造技術に関するホームページを見つけましたので、ご報告いたします。井上
さんのページの中の一部です。

<http://www.btnis.co.jp/~inoue-osa/wao.html>

井上さんが作っていらっしゃる邪馬台国関係のホームページです。
<http://www.btnis.co.jp/~inoue-osa/Welcome.html>

すごいページなので是非是非一見を大阪の弥生博物館の紹介もあるよ。
銅鐸の写真もあります。
<http://www.btnis.co.jp/~inoue-osa/yayoi.html>

***** 六爾 (RXE12761@niftyserve.or.jp) *****

286/286 YIG00127 かまくら RE^2:銅鼓の祭り
(18) 98/02/18 08:10 280へのコメント

ラン2さん、こんにちは。(^ ^)

>さて銅鼓のまつりですが、明日2月18日の深夜1時(正確には19日)、
>関西でえば2チャンネル(NHK総合)で、以前、衛星第2で放送された
>『中国55少数民族音楽の旅・天と地と時を奏でる』が再放送されます。

そうですか。情報ありがとうございます。m()m
ついつい長野オリンピックに気をとられて、他の番組のチェックを怠りがちになっております。

>これは少数民族の音楽を4年間にわたり取材したドキュメンタリーで、
>銅鼓を使って行われるまつりが取り上げられています。

銅鐸と銅鼓、源流をたどれば今まで見えなかったものが、おぼろげでも感じられるかもしれないですね。そういった期待はおいといても、銅鼓のお祭り自体も楽しみです。ただ深夜1時というのが問題。ビデオ録画で後日見ることになりそうです。

司会者 / かまくら

287/290 BYW00406 かおる RE:搬入土器と「神武東征」説話
(18) 98/02/18 21:24 263へのコメント

たけ(tk)さん、こんばんは。
亀レスをお許しく下さい。

>> これは、元々は比較的孤立的だった各地域が、列島全体(+加羅)の政治
>>統合の動き=内乱=を経て、統合されたということではないですかね
土器の動きからだけでは、そう断定してよいか分かりませんが、この時期に統合の動きがあったと考えても良いかと思えます。

>> というと、土器に関しては、纏向には北部九州以外の各地からは搬入されて
>>いるが、北部九州との関係では、畿内 北部九州の一方通行だった、ってこと
>>ですか・・・

そうですね、#257で紹介した論文ではつぎのように紹介しています。
「北部九州の土器は、畿内・山陰・中部瀬戸内といった地域に目立って動くことはない。反面、これらの地域の土器の影響は、移動品を含め北部九州で古墳出現前後に顕在化する。その最初の動きは吉備系統の土器にうかがえ、既に弥生後期段階、壺・甕・高坏の流入を認めることができる。・・・中略・・・古墳出現期を迎えると、山陰系等と畿内系統の土器が他の外来系土器を圧倒して影響力を強める。」

>>銅剣が祀られなくなるのも銅鐸と同時期ですよ？。
出雲の中細形c型銅剣は弥生の中期までみられるようですが、北部九州の広形銅矛や広形銅戈、近畿の突線鈕式銅鐸(3~5式)が残る弥生後期には見られなくなるようです。
弥生後期には出雲では四隅突出墓が、吉備では特殊器台(円筒埴輪のルーツ)や特殊壺を使った墳丘墓上での祭祀が始まるようです。

>> 出雲で四隅突出墓がなくなる時期はどうなんでしょ。この唐古・鍵 纏向の
>>時期ですか？。

四隅突出墓で最も新しいと考えられる島根県安来市の宮山4号墳は布留式期のものと見られており、古墳時代前期の初期には四隅突出墓は消滅したようですので、だいたいそう考えてもよいかと思えます。

>>「吉岐や対馬」よりもうちょっと向こうの勢力を想定していました。(^_^)。
やはり、そうでしたか、そんな気がしていました。
纏向では韓式土器が1個発見されていますが、伽耶のものかどうかはわかりません。

>>金海の大成洞遺跡の発掘状況などはご存じありませんか？
大成洞古墳群からは日本製と考えられる筒形銅器や巴形銅器、碧玉製紡錘車形石製品などが4世紀代の墳墓から出土して、近畿との関係が考えられていますね。
この辺は、たけ(tk)さんも御存じのことと思います。
積読状態の本を探していましたら「巨大古墳と伽耶文化 - 古代伽耶と倭の交流を解明する」(角川選書235)というのが見つかりました。
この本も既に御存じかもしれませんが、大成洞古墳群の発掘状況などを中心に、かなり詳細に伽耶と倭の関係を追及していますので紹介させていただきます(きちんと読んでいませんので手抜きをします。申し訳ありません)。

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

288/290 QWD02544 どんたく 「×印」の補足
(18) 98/02/18 21:50 282へのコメント

勘太郎さん、こんにちは。 どんたくです。

#282 に関連して、「×印」について追加・補足します。

(1) 神庭荒神谷と諏訪大社

A. 出雲の神庭荒神谷遺跡の周辺にある神社8箇所中、6箇所までが、建御名方神をお祭りする神社だそうです。(*1)

B. 信濃の諏訪大社(御祭神:タケミナカタ)で7年ごとに行なわれる御柱祭(オハシサイ)で奉納される巨木の根もとに、昭和37以前は×印がつけられていたそうです。
このことから、神庭荒神谷と諏訪御柱祭りとを結び付けて考えている人がいます。(*2)

そう言えば、今年は御柱祭の行なわれる年でしたっけ？

(2) 「×印」のある銅戈の鋳型

大阪府茨木市の東奈良遺跡から出土した銅戈用の鋳型には、銅戈の根元に当たる部分に、「」の中に「×印」が入ったマークがあります。
神庭荒神谷の場合は銅剣、東奈良の場合は銅戈という違いはありますが、「×印」のある位置は、いずれもよく似た場所です。

この銅戈用鋳型は、茨木市立文化財資料館にあります。(*3)

ここの字芸員の方は、(*4)

『神庭荒神谷や加茂岩倉の×印は、タガネか何かで刻んだものだが、この銅戈の場合は鋳型だから、全く異質のものだ。』
というように言っておられましたが、私には何か共通点があるように思えてなりません。

(3) 諏訪大社の神長官の家の印

諏訪大社の神長官(ジツヨウカ:古くから続いた神主)の家の破風の辺りに、「」の中に「十印」が入ったマークがついています。
私はまだこの実物を見たことがありませんが、最初にこの神長官の家の写真を見たとき、このマークを見て、思わずハッとしました。

でも、「十印」と「×印」の違いがありますから、これを神庭荒神谷や加茂岩倉と結び付けるのは、ちょっと無理がありそうですね。

確か六爾さんは、この神長官の家に行かれたことがあったのでは？

【参考】

(*1) 福島一夫「女首長に後事を託す」
荒神谷遺跡の謎ブックレット(1)『なぜ埋められたのか』
平成2年3月初版 島根県簸川郡簸川町発行

(*2) 小林義彦「謎の×印で結ばれている荒神谷と諏訪御柱祭り」
ページ(171)

- (*3) 大阪府茨木市立文化財資料館
〒567 大阪府茨木市東奈良3-12-18
TEL: 0726-34-3433
阪急電鉄京都線南茨木駅下車、徒歩5分。
ここには、本邦唯一の完全な形の銅鐸鑄型(石製)もある。
- (*4) 1997年8月に、茨木市立文化財資料館を訪れた際、学芸員の方から次のような話を聞いた。
『ここにある銅鐸石型の石は、明石川上流の方にある石と性質がよく似ている、というように言われている。
以前に、明石川上流からこの鑄型の石によく似た石を採取した。
この石を東京芸大に送った。
東京芸大で、この石を使って銅鐸作りを試みたが、失敗に終わった。』

QWD02544 どんたく

289/290 BYW00406 かおる RE:古墳の沿岸立地
(18) 98/02/18 22:01 248へのコメント

MUSEさん、勘太郎さん、横レスで失礼します。

>>それに、古墳の周囲を水堀でめぐらすなら、干ばつ時に「ため池」としての機能も果たせます。(改行多謝)

たとえば、大和古墳群で特殊器台形埴輪の出土した西殿塚古墳や中山大塚、箸中古墳群の箸墓古墳、特殊壺の出土した桜井茶臼山古墳、初期の円筒埴輪が出土している同じく桜井市のメスリ山古墳などには水濠が認められませんので、古墳時代前期の古墳のなかでも初期の古墳には水濠はなかったように思います。(墓域を区別するためや墳丘築造のために採土した跡が掘りくぼまれたようになっていたかもしれませんが、水濠という状態ではなかったのではないかと考えています。)

古墳時代前期後半以降は周濠を持つ古墳が出て来たかもしれませんが、中期の巨大古墳には周濠は当初から築造されていたと思われしますので、これを農業用水として利用したことは考えられます。

蛇足ですが、古墳は中世には砦や城に利用され、江戸時代には、周濠を改修拡大して完全に農業用水に活用しているようです。

>>古墳に植林するなら雨水を保水できますから、この「ため池」に自

>>動的に貯水するという省エネ農耕技法が完成したことになります。

すべてとはいえませんが巨大な古墳には葺石が葺かれていますので、植林はなかったのではと思います。

もっとも、古墳を国家が管理しなくなった後世には植林をしたかもしれませんが、管理されないと早々に雑草が生え、そして、現在見られる鬱蒼とした森を持つ古墳になるようですが、築造当初から農耕に役立つように造られていたとはおもえないのですが、いかがでしょうか。

>>瀬戸内海沿岸、大阪平野に巨大な古墳が作られたのも、沖積平野での水田

>>耕作を可能とする鉄製農具の普及があったばかりでなく、干ばつに対する

>>このような農政の確立も大きかったように思えます。

古市古墳群や百舌鳥古墳群の築造には、私もおっしゃるようなことが考えられると思いますので、先の話は古墳出現期に限った話です。

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

290/290 KFA03002 kikkawa RE:銅鐸鑄造技術に関するホームページ
(18) 98/02/18 22:03 284へのコメント銅鐸の鑄造技術に関するホームページを見つけましたので、ご報告いたします。井上さんのページの中の一部です。<http://www.btnis.co.jp/~inoue-osa/wao.html> 六爾さん、WWWページの紹介を有り難うございます。早速アクセスしたところ、以前に検索エンジンのgoo(<http://www.goo.ne.jp>)で、「鉛同位体比」を検索をしたときに、そのページがヒットしたのを思い出しました。

記述を読むと、北九州の銅鐸鑄型の例を挙げて、鑄型の石の産地は最寄りに存在せず、製造に適した遠来の石をわざわざ選んで使っていたらしいとの事、興味深いです。他にも、自然科学的方法について紹介されていますね。

なお、鉛同位体比については、<http://www.btnis.co.jp/~inoue-osa/wam.html> に載っていて、荒神谷遺跡出土銅剣などの話がありました。

本家・東文研のページには、解説や上記鉄剣の同位体比のグラフが載っています。
http://www.tobunken.go.jp/~hozon/Cns_Koji.html

P.S.六爾さんが#242で紹介された、角田文衛編(1994)『考古学京都学派』(雄山閣)ですが、この本の話は以前に見た記憶があったので、過去ログを検索してみました。
どんたくさんが、日本史の部屋・古代(nifty:FREKI/LIB/9/536)の#79(97/04/01)“雑誌「古代文化」”で、この本について言及され、小口雅史・法政大教授が、#82で编者などに関するコメントをされていました。どんたくさんなどから、追加コメントはありませんか？

291/291 BYD06141 中村 勝英 RE^ 2 :古墳の沿岸立地
(18) 98/02/18 23:46 289へのコメント

かおるさん、はじめまして・・・KANAKと申します。
横・横レスですが、

>それに、古墳の周囲を水堀でめぐらすなら、干ばつ時に「ため池」としての機能も果たせます。(改行多謝)

>> たとえば、大和古墳群で特殊器台形埴輪の出土した西殿塚古墳や中山大塚、箸>>中古墳群の箸墓古墳、特殊壺の出土した桜井茶臼山古墳、初期の円筒埴輪が出土>>している同じく桜井市のメスリ山古墳などには水濠が認められませんので、古墳>>時代前期の古墳のなかでも初期の古墳には水濠はなかったように思います。
>>(墓域を区別するためや墳丘築造のために採土した跡が掘りくぼまれたように>>なっていたかもしれませんが、水濠という状態ではなかったのではないかと思います。)

たしかに本来の“水濠”か“採土した跡”かは判定が難しいと思いますが、初期古墳群とされる“纏向古墳群”については次のとおり、分類されている様です。

石塚古墳	纏向1 或いは2	全長93	周濠
矢塚古墳	纏向3	96	周濠
勝山古墳	纏向3	100	周濠
東田大塚古墳	纏向3	96	周濠?
ホケノ山古墳	纏向3	90	周濠
箸墓古墳	纏向3 - 4	280	周濠?
茅原大墓古墳	纏向6	66	周濠

*また、纏向大溝とその後築造された箸墓古墳の関係も議論されています。
(日本の古代遺跡 奈良中部 「保育社」)

従って“初期の古墳には水濠はなかった”とは必ずしも言えないような気がするのですが？

292/293 SGL02501 弥生 銅鐸国「弥生説」4
(18) 98/02/19 00:17

1 第四部 銅鐸の正体 その1 (嫌なんだけど、お約束なのでUPを...)

幻想は果てしが無いのですが、これまでの仮説では、銅鐸は水田稲作の指導と普及の為に造られたこととなります。器物の製造には目的がありますが、銅鐸には「契約」の意味もあったのではないかと考えました。銅鐸国の傘下に入って、銅鐸を受取った時点で、銅鐸国はその共同体に稲作の新知識を与え技術指導をすること、共同体はその見返りとして収穫の一部を銅鐸国に渡す、という契約です。銅鐸は「契約の証し」でもあり、銅鐸連盟加入国のシンボルともなるだろうと思いました。今までは小銅鐸(鳴らす)は実用品の祭具、大銅鐸(見る)は、置くだけの祭器と考えていましたが、その場合の祀られる神の名前もどの様な祭祀にどう使われたのか、思い付けませんでした。銅鐸国が指導した稲作農耕の技術が高度のもので、それによって収穫を増し共同体が豊かになれば、非加盟国との差は歴然とし、銅鐸を所有することは、王の「ステータスシンボル」でもあったのではないかと思います。大型化の理由もその路線で説明が出来ます。

旅人1「なんでも、新しい稲作のやり方があるんやって、収穫が倍増すると！」
旅人2「その話聞いて、調べて来いって言うもんだで、こうして旅して来ただ」
ページ(173)

・崇神は「ハツクニしらした王」と、称えられていること。
 ・崇神一族（イリ家）は代続いた後に王権が近江に移り、その後にイリ家が少しの血筋を残して滅亡したらしいこと。
 他にもまだまだあるのですが、この辺で、仮説銅鐸国の説明を終わりにします。かつて、水野祐氏は発表された説で、崇神と神武の説話を合体させると、原大和国家の建国伝説が形を成しこれが最初の統一国家ではないかと言われています。そして崇神王朝が出雲その他の西日本を征服した、となるのです。多分出雲から大量の銅鐸が顔を出す以前の説、だったと思いますが、銅鐸はやはり無視されています。崇神王朝を3～4世紀とのお考えですが、これは古事記の干支から計算されたもので、信憑性ははっきり分かりません。要するに年代は不明です。

銅鐸国の開始は、考古学で判明するであろう初期の銅鐸が造られた頃であり、終末は崇神朝滅亡の頃と考えられますが、銅鐸の使用はもっと後まで続いたことも考えられます。銅鐸国は滅びてもその王朝を引継いだ国々があったからです。それから、考古学のRTで銅鐸の使用年数は分からないとお答えがありました。なお「銅鐸は稲作を国家経済の基盤とするノウハウと共に各国にもたらされた」というのがわたしの仮説ですから、銅鐸が九州から出ようが、どこかの離島から出ようが、全然驚かないことになっております。稲作可能の土地であれば何処にでも売れたでしょう。銅鐸や他の器物も移動は可能で、新旧・形・模様が混在して発掘されても、何ら不思議ではなく、時の情勢や必要に応じて、一旦、ある場所に納まったものが運び出されたかも知れません。あまり出土地に拘わるのはどうでしょうか。最終的に地下に潜った時期と理由については、場を改めます。

「弥生説」は、「銅鐸」の時代が農業国としての経済基盤を固め、その後の日本国の基礎を築いたという最も重要な時代に、深く関係しているのではないかと、という仮説でした。この国家改造が良かったのか悪かったのか分かりませんが、米本位制国家はその後長く続いたのです。時代の変り目に何らかのアクションを起こす人物が現れ周囲を巻き込み、次第に国全体が違う時代に突入するパターンが見られます...後から考えるとですが...。天才の登場が時代を変える、とも言い換えられます。孤立した島国日本の中で、明治維新まではそうやって、次々に新しい時代を築いていったのではなかったでしょうか。

最後に付け加えます。銅鐸が記・紀に見出せないのは、その「編纂をなした国家の初代大王」が、最初の日本統一の基礎を築いたと思われる「銅鐸国」の王とは別の一家だったからではないでしょうか。九州を含めて西の地域から銅鐸が出土しながらも、銅鐸圏とは言えない程度の数（今の所は）でしかないのは、その地帯が銅鐸王とは別の王権の支配地だったからかも知れません。以前に、九州の王族が東に軍隊を送ったのは「銅鐸国の繁栄に危機感を覚えた」からではないかと書きましたが、九州出土の銅鐸がその危機感を物語っていることも考えられます。記・紀の記述が、銅鐸国を省いてしまうと国の始まりが何世紀も下がってしまい、神話と繋げるのも難しくなります。彼等編纂者の苦肉の策は、銅鐸に始まった王朝の、事蹟だけを残して銅鐸そのものの存在も、それと分かる様な記述も一切載せないことだったでしょうか。

銅鐸が数多くの出土を見ながらも、記・紀に記載がないのを「非征服者の宝物だったから」と説明することが多いようです。しかし「戦勝国が、勝った事実を隠す」のは変ではないでしょうか。敵対する文化の異なる先住の人達を、計略を用いて、残忍な手段で殺戮した説話は幾つもあります。銅鐸について語るのを憚る理由は、銅鐸国王と記・紀編纂を行った国とが元は一族だったからではないかと疑い、更に、所謂「天孫降臨」「海幸山幸神話」その他の兄弟説話に、何故か「弟が正しい・弟が勝つ」というパターンが見られることから、初代銅鐸王の祖先は兄の立場だったのではないかと考えています。世界にも兄弟の対立物語は多く、後継者問題は深刻な御家騒動を引き起こしています。終わりませ～す。
 ...名古屋城出土の、スラリとスマ-トな銅鐸の写真を眺めつつ、 <弥生>

P,S, こちらの都合で、長くて済みませんが、残りを一挙に放出します、軽～い読み物ですから大丈夫でしょう。宜しく！（古事記オタクの弥生でした。）

293/293 VZD07512 ラン2 RE^2:なんでも鑑定団で銅鐸を鑑定
 (18) 98/02/19 00:52 285へのコメント

六爾さん かまくらさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

ラン2はこの銅鐸を放送された時、見ました(^_^)
 この番組のファンなんです(*^^*)

>> ところで番組に持ち込まれた銅鐸等はその後どうなったのでしょうか？

たしか依頼人は、関西人なら誰でも知っているとても有名な神社の神主さんで、
 ページ(175)

先代の神主さんが収集なさった品だったと記憶しています。
だからこの神社の宝物館にでも展示しとけばいいのに・・・と、うちのだんなさんとTV見ながらだべっていたのを思い出しました。
でもだんなさんに確認すると、全然覚えてないといってます(^; ;

294/296 VZC02152 勘太郎 銅鐸時代の米食
(18) 98/02/19 20:56 278へのコメント

MUSEさん、こんにちは
コメについてのレクチャーありがとうございました。

かおるさん、KANAKさん 古墳と濠のご発言ありがとうございます。

MUSEさんへ

このように卑弥呼の内政が成功して国内が繁栄すると、本州の西部に展開している他の国々へ、その統治ノウハウの移植を図ろうとした動きのひとつが、『古事記』の「出雲神話」で描かれる「国譲りエピソード」だといえ、安直なシナリオに見えるかも知れません。
でも、たとえ表面上は武力侵略に見えてもコメ食が安定供給されるシステムを提供されたとしたら、民の人心はどちらに傾くでしょうね。
たしかにコメを抜きに弥生、古墳時代は語れないでしょうね。

食だけでなく、絹という衣生活の革新も伴っていたのですから。
これでまたひとつ新説を思いつきました。
かいこの神様説 = 銅鐸はさなぎの形を模しているから"かいこ"を祭るものであった。ハキッ(.)\(^;

かおるさん、KANAKさんへ
箸墓に接している池？は後世のものでしょうか？
黒塚にも周濠があったように思ったのですが、行けなかった(/_;) 勘太郎の勘違いかも。

98.02.19 勘太郎

295/296 VZC02152 勘太郎 RE:銅鐸とは何か, part2
(18) 98/02/19 20:57 282へのコメント

どんたくさん、こんにちは

桜井古墳オフ、どんたくさんが行かれるなら私も行きたいのですが今のところ予定が立ちません。直前参加表明になるかも知れません。

「×印のついた銅鐸」のレクチャーありがとうございました。

(1) 神庭荒神谷と諏訪大社

A. 出雲の神庭荒神谷遺跡の周辺にある神社8箇所中、6箇所までが、建御名方神をお祭りする神社だそうです。(*1)

B. 信濃の諏訪大社(御祭神:タケミナカタ)で7年ごとに行なわれる御柱祭(杵ノシライ)で奉納される巨木の根もとに、昭和37以前は×印がつけられていたそうです。
このことから、神庭荒神谷と諏訪御柱祭りとを結び付けて考えている人がいます。(*2)

日本書紀には建御名方の記述がなくタケミナカタは出雲とは関係がないと思っていたのですが意外でした。もう一度検討する必要がありますね。

質問タイムが終わるまでにもっと聞いておかなければ、とアセアセしています。よろしく願いいたします。

98.02.19 勘太郎

296/296 VZC02152 勘太郎 さわらぬ神に祟りなし
(18) 98/02/19 20:58

今までの銅鐸シンポジウムの発言を読ませていただいて銅鐸は祭祀に使われたことはほぼ間違いないと思います。どういう風に使われたか、まではわかりません。祭祀についてひとつ気になることがあります。

doutakusinpo1998

司馬遼太郎さんの「街道をゆく」シリーズのなかで「古代、神は人に幸せをもたらすものではなく崇るものであった。人は、崇りを恐れ神に祈った。」という趣旨のくだりがありました。# 2 2 6 に記述させていただきましたようにフィリピンのアエタ族では精霊も悪霊も人に崇るものです。その違いは精霊は間違っただけで汚したときに崇り、悪霊は何も悪いことをしなくても崇るというものです。銅鐸の祭祀でも"幸せ"を祈ったのではなくむしろ"厄除け"を祈った可能性が高いと思います。崇りを恐れて神の奴隷になることは心理的に楽ではなかったかと思えます。現代でも不幸せの原因は「先祖霊を粗末にした崇りじゃー」などと恫喝する宗教? がしぶとくはびこっています。

これをどんたく説に当てはめると「雷撃除け」になるでしょうか。想像以外に手段はありませんが神に何を期待して銅鐸を祭ったか検討する必要があると思えます。

ところで銅鐸は記紀に記録されているのでは、イザナギ=イ・ザナギ=イ・サナキ=銅鐸、イザナミは銅鐸についている舌。お粗末でした。(^^;

98.02.19 勘太郎

297/297 QWD02544 どんたく RE:銅鐸国「弥生説」4
(18) 98/02/20 00:05 292へのコメント

弥生さん、こんにちは。 どんたくです。

>> (嫌なんだけど、お約束なのでUPを...)

忙しい中を、無理を聞いて下さって「銅鐸王国」論のエッセンスを纏めて戴き、まことに有り難うございました。しかも、新たに出演に崇神を登場させるなどのオマケつき。(^^)

記・紀には全く銅鐸などというものは現われてこないのに、さすが「古事記オタク」の弥生さん、古事記と銅鐸とを見事に結び付けてしまった手腕には、恐れ入りました。m(_ _)m

「銅鐸王国の主は崇神」ということですか？
(私の理解が間違っていたら、ごめんなさい)
ウム。私にとっては全く思いもつかない発想なので、どこから質問したらいいのかも分かりません。(^^)

いずれにしても、おかげさまで、弥生さんの「銅鐸王国」論のアウトラインが、おぼろげながら分かったような気がします。

「銅鐸について、本当に色々な考え方が有り得るのだなあ。」と、腕組みしながら、煙草をくゆらしています。(^^)

このシンポジウムも、そろそろ終わりに近づいてきたようですが、それに間に合わせるべく、最後には残りの部分をどっと放出して戴いて、「銅鐸シンポ」の掉尾を飾る銅鐸論となったようですね。

どうも有り難うございました。

QWD02544 どんたく

298/299 RXE12761 六爾 RE:なんでも鑑定団で銅鐸を鑑定
(18) 98/02/20 00:43 293へのコメント

nifty:FREKIMT/MES/18/293 へのコメントです。
ラン2 さん、こんにちは。

>ラン2はこの銅鐸を放送された時、見てました(^^)
>この番組のファンなんです(*^^*)

私も、大ファンです。いつの日か相沢先生の槍先形尖頭器をもってみんなで出演したいです。(^^)それとも、家にある頼春水(頼山陽の父)筆の江戸時代後期の飛脚問屋の看板の方がいいかな。^^;

銅鐸というものは本当に高いものなのですね。なにしろ460分のい1ですからね。銅鐸が一つ発見されると博物館が出来るといえますからね。(* *)
我が町の郷土研究家井上郷太郎先生が昭和30年代に数々の考古遺物を収集
ページ(177)

doutakusinpo1998

された際に、どうしても入手出来なかったのが銅鐸だったといえます。

ちなみに、この井上コレクションは八王子市郷土資料館に一括寄贈されております。詳しくは梶国男先生（八王子市の郷土史研究家、『古墳の設計』で藤森栄一賞受賞）の『土の巨人』たましん文化財団に出ています。

六爾(RXE12761@niftyserve.or.jp)

299/299 RXE12761 六爾 RE:「×印」の補足
(18) 98/02/20 00:43 288へのコメント

nifty:FREKIMT/MES/18/288 へのコメントです。
どんたくさん 勘太郎さん、こんにちは。 六爾です。

> B . 信濃の諏訪大社（御祭神：タケミナカタ）で7年ごとに行なわれる
> 御柱祭（オハシサイ）で奉納される巨木の根もとに、昭和37以前は
> ×印がつけられていたそうです。
> このことから、神庭荒神谷と諏訪御柱祭りとを結び付けて考えて
> いる人がいます。（*2）
この件については未確認です。でも、そうすると薙鎌も銅鐸祭祀に関係がある
かもしれませんね。

>
> (3) 諏訪大社の神長官の家の印
> 諏訪大社の神長官（シノヅカガ：古くから続いた神主）の家の破風の辺り
> に、「」の中に「十印」が入ったマークがついています。
> 私はまだこの実物を見たことがありませんが、最初にこの神長官の家の
> 写真を見たとき、このマークを見て、思わずハッとしました。

>
> でも、「十印」と「×印」の違いがありますから、これを神庭荒神谷や
> 加茂岩倉と結び付けるのは、ちょっと無理がありそうですネ。

>
> 確か六爾さんは、この神長官の家に行かれたことがあったのでは？
そうでした、ついこの間行って来たばかりです。鉄鐸の写真を撮ってきたばかり
です。私のホームページにもそのときの様子は写真入りで公開していますが、
残念ながら破風の写真はありません。

ちなみに、神長さんの家はかなり古くて謎がいっぱいだそうです。神長さん
は代々「守矢」を名乗っており、いわゆる「モリヤ族」の末裔です。

それでは、この問題の解決のキーワードをご紹介します。

.....
銅鐸祭祀の主人公であった騎馬民族であるヤマト族は各地へと勢力を伸ばして
いった。そして、かつては栄華を誇ったイズモ族も追われる身の上になった。
そこで、かつてから親交のあった諏訪地方を拠点とする農耕民モリヤ族の地に
たどり着き、両者は合体してスワ族になった。そして、ヤマト族と戦ったので
ある。国境の峠という峠には木の柵がめぐらされた。そして、その柵は7年ご
とに交換された。戦いは数百年もの間続いたが、5世紀ごろになると次第に和
解した。そのなごりが七年ごとにおこなわれる御柱まつりなのである。
新田次郎 『霧の子孫たち』より
.....

銅鐸をヤマト族のものとするならば×印で封印して埋めたのかもしれないね。

六爾(RXE12761@niftyserve.or.jp)

300/300 RXE12761 六爾 RE:銅鐸時代の米食
(18) 98/02/20 15:38 294へのコメント

nifty:FREKIMT/MES/18/294 へのコメントです。
勘太郎さん、こんにちは。

>
> 食だけでなく、絹という衣生活の革新も伴っていたのですから。
> これでまたひとつ新説を思いつきました。
> かいこの神様説 = 銅鐸はさなぎの形を模しているから"かいこ"を祭るも
> のであった。ハッ(.) \ (^.^)

銅鐸の別名としてサナギ（佐那岐）という呼び名もありましたね。私が取材し
ページ(178)

doutakusinpo1998

てきた鉄鐸はさなぎ鈴といひます。ですから、あながち珍説ではないかもしれ
ません。これからのご発展を期待しています。

>

> かおるさん、KANAKさんへ

> 箸墓に接している池？は後世のものでしょうか？

これは、文久の修陵の際の改変のようですが。詳しくは『書陵部紀要』（県立
の図書館にあるはず）に出ていたような気がします。

六爾(RXE12761@niftyserve.or.jp)

六爾の博物館 (<http://www.machida.xaxon-net.or.jp/~waki/>)

301/302 RXE12761 六爾
(18) 98/02/20 20:41

六爾の銅鐸研究史（第二版）

こんにちは、みなさま

長かったか、短かったかはわかりませんが、銅鐸フォーラムもいよいよ終わりとなりま
した。ここで、最後のご挨拶を兼ねまして銅鐸研究史を再アップさせていただきます。

銅鐸研究のあゆみ

はじめは哲学者の提唱から

1920年（大正10）哲学者であり、優れた歴史研究家でもあった和辻哲郎先生は
銅鐸銅剣文化圏論を発表されました。この文化圏論は現在の青銅器文化圏理論の基礎と
なるもので、教科書などにも必ずあるあの分布図はこれが発祥となっているのです。

マッチが火をつけて消えてしまった銅鐸研究

1927年（昭和2）梅原末治（マッチことうめはらすえじ）先生が『銅鐸の研究』
を出すと一時、その議論が止まってしまいました。これは、あまりの見事な研究の成果
であったがために、ほかの研究者が遠慮してしまったのです。この梅原マッチ先生の銅
鐸集成は天敵で終生のライバルでもあった森本六爾先生も絶賛しておられます。

マッチへのライターの反撃

そこへ反撃ののろしを挙げたのが小林行雄先生です。椿井大塚山古墳の一件以来、す
っかり信頼関係が崩れてしまった、マッチ梅原とライター小林のコンビはついに学説上
でも大きく対立するようになります。森本六爾先生の考えを発展し、銅鐸の原料は舶載
銅利器の鑄潰しであるという説を発表したのです。そして、その出現年代についても弥
生時代の前期である、という見解を示したのです。

ライターでガスバーナーに火をつける

そして、1960年（昭和35）その小林先生に懇請され、全く実物を見ないで写真
だけで書いた論文が佐原真先生の『世界考古学大系』の中の論文だったのです。この中
で佐原先生は画期的といわれた銅鐸をつり下げる紐（ちゅう）による分類を発表された
のです。ちなみに佐原先生のお名前は「真」ですから、佐原先生の説はつねに真説であ
ります。（^o^）

佐原真「銅鐸の鑄造」（『世界考古学大系』二・日本 弥生時代、平凡社 1960
年4月）

杉原旦那のなぐり込み

「テーへんだ、テーへんだ、近頃京都一家の方で小林ライターの子分の佐原のシ
ンが大変な研究をまとめたんだってえ」登呂遺跡の発掘で自他とも認める弥生研究のボ
スであった明治大学の杉原先生は、自分が監修している『世界考古学大系』にふと、見
慣れない名前の若造が銅鐸について発表しているではありませんか。「これは、いった
いどういうことだ。この部分は小林ライターが書くはずではなかったか。」なんと、小
林ライター先生は京都一家の番頭の佐原シン先生にこの部分を書かせたのです。そし
て、杉原旦那に訂正されないように、直前まで自分が書くことにしていたのです。
「べらぼうめ、小林ライターの野郎やりやがったな。このやろう、なぐり込みだ、野郎
ども、集まれ!!」杉原旦那の大反撃が始まったのです。

杉原旦那はすぐさま反撃論文を発表し、その中で銅鐸の年代を弥生時代後期前半に設
定し、埋納を弥生時代終末としたのである。銅鐸の原料についても舶載の銅銭の鑄潰し
であるという説を発表したのである。

杉原荘介「銅鐸 その時代と社会」(『駿台史学』22・1968年3月)

ガスバーナーから2口コンロへ

その分類、佐原シン分類を1970年(昭和45)佐原先生の学問友達でもあり、梅原末治先生の最後の弟子である田中琢先生が「キクタク」と「ミルタク」に分類されたのです。これは、紐(ちゅう)による分類は銅鐸を鳴らしたか、鳴らさなかったという点に凝縮され、鳴らした銅鐸を「キクタク」、鳴らさなかった銅鐸を「ミルタク」と名付けたのです。ここにいたって、分裂していたマッチとライターの学説は融合して強力な2口ガスコンロを形成するに至ったわけです。

田中琢「まつりからまつりごとへ」(『古代の日本』五・近畿、角川書店、1970年1月)

持ち運び可能なカセットコンロ

マッチとライターの融合によって強力な2口コンロになった銅鐸研究は一般の大衆には、ちょっとやさっとでは手の届かないところになってしまいました。それを誰でもどこにでも持っていけるように親しみやすくされたのがカセットコンロ藤森栄一こと藤森エイチン先生です。1964年(昭和39)に発表された『銅鐸』は毎日出版文化賞を受賞し、一般大衆でも銅鐸研究に参加出来るということを知らしめたのです。エイチン先生の銅鐸論が発表されるまで銅鐸関係の一般的な概説書および、読み物は全くと言っていいほど存在しなかったのである。それを一般大衆のものとしたエイチン先生はさすがですね。そんな頃、神戸の桜ヶ丘で14コもの銅鐸が一挙に発見されたのです。

レンジでチンする銅鐸研究

考古学はインスタントではいかん、と終生いつづけた梅原マッチ先生のしかめ面が目に見えるようですが、以後の銅鐸研究は百花繚乱となります。また、銅鐸の出土も相次ぎ、荒神谷、加茂岩倉と大量の銅鐸が我々の前に姿を現したのです。これで、現在までの銅鐸の出土総数は460数個を数えるようになったのです。

ちなみに、こちらの研究史は真実に基づいておりますが、一部脚色した部分がございますので、その点をご了承ください。なお、登場された各先生方にはこの場をお借りいたしまして、お詫び申し上げます。<(_ _)>_(._.)_(^_^).....

なお、こちらの研究史は

<http://www.machida.xaxon-net.or.jp/~waki/doutaku/index.html>

で見ることが出来ます。

***** 六爾 (RXE12761@niftyserve.or.jp) *****

<http://www.machida.xaxon-net.or.jp/~waki/>

302/302 BYW00406 かおる 箸墓の大池について
(18) 98/02/20 22:05 300へのコメント

勘太郎さん、六爾さん、こんばんは。

>> かおるさん、KANAKさんへ

>> 箸墓に接している池？は後世のものでしょうか？

>これは、文久の修陵の際の改変のようですが。詳しくは『書陵部紀要』(県立の図書館にあるはず)に出ているような気がします。

六爾さん、手許にある書陵部紀要所収陵墓関係論文集<続><III>を見たところ、昭和56年度第34号では「大市墓水道管取設工事箇所の調査」という題で前方部の拝所への水道工事に伴うトレンチの土層観察結果と出土遺物の紹介がされています。

また、昭和62年度第40号では「大市墓の墳丘調査」と題して箸墓の墳丘調査結果が紹介されています。

手持ちの論文集では30号以降しか掲載されていませんが、他の資料を見ますと『書陵部紀要』第27号は「資料紹介 大市墓の出土品」という題で箸墓の墳丘で採集された特殊器台形埴輪などを報告しているようですが、論文を読んでいないので、大池が文久の修陵の際に改変されたかどうか分かりません。

ところで、平成6年には大池の堤防改修工事に伴い、檀原考古学研究所が大池の西側堤防を箸墓の前方部北端から北側にかけて細長いトレンチをいれました。

この結果、箸墓の前方部の現代の裾から約10m外側で本来の法裾の葺石が検出

doutakusinpo1998

され、さらにその外側に幅20m以上の堤状の盛土を葺石から約10m離して構築していることが分かりました。

この溝は墳丘自体が完成する頃には土砂が堆積して行くようだと報告されていますので、周濠ではないと思います。

また、このトレンチの北方では古い纏向川の流路が確認されています。

これらのことから、私は大池は後世に灌漑用に作られたものではないかと想像しております。

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

303/304 BYW00406 かおる RE ^ 2 :古墳の沿岸立地
(18) 98/02/20 22:38 291へのコメント

KANAKさん、はじめまして。
レスをありがとうございます。

>>たしかに本来の"水濠"か"採土した跡"かは判定が難しいと思いますが、
>>初期古墳群とされる"纏向古墳群"については次のとおり、分類されている様で
>>す。

>>石塚古墳纏向1 或いは2	全長 9 3	周濠
>>矢塚古墳纏向3	9 6	周濠
>>勝山古墳纏向3	1 0 0	周濠
>>東田大塚古墳纏向3	9 6	周濠?
>>ホケノ山古墳纏向3	9 0	周濠
>>箸墓古墳纏向3 - 4	2 8 0	周濠?
>>茅原大墓古墳纏向6	6 6	周濠

>> * また、纏向大溝とその後築造された箸墓古墳の関係も議論されています。
>> (日本の古代遺跡 奈良中部 「保育社」)

>>従って"初期の古墳には水濠はなかった"とは必ずしも言えないような気がする
>>ののですが?

確かに、纏向石塚古墳の発掘では周溝が検出されています。

しかしながら、これは、わたしの勝手な考えですが、出現期の古墳と考えられる纏向形古墳の周溝は、弥生の方形周溝墓などに見られる周溝が大きくなったものであって、灌漑用に作られた水濠ではないと思っています。

実は私は、大和や河内にある古墳の周囲にある立派な周濠は、後世にこの地域の農民がこの周溝を利用して作った灌漑用の池ではないかと妄想しています。

なぜか、立派な周濠を持つ古墳が大和と河内に集中しているのも気になるどころです。

どうして、他の地域では周濠がある古墳を造らないのか?、つまりそれは、元々、古墳の設計図には周濠なかったからではないかと...という空想もしています。

追伸

KANAKさんは、大和古墳群の近くにお住まいだとか、うらやましいですね。

私は、大藤原京の横大路と下ツ道の交差点の近くに住んでおります。

これからもよろしくお願いします。

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

304/304 YIG00127 かまくら 【シンポジウム】銅鐸を考える 総論
(18) 98/02/20 22:43

皆さま、こんにちは。(^ ^)

【シンポジウム】銅鐸を考える も大盛況のうちに そろそろ終盤を迎えようとしております。

まだまだ議論がつかない状態ではありますが、2/25の会議室終了まであと数日を残すのみですので、ここで一旦各パネリストの皆さまに「銅鐸を考える」という基本に戻っていただきまして、これまでを振り返って【シンポジウム】を総括していただきたいと思っております。

パネリストの皆さま、よろしくお願いいたします。

尚、議題1~5、質問、企画等は会議室が終了になるまで続行させていただきます。一般参加の皆さま最後までラストスパートを加えつつご参

ページ(181)

加下さいませ。m()m

もちろん新規発言のご意見・情報提供など時間の許す限りご提供下さい。

司会者 / かまくら

305/305 KFA03002 kikkawa 地磁気年代推定法(RE²:銅鐸の使用年代)
(18) 98/02/21 01:53 032へのコメント

>>どこかに置きっぱなしなのか、本棚に見つかりませんでしたので、データを超電レスに成ってしまいましたが、やっと 中島正志・夏原信義(1981)『考古学ライブラリー 9 考古地磁気年代測定法』(ニューサイエンス社)を部屋の隅から発掘(^^;)しました。A5版・95ページの本で、読み直してみましたが、理論から試料採取・測定法、測定例の紹介、測定データの問題点まで、丁寧に纏めてありました。

島根県埋蔵文化財調査センターで見た展示パネルでは、地球の磁極の位置の軌跡が、まるで酔っ払いがグルグル・フラフラと歩き回ったかのような形で描かれており、どんたくさんがご覧に成ったという、永年変化曲線の問題点については、以下のような説明がありました。(p.76)

“西南日本における地磁気永年変化曲線で、最も新しくデータ数の多いのは、渋谷による図26であるが、この図からも、時代ごとに測定値のバラツキがかなり異なっていることは明らかである(図では測定値に引かれた縦線がフィッシャーの統計による誤差角である)。現在からA.D.400年までは、比較的よくまとまっているが、その中では1700年代と1400年代のまとまりが悪いようである。これは、その時代の測定値がまだ少ないのが、主原因である。

A.D.400年以前になると、精度は極端に悪くなってくる。その原因は、測定数が少ないことに加えて、その時代になると試料が窯跡からのものではなく、住居跡の炉の焼土がほとんどだからでもある。一般に、炉跡の焼土は、表面はよく温度が上がっているようにみえても、内部まで十分に温度が上がっていない場合が多い。したがってそのTRMも不安定なものが多い。今後さらに、年代および残留磁化、双方の信頼できるデータを積み重ねていくことが必要である。

紀元前になると、TRMの測定結果は渡辺直経(1959)によるものしかなく、データ数が少ないため磁気年代推定は不可能である。・・・”

とすることで、この本が出た時点では、紀元前後とされる銅鐸の年代推定には、満足に使えるようにはありません。

最近の著者の研究動向を調べると、中島正志・谷崎有里(1990)「考古地磁気年代推定試料の交流消磁実験」福井大教育紀要II 40,1-14 がありました。

地磁気永年変化曲線は、ここでも相変わらずShibuya(1980)を使っており、A.D.400年以前への適用は、頭打ちに成っているように見えます。

“考古地磁気年代推定法は、14C法のように独立して年代が決定できる絶対(放射)年代測定法ではない・・・”とあるように、標準データとして用いた遺跡の推定年代の信頼性に依存し、バイアスの危険性を考慮すると、古い年代を推定するには未だ問題点が多そうですね。

306/307 MHB01602 M U S E 同位体の次世代分析装置
(18) 98/02/21 14:36 281へのコメント

Re:#281

kikkawa さん、元素の同位体比を原子レベルでコンピュータ計測できる、世界で唯一の測定装置が筑波大学で17年前に試作され、現在でも現役だそうです。名付けて「同位体顕微鏡プロトタイプ」という。

そして、このプロトタイプを発展させて同位体顕微鏡を開発するプロジェクト(5ヶ年)が東京工業大学惑星科学実験施設同位体顕微鏡開発室で97年4月に始まったと、坂本尚義氏が、専門誌『科学』(7月号 p.560-566 1997 岩波書店)で紹介していました。タイトルは「同位体顕微鏡 全地球ダイナミックスを診る次世代分析装置」で、二次イオン質量分析法(SIMS)を発展させたものだそうです。なお、この同位体顕微鏡を構成するスパッタ型高輝度負重イオン源BLAKE-Vを開発したことにより、隕石中の酸素同位体比を計測できたことで、20年間も論争していた問題に決着がついた、と述べていました。この顕微鏡の特徴は、マイクロ領域の同位体分布を明らかにできることにあるからだそうです。

この装置で、銅・スズ・鉛の3元合金である銅鐸でも全面スキャンすれば、マイクロ単位の鉛同位体比分布も捕捉できるでしょうから、異なった産地の鉛
ページ(182)

を混ぜているか、の問題も解決するかも知れないですね。
とにかく、スゴイ装置が出現していたものと驚きました。

さて、P・バツズ氏の論文名を提示せよと述べられますが、よほどの専門誌なのか、明記されて紹介されていないようです。ただ、論文のコピーを提供された岡本健一氏の著書では、P・バツズ氏グループと書いていますので、その研究はかなり評価できるのではないのでしょうか。個人的な研究でなくチームとしての成果のようですから。
前回の発言（#277）で紹介した馬淵久夫氏の論文を掲載している『保存科学』（36号 1997年 東文研発行）では言及されているかも知れません。
当方はこの雑誌を探したのですが、見つかりませんでした。

次に、kikkawaさんから質量分別効果が小さいこと、銅鐸の主要3元素の沸点のデータから鉛が融点以上の雰囲気でもその蒸気圧はもっと小さく計算されると説明されます。
しかし、古代の鉛精錬における不純物の存在、具体的には「亜鉛」がガス化（沸点セ氏903度）したとき、液体鉛がそれに付随して炉外に排出されます。そのとき鉛同位体比に比例して鉛が排出されるとお考えですか。
原子量の小さい204鉛が多く排出されるように思うのですが。

《鉛鉱石の同位体比值とを直接、結び付けることは危険》と述べているのは、馬淵久夫氏の論文からの久野氏の感想ですが、これも馬淵久夫氏の論文にアクセスできる環境にあれば、その当否は容易に判断できると思います。朝日新聞社が編集責任のうえで掲載したわけですから、曲解の可能性は薄いでしょう。
kikkawaさんも『アサヒグラフ別冊 銅鐸の谷』をお読みになるなら参考になると思います。公立図書館でも容易に閲覧できる図書ですし。

久野氏が神岡鉱山型（岐阜県）の鉛データを加えて、中国・朝鮮・日本での鉛同位体比を比較すると、中国のデータ値に日本のそれが隣接する図を『荒神谷遺跡と青銅器』（島根県古代文化センター編 同朋舎出版 1995年）の136ページに掲載していますね。
それも前漢鏡と後漢鏡に挟まれる形で初香山銅鐸の値と近接して図示されます。この図からは中国と日本の鉛を弁別できないのではないのでしょうか。
銅鐸の鑄造を日本と推定する限りは、それと、神岡鉱山型（岐阜県）の鉛は方鉛鉱を精錬して得られる点も気になります。方鉛鉱は亜鉛分を多分に含みますから、古代の精錬では鉛の中に亜鉛分が残るのではないかと。
それで、銅鐸の化学成分分析で、前漢鏡と後漢鏡では無視できる量よりも多い亜鉛成分が検出されるのも、納得できる気がします。

《溶融時に鉛同位体比は均質化》するかは、実際にテストして銅鐸のすべての部位にて均質であることを確認するのがスジというものでしょう。事実、銅鐸の化学成分分析ですら、サンプル抽出において慎重な手順を踏んでいるのですから（銅剣の深さ3ミリの部位から試料を採取、3回測定の平均値）。時間ロスを懸念するなら、統計学は実験計画法による割り付けで実験回数の低減を提案しています。
それに、タツタ1コの銅鐸が出土した場合、その銅鐸だけで語らせるためには、計測データを大量に観察する以外に道はありません。
科学的アプローチとは本来そういうものでしょう。

98-02-21

MUSE

307/307 MHB01602 MUSE 雷神と風神
(18) 98/02/21 20:52 059へのコメント

Re:#059

どんたくさん、お久しぶりのMUSEです。

精力的な書き込みなので、どのツリーにぶら下がるか迷いましたが、雷の発生現象は、電力障害の面だけでなく、無線通信にもワルサをするため、海外
ページ(183)

での研究も活発なのですね。月刊誌『科学』（岩波書店）にも海外の研究が紹介されていました。最近では雷雲から成層圏に向かって発光する現象がジャンボ機のパイロットによって目撃されているそうです。また、認知レベル以下の雷を含めると毎日、1秒間に100コも発生して無線通信の頭痛のタネという研究もあるとか。それで、米国では、全米雷検出ネットワーク（NLDN）が常時稼働して発生時刻、位置、電流の強さと極性がリアルタイムでパソコンに表示するようになっているそうです。

このように、今でも雷の存在を無視しては生活できないわけですが、どんたくさんが指摘するように、古代人にとってそのメカニズムが分からないだけに恐怖の対象でしたでしょう。しかし、日本という地理的位置から考えると、雷現象だけが「畏れ」の対象でしょうか。むしろ、雷よりも恐ろしい台風の方がその被害となる地域が広大であるため、天災という点では、関心の高さは較べられないように思っています。しかも毎年、定期便のように来襲する台風は、恵みの雨をもたらす風神と考えるよりは、敬遠したい風神だったのでは、と理解しております。このことは、銅鐸を大量に出土した出雲国の江戸時代の年表を参照すると強く意識させられます。そこには、洪水の被害による不作、土砂崩れの記事が多く見られます。特に、金属精錬の事実が解明されていない銅鐸時代は別にしても、たたら製鉄の盛んであった江戸時代には切実な問題を提起したように思います。鉄の精錬には大量の木炭が要求されますので、植林を計画的に実施するシステムが運用されないと、山林の保水機能がうまく働かず、人災ともいえる洪水を引き起こすからです。そのうえ、煙害や大量の水を使うことで生ずる排水公害もあります。

もし、銅鐸時代にその鑄造が始まるなら、山の幸ともいえる鉱石、木炭、水から銅鐸が生まれると認識する古代人にとって、その災害を「山の神の怒り」の現れと認知するのではないのでしょうか。稲作農耕が谷地から平野に拡大したことも被害を拡大する要因となったでしょう。山人として採集生活がメインであれば、沖積平野もただの荒野に過ぎません。しかし、稲作農耕での食料獲得が定着すると、水対策が関心の的となります。山の神が怒るなら、それを鎮護する宗教的シンボルも必要になるでしょう。幸いにも日本では梅雨が田植えの季節に到来して潤沢な水を供給してくれます。カラ梅雨の発生頻度はそう高くはありませんが、台風が到来しない年はめずらしいです。そのため、風神に対する畏怖の念を古代人が共有するに違いありません。そして、そのシンボルが銅鐸であった可能性もあります。でも、銅鐸を地中に埋める行為を説明するには難しいかも知れません。

それで、物神に毒された現代人の私が解釈すれば、銅鐸とは、その製造に供された原料の数々の持ち主であった土中の神に銅鐸を捧げて入魂の儀を行い、神からの認証を貰い、銅鐸でもって財の交換手段として通用させる「金属貨幣」であった、というのはどうでしょう。たとえ珍説にランクされようとも、マンザラでもないと思っております。

その例証として中国の後漢時代にその習俗が見られる、鉛製の「買地券」が宮ノ本遺跡（福岡県太宰府市向佐野）で発見されていることを挙げておきます。この鉛製買地券はその表面に墨書で文言が書かれ、墓域を支配する土地神や冥界の神々に捧げられる金品であった。そして、それは、それらの神々から墓地を買い取った証拠の土地取引書で、買地券は、墓券・鎮墓券ともいわれる。この習俗は、中国の道教的信仰に根ざしたもので、西暦2世紀と13世紀のものが多く見られ、中国全土におよぶという。ただし、日本では、こうした道教的信仰は、南朝の宋や梁から百済を通じて伝わっているので、弥生時代の日本とはズレがありますが。したがって、中国からの伝来ではなくても東アジアの古代人がこうした観念を有するという事実のみに着目していただきたいのです。

参考

福西浩「雷雲上方の放電現象の発見」p.671-678
『科学』9月号 1997年 岩波書店

関口武『風の事典』原書房 1985年

宮ノ本遺跡の買地券 p.25-29
『日本の古代14 ことばと文字』岸俊男編 中央公論社 昭和63年

98-02-21

MUSE

308/308 QWD02544 どんたく RE:地磁気年代推定法(RE^2:銅鐸の使用年代)
(18) 98/02/21 21:45 305へのコメント

kikkawa さん、こんにちは。 どんたくです。

>> 超亀レスに成ってしまいました。 やっと 中島正志・夏原信義(1981)
>> 『考古学ライブラリー 9 考古地磁気年代測定法』(ニューサイエンス社)
>> を部屋の隅から発掘(^_^)しました。

「発掘」ご苦労さまでした。(^^)

>> A.D.400年以前になると、精度は極端に悪くなってくる。

ウム。それは致し方のないことでしょうねえ。
ご教示有り難うございました。

ところで、アサヒグラフ別冊『銅鐸の谷 加茂岩倉遺跡と出雲』所収の
上野武「銅鐸論の現在」に、次のような記述がありました。

『荒神谷遺跡の埋納坑周辺に焼土層があり、熱残留磁気法による年代測定が
行なわれ、(1) 950 ± 100年 (2) 590 ± 30年 の二つの
年代が示された。』

一方、#28「銅鐸の使用年代」には、次のように私は書きました。

>> 【参考】

>> (*1) 神庭荒神谷遺跡の熱残留磁気調査については、
>> 時枝克安・伊藤清明：「荒神谷遺跡の焼土の年代と性格」
>> 「荒神谷遺跡発掘調査概報(3)」昭和62年、松江 所収
>> に、AD590 ± 30、AD950 ± 100、AD1250 ± 80、AD250 ± 80 などという
>> 数字があるらしいが、これを直接読んでいないので、内容は分からない。
>> どなたかご存知の方がおられたら、ご教示をお願いしたい。

どうやら、「調査概報」に書かれた4つの年代のうち、少なくとも
最初の2つは確からしいと、上野武氏は考えておられるのでしょう。
(まことに不確かな推測ですが・・・)

6世紀とか10世紀とかいうことでしたら、A.D.400年以前よりも
熱残留磁気法の精度は高いと考えていいのでしょうか？

QWD02544 どんたく

309/312 QWD02544 どんたく RE:雷神と風神
(18) 98/02/21 23:29 307へのコメント

MUSEさん、本当にお久しぶりです。 どんたくです。

雷神でなくて、風神ですか？
こういうように色々な説が渦巻くところが、パソ通のいいところですね。

確か「スサノオノミコトは、台風を想起させる神様だ。」という説も
あったような気がします。

>> しかし、日本という地理的位置から考えると、雷現象だけが「畏れ」の対象
>> でしょうか。

俗に「地震、雷、火事、親父」といいますが、3年前の阪神大震災を経験
して、「やっぱり、雷より地震の方が怖い。」と実感しました。(^^)

>> しかも毎年、定期便のように来襲する台風は、恵みの雨をもたらす風神と考
>> えるよりは、敬遠したい風神だったのでは、と理解しております。

doutakusinpo1998

雷の場合にも、恐ろしい面（アラミタマ）と、水をもたらす良い面（ニギミタマ）の両面があると考えられますが、台風の場合、すなわち風の神の場合にも、アラミタマとニギミタマとがあると考えられてはいかがでしょうか？

ちなみに、アラミタマ・ニギミタマについては、
#142「RE: KANA Kさんからのご意見紹介」
#182「アラミタマ・ニギミタマ」
以下のコメント・リンクをご参照下さい。

出雲方面が特に台風がきつい地方とは思いませんが、銅鐸の中心地的存在である近畿地方に台風が襲来するときに、普通まず真っ先にやられるのは和歌山県です。

近畿地方では紀伊国が一番銅鐸が多い。
（#43「銅鐸の出土分布（どんたく）」参照）
・・・これはMUSE説では説明がしやすそうですね。

>> もし、銅鐸時代にその鑄造が始まるなら、山の幸ともいえる鉱石、木炭、水
>> から銅鐸が生まれると認識する古代人にとって、その災害を「山の神の怒り」
>> の現れと認知するのではないのでしょうか。

「風の神」から「山の神」へとお説が移行するところが、ちょっと私にはよくわかりませんが、「カンナビ山」という言葉があるところからしても、山に神様が鎮座するという考え方は古くからあったでしょうね。

MUSE説のような新説が出てくること、大歓迎です。

でも私は、「カミナリ=神鳴り」で、雷は神様だと思ってます。(^^)
もっとも、雷だけではなく、山川草木その他もろもろ、すべて神様かもしれませんが・・・。

P.S.
MUSEさんのお説とは関係ありませんが、
井上香都羅「銅鐸祖霊祭器説」1997.8.彩流社
という本が、銅鐸と山の神を結びつけて考えているようです。
しかし、私はちょっと、この本には首をかしげています。

QWD02544 どんたく

310/312 CXE04576 gumshoe RE:同位体の次世代分析装置
(18) 98/02/21 23:41 306へのコメント

もっとも近いMUSEさんのアーティクルにRESしました。

鉛同位体による産地同定の可否について論議は熱をおびてますが、
原論文に当たらずにあれこれというのは・・・どうもですね。

ブラッドフォード大学の
古代冶金学研究グループP.ブッド先生のホームページがありますのを
ご存じありませんか・・・
論文一覧もありますから、参照されればよいでしょう。
http://www.brad.ac.uk/~pbd Budd/personal.html#research_int

単なる傍観者ですが、どうしてもいつも考古学・古代史の議論が、
科学分析の技術論に還元されちゃうのか、とってしまいます。
人文畑の方ががんばってください。

311/312 GGB03124 たけ(tk) RE:搬入土器と「神武東征」説話
(18) 98/02/22 00:10 287へのコメント

かおるさん、こんにちは、たけ(tk)です。

もうそろそろお開きですか。お疲れ様でした。あ、まだ早いか。

doutakusinpo1998

》 そうですね、#257で紹介した論文ではつぎのように紹介しています。

弥生後期に吉備 北九州、古墳出現期に山陰（出雲？）・畿内 北九州、という土器の流れですか。何かおもしろそうだな。北九州の勢力が北九州 吉備山陰・畿内と動いている様子も見えなくもない。この時代の北九州と畿内の勢力関係はどうなんだろう？。畿内のうちで、河内（北九州系）と奈良盆地（地元系）なんていう違いは見えてこないんでしょうか？。

それとも、北九州 畿内と延びていった先で、勢力の中心自体が移動してしまったとか。

北九州の土器集中力がなくなるのはいつ頃なんでしょうか？。

》 積読状態の本を探していましたら「巨大古墳と伽耶文化 - 古代伽耶と倭の交流」を解明する」（角川選書235）というのが見つかりました。

ありがとうございました、買い物リストに入れておきます（最近本屋に行く時間もなくて・・・）。

たけ(tk) / GGB03124@niftyserve.or.jp

312/312 GGB03124 たけ(tk) RE:銅鐸と縄文語(?)
(18) 98/02/22 00:10 279へのコメント

大三元 さん、はじめまして、たけ(tk)です。(^^;)

》雷鳴のことはkamuy hum と言います。でも、hum には「音、匂い、味、体感、カミナリと同じ発想ですね。イナビカリはどうなんでしょうか？。

》「チ、ヒ、ミ」に直接的な言いがかりは見つかりませんが、次はチョット面白い。
》tumunci 悪魔、悪鬼
》mintuci 河童（cf. ミツチ）
》
》他に「チ」で終わる単語には、今調べてみたけど、親族関係を表す語が多いです
》ねえ。huci祖母 micici父 macici母 hekaci少年 matkaci少女。他にも、opici放す、
》nukarci ~を見る、などもあります。。。
》
》ci だけだと、各種代名詞（私、我々、貴方）、接頭辞として再帰的表現、

なんか、神様にしても人間臭そうなのが多そうですね。大汝 = ナムチ = なんてのが近いかな。

ミカツチもこの仲間だとすると、「イカツチ = 雷 = は征服者側の言い方」とはいいいにくいな。「厳めしい槌 = 巨大な槌で叩いたような音」なら別系統にできるけど。。。カグツチも「輝く槌 = 冶金(?)のときに金属を叩く槌」とかにして、別系統に無理矢理するとか。。

もうシンポの最終の週末になってしまった。僕の好きな徐福さんが出てこなかったのは残念だけど、しょうがないか。直接繋がるものもないし。

たけ(tk) / GGB03124@niftyserve.or.jp

313/316 MXH02644 阿斗夢 RE:銅鐸博物館
(18) 98/02/22 13:41 149へのコメント

ラン2 さん、シンポジウムの皆様、はじめまして。阿斗夢です。(^^)/

今日は、滋賀県野洲町にある銅鐸博物館へ行ってきましたので、レポートします。

遅ればせながら、私もちょっと行って来ました。レポートと言ってもラン2さんのレポートで済んでしまっているので補足だけ。

【交通機関】JR琵琶湖線「野洲駅」下車、野洲駅正面口から近江バス
ページ(187)

「村田製作所」「希望ヶ丘西ゲート」行で、「銅鐸博物館前」または「辻町」下車、徒歩3分

日曜・祝日はバスの本数が少なくなりますので(平日でも多くはありません)ご注意ください。バスの所要時間は10～15分です。それから「村田製作所」行きの場合、開館前の時間帯は「銅鐸博物館前」に行かないバスがありますのでご注意ください。(そのときは「辻町(つじまち)」で運転手に道を尋ね下車)

【開館時間】 9時～17時

入館は16:30まで

【休館日】 月曜日、祝日

ちょっと間違いがあります。
毎週月曜日(祝日は除く)、祝日等の翌日(土曜・日曜・祝日を除く)
年末年始(12月28日～1月4日)
その他(薫蒸など特別な場合)
ですから「祝日」はOKです。

【入館料】 大人=200円、高校・大学生=150円、小・中学生=100円

20名以上の団体は一人50円引きです。
特別展・企画展開催期間は別途料金(詳細は不明です(°_。)?)

銅鐸博物館では、シンプルでビジュアルに銅鐸を紹介するコーナーと、大岩山銅鐸のコーナー(ただしほとんど複製です)、野洲町民俗と歴史を紹介するコーナーに分かれています。

第一展示室が「銅鐸を紹介するコーナー」で、「銅鐸の誕生」、「聞く銅鐸から見る銅鐸へ」、「銅鐸の祭り」、「世界のカネ」、「銅鐸の成分」、「銅鐸の作り方」、「兄弟の銅鐸」、「銅鐸の紋様」、「銅鐸の絵」、「銅鐸から銅鏡へ」など、盛りだくさんにかつシンプルに紹介されています。また、触れるように銅鐸のレプリカ(博物館のオリジナルかも(^^;))が展示されています。

第二展示室が「大岩山銅鐸のコーナー」で、中央に明治と昭和に出土した銅鐸のレプリカと一部オリジナルが展示されています。ガラス張りなのは仕方ないのですがもう少し近くで見られたらなと思いました。それと、専門知識がない人(^^;)にはちょっと解りづらい説明でした。そして、明治と昭和の大発見の状況が紹介されています。

企画展示室は2階で、野洲町民族と歴史の紹介で銅鐸とは関係ありません。

第一展示室と第二展示室の間で加茂岩倉遺跡の調査状況を簡単に紹介しています。ホールでは鳴らせるように銅鐸(「触れるように」と同様)が展示してあります。それから、今だけでしょうか「邪馬台国はどこか?」の意見を集める企画が行われていました。地図に「ここだ!」と思うところにシールを貼っていくものです。

ラン2の一口メモ(^ ^)

昭和に出土した銅鐸は、発見者・土地所有者の協力により滋賀県の所蔵となりましたが、明治に出土した銅鐸は、散逸して地元には残っていません。

昭和に出土した銅鐸はそうとは知らぬ発見者が古物商に売りにかけたのを警官が見て事なきを得たのだとか。明治に発見されたものは2つが政府の所有になりましたが他は地元払い下げられました。そのため散逸してしまったのです。その後の調査で大部分は所在が明らかなのですが2つが現在でも行方不明だそうです。(「なんでも鑑定団」の「幻の一品」で探したら出てきたりして(^ ^;))

銅鐸とは直接関係ありませんが・・・

第9回赤米講演会と試食会

講演会 - 日時:平成10年3月8日(日)14:00～15:30

ページ(188)

doutakusinpo1998

会場：銅鐸博物館研修室
演題：コメの食文化と民族
講師：関西大学教授 上井 久義 氏

試食会 - 日時：平成10年3月8日(日) 15:30頃～
会場：銅鐸博物館1階ロビー
メニュー：赤米ケーキ、弥生風味赤米雑炊
協力：西川 和子 氏、岩井 久美子 氏

銅鐸とは無関係のおまけ(^^;)
ロビーに野洲町を紹介するためにパソコンを利用したクイズをやってみました。
そのパソコンが某社のハードディスク「20Mタイプ」でした。
パソコンの歴史を見る思いでした。(^^;)

MXH02644 阿斗夢

PS. 亀レスで失礼しました。<m(____)m>

314/316 KFA03002 kikkawa RE:同位体の次世代分析装置
(18) 98/02/22 18:19 306へのコメント

同位体顕微鏡を開発するプロジェクト(5ヶ年)が東京工業大学惑星科学実験施設
同位体顕微鏡開発室で97年4月に始まったと、塚本尚義氏が、専門誌『科学』
こんにちにはMUSEさん。その内に、この報文を含めて、関連する記述を当たって
みます。

二次イオン質量分析法(SIMS)を発展させたものだそうです。
機器の使用目的は異なりますが、学生時代から腐れ縁の悪友が、SIMSを使ってセラ
ミック薄膜中の元素の分布構造について調べていて、以前に彼の実験室を訪れたと
きに装置を見たことがあります。彼は、パソコンに目茶弱い人物で、フロッピーに書
き込まれたデータを使わず、レコーダーのチャートやパネルに表示される数字をノー
トに書き写して、データを解析するという驚くべき能率の悪いことをしていたので、
簡単なBASICプログラムを書いてあげたことを覚えています。

彼の装置では、スパッタリングで原子層を剥いていくので、深さ方向の相対分解能
はオングストロームレベルと極めて高い(深さの絶対値は不確定)が、面的には数μm
が精々と言っていたと記憶しています。
彼の言によると、メンテナンスの面倒な分析機器です。

この装置で、銅・スズ・鉛の3元合金である銅鐸でも全面スキャンすれば、ミクロ
単位の鉛同位体比分布も捕捉できるでしょうから、異なった産地の鉛を混ぜている
そのような測定は、なかなか難しいと思います。
須恵器・黒曜石などの給源推定に用いられる蛍光X線装置の場合は、大気によるX
線吸収の影響を軽減する程度に減圧できればよく、巨大な試料スペースを持つ機器も
ありますね。

ところが、質量分析計は、イオンが電場・磁場中で残留大気に多く衝突すると、忽
ちデータ精度が著しく落ちますので、超真空雰囲気が必要で、大きな試料台は困難だ
と思います。また、精密にフォーカスを合わせるためには、ジオメトリーの影響が甚
大ですから、平面的でない駄目でしょう。

鉛同位体比ですが、巨大な鉛鉱床などで、場所毎の均一さについての調査は、特に
研究初期に沢山やられていたと思います。問題に成りそうな様々な要素を、一つずつ
潰して行かなければ成らないのは、自明ですね。この方法は、自然科学の分野で、と
っくの昔に枯れきった手段であることを、もう一度思い出して下さい。

さて、P・バツズ氏の論文名を提示せよと述べられますが、よほどの専門誌なのか、
明記されて紹介されていないようです。
それでは、全く検証できませんね。これは、人文科学における考証に関する研究で、
その論拠を明確にしないと相手にされないのと同じでしょうね。久野さんや森教授の
不誠実な手口に、易々と乗らされずに、先ずはその論文を調べた上で主張されること
を、強く期待します。

具体的には「亜鉛」がガス化(沸点セ氏903度)したとき、液体鉛がそれに付随
して炉外に排出されます。そのとき鉛同位体比に比例して鉛が排出されるとお考え
前にも言いましたように、定性的な話ではなく、具体的・定量的な議論にされること
を期待します。ともあれ、高温では同位体分別効果が著しく小さいことは、前にも
ページ(189)

述べました。

朝日新聞社が編集責任のうえで掲載したわけですから、曲解の可能性は薄いで茶々で失礼しますが、新聞社は、古今東西プロパガンダの巣窟ですから、一番信用できない部類のような...(^;)

事実、銅鐸の化学成分分析ですら、サンプル抽出において慎重な手順を踏んでいるのですから（銅剣の深さ3ミリの部位から試料を採取、3回測定の平均値）。MUSEさんは、質量分析におけるデータ収集のやり方をご存じ無いようですので、説明しますが、同位体比を測定する場合は、精度を確保するために、極めて長時間の測定を行います。

ともあれ、同位体分別効果についての基本知識や、同位体比分析の実際を調べないままで、あれこれと憶測で否定しようとするのは、余り建設的ではないと思います。

316/316 KFA03002 kikkawa RE:同位体の次世代分析装置
(18) 98/02/22 18:19 310へのコメント

ブラッドフォード大学の古代冶金学研究グループP.ブッド先生のホームページが初めましてgumshoeさん、情報を有り難うございます。早速見に行きました。それによると、Paul Budd氏は、1982に同大学に入学し1986年に学部を卒業し、1987年に同大学の博士課程に進み1991年にPhDを取得し、考古科学のMark Pollard教授の下で講師の職に就いているとの事です。ところで、私にはBradford大は初耳だったのですが、1966年に設立された新設校だったのですね。論文や学会発表については、1996・97年についてのみ提示されていましたが、これから遡って、当該論文を知る事が出来そうですね。今回の場合は、その論文を挙げられたMUSEさんが調べて紹介するのが筋だと思えますので、私はそれに先んじて検討はしないこととします。

単なる傍観者ですが、どうしていつも考古学・古代史の議論が、科学分析の技術論に還元されちゃうのか、と思ってしまいます。人文畑の方ががんばってください。不毛な技術論で紛糾する場合は、2つのケースがあると思います。

1つは、自然科学的に確立した方法を考古学に適用した時に、その結果が気に入らない考古学者が、感情的に“議論は、批判のための批判というほかない。”と言う醜態を晒してしまう場合で、14C年代測定法開発者のリビー教授がノーベル化学賞を授賞した後で、山内清男教授などが不毛な論争を行い、実務的な議論に成らなかった事件が、代表的な例でしょうね。久野さんや森教授による鉛同位体比に対する態度も、似たものを感じさせます。

もう1つは、そもそも自然科学畑で確立した方法との評価が出来ていない手法を、“鳥無き里のコウモリ”の如く、畑違いの分野に用いて煙に巻こうと言う手口です。それらのデータを見て行くうちに、受益者側は技術的には判らなくても、疑問が沸き上がっていき、それに対して測定者が苦し紛れの強弁をして紛糾するというケースです。

考古学に用いられる確立した年代測定法としては、年輪年代法・14C年代法・ウラン系列非平衡年代法が主なもので、それ以外の方法の多くは、難点を持っています。nifty:FREKI/MES/2/532 (97/11/26)「年代測定法について」で紹介しましたので、こちらをご覧ください。北朝鮮が、高句麗様式の「檀君陵」を、電子スピニング法で5000年前とか言っているのも、この例かも？(単なるデータの捏造かも知れませんが...)

315/316 KFA03002 kikkawa RE:地磁気年代推定法(RE^2:銅鐸の使用年代)
(18) 98/02/22 18:19 308へのコメント

どうやら、「調査概報」に書かれた4つの年代のうち、少なくとも最初の2つは確からしいと、上野武氏は考えておられるのでしょうか。(まことに不確かな推測です。前述の中島正志・谷崎有里(1990)から、紹介します。考古地磁気年代推定法は、14C法のように独立して年代が決定できる絶対(放射)年代測定法ではないので、偏角-伏角の値から年代を独立に1つだけ決定することはできない。普通、2つか3つの候補年代が出てくる。そのいずれを取るかは考古学的推定年代に頼ることになる。”

どんたくさんがご覧になった、“地球の磁極の位置の軌跡が、まるで酔っ払いがグルグル・フラフラと歩き回ったかのような形で描かれており”の図を再度ご覧になれば、永年変動曲線が重なり合っていることに気付かれることと思います。上記の論文に引用されていたShibuya(1980)の図を見ると、例えば、偏角が西に5度、伏ページ(190)

角が50度で、過去2000年の何時か不明であれば、100・400・1900年頃のどれか決められないこととなります。

AD590 ± 30、AD950 ± 100、AD1250 ± 80、AD250 ± 80 などという数字があるらしいが中島正志・夏原信義(1981)『考古学ライブラリー 9 考古地磁気年代測定法』p.58に引用された、偏角と伏角それぞれについて誤差幅も示したShibuya(1980)の永年変化の図を見ると、590年の偏角と伏角は西12度・50度程度で、850-1050年頃も誤差範囲で一致します。1250年は東3度・57度程度で、250年頃を中心とする値ともほぼ一致します(実は、400年以前は誤差幅がとてつもなく大きく、殆ど何時でも合います(^;))。 “普通、2つか3つの候補年代が出てくる。そのいずれを取るかは考古学的推定年代に頼ることになる。”と期待されている、考古学サイドで年代幅が絞れなければ、収拾がつかなくなり、幾つもの推定年代が提示される話でしょうか？
元論文の偏角・伏角は、上記のような値を示していませんか？

6世紀とか10世紀とかいうことでしたら、A.D.400年以前よりも熱残留磁気法の精度は高いと考えていいのでしょうか？
相対年代で言えば、そう言うことになると思います。但し、標準曲線を作るのに用いた年代値は、溶岩など火山活動の年代もあるようです(日本各地で偏角・伏角は結構違うので、地域補正による不確実性あり)が、窯跡の年代を多用しているようで、これは考古学に基づく年代を流用していますから、下手をすると循環論法に成ってしまいますね。(^^;

317/317 CXN00172 大三元 Re:RE:銅鐸と縄文語(?)
(18) 98/02/22 22:17 312へのコメント

たけ(tk)さん、

>> カミナリと同じ発想ですね。イナビカリはどうなんでしょうか？。

imeru =稲妻、いなびかり、(菅野茂辞典)
光、輝き (中川裕辞典)
(imeru kamuy とも言います。)

imeru は meru (光・輝) に i - (それが) が付いた形のように、meru は語根っぽい要素のようです。meru は火の女神のロングバージョンにも出てくる言葉です。なお、「光・輝」を意味する語根は他にも、ki, kiyay, mike, tompi, nipek などもあります。(光輝く鶏、< tompi なんてのも気になってます。)

***Homepage: <http://www.alpha-net.or.jp/users/gens/>

318/322 QWD02544 どんたく RE:【シンポジウム】銅鐸を考える 総論
(18) 98/02/22 23:18 304へのコメント

かまくらさん、みなさん、こんにちは。 どんたくです。

#304:

>>ここで一旦各パネリストの皆さまに「銅鐸を考える」という基本に
>>戻っていただきまして、これまでを振り返って【シンポジウム】を
>>総括していただきたいと思います。

日本独特の銅鐸は、確かに謎だらけの存在といってよいでしょう。
逆にそれだからこそ、興味が尽きないのだと思います。

今回のシンポジウムで、色々な方々が、この銅鐸の謎に関して色々な
お考えをお持ちだということが分かりました。

いくら頭を柔軟にして、色々な発想を試みようとしても、到底私一人
だけでは、これだけバリエーションに富んだ考え方を出すというわけには
参りません。

そういう意味で、今回のシンポジウムは、私にとっても、非常によい
勉強になりました。

私は「銅鐸は雷神信仰の祭器である」という「どんたく説」をかざして
勝手なことを書かせて戴きました。

その概要は、
#58 『「どんたく説」プロローグ』
#99 『「どんたく説」エピローグ』

に書いたとおりです。

実は NIFTY SERVE に入会し、歴史フォーラムに参加させて戴いた時から、いつかはこのテーマについて書かせて戴きたいと思っていたのですが、今回漸くこのような「珍説」をアップできる機会が与えられたことを大変喜んでおります。

また、皆さん方にこの「珍説」を（眉に唾をつけながら）読んで戴けたことを、深く感謝しております。

本来なら、このシンポジウムの中では、銅鐸に関する諸研究の成果をもっと紹介すべきだったのかも知れませんが、私にはとてもそのようなことをするだけの力はなく、専ら自説を述べることだけに終始した感は免れません。

銅鐸に関する諸文献については、六爾さんが、
#42「六爾の銅鐸研究史(2)文献一覧」
で、非常に沢山の文献を紹介して下さいました。

私には到底このような真似はできませんが、現在市販されている本の中から、私の好みで、次の3つだけ紹介させて戴いて、自説を述べることだけに終始してきたことに対する、ささやかな罪滅ぼしとさせて戴きたいと思います。

- (1) 藤森栄一「銅鐸」昭和39年初版 学生社
私にとっての銅鐸に関する入門書で、大好きな本です。
「カモ・ミワ氏と銅鐸は関係がある」とする大場磐雄先生の説の存在も、この本で初めて知りました。
現在も改訂本が書店の店頭にあるところから見ると、おそらく銅鐸に関する本の中で、一番のロング・セラーでしょう。
- (2) 佐原真：歴史発掘(8)「祭りのカネ銅鐸」1996.7.講談社
銅鐸について教科書的に分かりやすく書かれています。
何かにつけて私はこの本を参考にさせて戴いています。
ただし、発行日から見てお分かりのように、加茂岩倉銅鐸出土以前に書かれた本です。
- (3) アサヒグラフ[別冊]「銅鐸の谷 加茂岩倉遺跡と出雲」
1997.11.アサヒ新聞社
題名の示すとおり、加茂岩倉特集であります。それだけでなく、最近までの銅鐸に関する知見が網羅的に紹介されているという意味でも、参考になる雑誌だと思われま

以上、「銅鐸を考える」シンポジウムの「総括」というには程遠いですが、直接・間接、応援して下さいました皆様方に深く感謝の意を表する次第です。どうも有り難うございました。m(_ _)m

QWD02544 どんたく

320/322 KFA03002 kikkawa RE:【シンポジウム】銅鐸を考える 総論
(18) 98/02/23 00:19 304へのコメント

こんにちは、かまくらさん、皆さんご苦労様でした。
パネラーだけでやっていた時期は、話題作りには悪戦苦闘でしたが、一般参加に成っ
てからはあっと言う間に感じました。既に、300を超える濃密な書き込みが集まり、
最近の臨時会議室では出色では無かったかと思えます。

パネラー依頼のメールを受けたときは、私は銅鐸が出土しない茨城に住んでいて、
銅鐸には馴染みはなく、深く考えたこともなく、“私は銅鐸については余り知らなく
て、自然科学的研究のレビューしか出来ませんが、それで宜しければお受けします。”
と返答した上で、参加させて頂きました。

パネラーとして参加したお陰で、博識な皆さんの発言を出来る限り理解しようと心
掛けたので、大変勉強になりました。皆さん、有り難うございました。m(_ _)m
自然科学的方法に関しては、総花的に紹介するのではなく、私の理解している範囲
内で、それぞれの有効性や限界などを、きちんと説明するように努めました。その結
果、きつい表現も見られたと思いますが、その点は失礼しました。

私は、月曜から金曜まで仕事の都合で不在となるので、発言する時間は殆ど残って
いませんが、もう終わりとは名残惜しいですね。
色々なテーマで話が盛り上がっていますので、私の個人的な意見としては、出来得
るならばもう少し延長して頂ければ幸いです。

319/322 SGL02501 弥生 RE:銅鐸国「弥生説」2
 (18) 98/02/22 23:46 261へのコメント

むちゃむちゃ、マトコメです。
 どんたく様#261を読みました。遅くなって済みません。その代わり長いです。
 》実は、私もこの神様の存在については、頭を悩ませています。(^^)
 》まさか、「タケミカヅチはフツヌシの別名だった」などということは...
 この件について説明をしようと、長くなり過ぎて困るので、簡単に。
 1、古事記で、健御雷之男の名前・出生を洗うとシドロモドロで怪しげな記述ながら、健御雷之男が「フツ」の剣そのものであるかの様です。なお、フツヌシは名前すらありません。(書紀一書だけに、雷神と経津主の生誕記事あり)
 2、タケミカヅチの名は、タケ、ミカ、ツチ、と区切って読めます。同腹に「甕速日」がいます。タケは別として、ミカとツチは、甕、槌、とも、土製の甕とも、甕つ霊(チ)とも取れます。この神話は複雑ですが、「先行の神話」(あって当たり前の火山神話)が、が述べられていると思われるのです。
 3、建御雷之男は、1、の「剣」の神格化と受取っても、2、の「甕、槌」と解釈しても「雷神」とは無関係ではないかとも思われます。ですから、これで、どんたくさんの悩みが解決するかと思えます。そこで、どうして建御雷之男が、高天が原の使者になるのかですが、古事記だけが「雷」の文字を当てたのはトリック臭いと睨んでいます。これは実は古事記が得意とするの手口の一つです。(高天が原の剣(天之尾羽張)が銅鐸国の剣(布津之剣)の親であることを述べ、高天が原が銅鐸国の親国であることを匂わせる手法もあります。)

》上等な祠ほど、きらびやかで、大きさも大きいようです。
 》人間の対抗心、自己顕示欲というものは相当に強いものようです。
 そうですね、「弥生説」もそんな感じで、「偉容を誇示する」と書きました。でも、山裾などの草木の生い茂る所に埋めるには、小さい方が扱いやすいです。それなのに、ただの自己顕示欲などで不便を承知で大型化させるには、かなりの経済力が必要かと思えます。「先住系・銅鐸製造グル-プ」は、どんな経済基盤を持っていたと御考えでしょうか。或いは別にスポンサーでもいたのでしょうか。また「埋める行為(儀式)」の意義よりも、何よりも、無理をしてでも見栄えのする様に大きくする方が、重要と考えられていたのでしょうか。

#297>>(嫌なだけで、お約束なのでUPを...)
 の「嫌」とは、弥生説は古代史仮説で銅鐸そのものには遠回しの傾向なので、場違いの感じもあってグジグジしている意味で、忙しいからではありません。「骨子だけ」書くのは難しくなりましたが御許し下さい。とうてい一口には書けないシロモノなのでした。
 ドダイ、文献から銅鐸を探ろうというのが、無茶なのだ!。分かってま~す。

最後ののでちょっと聞いて下さい。「仮説壺」って知ってます?。シラナイ?そうでしょう、今造った言葉ですから。お気付きだと思いますが一つ仮説をうち建てると自分の仮説に嵌まって、脱出し難くなります。壺に落ち込んだ様なものです。この「仮説壺」は外見よりも中は広くて充分に一人で散策ができるし、何と!そのまま飛行が出来るのです。飛行の目的は他の壺に接触してお互いに内部を見せ批判をし合うことで、勢いで喧嘩になることもあります。他説に教えられて自説を振り返り、反省・訂正などをすることが出来ます。相手の説を無視して頑として自説だけを振り回していると、誰からも相手にされなくなり誰も近寄って来なくなります。独走を続けるのも良いのですが、あまりスピードを出すと失速します。結構御偉い先生方にも失速する方がいらっしゃるようです。仮説の奇妙なところは、いろいろな外的状況も何故か自説に有利に働いてしまふことです。出来るなら痛烈な反論が欲しいと思うのにあまりありません。無視される傾向ならあります、先入観に支配されている人は専ら無視をするようです。でも、それではお互いに折角の仮説が育たないと思います。人の説にケチを付ける様な気がして遠慮する気持ちも分かりますが、失礼を顧みずに批判をするのが本当の親切だと思えます。ただ、否定をする場合にその根拠を示すのは当然ですが、同時に「それに代わる別の仮説の提示」が望ましいものです。

そんな訳で、壺の中を覗きに来る方が現れると嬉しいのですが、欠陥を指摘して戴くのがもっと望ましいのです。この前「銅鐸水神説」を書きましたが、あれは欠陥説なので、気付かれなかったか?、指摘して欲しかったのに...。元々が孤だんなな作業なので反応がないのは平気ですが、とても無駄な気がして、だから嫌だなあ、と思うことになったのです。質問されると考える、考えると道が開ける、謎も解ける、という手順です。この度お陰様で、建御雷之男の件の捜索で奇妙なことを発見しました、記・紀には、九州から葦原中国へ軍隊が出動したと思われる記事が二度ありますが、どちらも征服の事実だけがあって、実行者の実名が無いということです。私の仮説には大変に有利なので、いずれ詳細を書きたいと思えます。「出雲」や「建御雷之男」でウロウロしたお陰で、弥生壺には、新たな
 ページ(193)

「進歩」がありました。「シンポで思う壺」ってこれ、思っきりシャレかな？。

》「銅鐸王国の主は崇神」ということですか？

どうして疑問符ですか？、崇神だと書きましたよ。でも「王国の主」は個人ではないし単身赴任とも思えません、やって来たのは崇神一族、年齢は不肖ですが彼がリ・ダ・で祖父から子供まで四世代くらいだろう、と読み取れます。その後、繁栄の後に崇神朝は衰退します。銅鐸が長続きする筈はないのです。だって一通りに行き渡れば沢山はいらないし、米造りが自力で出来る様になって何時までも納税するのは馬鹿らしいですから。その後に銅鐸国が続いたのは「蓄積した富」のおかげだと思います。崇神王朝の次にはその富と権力を狙って騒乱状態になっています。でも水田は国のもとなり定着した…。ですから「弥生説」では銅鐸消滅理由は簡単です。「いらなくなった」のです。詳細は長くなるからカットします。「土」に埋めた訳も別の機会にします。祭祀関係のモロモロ、七五三縄・四手なども原料を変え神様が違っても現在に伝わっています。それで、わたしは銅鐸は信仰の対象では無い様に思えるのです（また話がそこに…）。祭祀に加わることはあっても、カレ自身が拝まれたり祈られたり、されたとしても、それが目的での製造ではないんじゃないか、と。出雲の大量の銅剣は布状のもので丁寧に包まれ、近くから出土した銅鐸は裸だったそうです。差がありませんか？。

#274 K A N A K 麻呂様

ゲッ！「指切りゲンマン」を知らない日本人が生息されているとは！、私は少なくとも、「天の神様に鍵をあげる」のフレ・ズは関西が発信地だと思っていましたのに…、あれはトモダチの思い付きだったのか！、それにしても、「指を切る・針を飲ます・鍵を掛ける」が子供の創作だとしても、「天の神様」と云うのは、子供が製造元とは思われないのですけどねえ。

菅公を最初に祀ったのは北野天満宮で、その地には元々、農業神・火雷神をまつ祠があったそうで、道真の御霊の活動が落雷で象徴されたことから雷神と結び付いたもの（宗教民俗研究家の窪寺紘一氏）だそうです。火雷神のことは、どんたくさんの幾つかのUPにもあり、ワケイカツチ（火雷）が「上賀茂社」の祭神だと触れながらも、火雷が落雷ではなく、ただ雷神信仰となさった様でした。「八雷」も、雷の大小、鳴り、響き、落ち、土中に入り、或いは火災を引き起こす、雷の様々な形態の神格化で、此処には雨を降らせて下さる優しい雷神の姿は無かったのに。また、カモ族と先住系との結びつきもお書きですが、私の仮説では八咫鳥はズバリ重要な役目を遂行した銅鐸国の人です。どんたく説とは、近いところを歩きながら、離れて行ってしまいました。

当シンポの何処かで「生雷、とはなんだろう」と云う言葉（違っていたら御免なさいまし）を読んだと思うのですが、誰方の発言だったのでしょうか？。この「生雷神」は、火災を引き起こす「火雷神」に対して人体落雷のことではないだろうかと最近になって気が付きました。カミナリの語源が「神鳴り」？は子供でも思い付きませんが「上鳴り」もあると思います。空の上で鳴るから、カミナリです。やがてその行いが神様のものと考えたのではないのでしょうか。訳の分からないことは神の仕業と考えられます、神隠し・神業・神技、など。長くなると退屈でしょうから、この先もやはりカット致します。

古事記には天つ神・国つ神・荒振神、の分類が見られますが、荒振神とは何だろうと考えていました。これが道速振る神で、オッカナイ神様です。「道」には日常使っている道もありますが、遠くの未知の果てに続き、先の分からない気味の悪い場合もあります。分からないコト・モノは「神」の支配下です、荒振神は、道（峠を含む）・山・河（沼も）にいたと記述されています。山野にパッコする狩獵民も敵対すれば荒神、熊や狼も荒神で、見知らぬ国を旅すればそこいら中で荒神にでくわします。神武記の「荒神甚多」（熊野山越え）では随分迷い悩んで、多分、熊・狼・蝮、などのことと解釈しましたが、山路のカミも含まれていたかも知れません。雷もね、あれはたしか夏でしたから。

大三元&たけ(tk)御両所にも多少のRESになったでしょうか。

#296 勘太郎様、（今までにRESをしたいのがチラチラあったのですが…。）

》ところで銅鐸は記紀に記録されているのでは、

》イザナギ=イ・ザナギ=イ・サナキ=銅鐸、イザナミは銅鐸についている

》舌。お粗末でした。(^^;

「岐・美」の神名は鐸の和名で、という説は昔からあったと思います。しかし、この説には発展がなく、サナギが「天照神」達の親だった、という傍証もありません。どうなっているのでしょうかね。これで仮説を纏めて戴けませんか？。

なお「神武東征」という言葉には「皇国史観」の響きがあります、「征」の字は「歩いて行く」意味で、本来は穏やかな言葉ですが、正しくは「政伐」と書くべきところを、「征伐」に替えて使用していましたので、「悪い者を退治する」イメ・ジが出来上がってしまったかのようです。「皇国」だけが正しくて、それ

doutakusinpo1998

以外の者は従わない悪者として考えたのが「皇国史観」であったと思います。なるべくなら、「神武東征」は「神武東行」とかにした方が宜しいかと思うのですが如何でしょうか。この四字熟語は死語だと思っていましたが、皆さんが御遣いになるので、驚き！ました。時間が出来たので頑張った、<弥生>

321/322 VZD07512 ラン2 茨木市立文化財資料館
(18) 98/02/23 01:19 018へのコメント

みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/
今日は、大阪府茨木市にある茨木市立文化財資料館をレポートします。
この資料館は、どんたくさんが#282からのツリーでも紹介されていますので、
そちらもご参照くださいね。

【茨木市立文化財資料館】
【場所】 大阪府茨木市東奈良3 - 12 - 18
【電話】 0726 - 34 - 3433
【交通機関】 阪急電鉄京都線南茨木駅下車、徒歩5分
【開館時間】 9時30分～17時（月曜日は9時30分～正午）
【休館日】 火曜日、祝日
【入館料】 市外在住の高校生以上は200円

まず大阪府茨木市の弥生集落・東奈良遺跡について、少しふれておきます。

東奈良遺跡は、南北約1.4km、東西約1kmの規模を持つ複合集落です。
集落には溝を廻らせ（環濠集落）、銅鐸・銅戈・勾玉を鑄造する工人を
持つ、北摂の中心的集団の居住地であったそうです。

私たちが興味のある銅鐸ですが、1973年から74年にかけての発掘調査で、
銅鐸の鑄型35点が発見されました。

第1号流水紋銅鐸鑄型は、ほぼ完全な形で出土しています。
また第2号流水紋銅鐸鑄型は香川県我拝師山出土銅鐸、大阪府原田神社銅
鐸の鑄型、第3号流水紋銅鐸鑄型は兵庫県豊岡市気比第3号銅鐸の鑄型と
判明しています。

各種の鑄型は各地で発見されていますが、ファイゴロ（人工的に風を送り、
炭・石炭などの熱源を高温にするための道具）が共に発見されているのは
東奈良遺跡と唐古・鍵遺跡のみで、これらのことから東奈良には、工房
工人が存在したといわれています。
（以上資料館発行の『茨木の歴史と文化遺産』より要約）

ラン2の雑感です。
小さいながらもとても見ごたえのある資料館でした。
東奈良遺跡の銅鐸鑄型をはじめ、ファイゴロや、勾玉の鑄型なんて初めて
見ました(o)。
どんたくさんがコメントしておられる銅戈の鑄型の×印も見ましたよ。
紫金山古墳や安威古墳群などから出た鏡や、隠れキリシタンの遺物など
など・・・山中に点在する中世墓地の展示も興味深かったです。
資料館の裏は、史跡公園になっており、埴輪や銅鐸鑄型のモニュメント
が立ってます。
資料館横を流れる川の橋の欄干は、銅鐸の形をしてました（笑）

受付では、お土産に銅鐸鑄型の文鎮を買いました。
でも家族には不評でした(;;)

322/322 VZD07512 ラン2 RE^2:銅鐸博物館
(18) 98/02/23 01:19 313へのコメント

阿斗夢さん いらっしゃい。ラン2です (^o^)/

詳細なフォロー、ありがとうございます m(____)m
ラン2は自家用車で行ったので、バスの便まで気がつきませんでした(^_^;;

>>それから、今だけでしょうか「邪馬台国はどこか？」の意見を集める企画が行われて
>>いました。地図に「ここだ！」と思うところにシールを貼っていくものです。

ラン2が行ったときには、なかったです(;;)
ラン2は京都に住んでいるんですが、家の近所に、なぜか「ここが邪馬台国だ！」
ページ(195)

という看板がたっています(^_^; ;
そこに住む地元の方が主張し、自費出版で本も出しておられます。
ご近所のよしみ(?)で、京都にシールを貼ってあげたいです。

>> 第9回赤米講演会と試食会
>> 演題：コメの食文化と民族
>> 講師：関西大学教授 上井 久義 氏

上井先生のお話、聞きたいなあ(ラン2は学生時代、民俗学を勉強してた)
弥生風味赤米雑炊というのも食べてみたいです(^o^)
縄紋クッキーなら考古の部屋のオフで、かおるさんにごちそうになりました。

貴重な情報、ありがとうございました。
もうすぐこのシンポも終わりだけど、最後まで楽しんでくださいね。
亀レス、大歓迎! どんどんアップしてください。

ラン2

323/323 YIG00127 かまくら RE^2:銅鐸博物館
(18) 98/02/23 07:23 313へのコメント

阿斗夢さん、こんにちは。(^ ^)
銅鐸博物館のレポートありがとうございます。

>第一展示室と第二展示室の間で加茂岩倉遺跡の調査状況を簡単に紹介しています。
>ホールでは鳴らせるように銅鐸(「触れるように」と同様)が展示してあります。

阿斗夢さんは、銅鐸を鳴らしてみました?
鳴らした音はどう聞こえましたでしょうか?

>それから、今だけでしょうが「邪馬台国はどこか?」の意見を集める企画が行われて
>いました。地図に「ここだ!」と思うところにシールを貼っていくものです。

こういった企画は面白いですね。遊び半分に参加していても、熱中しちゃうたり
するし・・・。(^ . ^) 私だったら何処にシールを貼るのでしょうか??

>昭和に出土した銅鐸はそうとは知らぬ発見者が古物商に売りかけたのを警官が見て
>事なきを得たのだとか。明治に発見されたものは2つが政府の所有になりましたが
>他は地元払い下げられました。そのため散逸してしまったのです。その後の調査で。
>大部分は所在が明らかなのですが2つが現在でも行方不明だそうです。(「なんでも
>鑑定団」の「幻の一品」で探したら出てきたりして(^ ^;))

行方不明の2つの銅鐸が無事でいてくれたら、もうそれだけで・・・。(;-;))
持ち主がその価値を理解して、ちゃんと扱っていていることを祈ります。

> 第9回赤米講演会と試食会
> 講演会 - 日時：平成10年3月8日(日)14:00~15:30
> 会場：銅鐸博物館研修室
> 演題：コメの食文化と民族
> 講師：関西大学教授 上井 久義 氏

> 試食会 - 日時：平成10年3月8日(日)15:30頃~
> 会場：銅鐸博物館1階ロビー
> メニュー：赤米ケーキ、弥生風味赤米雑炊
> 協力：西川 和子 氏、岩井 久美子 氏

赤米講演会と試食会ですか!
行ってみたいですね。近くに住んでないのが今、とても悲しい。
赤米ケーキってどんな味なんだろうね。

>ロビーに野洲町を紹介するためにパソコンを利用したクイズをやってみました。

歴史クイズっていうものでしょうか?
博物館にはよくありますよね。初級・上級が選べたり、項目ごとに別れていたりするタイプのものは、やったことがあります。苦戦したりしなかったりでした。野洲町もそういったタイプのクイズなのかな。

銅鐸シンポ終了まで後、数日。時間は限られておりますが、最後までご参加
なされてくださいませ。m()m

司会者 / かまくら

324/324 BYW00406 かおる RE:【シンポジウム】銅鐸を考える 総論
(18) 98/02/23 22:39 304へのコメント

皆さん、こんばんは。
長いような短いようなこのシンポももう終わりですね。

昨年、パネラーとして御指名頂いてから、にわかに銅鐸の勉強を始めた訳です
が、銅鐸そのものについては、十分理解出来ず、発言も通り一辺の内容になって
しまい、申し訳ありませんでした。

ただ、今回の収穫は銅鐸の分布が時間の経過と共に変化し、吉備や出雲では比
較的早い時期に銅鐸がなくなったこと、そして、これと関係があるのかどうかわ
かりませんが、吉備では弥生墳丘墓の上に特殊器台が立てられるようになること
と出雲では四隅突出墓が盛んに造られるようになるなことが分かりました。
また、最後まで銅鐸が残る近畿や東海地区も古墳時代の到来と共に銅鐸が無く
なること、また、北部九州を中心として分布していた広形銅矛も、時を同じくし
て無くなることも分かりました。

また、弥生終末期から古墳時代始めに、土器がかなり移動していることも分か
りました。とくに、吉備、出雲、近畿の土器が北部九州に移動していました。
近畿にはどういうわけか、北部九州の土器が出土していないことも不思議でし
た。

古墳の発生や展開に興味を持っている私としては、いつのまにか、銅鐸ではな
く、以上のような話をしてしまい、「おいおい、どこへ行くんだ」と思われた方
もおられたと思いますが、そう思われた方、どうかお許してください。

銅鐸そのものも魅力的ですが、このシンポを通じて私は、銅鐸が産み出された
弥生時代の土器や墳墓の変遷、拠点集落や周辺の集落の動向などから弥生時代が
どのように変化して来たのかが気になって来ました。

今後、考古学が土中から取り出すメッセージを新聞情報などを集めながらフォ
ローしてゆきたいと思います。

そういえば、徳島県三好町の大柿遺跡から弥生時代前期末から中期初めのもの
とみられる棚田状の水田跡が発見されたそうですね。
棚田だと、水の管理も大変ですが、それができるほど弥生前期末には水利
管理技術も発達していたということでしょうか。

もっと、弥生人の生活の実相が明らかになれば、銅鐸のなぞを解明する手がかり
が得られるかもしれませんね。

これからも、石室に入ったり、墳丘に登りつつ、弥生時代についてもぼちぼち
と楽しみながら学んでゆくことにします。

最後になりましたが、十分にお答えできなかった部分もありましたが、色々とし
を頂いた皆様ありがとうございました。

司会のかまくらさん、どうもご苦労様でした。

発言数が300を超えていたのですねえ、いやあ、盛り上がってよかった。忸

<<諸陵司小属>>かおる (BYW00406@niftyserve.or.jp)

325/328 VZD07512 ラン2 RE:【シンポジウム】銅鐸を考える 総論
(18) 98/02/24 00:29 304へのコメント

みなさん こんにちは。ラン2です (;_;) /

本当に終わってしまうんですかあ (??)

2ヶ月なんて長いようで短いものですね。

ラン2の中では、まだまだ未消化のものが多すぎて、物足りないです (;_;) /
(期間延長なんてダメですか? <かわとさん)

ともあれこの2ヶ月の間で、銅鐸クンは、ラン2の良い友達になりました。
親しくなればなるほど、もっと知りたいと思い、次から次へとプロフィール
ページ(197)

を検索していくのですが、謎は深まるばかり・・・
なかなかその正体を現してはくれません。
だからこそおもしろいのかも知れませんね。
これからもずっとつき合っていきたいと思っています(^_^)

司会のかまくらさんをはじめ、パネラーのみなさま、ROMして下さった
みなさま、ありがとうございました m(_ _)m

(^_^)ラン2のおすすめ銅鐸入門文献解題(^_^)
ラン2のパソコンの横は、家にある銅鐸関係の本、雑誌類等々をかき集めて
山になってます。
その中からセレクトして、ラン2のおすすめ本を紹介させていただきます。

佐原真『歴史発掘8 祭りのカネ銅鐸』講談社 1996
どんたくさんのおっしゃるとおり、教科書的な本ですね。
ビジュアルだし、最初に読む本にはぴったりだと思います。

佐原真「銅鐸の鑄造」『世界考古学大系 第2巻』平凡社 1960
これさえ理解していたら、博物館などで、どんな銅鐸を見てもへっちゃら。

佐原真・春成秀爾「銅鐸出土地名表」『考古学ジャーナル』NO.210 1982
この地名表はとても便利です。必携かも・・・
ちなみにこの号は、銅鐸研究の現状という特集です。

小田富士雄「銅鐸の年代と性格」『論争・学説日本の考古学4』雄山閣 1986
研究史を知るならこの本が1番まとまっています。

寺澤薫「弥生時代の青銅器とそのマツリ」『考古学その見方と解釈 上』
所収 筑摩書房 1991
比較的新しい情報と、方法論が学べます。

他にもたくさん紹介したいおすすめ本がありますが、上記の本を読んでいく
と、自然にたどりつくと思います(^_^)

おっと、これが最後の発言ではありませんよ。
では また (^.^)/~~~ ラン2

326/328 RXE12761 六爾 銅鐸を考える・総論
(18) 98/02/24 00:53

こんにちは。パネラーの皆様、かまくらさん

そして、わずか2ヶ月間という短い間ながら、熱心に書込をしていただいた
皆様、ありがとうございます。
私が、パネラーとして担当した、研究史的な部分としての総論は、前回の銅鐸
研究史2の方で述べさせていいただきましたので、今回は感想を含めての総論と
させていただきます。

総論・銅鐸シンポジウム

私も、最初パネラーのご依頼を受けたときは、正直言って銅鐸に全然興味が
ないので、お断りしようと思いました。ところが、その晩夢の中でこうささや
く声がありました。

「こら、ロクジなにをやっている起きろ、寝ている場合じゃない。」

(突然、軍人風の背中ofのしゃんと伸びたおじいさんが怒鳴っています。)

「お前は、ロクジなどと名乗っているからには、森本先生のおやりになられた
お仕事については全部知っていないとならないのだ、これは命令だ！銅鐸フ
ォラムをやれ！」

「でも、私は何も知らないのですが、どうしたらいいのでしょうか」

「何を言っているのだ、勉強すればいいじゃないか、俺の本を読め！」

(このおじいさんは誰なんだろう、ははあ、杉原旦那だなあ、すると俺の本と
いうと『日本青銅器の研究』だなあ、そういえばいつも行く古本屋の棚の一番
ページ(198)

下に売れ残ってあったっけなあ。)

「わかりました、勉強いたします。研究史からはじめます。研究の研究のロクジですから、これには自信があります。先生の本は明日すぐに買いに行きます。」

「それでいい、頼んだぞ！」そういうと、杉原旦那はすうっと消えました。

.....
そんなことがあったのです。そして、終わった今、こう思うのです。研究史的な部分は不十分ながらも、紹介することが出来ました。あと、藤森栄一先生のサナギ鈴についても実物をふくめて紹介することが出来ました。私としては不十分ながらもお役目は果たしたような気がいたします。なんか、杉原旦那、栄一先生、六爾先生が手を振って「よくやったぞ、これからもがんばれよ！」とおっしゃってくれているような気がいたします。

.....
そういえば、藤森栄一先生からもメッセージが届いております。
「我々の銅鐸を追求した学説は、いずれ、踏み石の宿命をおえて、朽ち忘れられるだろう。しかし、我々という人間が、一つの事象を追って追って、そして生きたということは、まぎれもない事実であり、きっと同じようなのちを大切に守っている人々の心の中で、生きつづけるだろう。考古学、という学問はいや人生とはそういうものなんだよ。」
.....

最後に、私ロクジ(本日から改名いたします)のつたない発言を聞いていただきまして皆様、およびご助言いただきましたパネラーのみなさまにはこの場をお借りいたしまして厚く御礼申し上げます。そして、全体をお導きいただいたかまくらさん本当にご苦労さまでした。

桜井の森本六爾先生のお墓参りを済ませた翌日に
ロクジ(RXE12761@niftyserve.or.jp)

追伸
私の銅鐸を追求する路はまだまだ続きます。

続きは私のホームページをご覧ください。
六爾の博物館・銅鐸展示室
(<http://www.machida.xaxon-net.or.jp/~waki/doutaku/>)

327/328 VZD07512 ラン2 RE^3:銅鼓のまつり
(18) 98/02/24 02:20 286へのコメント

みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

『中国55少数民族音楽の旅・天と地と時を奏でる』を見ましたので、
ちょっと感想などを・・

銅鼓のまつりは、ほんのちょっとでしたけど、とても興味深かったです。
1番関心を持ったのは、銅鼓は、雌雄の1対であるということでした。
これは銅鼓だけでなく、中国西南部に分布する木鼓や、太鼓についても雌雄1対だということでした(^o^)
ラン2は、入れ子になっている銅鐸って、もしかして雌雄1対なのかもしれないと想像してしまいました。
でも単体で出土しているものも少なくないし、あくまで想像ね。

それとシャーマンが登場してたんですが、腰にいっぱい吊り下げてつけてました！ 何をもって？ 朝鮮式銅鐸みたいな小さなベル。
インパクトありましたよ。

あわてて書いているので、詳しい中国の地名を書けなくてすみません。
では また (^.^)/~~~ ラン2

328/328 VZD07512 ラン2 RE^2:銅鐸国「弥生説」2
(18) 98/02/24 02:20 319へのコメント

弥生さん はじめまして。ラン2です (^o^)/
後半、シンボを盛り上げてくださって、ありがとうございました。

doutakusinp01998

ラン2は記紀には弱いので、本論にはレスつけられずにごめんなさいね。
最後だからちょっとだけいっちょかみさせてください。
とんでもなく見当ちがいかもしれないけど(^.^);

>>#274KANAK麻呂様

>> ゲッ! 「指切りゲンマン」を知らない日本人が生息されているとは!、私は
>>少なくとも、「天の神様に鍵をあげる」のフレ-ズは関西が発信地だと思って
>>いましたのに...、あれはトモダチの思い付きだったのか!、それにしても、
>>「指を切る・針を飲ます・鍵を掛ける」が子供の創作だとしても、「天の神様」
>>と云うのは、子供が製造元とは思われないのですけどね。

ラン2は関西人です(^o^)

ラン2は「天の神様に鍵を預ける」といってました。

「指切り」というのは、もともと誓約のしるしとして、小指の先をきりとった
ことからおこったそうです。愛情のあることをたしかめ、変わらないことの宣言
を、形としてのこすために行われた色町の男女の誓いがもとのようです。

「指切りげんまん うそついたら針千本飲ます」という唄は、明治の末ごろ、東
京地方でいわれるようになったみたいです。
げんまんというのは指切りの別称で、違約したときげんこつ一万回くらわすとい
う意味だそうです。
(以上『ふるさとあそびの事典』東陽出版 1976 より)

それと「天の神様に鍵を預ける」ですが、元来、共同体の中で約束事というのは、
氏神さんや、共通の信仰対象の場で行われました。
定例の祭礼が行われる際に、村落自治に関する申し合わせなどがそうです。
このような神前で誓約する風習で、約束を違えると諸神諸仏の罰がくだるといっ
たことが、いつか子供の遊びに中に入り、天の神様に決裁を仰ぐというような
意味を持つのでは・・・と、ふっと思ったわけです。

それと、

>> なお「神武東征」という言葉には「皇国史観」の響きがあります、(中略)な
>>るべくなら、「神武東征」は「神武東行」とかにした方が宜しいかと思うのです
>>が如何でしょうか。この四文字熟語は死語だと思っていましたが、皆さんが御遣
>>いになるので、驚き!ました。

についてですが、歴史学者の多くは「神武東遷」というように使ってますね。

では また (^.^)/ ~~~

ラン2

329/329 MHB01602 M U S E RE:同位体の次世代分析装置
(18) 98/02/24 18:49 310へのコメント

Re:#310

gumshoeさん、はじめまして。M U S Eと申します。
このたびは、P . ブッド先生のHPアドレスをお教えいただき、ありがとう
ございます。
おかげで大変たすかりました。当方は、市井の単なる歴史好きなもので、こ
うした専門論文に接する環境にありませんので。
特に考古学の論文は、基礎的素養に欠けているせいか、なかなか理解するの
に苦労しております。

で、P . ブッド先生の論文にもアクセスしたい気持ちはあるのですが、原論
文は英語で、かつ同位体化学にも相応の知識がないと一読すらできないでしょ
う。何しろ高校の物理や化学を学んだ程度のお粗末なレベルにある身では、
どうしたものか、と思案投首であります。

そのようなわけですので、gumshoeさんの当該論文をお読みになった感触で
は、どのような評価が下せるとお思いでしょうか。
当会議室はまもなく閉鎖されますが、その感想などを日本史館の2番会議室
にお寄せいただければ、と思いますが・・・。
また、文面から拝察してgumshoeさんは考古学の専門家と感じましたので、
銅鐸に対するご意見も頂戴できれば幸いです。

さて、鳥根県の荒神谷遺跡から大量の銅剣と銅鐸が出土し、そのうちから抜
ページ(200)

doutakusinp01998

き取ったサンプルについて化学的成分と鉛同位体比が測定されました。そのとき、銅剣と銅鐸のあるペアに同一の化学組成とよく似た鉛同位体比が観測されたそうです。ところが、そのペアは、考古学的には100年の年代差と鑑定されていたので、科学的データを偶然の一致と片づけられない内容であると分析者の平尾良光・東文研化学室長は述べています。科学者は同一時期の製造を予想し、考古学者は自らの編年観にしたがい年代差ありと鑑定したのですが、この場合、gumshoeさんなら、どのような見解をお持ちになりますか？この分析は1995年に実施されていますから、すでに結論が発表されているかも知れませんが、そのすり合わせには興味あります。

98-02-24

MUSE

330/334 VZC02152 勘太郎 銅鐸祭りの気持ちは？
(18) 98/02/24 21:24 319へのコメント

こんにちは、かまくらさん、パネリストの皆様
銅鐸シンポも早くも終了間近となりましたが皆様のお陰で随分と物知りになりました。よそ行って知ったかぶりができます。少し早いお礼ですが、ありがとうございます。

弥生様、拙文を読んでいただきありがとうございます。多分弥生さんも同じ視点かと思いますが、勘太郎は古文書、考古学成果から古代人の心を読みとりたいと思っています。カッコ良く言うならば「心理考古学」とでも言いたいでしょうか。人の歴史には形態的な進化とは別に「こころの進化」があったと思います。今でこそ「セクハラ」という言葉が社会的に認知されていますが当時は「強姦」などという意識さえ無かったでしょう。ネアンデルタール人が死者を埋葬し花を供えたとき、どういう気持ちだったのか、など大脳のどの部分が発達あるいは退化してきているのか興味があります。そういう視点で銅鐸人は「喜びの気持ち」で銅鐸祭祀をしたのか、「怖れの気持ち」で祭ったのかなど今回のシンポジウムで多少の感触がつかめたのは収穫でした。

銅鐸についての学術的成果が一定レベルまで蓄積された今、タイムリーに銅鐸シンポジウムを企画されたフォーラムの方々、かまくらさん、パネリストの皆様にあらためて感謝申し上げます。

98.02.24 勘太郎

334/334 BYD06141 中村 勝英 RE:THANKS銅鐸国「弥生説」
(18) 98/02/24 22:39 319へのコメント

弥生さん、今日は・・・KANAKです。
「銅鐸国論」ご苦勞様でした。残念ながら消化不良ですが、何れ機会があれば質問させて頂きたいと思っております。骨格は概ね次のとおりと理解していいのでしょうか？

1. 弥生？期に「出雲」で初期水田耕作を行った渡来系「オミズ又国」があった。
(当時、日本列島の食糧危機は深刻さを増していた。)
2. 弥生？期に「九州」から、より進んだ灌漑水田技術をもつ渡来系「崇神一族」が「出雲」に侵入し「オミズ又国」を滅ぼし「崇神銅鐸国」を建国した。
(この事跡が「国譲り神話」かつ「崇神記事」の原型？)
3. 「崇神銅鐸国」は周辺国に、新農業技術を提供する対価として「傘下同盟国」を形成していった。その同盟シンボルが「銅鐸」である。
(「銅鐸国」の「傘下同盟国」の首長が「国神」。この過程が「崇神記事」？)
4. 「九州」には「崇神一族」と同族の「XX一族」があり、九州を征服していった。その事跡(神話)・シンボルは不明である？
(この事跡が「日向神話」??かつ「景行記事」の原型？)
5. 弥生？期に「崇神銅鐸国」は周辺諸国を「傘下同盟国」としたうえで「大和」に侵攻した。・・・銅鐸中心地の時代変遷はコレによる？
(この事跡が「神武東遷神話」?? 「オミズ又国」滅亡王を大和に祭祀？)

6. 弥生? 期に「XX一族」は大和に侵攻し「崇神銅鐸国」を「近江」に駆逐し、滅ぼした。・・・「崇神銅鐸国」は三遠にのがれた?
(この事跡が「神武東遷神話」?? 「銅鐸」はこの時に埋設??)

7. 「XX一族」が、その後倭国を支配した。3世紀の「邪馬台国」は??である。
(「XX一族」は「崇神一族」滅亡王を祭祀しなかった??)

ホンの骨格ですが、かなりの誤解が有ると思います。機会が有ればご指摘下さい。

なお、「天神さん」については、極めて中途半端な議論提起をしてしまいました。かねてより「天神さん」とは何だろうと考えていたので、「雷神」についての議論に、つい割り込んだものです。弥生さんもお迷いになった様に、「天神論」は直ちに「銅鐸雷神祭祀説」とは関係しませんからね
(或いは結果的に何処かで結びつけば・・・とは今でも思っています)

・・・以下コメントです。
>> ゲッ! 「指切りゲンマン」を知らない日本人が生息されているとは!

チョットお品がない驚かれようですよ! 「指切りゲンマン」を知らないとは言ってません。子供の頃"ゲンマン"という言葉は一般化していなかったと思う。・・・全国的に一般化したのはラジオ等の影響では無いか? というだけです。"ゲンマン"は"拳万"だったんですね。

>>少なくとも、「天の神様に鍵をあげる」のフレ-ズは関西が発信地だと思って>>いましたのに...、あれはトモダチの思い付きだったのか!

関西のお嬢さんで、聞いたことがあると言う人がいました。一時流行したのでしょうか? どちらにしても近年のモノの様です。

>>「天の神様」と云うのは、子供が製造元とは思われないのですけどね。

近年? のモノならば、"製造元"を云々しても、しょうが無いのですが、語感からして、亜流クリスチャン系ではないでしょうか?

>> 当シンポの何処かで「生雷、とはなんだろう」と云う言葉(違っていたら御>>免なさいまし)を読んだと思うのですが、誰方の発言だったのでしょうか?

215で申し上げました。
古代史の謎 # 260 (関東八連合王国? -牟佐神社の祭神)
の由緒書を引用したものです。

>当時の祭神は生雷神(即ち雷公)であった。・・・

について、次の天武紀記事との関連で自問したものです。
「・・・吾者高市社所居、名事代主神。又身狭(*牟佐)社所居、名生霊神者也」
(大和での近江軍との戦いにおける神託)

つまり、この神社「由緒書」が天武紀"生霊神"との混同ではなく、何らかの古伝承に基づくモノであれば、生雷神(即ち雷公)が「天神」として祀られていた可能性が生じる・・・と考えたものなのです。(解明できていません)。

弥生さんが物事を直截簡明に解釈されるのは、感服致しますが、「生雷」について"人体落雷"は一寸頂けません。"人体落雷"と"祭神"を結びつけるのは発想的にムリな様な気がしますが?(絶対に無いとは言いませんが)

>>雷の様々な形態の神格化で、此処には雨を降らせて下さる優しい雷神の姿は無か>>ったのに。

正にそうですね。私の仮・仮・・・仮説は次のとおりです。
>降雨神としての「雷神」は、平地水耕の発達とともに「蛇(→龍)神」に其の>地位を譲り、崇り神としての性格が強調されたのでは無いか?

・・・しかし民衆レベルでは「天神さん」としてその痕跡を残したのでは無いか? ということなんです。

>>カモ族と先住系との結びつきもお書きですが、私の仮説では八咫鳥はズバリ重要な>>役目を遂行した銅鐸国の人です。

・ ・ についてはヨーク検討するつもりです。

イロイロと有り難う御座いました

331/334 SGL02501 弥生
(18) 98/02/24 21:44

皆様お疲れ様でした。弥生説を読んだりで...

用事が済んだあ、バンザイ。でもこのシンポジウムは終わりなんですね。元々、二か月足らずで銅鐸を語るの、短かすぎるとは思っていたが...。お陰様で、期間中にフロロピ-に溜まった皆様方の御発言は、これからは資料として有り難く使わせて戴きたいと思えます。感謝あるのみです。

つらつらと、また余計な事を考えたのですが、もしも日本書紀が、アメミコトヒラカスワケ(38代)か、アメクニオシヒラキヒロニワ(29代)から始まり、古事記の発見が無かったら...、与えられた材料が、倭人伝その他の中国資料と、発掘された金属武器類と銅鐸・土器・木器・石器だけだったなら...、銅鐸圏と呼ばれる地帯の各地の、弥生・古墳時代の遺跡は、何だと思われたでしょう。多分銅鐸とも結び付けて考えられ、「銅鐸とは何だ?」となって...。な~んだ、今と同じこっちゃ!。でも銅鐸国の所在は論じられたかもですね。

銅鐸のxマ-クが、話題になっていましたが、私は、一か所から出る数は、村か国の数かも知れないし、間違えの無い様に個数を数えて確認する為のものではないか?と思っていました。製造時・出荷時に行くと品物に傷が付くので考えられるのは埋める時です。いずれにしろ数をチェックした時の印ではないかと思いました。一か所出土の中の幾つかにだけ見られるのは、埋める前に方々から集めたことも考えられるので、その中の幾つかのグル-ブが埋め場所に持ち出す前に、個数を当たらせて付けたり、何もしない場合もあったりです。

銅剣も同じ様な事情でしょうか、剣や戈は、柄の陰になる部分を選んで付けたとすると、使用中にも付いていた可能性が考えられ、そうなる製造時に付けたこともありえます。「数チェックx印説」が当たっている様な気もしてきました。銅戈鑄型の場合は、大量注文でもあったのかも知れません。(便利なチェック印は今も使います。)もう少しx印のことを調べないと、はっきりとは言えないのですが、大小・新旧・模様、関係無しってことでしょうか。

呪術も祭祀も当然あったと思いますが、庶民の日常の暮らしは、実利的で、その点は現代と大差ないのではないかと思います。銅鐸が祭祀器だとしても、物体であり、造られ運ばれマツられる?までは、商品だと考えた方が思考が広がります。古代に「数」があったか、数詞は幾つまでか、その証拠はあるのかなどの問題があって、殆どクリヤ-出来ませんが、別の機会に譲ります。

司会のかまくら様本当にご苦労様でございました。御疲れになったでしょう? お世話になりました。またいずれ何処かで...、さようなら。
では、シンポジウムの御仲間のみなさん、御機嫌よろしゅう。 <弥生>

332/334 VZD07512 ラン2 同志社大学歴史資料館
(18) 98/02/24 21:57 018へのコメント

みなさん こんにちは。ラン2です(^o^)/
最後ですので、一挙に放出させていただきます(^ ^)
といってもラン2が行ける範囲ですので、しれてますが...

同志社大学歴史資料館は、同志社大学が調査してきた遺跡の遺物展示紹介、学生の教育のために開館されているものです。

この資料館には、杉浦丘園(明治時代の考古学者であり収集家)がもと所蔵していた銅鐸の破片があります。これは徳島市星河内遺跡のもので、7個(扁平鈕式・四区袈裟禪文)でいるうちの、1個の破片の一つです。他は、東北大学が所蔵しています。森浩一先生は、この破片から檀原考古学研究所のTさんに復元図を作らせ復元し、その破片の部分にはめ込んで展示しています。高さは30cmくらいかな。

【同志社大学歴史資料館】
【場所】 同志社大学田辺校地(京都府京田辺市)
【電話】 07746-5-7255
【アクセス】 同志社大学田辺校地(京都府京田辺市)

doutakusinpo1998
自然系等実験実習棟内1・2階
(近鉄京都線興戸駅下車、徒歩15分[坂がきつい]、
JR学研都市線[片町線]同志社前駅下車、徒歩10分[上に同じ]、
近鉄京都線新田辺駅下車、バスまたはタクシーで10分)

大学開校時の月～金の昼間に開館しています。
春休みなどがあるので、開館しているかどうかは、電話で確認してください。無料。

333/334 VZD07512 ラン2 大阪市立博物館
(18) 98/02/24 21:57 018へのコメント

みなさん こんにちは。ラン2です (^o^)/

先月、大阪市立博物館の企画展「描かれた聖域」というのを見に行ったとき、常設展に展示されていたのを見つめました。
『考古学ジャーナル』NO.210の地名表によると、
大阪府八尾市恩智都塚山で1949年出土。扁平鈕式・六区袈裟襷文で、
高さは39cm。所蔵は来恩寺ということです。

この銅鐸についての詳細が書かれた文献(『古代学研究』3号)を見てからとっていたのですが、シンポ終了までには間に合いそうもないので、大阪市立博物館にもあったよということだけを、お伝えします。

【大阪市立博物館】
【場所】 大坂城公園内
【交通機関】 JR環状線線「大坂城公園・森ノ宮」各駅から徒歩約20分
京阪「天満橋」駅から徒歩約20分
地下鉄「天満橋・谷町4丁目・森ノ宮」各駅から徒歩約20分
【開館時間】 9時15分～16時45分
【休館日】 第2・第4月曜日、12月28日～1月4日
【入館料】 大人=200円、高校・大学生=150円、小・中学生=100円

335/336 MXH02644 阿斗夢 RE^3:銅鐸博物館
(18) 98/02/24 22:45 322へのコメント

ラン2さん、こんばんは。阿斗夢です(^_^)/

>それから、今だけでしょうが「邪馬台国はどこか？」の意見を集める企画が行われて
>いました。地図に「ここだ！」と思うところにシールを貼っていくものです。

|ラン2が行ったときには、なかったです(;_;))

私が気づいたときに学芸員の方が貼る作業をしていました。これが新たに貼ったものなのか、張り直したものなのかは定かではありません。既に何枚か貼ってありましたが、まだそんなには貼られていません。貼るなら今です！
ちなみに私は全然解らなかったのでパスしました(^;)

|ご近所のお楽しみ(?)で、京都にシールを貼ってあげたいです。

義理で野洲町にも一枚(笑)

|上井先生のお話、聞きたいなあ(ラン2は学生時代、民俗学を勉強してた)
弥生風味赤米雑炊というのも食べてみたいです(^o^)
縄紋クッキーなら考古の部屋のオブで、かおるさんにごちそうになりました。

昔のお米は赤米で雑炊のようにして食べていたらしいですね。現代の赤飯はその名残というか、まねたものらしいです。ひょっとしたら銅鐸の前に赤米雑炊が
供えられていたのかも知れません。(単なる想像です)

MXH02644 阿斗夢

336/336 MXH02644 阿斗夢 RE^3:銅鐸博物館
(18) 98/02/24 22:46 323へのコメント

ページ(204)

かまくら さん、こんばんは。阿斗夢です(^_^)/

| 阿斗夢さんは、銅鐸を鳴らしてみました？
鳴らした音はどう聞こえましたでしょうか？

お寺の鐘のような荘厳な響きは全くしませんでした。大きさから想像できるように少し高めの音でコン、コンって短い音でした。これもレプリカの一つに過ぎないですし、これで全ての銅鐸の音を押し量るわけにはいきませんが。

| 行方不明の2つの銅鐸が無事でいてくれたら、もうそれだけで・・・。(;-;) 持ち主がその価値を理解して、ちゃんと扱っていていることを祈ります。

売り飛ばされているにしても、そんなに安くはないはずですからそれなりに大切にされていると思います。最悪の場合でも蔵の奥深くしまわれて忘れ去られているくらいでしょう。個人所有なら国宝でなくても家宝ですからね。

トロビーに野洲町を紹介するためにパソコンを利用したクイズをやってみました。
| 歴史クイズっていうものでしょうか？

残念ながら現在の野洲町関連のクイズです。内容自体は紹介するようなものではありません。

このシンポジウムももう終わりなんですね。やっと銅鐸入門をはじめた時なのに・・・
また機会があったときにはそれなりのことが言えるように勉強しておきます。

MXH02644 阿斗夢